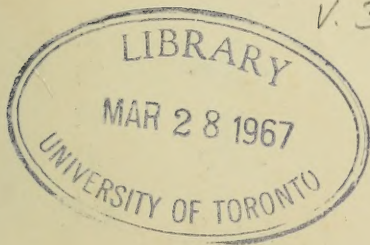
顧問　井上通泰先生
　　　山田孝雄先生
　　　新村出先生

正宗敦夫　編纂校訂

日本古典全集

うつぼ物語　第三

凡例、訂正追加

一、此の第三分册以下に於ては、宇津保物語の校異の部分に、新たに、國と云ふ符号、及び國イと云ふ符号が加はつてゐる。本書の校訂に從事して後、國文大觀所收の宇津保物語を閱した所、此の國文大觀本も亦、本全集の底本と同じ本居宣長校本の傳寫本によつてゐる事を知つた。即ち、田中道麿所藏の二箇の證本を以つて、天明四年に本居宣長の校合を加へた校本を借りて、本居建正が、文化八年の二月より六月にわたり、荒木田久老の安永八年、天明四年、寛政八年と三度讀みたゞした版本に校合を書加へたのが、國文大觀に收められた本である、而して、古典全集本の底本としたる橡樟園の校本は、多分此の文化八年の本居建正校本を、文化十二年に橡樟園が借りて、校異を版本に書入れたものかと思はれる。また、その本居建正校本には、靑黑字の書入あり、此の靑黑字の書入は、本居宣長校本にあつたものをそのまま書加へたよしであるから、從つて此の古典全集本の底本にある靑黑の書入は、文化十二年に本居氏藏本を以つて橡樟園が校合した際に、本居氏本の靑黑の書入を、そのまま版本に移して書加へたものかと思はれる、然るに、橡樟園が、此の版本を求め得た時には、既にその本には書入が存してゐた。即ち、村田氏が文化三年に活字本をもつて校合を加へ、文化四年には、春雄、寛光が他の寫本を以つて校合を加へてゐた。但し、文化三年の校合は活字本を以つて校合したと云ふのであるから、活字本は初の俊蔭の卷があるのみであるゆゑ、此の校合は俊蔭以

下には及んでゐない筈である。また文化四年の校合も、俊蔭の卷以下あて宮の卷までで、それ以下には校合が存しなかつた事、橡樟園の奥書によつて明かである。但し、右は、末卷の奥書によつて知られるのであるが、文化三年の村田氏の奥書は朱書であり、春雄、寛光の奥書は黒書である。併し、本文の朱書の校合書入は、俊蔭以下あて宮にまで及んで居り、明かに、此の朱書の校合は、文化三年の村田氏の校合によつて書加へられたもののみでなく、文化四年の校合の際にも加へられたものゝと思はれる。然るに、橡樟園の奥書には、本居氏校本によつて、朱靑の墨を以つて全部にわたり、校合を書き記したよしに記してゐる。これは、前述の國文大觀本の本居建正の奥書に靑黑字にて校合書入を加へたよしに記してあるのと齟齬し、また、此の橡樟園の校本の實際に就いて見ても、後半には、朱の校合書入なく、靑黑字の校合書入のみ存する事實とも一致しない。從つて、橡樟園の「朱靑いろの墨もて」云々とあるのは、恐らく、靑黑いろの墨の誤とすべきか、または、朱靑黑三色をもつて校合を書加へたの謂で、朱色の校合書入は、文化三年、同四年の校合書入のみならず、橡樟園が本居氏本によつて校合書入を加へた際にも、靑黑の外、朱の書入をなしたものかも知れない。いづれにしても、朱の書入が文化三四年の際のもの、靑黑の書入は、文化十二年に、橡樟園が本居氏本の書入によつて、移したものと云ふ事は、大体に於て云はれるやうである。（此の點、前の凡例に記せる所は誤りであつたから、此所に訂正する）。然るに、怪しむべき事は、同じく本居宣長校本を用ゐた本居建正本によると云ひながら、古典全集の底本と、國文大觀本とでは可成り異同があり、相互に脫漏があるので

ある。尤も、古典全集の底本の方が、本居建正本以外に、他の寫本によつて校合を加へてゐるのであるから、少くとも前半は、校異の記入はより豐富である筈であるが、然も、此の底本には脱して居て、國文大觀本の方に存する校異か可成り澤山ある、これは恐らく、橡樟園が本居建正本と校合する際、その不注意から、脱漏したもの、誤つて記入したものなどが存するがゆゑであらう。從つて、同じく本居建正本に溯るならば、手近にある此の國文大觀本を參照する事は、極めて簡便な方法なので、此の第三分册以下は、國文大觀本を參考にしつつ校異を作つて行つた。その結果、古典全集本の底本と國文大觀本と相違の箇所を見出だした際には、これを「國」と云ふ符号を以つて記し、國文大觀本に於て割註の形式で記入せられた校異の中に相違の箇所を見出だした際には、これを「國イ」と記して本書の校異の中に收める事によつて、古典全集本の底本の缺を補ふ事とした。勿論、國文大觀本は、本居建正本を活版にうつす際、可成り誤謬や脱漏の生じた事が認められるから、甚だ不完全なものではあるが、やむを得ない。

うつほ物語
第三

うつぼ物語　第三目次

初秋

一名　とばかりの名月
又　相撲の節會
又　内侍のかみ

かゝる程に、左大將殿の中の御殿に、君達上達部御子達數多おはしまして、物聞し食しなどして、御物語し給ふ程に、右大將1その日御殿にて籠りおはしければ、「今日内裏へ參らで籠り物すれば、むづかしう思はゆるかな。左大將殿へや參うでまし。それは2内々は勝りに3興は思は4らむ。5今中將三條殿へ」と宣ひて、我も6中侍も、清げなる御直衣奉りて、一つ御車7にて率8る。近き程なれば、殊9なる所狹き御前もなくて參うで給へり。先中將下して、「此所に、今日いと10き〔○暇〕にて籠り侍る11がむづかし12き13になむ侍ふ」と聞え給へり。右大將「正賴もさなむ思ひ給へ、むづかりて、其方にも參り14來むと思15ひ給へつるに、いと畏し」と宣ひて、皇子達上達部引き出で給へり。右大將下りて入り給ふ。皆御座に奉りぬ。かくて御折敷更にも云はず、千々に白銀の土器菓物16乾物、いと淸らにして參らせ給ふ。北の御殿より客人の御肴御17(酒)參らせ給ふ。それに打ち次ぎて、粉熟參り、御膳など參らせ18、かくて御物語のついでに、主の大殿

校異 1 宮殿アリ。2 イ内に、宮此處に。3 イけふ。4 イえ。5 イいざ。6 イ中將。7 宮に、國イ二字ナシ。8 イり。9 宮に。10 イま。11 宮考異ナシ。12 イさ歟、宮さ。13 正と。14 国な。15 イふ。16 宮考異ニ一字ナシ。17 一字イニヨリテ補フ。18 イ給ふアリ。

1に「右の相2撲どもは參うで來にたりや。此方のは參うで來ぬかな」「少しは參うで來にためり。例の年頃參う3で上り來る男ども、數多かるを、今年は數4如くなむ5さうで來まじき年なめり。參う上りたる限りは、異6なき者7どもなむある。容貌もいと清げにて、只今の力の盛りなる男ども8にて、いとよし。なほ仕うまつらむに、少し9と所ある年の相撲10 11とどもになむある。例の參うで來る男ども、あるは死に、あるは12身の病など侍りて、さ13りついでの者ども奉り上げ、14かくいとよき」左大將、「15頼もしある者どもあめり。力付き容面なども異なき中にも、今年思ふ所や侍らん、こと16もなく心遣してなむ參うで來ためる。この名高き下野の並則參うで17來る來たり。先づ珍らしきものは彼の並則が參うで18來る事のみなむあ19り」客人の大殿、「此方の伊豫の最20く〔〇手〕行經が參うで來ぬに、兼雅は思ひ歎きにて侍り」主の大殿、「一日も21仁壽殿にて仰せられしは、少し由ある業もしてしがな。同じくば出で22たらん節會の、見所ありてもしなしてしがなと仰せられしを、今年の相撲、かく男ども23人多からねど、さてもありぬべき限りあるを、同じくば御心留めて御覽ぜさせ24申してしがなと思25ひ26給ふる」客人の大將の大殿、「兼雅もさなむ思27ふ給ふ28る事な29るを、心30のさるべき樣なる事をなむえ思31ふ給へ出でぬ」主の大殿「言はで思さむに

校異 1[イ]ナシ。2[イ]ひ。3國ナシ。4国のアリ。5[イ]參。6国もアリ。7因考異二字ナシ。8國イりさ、9国見。10下三字[イ]ナシ。11一字国ナシ。12國イみや。13[イ]る。14因て。15[イ]左のも由。16国ナシ。17[イ]二字ナシ。18因來た。19因る。20[イ]て。21因仁壽。22国立た。23[イ]など。24[イ]二字ナシ。25[イ]ふ。26國イ二字ナシ。27因う。28國イナシ。29因考異うもなき。30因に。31因う。

怪しうはあらじ」1左大将「されば2言はではえあらぬものになむ」など宣ひて、我もく劣らじと3思す4に、御土器度々になりて、右大将「此所に参り、5かくは6むづかしうぞ7恥かしう思8ふ給9（へ）しか10ば、今は心安かりけり」主の大殿「今は御11後12なすべき人やは侍ら13ん、しか思すは」と聞え給ふ。14右大将「怪しくはたゞ此所に参うで来るは侍ひ附きたる心地こそすれ」とて、

立15き馴れて止みにし宿を今日見れば古き心16を思ほゆるかな

と宣ふ。主の大殿、

止みぬとも思ほえぬ17るかな我が18君は今こそ人の立ちも馴らさめ

と宣ひて、御物語昔の事など聞え給ふ。「世の中の心ゆき、なほをかしきものは、労ある女の情有るが、物云ひ19容貌などする20は、かの女の如何にせましと思21ふ煩へるが、心止めて22（書）きたる23文見るばかり労あるものこそなけれ。昔嵯峨の帝の御時、承24香殿の御息所25かの女を見給へぬかな。怪しく目出たかりし人の御心にこそありしか。正頼いまだ中将に侍りし時、かの御息所内26寛の賄に當り給ひて、仁壽殿に侍ひ給ふ方に、透きた27り御簾の内におはしますに、打見28ゆる程に、29更に魂なくなりて、いかでいさゝ

校異 1〔イ〕右。2〔イ〕ど。3〔イ〕思ほ。4〔因〕ナシ。5〔イ〕来し、〔因〕てし。6〔イ〕昔こそ。7〔因〕はアリ。8〔因〕う。9一字〔国〕ニヨリテ補フ。10〔イ〕ナシ、〔因〕ど。11〔國〕イこしう。12〔イ〕見、〔国〕見た。13〔因〕ぬ。14〔國〕イナシ。15〔イ〕ち。16〔イ〕の。17〔因〕ナシ。18〔イ〕宿。19〔イ〕かゝり、〔国〕語り。20〔イ〕が、〔國〕ナシ。21〔イ〕ひ。22一字〔イ〕ニヨリテ補フ。23〔國〕イ文。24〔因〕杳。25〔イ〕ばかり。26〔イ〕宴。27〔イ〕る。28〔因〕ナシ。29〔國〕イきら。

かならん事も聞えて1しがなと思ひわたりしに、如何なる折にかありけん聞え2初めて、後々は切めて聞え煩はす程に、思し煩ふにやあらんと見えし程の御文見給へしこそ世にあはれに勞ありしか。正頼が老の世に、その御文賜へ3しばかり似る物4のあはれ5なむ思ほえぬ6。終に疎くて止み給ひにしものから、宣ひ放たぬ事などのあれば、頼みまさりて、いと7かしく魂の行くらん方も知らずこそありしか。さる女の今の世にあらじ8とや」右大將「今の世の女の深く有り難き御心は、9仁壽殿の女御こそおはしますらめ。この承る承香殿に更に劣らぬ御心なり。兼雅現にある10こそならばこそ取り申さざらめ、怠々しき事なれど、昔聞ゆる事ありしを、更に宣ひ放たで、頼めとのみあらせつゝ、多くの好色事を御覽じたるなむいと有り難き。今にいとたまさかに聞えさする時11ほど、同じやうなるものから、遠き御心はなほ同じやうなれど、多くの好色事をなむ御覽ぜられぬる」など申し給ふ。主の大殿「いで、12何處なりしをか。正頼13は童べの中よりはさる心ある人はあらむ。その承14香殿はいと15好色事な16るし人の御心をや」17大將「よし。さばかの御文はありや。兼雅が許にか18(の)女御の君の御文ありしが」と申し給へば、19大殿「正頼が許になからむやは。萬の事むづかしうと思ふ時20に見給へつゝ、世間の事忘るゝ文ありかし」右大將三條殿に21して中將して、

校異 1國イはアリ。2因考異初。3因りアリ。4国なく。5国にアリ。6因考異るアリ。7因ど。8因は。9因仁壽。10国事。11国な。12因いづら。13因が。14因香。15因筋殊。16因り。17因右アリ。18一字因ニヨリテ補フ。19因主のアリ。20因考異ナシ。21因二字ナシ。

仁壽殿の女御の御文取りに遣り給ふ。主の大殿は左衛門1佐の君して、昔の承香殿の御息所の御文取りに遣り給ふ。「この2御文御許なると、兼雅が許なると較べむに、先づ物賭け給へ」と聞え給へば、大殿「何を賭くべからむ。正頼女一人賭けむ。御許には何をか賭け給はむずる」「兼雅は侍るに從ひて仲忠を賭け侍らん」な3にこれかれ子どもを賭物にて、この御文ども通はし給ひけ4り、中に勝れて目出たきを選り5出し持ち給へりけるを、右大將殿のをば、白銀の透箱のいと淸らなるに、敷物などいと目出たし、それに6つれて、この殿の7を8蠟の嚢9こなどしたるに、あやけ10づり出しなどしたるに、唐草鳥など彫り透かし11てあるに入れて、御覽じ較ぶるに更に劣り優らず。12いと等し13き手言葉劣り優らず、14等しき時に、主の大殿「仁壽殿は、うるせき人にこそ有りけれ。昔より後の世まで15は、所謂賤16る(○峨)の御時の女御ぞかし17と、それに殊に劣らぬ手など走り書きけり。など正頼が許に寄越する文これに覺えたる筋の思はへぬ」と宣ふ。右大將「返りて此の御文は今めきた18りす19き(○筋)など20の優りたりけり。21持なり」と定められて、仲22くた(○忠)を此方の御賭物に、この殿の持給へる女を彼方に取りて、互に御子どもを取り給ふ。かくて御遊び、萬の物の聲搔き合せて遊ぶ時に、仲忠聞ゆる、「23仲忠、こ24こばくの25箏の御琴など、物に搔

校異 1 因のアり。2 因二字ナシ。3 イど。4 国る。5 イ出て、因出でゝ、因考異出だし。6 国入。7 国は。8 国淺香。9 イみ。10 因考異へ。11 イなどした。12 以下十三字イナシ。13 一字国く。14 因イむか。15 因も。16 イが。17 イナシ。18 国る。19 イち。20 イナシ。21 イ持、因持。22 イた。23 イ二字ナシ。24 国く。25 因箏。

き合せて仕うまつるなかに、一日藤壺にて仕1らまつりしばかりおもし2(ろ)きなむ侍らぬ。かの姫君琵琶
合せて遊ばしし承りしに、世間の事こそ思ほえざりしか。只今の琵琶の一は3良少將こそ侍4めれ。それ5
も合せて度々仕うまつる時侍れど、え彼の手にも出ださぬ手をなんいと珍かに遊ばしし、怪しがりしかば、
をさ〳〵物の音に合せ難くせらるゝなむ世になく仕うまつりしを、6かくして仲忠7上手苦しき手をこそに
なく彈き合せ給ひしか。それを、8遊ばす琵琶の飽かず覺え侍りしまゝに、やむごとなき9節會の爲めに嫁
して侍りし手どもを、殘さずなむ仕10まつりし」主の大殿「眞に戲れにても其處に遊ばす11箏の琴、怪しく
いさゝかにても搔き合せ12違ひなどもせずと13も聞14(き)給へし琵琶なり。さるは女のせんにうたて憎げな
る姿したる物なり。殊に習ふなども見えざりきや。いかでするならむ。15さこと16 17(こそ)の日18もとに19や
はかはに書きたる文の御懷中より見えしを、せ20き(〇切)に惜しまれしは誰がぞ。正賴、それ許り見給へま
ほしき物こそなかりしか。誰がぞ」と宣へば、仲忠が答「あらず。里よりらうしの物し給ひしなり」主の大
殿「21つで22の、この虛言なせられそ。何でふ里よりは23 24樣の御文は添れ給はむ。心ばへあるべくこそ見
えしか。いと著かりきや」仲忠打ち笑ひて「紙をこそは取り敢へず侍りけめ。仲忠は更に老の世に空言をな

校異 1〔イ〕う。2一字〔国〕ニヨリテ補フ、〔イ〕ろ歟。3〔イ〕頭。4〔図〕るアリ。5〔イ〕こそ。6國イナシ。7〔図〕が。8〔イ〕
かのアリ。9國イせら。10〔イ〕うアリ。11〔イ〕しやう、〔図〕箏。12〔図〕給。13〔イ〕ナシ。14一字〔イ〕ニヨリテ補フ。
15〔イ〕ま。16〔図〕やアリ。17一字〔イ〕ニヨリテ補フ。18〔国〕殊。19〔イ〕和らか歟、〔国〕薄葉。20〔イ〕ち。21〔イ〕い。22〔イ〕
ナシ、〔国〕や。23〔図〕さるアリ。24〔イ〕さる、〔国〕さやうの。

お知らず侍る」大殿「これを初にて習ひ給ふ1文こそはあめれ」など宣へど言はず。かく遊び暮して、御前に馬槽立てゝ、御馬どもに秣飼はれなどするに、主の大殿右大將の君に馬2の奉らまほしく思さるれば、張革立てさせ給ひて、皆君達御た3うし(〇弓)遊ばす程に、中島なる玉葉に、鶚池より立ちて、三寸許りの鮒を銜ひて降りけるを、主の大殿「かれ射給へらむ人には、この西の馬槽の馬十疋4ならながら賭けんや」と宣ふ。右大將「皆遊ばせ。兼雅も仕うまつらん5」と宣ふ。主の大殿「待て暫し。見知らば中らぬものゆゑ、6鳥立ちなば興醒めなむ。勞7べき兵衛の尉先づ試みてんや」とて、主の大殿右大將と先づ遊ばす。主の大殿は、西の御8(ま)や(〇既)にかしこく勞り飼はせ給ふ五尺の鹿毛、九寸の黑と云ひて名高き御馬二つ賭け給ひ9て、10左大將殿は、11鷹屋に据ゑていと名高き御鷹二つ賭け給ひ12て、先づ主の大殿遊ばす。これ御本意有りて、この馬奉らん13心にての事なれば、殊に遊ばし中てむ14心もなくて、たゞ鳥立つまじ15許りの程に心して遊ばず。更にもて離れた16る。右大將の大殿、おいらかに立ち走り遊ばすに、刺すが如くに17て居たる18羽尾ごめに射落して池に入りぬ。興ずる事限りなし。この19馬迎へして、御馬20を賜はり給ふ。その御21厩の別當預り二人22遊びて牽かせて參る。夜更けて、右大將の大殿、この賭物の九寸の黑を引き重ね

校異 1 [イ]に、[国]べく。2 [因]考異を。3 [イ]ら。4 [イ]二字ナシ。5 [イ]やアリ。6 [國]イとも。7 [因]ある。8 一字[因]ニヨリテ補フ、[イ]ま歟アリ。9 [イ]つ。10 [国]右。11 [國]かす。12 [イ]つ。13 [イ]のアリ、[因]の御アリ。14 [イ]のアリ、[因]の御アリ。15 [イ]とアリ。16 [イ]り。17 [因]食ひ。18 [イ]二字ナシ、[国]魚、[國]イ尾。19 [因]馬。20 [因]ナシ。21 [因]厩。32 [イ]あひ添ふ歟。

て、遊びて罷出給ひて入り給ふ時に、仲忠、殿の御廐1別當預りよ2かの〔○寄〕3人4この5馬を舞ひ遊ひて、かの大將殿の御廐6人の手より遊び取る。7まて8その御馬を牽かせてぞ參れる別當預り9、になく饗し給ひて、宰相中將士器取りて、にな10ら强ひ給ふ。夜一夜「其駒」を遊び明して、曉方に、女の裝束一具、白張一襲、給の袴一11重づゝ賜ふ。かづきて歸12る參るに、この殿の御鷹13こ殿の鷹14ゐ〔○飼〕に据ゑさせて、歸る御廐の人に添へて奉れ給ふ。左大將殿15は「此の御鷹は、今一度渡り給ひて、今一つの鶚落してなむ賜はるべき」とて返し給ふ。右大將、「兼雅は16鶚を仕うまつり、其方には中島の程より17に遊ばししに、この御鷹は」とてなむ奉れ給ふ。大將殿18に「情なきやうなり、强ひて奉れば」とて、殿の鷹飼高麗の樂して、鷹ども遊びて取りて、歸る鷹飼に中將君士器取りて、限りなく饗し給ひて、細長19〔添〕へたる女の20裝束一裝賜ひて歸し給ひつ。右大將「情は飽くまでおはすかし」など宣ひて、北の方に、左大將殿に參りてありつるやうなど、いと詳しく語り聞え給ふ。

かゝる程に、左大將殿に左の相撲いと多く參れり。大殿21は〔○椅〕子立てゝ、簀子におはしまして宣ふ、「今年右大將殿も、例よりは、心殊に今年の相撲仕うまつらすべき事なりなど宣ふと、常よりも勞りてさ22〔ふ〕

校異 1 〔イ〕のアリ。2 〔イ〕り、〔國〕る、〔國〕イるの。3 〔国〕人、〔因〕人。4 〔イ〕そ歟。5 〔イ〕こま歟。6 〔イ〕のアリ。7 〔イ〕さ。8 〔因〕こ。9 〔因〕にアリ。10 〔イ〕く。11 〔国〕具、〔因〕具。12 〔イ〕り。13 〔イ〕二、〔国〕二つ。14 〔イ〕かゐ、〔国〕かひ。15 〔因〕ナシ。16 〔因〕岬のほどより。17 〔因〕ナシ。18 〔国〕は、〔因〕ナシ。19 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。20 〔因〕装。21 〔因〕い。22 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。

らへ。竝則かく參う上りたれば、例より優ると覺ゆる年なり。1左大將殿も、竝則參うで來たるをとなむ宣ふ事2しありし。あなたの下野の最手、前に竝則に鬪ひたりし行經參うで來ず。さりとも必ず參うで來らんとなむ宣ひし。さらでも、左〔○右カ〕にはいと異もなき相撲ども數多あめり。怪しく例の左3大將殿あるに軋ろひて、事々しき事あるを、一のには4うらて、果の場に出で來なむよからむ」など宣ひて、物いといかめしうまと5うろ〔○政所〕上り6調じて賜ふ。かくて左〔○右カ〕大將殿も、「論なう今年の相撲は、勝たむ方に、やがて佐達などいますする事ありなむを、さる心設けせむ。來ぬまでも、しか思ひたらむに、負くるにても7何8せう事かあらん9とする。假にて惡しかりなむ。心留めてし給へや。かづけ物など多く設け給へ」と北の方に聞え給ふ。政所などにかくの如く續くとも、限りなく淸げなる打敷などの事ども設け10のせ給へり。「左近の中將達はた勝負せむ程の11樂仕うまつらせん事。12勝つものな13らば、その遊び人ども相撲人どもは選び定めてむ」と宣ひて「いかで饗を淸らにせむ。何事14とも珍らかにせむ」とて、大將達は我15も我も劣らじ16〔と〕なむ思しける。その相撲の節17九日、奉りて參り給ふべき御裝束ども、大將の大殿のも、仲忠の中將の爲めにも、限りなく淸らにせさせ給ふ。北方絹綾多に取う出18得させ奉り給ふ19とぞ、中將御

校異 1国右。2国の。3团右のと、囡考異右のとり。4囡斯う、囡考異うか、國こし。5团こ。6國イてこ。7囡何。8团でふ。9國とアリ。10团さ。11团よく。12团かづけ物。13团どは。14团ナシ、囡を。15國にアリ。16一字团ニヨリテ補フ。17囡の。18囡てせ、國えう。19囡かくて。

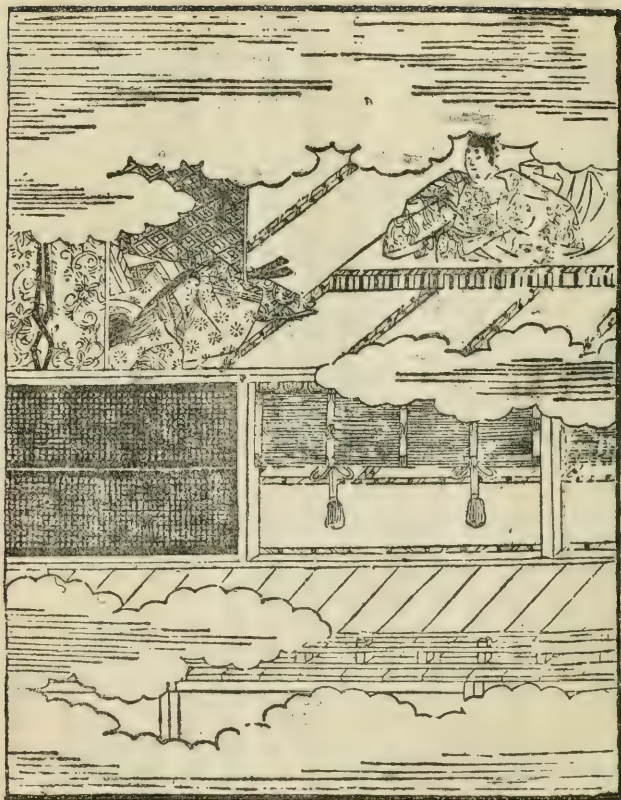
前に參り給ひて、「仲忠、宮に參らんと思ふを、え參らぬかな」大將の大殿、「なほ參りて藤壺1(に)物2に申さば、惱ましさは止みなむ」仲忠「かの局に3、少し4心地してこそ物は聞えめ。亂り心地の惱ましく覺えむまゝに、御返事聞えては恥かしからむ」大將「中將の5かしこき6はかの君に聞ゆる事の答などせさせ奉るこそうるさけれ」仲忠、「それも更に慣れ聞ゆる7(事もあらじはや」とて參り給ひぬ。かくて)左大將殿も同じごと、この8(す)まひ(〇相撲)の事を定めらるゝに、右の伊豫の最手參う上りたるに、大殿いとかしこく喜び給ふ事限りなし。「今年の相撲に、行經參うで來9のらましかば、左の並則10も參うで來たるに、初行經並則こそは定まりにしか。それら參うで來ぬかとて、いと口惜しかりつるに、嬉しく參う上りたり」など仰せらる。

〔書詞〕伊豫11の最手、12奮奉13る、蘇枋14沈など奉れり。相撲どもなどにも持たす。左大將殿には、15仁壽殿、藤壺の御16裝束の事17賜ふ。これは右大將殿に18奉り給ふ。こゝ19に相撲人20くあり。

その日頃は、21右22近衞23大將中24將、たゞ此の頃相撲の事をのみ25他の御心なく、日の近くなるまゝに、急ぎて日々に參り給ひ、その事定められなどす。26左近27中將連純頭兼けたり、平の維蔭中中納言殿の太郎

〔校異〕1一字〔イ〕ニヨリテ補フ。2〔イ〕ナシ。3〔イ〕はアリ。4〔図〕心。5下五字〔図〕用意して。6一字國イい。7以下十七字〔図〕ニヨリテ補フ。8一字〔イ〕ニヨリテ補フ。9〔イ〕ざ。10〔図〕ナシ。11國イナシ。12〔イ〕にし、〔イ〕にも。13〔図〕り。14〔イ〕盤。15〔図〕仁壽。16〔国〕裝。17〔国〕し給。18〔図〕馬アリ。19〔国〕は。20〔イ〕ら。21〔イ〕左、〔イ〕左右。22〔図〕のアリ。23〔図〕のアリ。24〔イ〕少アリ。25〔国〕にてアリ。26〔国〕右。27〔図〕のアリ。

元輔の君1權少將に藤原仲正、名高き容貌人23らうさなり。左近には仲忠涼二人ながら宰相にて中將なり。少將に行正左大臣殿の三郎成淸村方など、名高き人々なむその頃の左近中將には物し給ひける。4七月朔日5此の帝仁壽殿の大將の御息所の6局に渡り給ひて、「などか昨夜藏人奉りたりしかど參う上り給はずなりにし。合憎日頃度々迎へ人を返し給ふかな。若し7思し怨ずる事やある。あないとほし」御息所、「怨じ聞えさすべき事や侍らむ。まめやかには、日頃、暑氣にや侍らん、怪しく惱ましく思ひ給へられてなむ參う上り侍らぬ」「それこそ8は參う上り給はゞさも思されざらめ。まこと何で9う惱まし10さぞ。若し例の事か」「あな見苦し。今は11世にも越え、などか今はすとも思はむ、夏12水のと云ふ事もありや」「まことに此頃は13さる人數多物14すなり15。16物し給ふらん。あはれ、習はぬ御心地17も思ほ18さるらむ。それをなむ只今聞き煩ふ。」19「誰にか負せ20られんとすらむ。怪しや。いまだ負せ人やはある」上「味氣なの21相盜人や」答「更にこそ知り給へね。げに何事ならむ」「げに知り給はずや。情なくな物せられそ。かく宣はむからに右大將疑はむ」御息所「ましてこれこそ人の上にても嘘言22 23思ほえ[illegible]」上「怪しう心憎く勞ある

校異　1國イ右近歟。2因考異々アリ。3团らうき、国に勝、因ら多。4团かくてアリ。5团頃歟、国内裏の。6团御アリ。7团多く。8國ナシ。9团ふ。10因き。11因夜離をもよしとこそ思ほすらめと思へど。12因虫、团み、國箕川。13因二字ナシ。14因考異せず。15因考異にしアリ。16团六字ナシ。17因考異ナシ。18國す。19因答アリ。20國二字ナシ。21國あは。22因とアリ。23团覺。

人なればこそさ見つゝある。異人は難からむかし。知りて惑はむ事はそが中にもまた許す所なむある。かの兵部卿の皇子1、兄弟とも云はじ、少し見所ある人なり。先づ打見るにも、かの君を女になして持た2うまほしく、さならずば我3持たら4まほしくなむ見ゆる。まして、少し情あらん女の、心留めてかの皇子の言ひ戯れむには、如何はいと5儘にしもあらむと見れば、理り6なりとて切にも咎めず、時々の氣色をば物とも思はれずかし。されど罷免るゝ事どもも7ある8ぞ、かなかき、御許9に、大將10朝臣馴らし給はむ切にも11咎め12ざらまし。理りなりと見13る所14に少しあらまし。更に兵部卿15皇子返りて苦しき人なり。見む人に心止められぬべき心ありて、吉祥天女にも如何せましと思はせつべき16大將なり。それを、少し人に勝り給ふ所は、いと深くなむ知り給17とずなりにける、後は覺束なけれど」御答「あなうたて。さる心やは見えし。異人をこそ物せらるめりしか。かう宣ふからにいと惡しからむ。たゞ言ひしが見所ありしか18え、た19し文走り書きたるが、心ある20樣なりしかば、あはれなど思ひし」など聞え給ふ。「嘘言を宣ふにこそ。さらば疑ひ聞えん。何で21う嘘言にかあらん、時々物聞え今もあめるは」と宣ふ。御息所「22今やさ思23ひはるゝ心やありけんなど著く見ゆる事もなかりし。この春宮に24侍ふが、25又里に侍りし時こそさ思ふ事もやそが中に。

校異　1 因はアリ。2 イら歟、国ら。3 因女にて向は。4 国れアリ。5 イ眞實。6 国や。7 イなんアリ。8 イそが中に。9 因の。10 因のアリ。11 國イ跳。12 國イう、13 國ゆアリ。14 イぞ。15 因のアリ。16 因人。17 イは。18 イば。19 イだ。20 因樣。21 イふ。22 イいさ。23 イ術歟、因ナシ。24 國イさるら。25 イまだ。

あらむと見給へしか」と聞え給ふ。「それ将さかし。何れの世界にか男1あるが、2彼處3 4言は5ねがなかりし。まつはり〔○先づ理カ、纏りカ〕なき致仕の大臣、高基の朝臣さへ言ふ事ありけむかし。これになむ驚きにし、怪しく物せらるゝ人なりけりとは。そが中になむいと切に云ふ人々ありと6聞7かじ8と。仲忠は、天下に珍しき心あらむ女を、彼9たりに少し氣色あらば、10え忍ぶまじき人ぞかし。それを如何に餘所に見ては、如何にあらんと思ふなむいと心11憎く有り難き御心といよ〳〵思はゆる。今もなほその心失すまじかし」12御いら13ん〔○答〕「さ14るはかいあてこそも、見る所やありけむ、異人よりは返事15せよせまほしくは思16ひたらざりしを、かの仲忠もさもや見けむ、いとあはれと思ひぬべき事17覺えすめりしかど、まめやかには思18はで止みぬめり」19吉上「あはれなる事20もがな。かの中に通はされけむ文いかに興ありけむ。かれを見ばや。す21かし〔○涼〕の朝臣の22吹上の濱に物したりし時に、仲忠いと切に勞ありしかば、なほあてこそは仲忠に取らせ給へと大将に物する事ありしを、いと切に喜び云ふ事ありしかば、必ず取らせ給23はむやと思24かしを、志異なりければ、かく異なるを如何に思ふらん。天子空言せずと云ふ事は無き世なりけりとこそは思ふらめ。怪しく心憎き所ありて恥かしと思ふ人に、虚言すと思はゆるなんいとほしき。

〔校異〕1国とアリ。2圀彼處。3圀にはアリ。4國イ行か。5冈ぬ。6国もアリ。7冈きし、圀ききかし。8国かし、圀ナシ。9冈だに、国たゞに。10圀ナシ。11國イに付。12圀ナシ。13冈へ。14国れば、15冈二字ナシ、圀いと。16国ふ給へ。17国多く。18國イひ出。19冈き、院、国き。20圀か。21冈ず。22國イふみ。23國イひて。21冈ひ。

その今宮をやは取らせ給はぬ。天下に云ふともえ勝る事あらじ。怪しく見るに心ゆく心地して、世間の事忘るゝ人になむ1。す2かし(〇京)の朝臣えこそ等しからね。なほ彼は彼として、これは心殊になむある。まだ位なむ心許なき。それはな思しそ。さらばえ批き宣ふ事あらじな」御息所「如何に此處にはともかくも思3(ひ)給へん。萬の事宜はせむにこそは」御答「されど其處4に許し給はゞ5ところ」答「此所には聞えさせむ。何かはさてあらんに、人などは似げなくなど言ふ事はなくやあらむなど思6(ひ)給ふれど、位などまだ高き人にもあらねば、なほ暫しはかくて物し給へとなむ思ひ給ふる」帝「などてか女のたゞにて盛り過ぐ7ることのあらん。さるべき人なくてある時にだに味氣なきも8、かくよき人を見てはさて過ぐす事のあらむ。泣はな思ほしそ。まだ年若き人なり。罪は9免れなむ。その程はた10世11に人には12落さじ。なほさ思ほしたれ。世に謗ら13れはあらじ」答「いでや、えぞ思ひ給へ定めぬや」「空洞を思し出づるにやありけむ。あな僻な。世に批きあらん事は聞えじ。なほさ思したれ。こよなき位にしなしてむ。只今のみめよりも、かく具したる才に、容貌心なども勝れば、只今より覺え勝14るなむ」御息所「今よく思15(ひ)給へ定めてを、里16になど許し17申されば」上「その御里こそ世に謗り給はざらめ。さては頼もしかなり」など聞え給ふ。

校異 1 [不]あるアリ。2 [不]ず。3 一字[不]ニヨリテ補フ。4 [不]と。5 [不]ナシ。6 一字[不]ニヨリテ補フ。7 [因]す。8 [因]考異からアリ。9 [國]イさぬが。10 [國]イか。11 [不]の。12 [因]劣ら。13 [國]せ。14 [因]り。15 一字[不]ニヨリテ補フ。16 [不]ナシ。17 [不]ま。

御薬四1立て〻日の御膳聞し召す。賄にも渡らせ給へりき。「辛うじてこの頃なむ少し怠りて侍る」上

「いと2ほしき事。更になむ知らざりける。如何に怪しき心と人々思ひけむ。譃言なむいと悪しき事なる。

いかゞ人のたゆまざ3ら4(5む)」など宣ふ。

かるゝ程に、上達部皇子達など67仁壽殿に參り給ふ。殿上人侍ふ限り參れり。左大將三條8院9に御菓物

御酒など取り寄せて、その御局に多くの上達部皇子達などおはしまして、御酒參りなどして、御物語り、上

も春宮も「久しくよしある10わ11き12とず。やう〳〵風涼しく、時もはたをかしき程になり行くを、世間の

事も忘れ、心の中ゆくばかりの事もこの秋してしが13なむ〳〵定め給へ。人の14齢と云ふ物15はかなき物16

な17く、命あらん限りこそあらむ事を見つゝ18こそあらめ」と宣ふ。春宮「げに同じく19出で來む節會とも

を、なほ御時の珍しき20ない〔〇累〕代にもしてしがな。かの吹上の九日、少しよしある九日に21なりけむ、

又さやうならむ事侍らばよからむかし。年の内出で來る節會の中に、何れいと切に勞あ22り、定め申されつ23

よや」大將「年の内の節會、24これを何れ25と26勞あ27りて、28朝拜など聞し召す時はいと面白く、内宴も

校異1國イ臨。2囝いとアリ。3因るアリ。4一字囝ニヨリテ補フ。5国め。6囝皆アリ。7因仁壽。8因

のアリ。9因より。10國イに。11囝ざ。12国せ。13囝なむ、国しなむ、因朝臣、因考異〳〵なむ。14因

歡。15因はアリ。16国にアリ。17国む。18因も。19因ばアリ。20国る。21囝はアリ。22囝る。23國げ

24因どもは。25因も。26國イちう。27因り、因異れど。28國イては。

聞し召すもいと勞あり1、面白し。三月の節會は花とく咲く時はいと勞ある程なり。2なほ殊なる花などは咲かぬ程なれど3も、怪しく艶きて哀れに思ほゆるは五月五日なむある。短き夜の程なく明くる曉に、時鳥4ほのかに聲打ちし、五月雨たる5頃、6 7同じ日の早朝、菖蒲所々に打ち8艶きたる、香のほのかにしたるなむ怪しく興勝りて思ほゆる。藥物などの盛りにはあらぬ程なれど、9わづかに時過ぎたる物など10あるなむいと勞ある。節供など聞し召す時11にはた更にも益す物なし。七月七日をかしう12あれど、殊なる面白き事はなくなむある。かれも有樣になむ。九日は吹上を思13ふ給ふればいとこそ勞あれ。それより後は五日14わ15をくるとなむ思16ふ給へらるゝ」上「いとよう定め給ふなり。思ひしごとなり。更に年の内の17節會18見るに、五月五日に19ます節20なしとなむ思ふ。花橘柑子など云ふものは、時過ぎて古りにたるも、珍しき物21餘へに愛るなむいとをかしき。そこに勝すもの22慰む。節する時の馬弓競馬も更に見所なしかし」など笑ひ給ふ。かく御物語りし給ふ程に、23日夕影になほいと、七月十日ばかりの24程に25なほ26若27さ盛り28なり。風なども吹かずあるに、人々「少し涼しう風も吹き出でなむ」さるは今日秋立つ日にこそあれ。

校異 1〔イ〕てアリ。2〔イ〕さてアリ。3〔イ〕ナシ。4〔イ〕のアリ。5〔国〕に。6〔因〕考異ほひのアリ。7〔イ〕ほひ。8〔イ〕葺。9〔イ〕はつ。10〔イ〕のアリ。11〔因〕ナシ。12〔因〕はアリ。13〔因〕う。14〔イ〕は、〔国〕に、〔因〕には。15〔イ〕劣、〔国〕遲。16〔因〕う。17〔因〕考異節供。18〔因〕どもアリ。19〔因〕勝る。20〔因〕會アリ。21〔因〕一つ。22〔イ〕なくな。23〔イ〕八字ナシ。24〔イ〕程の、〔国〕二字ナシ。25〔イ〕夕日影アリ。26〔国〕いとアリ。27〔国〕き。28〔國〕イナシ。

1しな〳〵見ゆる風吹けや」など上達部宣ふ程に、夕影になり行く2。珍しき風吹き出づる時に3ふかくぞ出だし給ふ、

珍しく吹き出づる風の涼しきは今日初秋と告ぐるなるべし

と宣ふ。御息所4(御集)の内ながら「げに例よりも今日は」とて、

いつとても秋の氣色は見すれども風こそ今日は深く知らすれ

と聞え給へば、5 6打ち笑ひ給ひて、「されどまだ外にぞ侍る。

立ちながら内にも入らぬ初秋を深く知らする風ぞ怪しき

そ7こ8と聞ゆる風9さかりや」と宣ふ。左大將「それも如何」とて、

外に立つと頼みしもせじあだ人の秋は出でても過ぐ10す11云ふなり

と聞え給ふ。かくて其處12にて日暮れぬ。上13々帝渡り給ふとて、御息所14を「今宵だに參う上り給へ。例の御迎15に16奉らば、返し給はむものをや。いざ諸共に」とて立ち給へり。御息所「これも19かくしやすき御使になむ」と聞え給ひて、「まことは何かは」とて、

夏だにも衣隔てゝ過ぎにしを18(何しも秋の風を厭はん)

校異 1 活著く。2 図まゝにアリ。3 活ナシ、国上。4 二字活ニヨリテ補フ。5 活上アリ。6 国上、國イふし 7 国よ。8 図考異に。9 活な。10 活と。11 國イとアリ。12 國も。13 図ナシ。14 図に。15 活ナシ。16 活だに參。17 活返。18 下十字国ニヨリテ補フ。

1と聞え給ふ。「おのれ辛く2てと3は4うれをや5言ふ。あな6 7かま」と聞え給ふ。「例の8かくし給ふなよ。よしさらば自らもよ」9とて渡り給10ひぬ。かくて上達部皆御11許に參り給ふ。上より藏人御12許に率れ給へり。女御參う上り給ひぬ。

[詞書]こゝ13に御息所14よなどおはします。大將の君御子引き連れて三條15 16院へ歸り給ふ。

17左大將は、宰相の中將諸共に殿へ歸り給18ひぬ。異人は、あるは宿直に侍ひ給ふもあり、里に罷出給ふも有り、左大將の君も罷出給ふ。19舞も20北の大殿に送り奉り給ひてなむ彼方此方21おはしましける。「物語りし給へりける程に、上仁壽殿に渡り給ひて、此處になむ物する。し22る仕うまつれと仰せ有りつれば、又其處に參りて、御物語りなど聞えさせつる程に23(24なん、夜更くるも知らずなりにけりや」宮「いかに)臺には何事25ろ物し給ふ」大殿「上局に物せられける。異なる事も物せられざめり。例の遊びをなむせられつる。府の宰相の中將御簾の傍にて26箏の琴仕うまつりつ。あてこそは琵琶をなむ少し掻き合せらるゝなり27つる。此所に物せられしよりも少し劣りにけり。28逸物の中將に劣らぬ29上に掻き合せなど30するに、更

[校異]1[国]五字ナシ。2[イ]ナシ。3[イ]ナシ。4[国]こ。5[国]考異にはアリ。6[イ]聴なとて、早うと宣ふ、まめやかにはいアリ。7國イナシ。8[国]返。9國イそ。10國イは。11[国]供。12[国]供。13[国]は。14[イ]ナシ、[国]上。15國のアリ。16[国]殿。17[国]右。18國は。19[国]御アリ。20[イ]子ともゝアリ、[国]御子どもゝアリ。21[イ]ヘアリ。22[イ]か。23以下廿字[イ]ニヨリテ補フ。21[国]二字ナシ。25[国]か。26[国]箏。27國イ一日歟。28[イ]さるアリ、29[国]箏。30國のアリ。

にもどかしか[1]しずや」宮「如何に、かの中將の思ふらむ氣色は如何ある」大殿「それをなむ見給へつる。少し訪心なき氣色なむ、[2]見なしにやあらむ、[3]見えつる[4]は」宮「あはれと聞く人の心にこそありしか。いと切に思ひたるものから、更にあはれ[5]たる氣色は見えず、さりともはたさ思ふらんとは見えつ[6]ゝ、同じう走り書きたる文の、おいらかに人見ゝとも、かたはにもあらず、さすがにいとあはれに見えしなり。いと舞[7]き宰相の中將の文、いと久しく見えねば、思ひ出でられて、いと[8]戀しくなむ」大殿「今も彼處には消ゆまじかめり。今日も見給へつれば、御[9]前にきやう〔○興カ、饗カ〕仕うまつるとて侍はれつるに、ことゞなく走り書いたる[10]手の、薄葉に書きたる、懐中より[11]すでに見えつる[12]、見せよや[13]〔へと〕戲れ心に聞ひつれど、笑ひて出さずなりぬ。なほ氣色ある文にやあらむ。[14]宮[15]もはた仲忠今も昔もさる心あたりと聞し召した[16]れば、[17]返事[18]せられなどするをば、切に宣ふまじかめり。道理と許されたるこそは、この中將はいとかしこけれ」など宣ふ。宮「いで此の中將、この中に入れてしがな」「[19]樣こそ[20]をよそ〔○凡カ〕はしたる思ひ侍れ[21]ど、[22]仰せ[23]くる〻事[24]ある[25]や。なほ[26]樣こそは、す[27]かし〔○涼〕の朝臣に物せられよ。

校異　1 [石]ら。2 [宮]見えつるアリ。3 下五字[宮]ナシ。4 一字[石]ナシ。5 [石]な。6 [石]る。7 [宮]考異ナシ。8 [石]悲、9 [石]らん。10 [宮]考異一字ナシ。11 原本此字讀ミ難シ。12 [石]をアリ。13 一字[石]ニヨリテ補フ。14 [宮]東アリ。15 [石]ナシ。16 [石]なアリ。17 [國]返り事。18 [國]してアリ。19 [石]今。20 [石]三字ナシ、[石]をこそ。21 [国]上。22 [宮]上アリ。23 [国]ら。24 [宮]とアリ。25 [宮]なり。26 [国]今。27 [石]ず。

仲忠は我思ふ事なむある。す1かし〔〇涼〕にと思へ2ど、3ろう〔〇族カ〕の源氏なり。同じくば仲忠を4なほ思ふと、度々かの吹上の九日にも仰せられ5しありき」「6(さ)ば源中將も、仲忠の朝臣に7ゝ何處かは劣れる。更に劣り優りたる事なき人にこそあなれ」大殿「源中將はいき8をほひ〔〇勢〕こよなく勝りたなり。さりとも9け10をとる〔〇氣劣るカ、與劣るカ〕は、人柄はいと11久しきを、心恥かしげさと才とは、藤の中將はなほ勝りたらむ。正賴が思ふ12が、あこそに心ありし人々、これをだにと、兵部卿の皇子13左大將宣ふを、源中將に14も物したらば、勢により物したるにやと思はれんなむいとほしき。正賴は更に勢求め侍るにはあらず。たゞ此の世に15此所は16容面勞ある人の中にも、17逢れたる人18の、此の二人こそはあれ、これ一人はと思ふ本意たむある、仲忠の中將をばかく仰せらるめれば」宮「仲忠をば、誰にか上は仰せらるらん」大殿「いさや。誰19ぞと思すにかあらん。思す事ありと仰せらるれば、それも此の筋に放れじとこそ20思ゆれど、なほ正賴は此の藤21の中將こそいとほしけれ。世の常の人にもあらず、目出たき22公卿の23一人子にて、萬の事心もとなからぬ、此世の人の限りたくあらまほしきになむ。24頭中將勢はあるまで、源中將はいと目もあやに一つものな25ると見ればこそふさ26いに27覺え28ぬ、必ず人々思ふ所あらむと思へば。

[校異]1[不]ず。2[不]ば。3[不]そ。4[不]とアリ。5[不]ナシ。6 一字[類]ニヨリテ補フ。7[不]ナシ。8[不]ナシ。9[不]けふは、[宮]考異けふ。10[宮]考異お。11[不]等(ひと)。12[不]ナシ、[国]は。13[宮]右。14[宮]ナシ。15[不]幾多(ここだく)、[宮]幾多(いくばく)。16[不]高名(かみやう)。17[宮]勝。18[宮]ナシ。19[不]に。20[不]思は。21[類]ナシ。22[国]イ古。23[国]考異一つ。24[類]九字ナシ。25[宮]り。26[宮]ひ。27[類]はアリ。28[國]イね歟。

人の聲と云ふものは、若き人などをば、1本家の勞りなどして立つるをこそは面白き事にはすれ。勞2り所もなくて、3本家の恥かしく物せらるゝなん物しき。さるは、いと見所ある人にこそあれ。この二人の人見る時にこそ、眼五つ六つはほしけれ」と宣ふ。宮「それは頭中將をと思ひしかど、さればなりと人には知らせむ4むかし」大殿「人のことには、さ仰せられればなむとは如何語らむ」「いざや、如何せまし。此の5樣こそ6、あて宮の御代にと人々宣ふこそ苦しけれ。少くより頭中將の爲めにと勞り生したる物を」「さて此の袖こそ、7ちゝこそをば如何すべき」「それを兵部卿の皇子8左大將殿9にはとこそ10思へど、いと11いみじう思12(ひ)給へる仲忠の中將の母あるを如何にせむ」13と、大殿「何れを如何にすべき事ぞや」「なほ見るに、袖こそは14左大將の見15賜ばんによく、16ちごこそは兵部卿の見給はむにこそはよからめ」大殿「かしこうも宣ひ合せけるかな。袖こそは、いとよく容貌も心も右大將にこそ作り合せたれ。17ちごこそはいと嚴しくて、好みたる所こそあめれ」と宣ふ。宮「この人々何れかはいと見るかひなく物しくはある。そが中にい18とま[○今]こそは19蛙にも20似ずこそは21をいかでたれ22と見ゆれ。藤壺には23たこし氣24は劣りた25りをや。あてこそは、怪しく此所彼所ともなく、おしなべて目安くこそは物し給へ」など聞え給ふ。

校異 1国御氣。2因考異る。3国御氣。4団ナシ。5国今。6因をアリ。7団ちご、因げす。8団右。9國イへ。10因はアリ。11因どアリ。12一字団ニヨリテ補フ。13因ナシ。14団右。15国給は。16因げす。17因げす。18国ナシ。19因怪しう、因考異人に。20因あら。21団生ひ出。22因ど、なほ。23因少し氣、団おかしげ。24因ナシ。25団る。

譯詞 1（此所は左大將殿、宮）物聞食しつゝおはします。君達皆2なし。彼の大殿には、十四の君より初め、彼方の御腹の若君3達、皆渡りて涼み給ふ。此所4に大將殿、宮などおはします。國々より絹いと多く持て參れり。かくて宮大殿、國々より參れる絹御覽じて、「相撲の節5に、仁壽殿磨壺の御裝束いかで淸らにして奉らむ」6大殿「論な7く御前に8事こそ目立9ち給へ。さるは心してよくせられたらむぞよからむ」「御裳などは摺らせたり。唐の御衣どもぞまだせぬ」など宣10はす。11大殿のその日12奉るべき13御衣の事、御逆卅人許り、薄色の裳著てあり。14そな15ひ（○髻髮）ども多なり。唐の御衣など染めさせ給ふ。御紅染は、打物などせし所の別當、大貳御許、藏人より下仕などあり、いみじく物染め騷ぐ。政所に家司達16いと多く著き17たり。「如何にぞ。御19ほにども19、例の數候や」義則云ふ、「御ほには、20早稻の米を仰せ21に遣はせ22こけむ。今年は早稻の米いと遲き年なり」と言ふ。

かくて相撲の節明日になりて、內裏にいとかしこく、賄に當り給へる御息所か23らる〔○更衣〕達24と參う上り給ふべき事を思しつゝ手盡くしたる御化粧をしおはします。その相撲の日25、仁壽殿にてなむ聞食しける。

校異 1八字図ニヨリテ補フ。2 [イ]中、図おはす、中。3 図ナシ。4 国は。5 [イ]の。6 [イ]をと。7 国り。8 [イ]異事なくこそ目立、図こそ染め裁、図考異盡く染め裁、国他事も當、國他事なく染め裁。9 [イ]ち。10 [イ]はせ、又、図ふ。11 図考異又アリ。12 國イたてゝまつ。13 國イさ。14 [イ]う。15 国る。16 図考異二字ナシ。17 國イナシ。18 [イ]衣、図考異最手。19 [イ]はアリ。20 國イは。21 国ナシ。22 [イ]受、国に、図考異て。23 [イ]うい。24 [イ]ナシ、図皆。25 図にアリ。

1・・2（い）えむ（〇內宴）思3日違（たが）へたるなるべし。その日、朝（あした）の御賄には仁壽殿4女御、晝の5賄には承6香殿の女御、夜さりの御賄には式部卿の7女御、更衣（かうい）十人、色聽（ゆる）され給へる限り色を盡くして奉れり。更衣達皆日のよ8ろひ（〇裝）し9、天の下の珍しき綾の紋を奉り盡くし、御息所達賄（まかなひ）仕うまつり給はぬは、髫（うな）髪にてなむ侍ひ給ひけ10り。藏人も皆、今の11帝の盛りに物し給へば、此の御時の藏人は、やむごとなき人の女（むすめ）ども、あるは12御節（ごせち）の藏人13宛（あ）つ、雜役（ざうやく）仕うまつ14り、藏人も、更に15襃へぬ容貌（かたち）、16更に劣らぬ品（しな）の者どもにて、髮揚げ裝（さう）束したる樣もいと目出たし。十四人の藏人、七人17 18御節（ごせち）の召19藏人、20十七人は雜役の藏人なり。あるは冠位（かうぶり）賜はりて、みや21らぶ（〇命婦（みやうぶ））22聲（こゑ）許されたる二人、內侍（ないし）達許されぬもいと目出たくあり。すべて彼處（かしこ）に仕うまつるべき女、容貌（かたち）ども仁壽殿に侍ふべき用意してあり。左23近衞24大將より初めて、萬の天の下の人參り25給ふ。左右近26（衛）の樂人おり調（ととの）へて侍ふ。面白き事限りなし。皆相撲の27裝（しやう）束28し、瓢（ひさご）花插頭（かざし）など、いと珍らかなる事29どもしつゝ、左30近31の幄（あく）打ちつゝ32さうぐ。限りなく淸33くなる御容貌ども、まして御裝束奉りて、皆その日男女（をとこ）34こ藍（ちる）をなむ奉りける。かくてその日35賄（まかなひ）36も、

校異　1下十四字[国]ナシ。2一字[イ]ニヨリテ補フ。3[イ]ひ。4[因]のアリ。5[イ]御アリ。6[因]香（きやう）。7[国]宮のアリ。8[国]そ。9[因]考異てアリ。10[因]る。11[國]イ御こと。12[イ]五。13[因]二字ナシ。14[因]る。15[因]劣ら。16[因]二字ナシ。17[国]はアリ。18[イ]五。19[因]のアリ。20[イ]衍賊、[因]ナシ。21[イ]う。22[イ]前、[国]考異上、[因]色。23[イ]右アリ。24[因]のアリ。25[因]集りアリ。26一字[国]ニヨリテ補フ。27[因]裝（さう）。28[イ]ナシ。29[國]イナシ。30[国]右アリ。31[国]衛アリ。32[イ]侍ふ。33[イ]ら。34[イ]一、[国]二（ふた）。35[因]の御アリ。36[因]どアリ。

御息所達一の女御大將殿の仁壽殿式部卿1女御なり。これ只今時の女御なり。仁壽殿の女御朝の御前に出で給ふ。更に本上の御容貌此の御息所に似たるなし。花23かふろう（〇紋綾）に唐綾重ねたる摺裳か4は（〇搔）練の袿、紅色に二藍襲の唐の御衣奉りて侍ひ給ふ。56う7こば8ら（〇幾多）の人に御覽じ比べ給ふに、此の御息所9殿御子にて侍ひ給ふ10。帝此の御息所を11左大將聞え給ふ事ありき、今も忘れ給ふまじと思して、さては如何あるべきと御覽じ比べて、内外に御12祿を配りて御覽じおはしますに、何れも異もなき男女にてある時に、上思す、この女御と大將とさてあらむに、なかるまじき13なるにこそありけれ、これを同じ14所に、勞あらん所に据ゑて、情あらむ草木、花盛りにも紅葉盛りにもあれ、見所あらん所の夕暮などありて、行く先を言ひ契り、深き心言ひ契らせ、互にあはれならん事を心留めて打ち言はせ、15お16ゝしき17さお18はらせむに、怪しうはあらじ、なほ聞き見む人、目留め耳留め19見ざらむやは20見えし、さてあらせて聞かばやなど思しつゝ目21守りおはしま22（す）23に、賄打ちしなどし給ふにも、、いと勞々じうまことに大將の相撲の事など行ひ給ふにも、いと心深き勞の見ゆれば、怪しく似たる人の心樣にもあるかなと御覽して、

〔校異〕1〔因〕の宮のアリ。2下三字〔国〕文れ。3二字〔國〕イナシ。4〔イ〕い。5〔因〕帝アリ。6〔イ〕そ、〔国〕こ。7〔国〕く。8〔イ〕く。9〔因〕にかよひて見え。10〔因〕なしアリ。11〔イ〕右。12〔イ〕眼。13〔イ〕中。14〔因〕く。15〔因〕を。16〔イ〕か。17〔イ〕さを、〔国〕事、〔因〕考異業を。18〔イ〕二字ナシ、〔国〕語らは。19〔國〕ナシ。20〔因〕とアリ。21〔因〕守。22一字〔イ〕ニヨリテ補フ。23〔因〕考異ナシ。

1御前に、いと面白き女郎花の花のあるに2、外に3差し出だし給ふ。

「薄く濃く色付く野邊の女郎花植ゑてや見まし露の心を

4これが心見解き給ふ人ありや」とて、打ち出だし給へば、兵部卿の皇子取りて御覽じて、心得給はず5。

されど御心6 7も思す事ありけれ8(ば)、知らず聞え9にかくなむ10、

蘿よりな11くむら[〇七村]匂ふ女郎花野邊は何れもさもや待つらん

と書きて、右大將の大殿に奉り給ふ。されど人知12らぬ心一つに思13し11(し)事なれば、上に氣色御覽じたらむも知り給はねば、何でふ心ならむと思しながら、

女郎花賤しき野邊に移るとも蓬は高き君にこそせめ

とて、15大將の大殿に奉り給ふ。怪しく、16只今の御賭には、我が御息所こそ17待ひ給へ、その折18にしもかく宣ふは思す所19あらんとて、

二葉より野邊に20は植ゑぬ女郎花離ながらを21老の22代は經よ

とて、仲忠の宰相中將のかく23さるゝふるとしす。仲忠打ち見るすなはち勞の深き除りに思ひ寄りて、かく

[校異]1 [内]御前。2 [イ]付けてアリ。3 [内]考異二字ナシ。4 [イ]と書き給ひてアリ。5 [国]ことアリ。6 [イ]にアリ。7 に。8 一字[イ]ニヨリテ補フ。9 [国]にく。10 [国]とてアリ。11 [イ]な。12 [国]れず、[国]れぬ。13 二字[国]す。11 一字[イ]ニヨリテ補フ。15 [内]左アリ。16 [国]ナシ。17 [イ]不断。18 [イ]節。19 [内]やアリ。20 [イ]は匂ふ、[国]ならはぬ。21 [国]イい。22 [国]齢に。23 [イ]遊らふに劣らず、[国]待ふに劣らず、[内]待ふに取らず。

書きつ1ゝ、

撫子を並べて生す女郎花植ゑて2ば花の親と頼まむ

と書きて參る。上御覽じて、3如何に〳〵心を御覽じ4て解きておはしま5すに、兵部卿の皇子承香殿を思6くしたり。7左大將のを御覽じて、怪しく心8經たる事をも宣ひたるか9と思して、仲忠10を御覽じて、常笑ひ給ふ事限りなし。「仲忠の朝臣11は何でふ心12を變へたる13あは」と仰せ14らる。仲忠、「深くは知り給へざ15めつれども、はた奏したらむ、こよなくあらずや侍らん」「かしこう空覺え（〇おぼれカ）する朝臣なりや」とて、笑ひて止み給ひぬ。

今は16皆相撲始まりて、左右の氣色17齋ひ過して、勝負のかつき18（〇勝つ際カ）は、四人の相撲人出して、勝つ方一二の相撲、方一つ取られ給へ19る。皇子達上達部大將中少將20返し給ふ。十二番まで、此方彼方互に勝負し給ふ。只今は此方21にも彼方にも數なし。今22一番23は出だすべきになむ勝負定まるべき。左にた24しな下野の並則上りて、25さうに並則が京26參う上る事三度。27幾多の年頃のなかに、一度は仕うまつれり。一度は相ふ手なくて罷28へり歸りにき。天の下の最29手なり。左大將の大殿、30左の相撲これに相ふべ

校異 1囝く。2囝や。3因色〻に。4囝ナシ。5因考異さす。6囝ナシ。7因右。8囝得。6因なアリ。10因のアリ。11國イナシ。12因得。13国か。14國イナシ。15囝り。16囝ナシ。17因言。18囝にアリ、因わアリ。19国り。20国かく。21國イナシ。22因一番。23囝ナシ。24国ゝ。25国更。26因にアリ。27因幾。28囝ナシ。29國イりアリ。30国右。

きはなしと1覺えて、2二度の相撲にぞ3勝負定まるべければ、せめて此方彼方4に5營み交しておはしまさむ。左は竝則を賴み、右は行經を賴みて、大願を立てつゝ勝たむ事を念じ、更に相撲頓に出で來ず。かく云ふ程にまだ日高6に、その程に御賭の賭代りて、承香殿仕7まつり給ひける。今は夜さりの御賭になりて、式部卿8宮の女御當り給ふを、この御息所書の御賭に「なほ9う度は仕うまつり給ふ。後は御讓りあらむ事を仕うまつらん」とて、今日はなほ承香殿仕うまつり給ふ。夕影の程にな10る、日の賭仕うまつり給ふ。相撲の11盛りに軋びて、勝負して、左右樣々の相撲出して仕うまつらせ、限りなく樂を仕うまつる。かく〔〇樂カ〕面白12き御覽せし程に、賭の御息所の容貌13裝束目出たく淸らなるも、え心留めて御覽ぜざりけるを、かく軋ろひ14しど〔〇挑〕み交して出で來ぬ程15に、此の御賭を御覽じて、夕影に怪しく物の淸ら勝る程に、例よりも勝りてなむおはしましける。帝16の君17の御名立ち給ふ兵部卿の宮に御覽じ比べて、18げにはた只え見過してあるまじき人の仲にこそはありけれ、男も女も互に見交して19、げに〳〵身は徒になる20とも、我にてもたゞにては、えあらじかし、見るに、男も女も21にか〔〇深〕き勢あり22けりともいとゞ覺ゆるかな、かゝる中の、さすがに色に出て23えあらず、思ひ愼む事ありて、24うの中に何でふ事を言ひつくすらむ、こ

校異 1 囧思し。2 国此。3 国勝。4 國だアリ。5 囧挑。6 囧し。7 因うアリ。8 因のアリ。9 囧此。10 因り。11 國イさは。12 囧く。13 因裝。14 囧い。15 囧ナシ。16 国こアリ。17 囧こアリ。18 国今日。19 囧ばアリ。20 國イナシ。21 囧ふ。22 因考異二字ナシ。23 囧はアリ。24 囧そ。

の中には世の中にありとある1事の、少し見所聞き所ある2は言ひ盡くすらむかし、彼を聞き見るものにもがなと、此彼を比べつゝおはしまして、いかでこれに聊かなる事言はせても見せてしがなと思す。物など聞食して、「今日の賭は、人々に土器賜ふべき物ぞや。分いても、其處には3忌む給ふ事やあらむ4ずる」御息所「賭の土器賜ふべき人こそ侍はざめれ」と聞え給ふ。兵部卿の皇子5え聞き過し6て給はで「今日は土器の相撲の節にこそ」と聞え給ふ。帝笑ひ給ひて「されば、7止めて8給へれ9する人もあらむ」兵部卿10皇子「倒るゝ方になりなば、勝つ名11となり〔〇取り力〕みむかし」と聞え給ふ樣、切に12返し餘13り氣色なれば、あはれに苦しく14覺ゆらむ、さてあらん15ぞ16似げなかるまじき中にこそありけれなど御覽じて、上、

「17御土器女御に賜ふべき人18なかなるを、げに19なしや20うと試みむ」とて、賭の御息所に賜ふとて、

「強者の21原に宿るは辛けれどかたはに見えぬ弟矢なりけり

と見ゆればなむ咎め聞えぬ」とて參り22見給ふ。御息所賜はり給ふとて、

かたはなる名の弟矢にも聞ゆれば思ひ焦らるゝ頃にもあるかな

とて賜はり給23ひて。春宮取りて、兵部卿の宮に奉り給ふとて、

〔校異〕1〔因〕考異も。2〔イ〕ぞ。3〔イ〕言ひ、〔因〕考異忌み。4〔イ〕とす。5〔イ〕はアリ。6〔イ〕ナシ。7〔イ〕賦。8〔イ〕倚、〔イ〕魂觸。9〔国〕ぬ。10〔イ〕のアリ。11〔國〕イも。12〔国〕隱。13〔イ〕る。14〔イ〕思ほゆ、〔國〕思ほゆる、〔因〕思ほ。15〔イ〕に。16〔イ〕國憎。17〔國〕イナシ。18〔イ〕二字ナシ。19下五字〔国〕何でうと、〔因〕考異何でう。20一字〔因〕そ。21〔因〕滅。22〔イ〕ナシ。23〔イ〕ふ。

「秋の夜の數を搔1くせむ鴫の羽の今は弟矢の片羽に2はせむ
同じくば、さてあらむなむよからん」兵部卿賜はり給ふとて、
「大鳥の羽や片3わになりぬらん今は弟矢に霜の降るらん
思ほえぬ事4かな」とて5太上の宮に奉り給ふ。取り給ふとて、
「夜を寒み羽もかくさぬ大鳥の降りにし霜の消えずもあるかな
なほ言はれ初め給ひにたるこそ惡しかめれ」とて、取り給ひて、左大將に6奉り給ふ7とて、
8聞き果てゞ夏をも過ぐ9す霜見れば却りて冬の數ぞ知らるゝ
右大將10奉り給ふ。11取り12て、
「花の上に秋より霜の降るなれば野邊のほとりの草をこそ思へ
かゝる虚言恐ろしかりけ13る」とて、兵部卿14皇子に奉り給ふ。取り給ふとて、皇子、
扱き交ぜて秋の野邊なる花見れば仇人しもぞ先づ古しける
かゝる程に、他上達部15數多參り給ひぬ。度々御土器參りて、16日申の時17より、今一手の相撲此方彼方將
に出で來ず。上より初め奉りて、上達部皇子達なほ氣色ある18つき手19（20なり、此度こそ事定まるべき度

校異 1 [イ]か。2 [国]ぞ。3 [国]羽。4 [イ]は。5 [イ]彈正。6 [国]賜は。7 [国]取り給ふアリ。8 [イ]消え。9 [国]る。10 [イ]
にアリ。11 [イ]と。12 [国]給ふとアリ。13 [イ]り。14 [イ]のアリ。15 [イ]いとアリ。16 [イ]ナシ。17 [イ]ばか。18 [イ]
べ。19 以下十七字[イ]ニヨリテ補フ。20 以下十五字[国]ナシ。

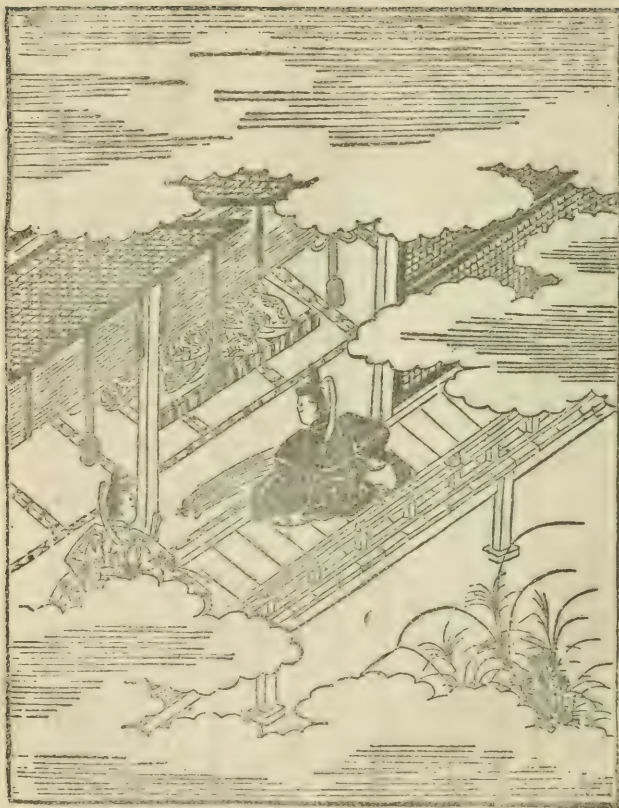
なれとお〕1を〔○思〕して、强ひて待ちおはします。辛うじて、先づ左に竝則、右に伊豫の最手行經出で來る時、人々「此度の相撲の勝負の定まらむ事いと無期なり。まさに竝則行經3が3〔相ひ〕なむ手4は、頓に定まりなむや」5いと心許なくてある程に、上「いと切に勞あ6る、左にも右にも、今日勝たん方は、參る人分れて、その府の人官人の迭せよ」と仰せられて、左右と7遊ぶ事限りなし。かゝる程に、なほ8く左勝ちぬ。左より四十人の舞人分れて、人など數知らず出で來て、遊ぶ事限りなく面白く遊びせめて、左大將土器取りて、竝則に賜9はて、袙の御衣脫ぎて賜ふ。限りなく遊ぶに、上「こゝ10ろ〔○幾多〕の年頃、嵯峨の院の御時にも、國治りて11後も、見所ある事なかりつるに、12更に13言へ、只今の大將達14の、例の人に立ち勝りたる人にて心遣ひせられけん、いと勞あるかな。これに少し珍らかならん筋にして、かの九日の等しき相撲になしてむ。仁壽殿の相撲の節、吹上の九日とも言は15せてしがな」と宣ふ。春宮、「さりとも、今日これはやと見ゆる16、他人は17たち仕うまつらじ。幾多に並なく、天の下18ある限りの者の、今日に盡きぬるを、それに少し立ち勝らむ事は、す19かし〔○凉〕仲忠仲賴なむ仕うまつり出ださむ」上、「その人々こそ心強き人なれ。さりとも20今見むかし」とてす21かし〔○凉〕を召す。す22かし〔○凉〕その日いと目出たく

〔校異〕1 ㊀ぼ。2 ㊂考異と。3 二字㊀ニヨリテ補フ。4 ㊀挑み。5 ㊂ナシ。6 ㊀り。7 ㊀爭ふ。8 ㊂も。9 ㊀ひて。10 ㊀ら。11 ㊂のアリ。12 ㊂さこそ。13 國何時。14 ㊀少し、㊂考異の少し。15 國イナシ　16 ㊀事アリ。17 ㊀え。18 ㊀にアリ。19 ㊀ず。20 ㊂試み。21 ㊀ず。22 ㊀ず。

1装2束著て參れるを、御前に召して仰せらるゝ。「今日なむ例の節會に似3ず、物の興思はゆる4になむあるを、今日累代の例になりぬべかめり。5おもやう、今少し珍らしからん事しつけて、同じく6は例にせむ。なほ7今日の相撲の事8に、9沙汰あるまじく故事10なん思ふ。人のすまじき事をこそはせめと思ふに、す11かし〔○涼〕の朝臣と今一人となんある。朝臣の訪ひに物したりし九日なむ唐土にもなく珍しき例になりにし。今日の相撲12となんきたさ13る様14おしき15が仕うまつりし琴仕うまつれ」す16かし〔○涼〕「年頃仕うまつりし琴、仕うまつらじと思ふ心侍りて、魂をも變へ、仕うまつりしあたするゑ〔○跡未カ〕をも捨てゝ侍れば、更に17弾き所あ18り手と云ふものなむ覺えず侍る」と奏す、上「更に奏すまじき19（こ）となり。仲忠の朝臣、度々否び申20（す）をだに許さで、けに山賤とも聞かじや」と仰せらるゝ。强ひて傍なる人に21云ふ、「卿か、善うまれ惡しうまれ、思ひだに出でられば、仕うまつるべきを、更に隱け離れてなむ思はゆる」と人々に云ふを、22聞し召して、「す23かし〔○涼〕の朝臣が24冷まし申25（す）を辭はせてば、仲忠の朝臣のしてむをば責めじ」など、度々いと切に責めさせ給ふ。畏まりて更に仕うまつらず。上「手26 27むげに覺束な

校異 1因裝。2不束き。3國る。4不日アリ。5不思ふ。6國イか。7國イたまふ。8不よ、因は。9不また。10因にせむとアリ。11不ず。12因も。13不な。14不因になさまほ。15不ナシ、因かの。16不ず。17下五字因今また。18一字不る。19一字不ニヨリテ補フ。20一字不ニヨリテ補フ。21國イ二字ナシ。22国上アリ。23不ず。24因辭ひ、因考異辭し。25一字不ニヨリテ補フ。26因はアリ。27不は。

く覺ゆ1るとも、深き2才は、それに向ひて手觸れしむれば、自然に思ひ出でらるゝものなり。いとさ言ふばかりにはあるまじかめるを、さりとも片3手4は殘りたらんものをと、怠々し5う申す事なり。上6にも常に好みてはせざりけれど、勞ある聲にもあるかな。まして常に7なのが〔〇違〕ひて、心に入りなむ時如何ならむと思ほゆるなむいと面白き。いと切なる夜に、後めたき事は言はじや」とて、御前なる六十調を五8箇に調べて「こ9れ10聲をもて、11折返し只彼の吹き合せむにて仕うまつ12れよかし。彌行が13うらいはこの15はを、琴の音の出で來む限り仕うまつれ」と仰せら16れて、17 18す19かし〔〇涼〕更に、他手は思ひ出づる事や侍らむ、五箇の手と云ふもの、懸けても20思ほえずなむ侍る。この21調を返22して聲になして、仲忠と侍はゞ、仲忠の朝臣の仕うまつらむを承らばや、僅に23も、たゞ百の六十24ぜう〔〇調〕許り、異25やどもの多く侍らん」と聞えて侍ふ。「す26かし〔〇涼〕の朝臣仕うまつらばこそは、仲忠の朝臣27は、亂ろびたる人28仕うまつるに、これに搔き合せて仕うまつれとも言はめ。辭29うまじきす30かし〔〇涼〕だに31云ふ。ましてかの合惰者はまさに聞きてむや。よし負32す見むかし」と宣ひて、「仲忠の朝臣」と御口つか33う召す。

校異 1[イ]ナシ。2[国]才。3[江]音、[江]へ。4[江]ばかりアリ。5[国]く。6[イ]手。7二字[内]た。8[國]イり。9[内]の。10[イ]こそアリ。11[國]イおも。12[イ]らアリ。13[イ]そら、[内]族。14[内]二。15[國]イか。16[イ]る。17[国]賜へばアリ。18下三字[内]ナシ。19一字[江]ず。20[イ]覽。21[イ]白手。22[国]り。23[内]思ひ出で侍らむ。24[イ]で。25[イ]手。26[イ]ず。27[内]にアリ。28[イ]にアリ。29[イ]ふ。30[イ]ず。31[イ]かくアリ。32[イ]せ、[江]せん。33[イ]ら。

仲忠左近の幄にふ1み〔笛〕吹きせめて、勝ちたる遊びし居2なに、召す聲を聞きて、笛打ち捨てゝ逃げ隠れぬ。隠れ所も覺えず、いかで人に知られじと思3（4ひ）、藤壺5に、春宮6に侍ひ給ふ大將殿の7あて宮の御局に隠ろ8ゝ9に、御達「こは何ぞの御隠ぞや」など笑ひ言ふ。仲忠「只今わ10（づ）ら〔〇煩〕ひにて侍り。え罷出で、せめて隠れ所を求むるに、たゞ此所に侍はんのみなむ心安かるべき」兵衛「あなむくつけや。過失したらむ人をばいかでか隠さむ11。言ひ懸け12てもこそし給へ」中將「他に過つ13べき事も覺えず。此所にこそ萬の事過つべけれ」兵衛「14よう〔〇要カ、益カ〕なきもの15見えずとか言ふなれば、何處にてかし給はざらむ」答「さりとて、あはせにあだならぬ人もあめりや」とて、御簾御几帳の中に隠れて、長押に押し16はかりて、たゞあて宮の17た前に侍ひて、物など聞18えて、「今日上に參う上り19給はぬ人は、いと罪深き心地こそし給へ。さる目出たき事の有り難げなるを御覽ぜで、なほおぼろげにはあらじかし」上兵衛の君して、「如何20がなど21そさせ給ふ。それ見過すも罪なきにはあらずかし」仲忠「時々侍ふに、背にたるにやあら22（ん）」とて「まめやかには、さばかり面白かりつるものを御覽ぜずなりぬる」兵衛、「この頃惱み給ふ23かどありてなむ。何方か24勝ち給ひぬらん」答「25何せむに26か問はせ給ふらむ。左の府の中將には仲忠

校異 1[不]え。2[不]る。3一字[不]ニヨリテ補フ。4[因]へば。5[国]は。6[不]ナシ。7[因]考異四字ナシ。8[國]イナシ。9[不]時アリ。10一字[不]ニヨリテ補フ。11[不]とアリ。12[不]ナシ。13[因]二字ナシ。14[国]や。15[因]はアリ。16[不]か。17[不]御。18[因]ゆ。19[国]給ふ、上りアリ。20[不]に。21[不]奏さ、[国]問は、[因]言は。22一字[不]ニヨリテ補フ。23[不]事。24[國]イ語ら。25[不]何歟、[因]何。26[國]ナシ。

侍らずや。何方にかはあらん」兵衛「さればこそは、此方にはあらじと思ほすめれ」1曰く「心の中はよき虚言人なりけり」など言ふ。「いと2みうこそ3よく〔○憎カ、醜カ〕げなかりつれ。いでさも口惜しく御覽ぜずなりぬるかな。さるは、必ず參う上り給へらむと思ひ給へつるを、同じくいた4(す)相撲と云へども、いと勞ありてし侍5るは、侍ひ給ふらんと思ひてこそあれ。御覽ぜざりけるこそいと6夜7(の)錦の8心すれ」兵衛「此所にてやは9仕うまつり給10はで、御覽11ぜさせ給はぬ」「12いで何かは相ふ13手に14しなし給はば」など言ふ。

かくて物聞え給15(ひ)、萬の事を言ひ居たれば、16上兵衛して答へさせ給ふ。中將「高麗人などこそ御17通辭はありと云ふなれ18。19僻り渡20りとも思はぬに、怪しくもあるかな」21 22と、ちゝ「されども、こ23よ〔○辭〕作りはたあ24て〔○遊〕25ばす上手におはしませばにこそあ26はれ」など言ふ折に、夕暮になりぬ。秋風いと涼しく吹く。中將「秋風は涼しく吹くを白妙の」など御前なる箏27の琴28 29搔き鳴らしなどす。兵衛「されば、賴み聞ゆる人もあらんかし30」中將「此所な31みでは何處をか32 33調べ34」「されど35野にも山

校異 1 因答。2 イ二字ナシ。3 イに、国みに。4 一字因ニヨリテ補フ。5 イりつアリ。6 因夜。7 一字イニヨリテ補フ。8 因心地。9 イ御手アリ。10 イひて。11 國イと。12 國イべく。13 因考異く。14 因考異ナシ。15 一字イニヨリテ補フ。16 因藤壺。17 因通。18 イばアリ。19 イ能。20 イる。21 イいアリ。22 イ答。23 国は。24 イそ。25 因考異び。26 イナシ。27 イ二字ナシ。28 イをアリ。29 國イ潰。30 イなアリ。31 イら。32 イはアリ。33 因知らむ。34 国むアリ。35 イ兵衛アリ。

にもとこそ言ふなれ」中將「それは嵐ならんや」兵衛「されど1眞風とこそ聞ゆ2れ」中將「されど今は皆木枯になりにたりや」兵衛「3むべこそは豫の空に聞えけれ」中將「先づ先に立つとてなむ」兵衛「此頃より聞えざりつる御すきぞかし。いかでならむ」中將「秋霧の4降るは如何聞えざらむ」兵衛「5それ6が晴れず7みあらむこそ見苦しけれ」中將「そよや。盡きせぬこそ8いと侘びしけれ」兵衛「宿かす人はあらむを、あいなき御事なりやなどなん」中將「されど春宮よりは遠9ざるめるを」兵衛「それは雲の上には御宿ありとてなむ」中將「それを攀り過ぎし10は月陰にも御覽しけむ」兵衛「それこそは白雲なれ」中將「いでまことは、まめやかなる事をこそ聞えさせめ。月日などは超えこそ侍れ。え思ふ給へ定めぬ事の、年月に添へて勝るをば如何せ11ぬ、つひに御覽じ知ら12ずやすらむ」兵衛「この頃は13ほに添へては思ほしえずやあらむ、晦日になりにけるは」「いで、さては有明も著からんかし。怪しく、眞實事聞ゆれば、晦日におはする14ゝ15かな」「16いなや、君を聞ゆるにはあらず」「あいなき17垣下か18など、19いで世の中に侘びしきものは獨り住するに勝るものな20かめり。吾が君や、思し知るらん」と聞ゆるは理なか21りけり。「今は、

校異 1國任せて。2〔イ〕なアリ。3因う。4〔イ〕ふに、因今日、因考異けし。5〔イ〕は曉、因晴し。6〔イ〕み曉、因み。
7国のアリ。8因考異二字ナシ。9國ナシ。10〔イ〕を、國をば。11〔イ〕ん。12〔イ〕じと、〔イ〕ぬと。13〔イ〕月。14〔イ〕ナシ、〔イ〕う。15下三字國イうなる。16下三字因考異答。17国は妹。18〔イ〕る丶を、国な丶なりや。19〔イ〕言ひて、国二字ナシ。20〔イ〕りけ、〔イ〕かりけ。21因考異め。

結ふ手もたゆく解くる下紐と聞えさするも、いとなむかひなき」あゝく宮辛うじて2言ひ給ふ。「下紐解くるは朝顔に3かと云ふ事ある」中將「同じく吹かば、この風も物の4えう〔〇要カ、益カ〕に當るばかりになりなむ」とて、

「旅人の日もゆふ暮の秋風は草の枕の露も乾さなん

涙のかゝらぬ曉さへなきこそ」藤壺の御答へ、

「仇人の枕にかゝる白露は秋風にこそ置きまさるらめ

忘れ給ふ人々も5な6うはあらじかし」中將「まだこそなけれ、

この葉をも宿に7吹かさぬ秋風の空しき名をも空に立つかな

著き事もあらじものを、何れか仇人ならん」藤壺、

「吹き來れば萩の下葉も色附くを空しき8風といかが思はむ

まめやかにも見えずかし」中將「それは9御許10にな11らんかし」とて、

秋風の12萩の下13庭吹く風に人待つ宿は14今年や來らむ

藤壺打ち笑ひ給ひて、

[校異] 1 [不]て。2 [不]答へ、[不]出で、[国]言ひ出、[図]言ひ出で。3 [國]イナシ。4 [国]や。5 [国]考異氷。6 [國]イら。7 [不]吹る。8 [図]考異もの。9 [国]音。10 [図]ナシ。11 [國]るアリ。12 [国]荻。13 [図]葉を。14 [国]事さやく。

雞なる荻の邊を吹く風のいざやそよともいかゞ答へん

中將「いでや、もどかし1（2う）こそあれ。

　吹き渡る下葉多かる風よりも我を此方3てふ人もあら4なむ」

と聞ゆる程に、仁壽殿より仲忠をせめて求めさせ給へど更になし。「罷出やしぬる」と5仰せらる。6陣にも罷出とも見えず、隨身はありと聞し召して、強ひて求めさせ給ふ。「只今左近のあ7て〔○蝬〕にて、になき8箏の聲々出すなりつるを、よ9にも罷出じ。罷出にたらば召しに遣はせ」など仰せらるれど更になし。上10左大將に「仲忠の朝臣に切に會はまほしき事なむあ11か。更になしとや。其所に在り所12知り給へりや」大將「只今まで侍ひつるを、罷出やしぬらむ、侍はずなむ侍る」上「さらば召しに遣はせ13かし」大將「罷出侍るとも、さるは見えざりけるを、怪しくなむ聞え14させ15侍りぬる16を、27中將朝臣も侍はるゝを、若し琴仕うまつるべき事や仰せられつらん。さ承りてか逃げぬらん。いと怪しき者なり。琴の事18は19へ20ば、跡を絶ちて逃げ隱るゝ樣なればにや。暫し御琴どもを隱され、す21かし〔○涼〕の朝臣も侍はず、罷る由22言ひ散らして隱され23よ。あいな24う25かたやがて罷26出る」27す28かし〔○涼〕29などの、「よき事」と立ちて、

校異 1一字[イ]ニヨリテ補フ。2[因]く。3國イてアリ。4國イナシ。5[イ]思さ。6[イ]らむ。7[イ]く。8[因]箏。9[国]ナシ。10[国]右。11[イ]る。12[イ]はアリ。13國イナシ。14國イら。15[因]考異二字ナシ。16[イ]ナシ、[因]源。17[国]源アリ。1[因]と言、[因]考異言。19國イつ。20[因]考異れアリ。21[イ]ず。22[因]をアリ。23[因]考異ば。24國イり。25[イ]はた、[因]二字ナシ。26[因]出させらるまじ、[因]考異でむ。27[因]など宣ふアリ。28[イ]ず。29以下七字[因]ナシ。

たゞ氣色ばかり、御前近き邊にて頼純の1君の君にあひ給2ふ「す3かし〔〇涼〕は罷出ぬ。若し召しあらば、御前にて琵琶仕うまつりつる4、俄にけ5そう〔〇氣上カ〕してと奏し給へ」と言ひつけて、仲忠聞く許りにも言は6で、これも廣壺に參りぬ。仲忠「彼は7〔誰〕ぞ」と云ふ。「す9かし〔〇涼〕」と答へて言ふ、「仲忠おはせ10ねどいと11よく12吹くめり。す13かし〔〇涼〕と14て秋風にもなし給ふかた。此所にこそ隱れられたりけれ。只今切に求めさせ給ふめるは」仲忠「さらば、あなかまや」す15かし〔〇涼〕「大將の大殿、召す使に指され給ひつめるは。それをば辭16はじかし」仲忠「今宵は親も子も知ら17じ」す18かし〔〇涼〕「御前にて御琴賜はりて、責め19そせさせ給へるに困じ20わたりや。吾が君の御と21し〔〇德〕にこそ罷り出でぬれ」「仲忠が德には、さのみこそは嬉し22げなければ」など物語りしつゝ、内より、淺香の折敷どもに、肴いと警策にし出されたり。中將「いとねたき事たゞ一つ、す23かし〔〇涼〕24がけう〔〇興カ、今日カ〕あるかな」仲忠、何事ぞや」「25いで今日必ず參り給ひなむと思ひつるに」仲忠「それや26、何かねたき事ありや」27「この相撲の左の竝則が勝ちつる28程の、29やとたひ仕30うまつりつるをなむ、31おはしますとようい32ひ〔〇宜う言

校異 1 [イ]二字ナシ。2 [国]ひ。3 [イ]ず。4 [イ]にアリ。5 [因]ざ。6 [因]考異せアリ。7 一字[イ]ニヨリテ補フ。8 [国]誰。9 [イ]ず。10 [イ]ぬと。11 [因]二字ナシ。12 [イ]情。13 [イ]ず。14 [國]イナシ。15 [イ]ず。16 [イ]ひ給アリ。17 [イ]ず。18 [イ]ず。19 [因]考異に責め、國にせ。20 [イ]に。21 [イ]く。22 [国]二字ナシ。23 [イ]ず。24 [國]イ衍歟。25 [因]答へ。26 [國]なアリ。27 [因]涼アリ。28 [因]考異やら。29 [因]考異こと。30 [イ]ナシ。31 [因]考異仲忠アリ。32 [イ]し。

ひか、用意しか〕つる所なんあひつる1被をこそす2なれ、殊なる師とも思はぬものを、す3かし〔○涼〕4ねたき事も言ふを聞し召し入れぬは、げにそれだにあらぬ御心なむめりかし」など聞ゆ。「仲忠もさぞありつるや。笙の笛の5調の程よ」など言ふ。藤壺「こゝにてやは只今聞かせ給はぬ」。かくて6もす7かし〔○涼〕も仲忠も萬の事を聞ゆる程に、仁壽殿より頭中將求むる使に、府の人もさ8ながら里には往き、仲頼も少將達も連ねて、すべて宮の内を求9（め）廻り給ふ。大將の大殿、たゞ殿上童を一人御供にて、先づ10陣ごと11も、「宰相中將やま12にで〔○罷出〕つる、13捕はせ、14近15え〔○衛〕の御門に車やある」と問はせに遣16めしたれば、「陣にも罷出給ふとも見えず。車も隨身どももあ17る」と聞18え。后町より初めて、君達の御宿直所御局19に20窺ひ給ふに、藤壺に立ち寄りて聞き給へる21、御前の方に22箏の琴彈き、す23かし〔○涼〕琵琶掻き合せて、24知るべき人25々の事なれば、著26く聞かせじとて、異聲を調べ、例の聲を變へて彈けど、勞ある人の御耳なれば、ふと聞き知りて入り給ふ。仲忠見附け27られて、術なき心地して、強ひて隱るれど、大殿見付け28て給ひて、「召せば、などかく29ては物するや、參られよや」と宣ふ。仲忠、やがて罷30りて31に

校異 1 類考異はうへ。2 國イナシ。3 不ず。4 不のアリ。5 國イし人。6 不ナン。7 国ず。8 不しアリ。9 一字不ニヨリテ補フ。10 不らむ。11 国に。12 国か。13 類と問。14 以下十五字類考異ナシ。15 一字国ゑ。16 不け。17 類り。18 不し召し、類ゆ。19 不どもを。20 國イうるは。21 類にアリ。22 国箏。23 不ず。24 不著。25 國イナシ。26 國し。27 國イナシ。28 不ナシ。29 類考異ナシ。30 不出。31 不ナシ。

けりと奏せさせ給へ1と、只今亂り心地物に2似ず惱ましくて、え御前に侍ふまじ」大殿「見苦しき人にもあるかな。罷出にけりと人の奏すればこそ召しに遣はせとは仰せらるれ。又只今隨身も乘物もありと奏するなりつるは。さ聞し召したるにはいかゞさは奏せむ。兼雅3さへ隱すなりと仰せられじや。忿々しき事也。朝臣の交らひするに兼雅苦しき時多かりや。世の中の人の否び難く思4ふ事は、ほう5せくこそはすれ。いかゞ天の下ならん人は仰せ6の言を否び申す人7あらん。切に御口づか8ら召し求めさせ給ふを、宮の内に侍ひながら仰せ9に叶はぬ事、例の人にえあらじや。早う參り給へ」と宣ふ。仲忠「更にたゞ今宵の事は許させ給へ」大殿10の「後に兼雅11偏に悼まれざらん、何12にかせむ。天下に、しだ13ひ(〇次第カ)に叶はむとて、何か惡しか14りなん。今宵の召しに叶はれざらんこそはいと惡しかるべけれ。御け15かき(〇氣色)惡しうて仰せらる16 17とや」18とて、せめて御前に押し立てゝ參り給ふ。す19かし(〇涼)の君をばありとも聞き給はず。

［書詞］此所20に癈寢。仲忠す21かし(〇涼)姫君御達數22知らず多かり。大將仲忠侶す。大將中將の君、森宮23の24君達、25左大將の三26君、嵯峨の院27女五28宮、四の29皇子20給宮おはします。女御晴の

［校異］1 不衍歟、因よ。2 國イし。3 國イに。4 國イひ。5 不と。6 因ナシ。7 不のアリ。8 不ら。9 不ナシ。10 国ナシ。11 國イ秘密。12 不ナシ。13 因い。14 不ら。15 不し。16 不るアリ。17 国ぞ。18 國か。19 不す。20 不は。21 不ず。22 因三字ナシ。23 下二字因考異ナシ。24 不宮。25 因右。26 因のアリ。27 皇のアリ。28 因のアリ。29 下三字不ナシ。30 国姫。

も只のも、多に侍ひ給ふ。左大將殿の大君、すべて此の御族、君達女達さ1しながら御容貌いと淸らな2る。

上此方に入り給ひて「など藤壺は參う上り給はぬ」3二45宮「そがさうぐ\しき事。かの君の參う上り給へ6らんこそ今日の相撲よりも見所あべけれ」春宮「かけ〔○賭カ、賷カ〕につ〔○果つカ、勝つカ〕ばかりはあらざめるものを」とて、御前に生海松の石貝附きながらあるを取り給ひて、藤壺に、「などか參う上り給はぬ。此方に皆物せらる7めるもの8、

浦なるやみるめは知らですまの蜑は9底にやかづ10ゝ11かみ〔○海〕の玉藻を

と思ふなん怪しき。今12だに參う上り給へ。」とて奉れ給13へれば、藤壺、

「底なるや見るに隱るゝ海14藻とはえこそかづかね限に障りつゝ

人々の御覽ぜむを思ひ給へてなむ。」とて奉れ給へり。春宮15二16宮に、「御覽ぜよや。いとさ言ふ許りにはあらぬ17」とて御前に出で給18ひぬ。かくて夕暮に19藤壺より參20れり21給ふ。侍從なりし時より22、この頃はいと月出たき容貌の盛りなり。父大殿さる容貌人にて、連ねて參り給ふに、更に親子とも見えず、たゞ、

校異 1国ナシ。2不り。3国四、図考異五。4国のアリ。5図考異君。6不かアリ。7國イるアリ。8国をアリ、図を、とてアリ。9図床。10不く。11不う。12國イナシ。13不ひつ。14不の藻は、不藻をば。15不こ、国四、図考異五。16国のアリ。17不をアリ。18類考異ふ、國イはぬ。19不仲忠アリ。20不ナシ。21図二字ナシ。22不もアリ。

一つ二つの弟兄に見えたり。左大将の大殿見給ひて、「こともなき随身かな。中将の朝臣今日の随身いと見苦しや」と遊びおはしまさふ。左1近大将「右大将ひ2とり〔○左〕3右の府の5随身し給ふなり。いかゞ同じ府の仕うまつり給はざらん」と5て、仲忠を先に立てゝ、左右大将後に立ちて參り給ふ。仲忠求め6もて歩きつる少將左右近7も立ちて、皆8遊びて參9り、たゞ此の御仲にす10かし〔○涼〕一人なんなかりける。仲忠夕11榮して12そこ13ゝの人にも14勝れて目出た15き容貌の清らなるよりも、差し歩みたる樣打ち思16(ひ)こつる氣色、更に人に似ず艶めき鬧々じ。左右の大將より初めて參るを、上御覽して、いと17氣色よくて、「いとかしこく求め出られたるかな」と宣ふ御氣色のいとよければ、御前に侍ひ給ふ限り、彈正の皇子立ちて御階より遊び下りて、仲忠の朝臣に遊び合ひ給ふ。兵部卿の皇子若宮より初め奉りて、上達部皇子達殿上人18連ねて迎へ給ふ。19「侍ひけるを、などか召しには參らざりつる」と宣へば、20右21近大將「左の檻にて、大將の土器賜ひてけちす22るを賜ぶ事ありければ、こよなく給べ醉ひて、深き雅の下になむ隱れて侍りける。草の中に笛の音のし侍るを尋ねてなむ」上「草笛をこそは吹きけれ」大將「隱れ遊びをやし侍らん」と聞え給へば、上御土器初めさせ給ひて、「醉人とも忘れぬ事あり」と23は仰せられて、仲忠に、

校異 1[図]ナシ。2[イ]だ。3[国]右。4[國]イかのアリ。5[図]ナシ。6[イ]にと。7[国]衛アリ。8[図]歩み。9[イ]る。10[イ]ず。11[國]イばつ。12[國]イに。13[イ]ら。14[図]似ずアリ。15[イ]く。16一字[イ]ニヨリテ補フ。17[イ]御アリ。18[國]イ人連ねアリ。19[イ]上アリ。20[国]左。21[図]ナシ。22[図]ナシ。23[イ]か、[国]ナシ。

「百敷を今は何ともせぬ人の誰と葎の下に臥すらん

けんに人あらじかし」とて賜へば、仲忠、

百敷に知る人もなき松蟲は野邊の葎ぞ臥しよかりける

と奏し給[1]ひて、春宮に侍ふ。春宮「いでその籠[2]よれつらん葎も思ほゆるや」とて。

松蟲に宿問ふ秋の葎には宿[3]れる露や物を思はむ

と宣へば、仲忠、

同じ野に宿をし貸さば松蟲の秋の葎を頼みしもせじ

と聞ゆる。春宮左大將に參[4]り給ふ。大將取り給ひて、

松蟲に宿をし貸さば秋風に包異なる花も見えなむ

とて、賜はり給ひて、彈正の皇子に參り給ふ。取り給ひて「[5]戲れにても、[6]たゞ安き事こそ[7]同じ陰[8]ね〔○なカ〕れ[9]。

花見[10]かく野邊を見る／＼秋ごとにたほ松蟲の旅に[11]つるかな

つ[12]ゝし、[13]今こそ聞えつべけれ」かゝる程に、上何事をしてこれに物を言は[14]んと[15]思ほす。仲忠はいと

〔校異〕1 國イはり。2 〔イ〕ら。3 〔因〕せ。4 〔因〕らせ。5 國イさばふれふれ。6 〔イ〕忠康を。7 〔イ〕思しかけ。8 〔国〕け。9 〔王〕たアリ。10 〔因〕がて。11 〔イ〕經。12 〔イ〕ら。13 〔イ〕と。14 〔イ〕せアリ。15 〔イ〕てアリ。

賭け離れて侍ふに、上(うへ)碁盤を召して、仲忠と1遊ばす。「何を賭物(のり)に2はせん。いと切(せち)ならん物3を賭けじ。言事(いひごと)4を賭けむ」と宣はせて、三5番(ばん)に限らせ給ひて遊ばす。6上(うへ)手の御ざ7へ〔〇才〕を盡8かしてし給ふなかに、碁なむ一にし給9ひ榮えおはしますう10ちにも、11うれにいかで12と思ほ13し、仲た14し〔〇忠〕はたゞ思ほすらんとも知らで、たゞ藤壺にて物聞えつるのみ思ほ15して、我この御16事17勝たむとも思はず、魂はたゞ藤壺にてかうのみある心地して仕うまつりければ、一番に上(うへ)勝ち給ひぬ。二番18は仲忠19勝ちて、果(はて)の度手(たな)を一つ打ち誤20ちて、たゞ目一つを負け奉りぬ。上(うへ)興あ21ると覺(おぼ)し22召して、「早う賭物(のり)つぐ23 24事は」と仰せらる。「何事をか25仕うまつるべく侍らん」26「たゞ言ふ事を否(いな)ぶまじきばかりなり。勞ある秋の夕暮に言はむ事27だにはあらじかし」と仰せらる。仲忠、ねたう負け奉りぬるかな、心遣(づかひ)して仕うまつらましものを、何事をか仰せられんとすらんと思ひて、「とく28かけ給〔〇承〕はりて、身に堪29えぬべき事ならば30（仕うまつ31り、堪へぬ事ならば、そのよしをこそ奏し侍らめ」上「仲忠が堪32ゝぬ事は世にありなんや。さて堪33ゝぬべき事ならば承りなんや34は」仲忠「承りてのみなむ」上、す35にし〔〇京〕に賜ひつる琴と箏(ひ)

校異 1 [イ]碁アリ、因御碁アリ。2 [イ]か。3 因考異ナシ。4 國イき。5 國イゐん。6 国なべて、國イ上(うへ)。7 國え。8 [イ]く。9 国ふ才(ざえ)に。10 因へ。11 [イ]こ。12 國イナシ。13 [イ]す。14 [イ]だ。15 [イ]え。16 [イ]碁に。17 國イ語ら。18 因に。19 國イ立。20 因考異り。21 [イ]り。22 [イ]二字ナシ。23 [イ]のアリ、因考異のふアリ、國イしのアリ。24 国のへ。25 [イ]はアリ。26 因上アリ。27 [イ]たアリ。28 [イ]う。29 [イ]へ。30 以下十二字[イ]ニヨリテ補フ。31 国らん。32 [イ]へ。33 [イ]へ。34 [イ]ナシ。35 国ず。

しきせいひ1ん〔○幾賓カ〕を同じ聲に調べて「これなむ今日の言事に仕うまつらんに宜き事な2る。これ吏に3上4 5ふ堪へて、琴聞かじ。これが音の出で來む限り、この6いん〔○韻カ〕を立ち返り〳〵度々遊べ」と仰せらる。仲忠奏す「他仰せ言は、身を從らになさん、蓬萊7の8 9あくまてこゝ10にしやく優曇華を11求めに罷れと仰せらるゝとも、身の堪12ゝむに從ひて承らんに、13更にこの仰せ言をなむ、かゝる所々に通さむよりも難き仰せ言な14る」と奏す。上打ち笑はせ給ひて「15二なき勅使かな。さりとも16と蓬萊の山へ不死藥取17もに18渡らん19事は、童男20く21れん〔○丱〕女だに、その使に立ちて、舟の中にて22老い、島23の浮べども蓬萊を見ずとこそ歎きためれ。かの心上樂のさる者だに終に到らずなりにける蓬萊へ、今朝臣の日の本の國よい、行くらん方も知らず不死藥の使したらん事少し煩はしからむ。えや求め會はざらん。童男24丱女え劣るまじかめり。今一つ興ある丱女出で來る煩ひあらん。これ二なき使好みなり。又惡魔國に優曇華取りに行かむに、少し身覺25へやあらん。彼も南天竺より金剛大師の渡りける事は、睦まじき輩を隣の國より迎へ取りて、これ相顧みるとて、時の國26母の仇を致してなむさる使には出だしたりける。そ27れ

校異 1因ナシ。2团り。3下六字因調をな變へそ、他聲はゞ 4国にアリ。5一字团た。6国ゐん、因考異手。7因考異山アリ。8国不死藥アリ。7团惡魔國に、国惡魔國の。10团不死藥、国四字ナシ。11团も取り、因取り、國イとも。12团へ。13因考異二字ナシ。14团り。15因似げ。16团ナシ、国今ゞ 17团り。18团到。19因と。20三字团卿。21一字团は。22國イおは。23国に、因ナシ。24团卿。25因ひゞ 26团女。27因もゞ

南天竺より渡るに、自然に年經にたれば、辱忍の翡の別に會はずとは1歎かずや。それを如何に、胡臣の國母の仇ありともなくて、またさる藥要ずる后あ2りともなくて、俄に親を捨てゝ渡らんに、少し物の煩ひあ3る不孝になりなむ、4三の疲れありなむ。かくになき事よりは、たゞ此所ながら調べたる一5つ彈かん事は易からむかし。あるまじき使には進まで、たゞこの琴を6一つ掻き鳴らし7聞かせなん。かの不死藥優曇華に劣らざらん。不死藥は食ふ8とも萬歳の齡ありと言ひて、かの國の帝王さ9る難き使を立て求められ、優曇華は俄にせむる命留めむとてなりける。何れも〳〵命を惜しむ藥なりけり。それを朝臣今宵の言葉を、さらばとて、惡10慶國蓬萊の山まで出だし立てなむ、我少しはになきまつは、我かく目に近く見馴らしたるを、さる心凄き使に、11けるか〔〇遥〕な12か程を出し立てゝ思はむになん少しあはれに心細からん。13生きて見し人も只今物せらるゝ、それ14は歎き思はむを見んに、いとかひなからむ15 16はし。17言ふ程に、不死藥をゝ蓬萊にも到らむと思はむ18程に、ともかくもあらば、不死の藥も何にかはせむ」と仰せらる。仲忠、「さては向ふ事難き蓬萊には侍らざりけり。たゞ不死藥なむ枯れ侍りにけり」と奏す。上「されど今宵は王母が家に劣らずなんありける」仲忠「近き衛に童男丱女こそ侍へ」と奏す。上「海廣く風早きを、いかで求められむとすらん」仲忠更にえ仕うまつるまじきよしを奏し、この頃の歌を作りて御覽せさせなどするに、

因1國イなり。2因考異る事。3因り。4活身。5國イへ。6活手アリ。7活てアリ。8因翡。9活り。10國イら。11活け。12活る。13活又アリ。14活が。15下二字因かく。16一字活か。17活かくアリ。18因考異よりも。

帝わりなく言ふ者かな、これに終に負けぬる事のねたさなど思はして、これなら1ん事2何事をかは言はむと思ずに、仲忠3の4腹に年頃いかでかと御心に思しわたり、昔より聞し召し懸けて いかで5とのみ思はしけれど、世にも聞えざりけれ6ど、口惜しく思ほしける事の、今7の世の中にありと聞え、只今の勞8者容貌人の9こみの10人者の中に入るを、これがついでに宣ひ寄らん11かと思して、「さらば朝臣は絶えて仕うまつらじとや。かく自らはえ物すまじかなるを、12少し朝臣の手に思ほえたる彈く人はありなんや」仲忠、「この族の手13いよつ〔○松〕方のみなむ仕うまつらん。この一つ筋になむ侍る」上「それは時々聞14きしいまだ少し珍しからんをこそ」と仰らる。仲忠「一つそ15こ〔○族〕の手は松方をはなちて仕うまつる人侍らず」上「なほ思ひ出られよや。16たてなしや」仲忠「覺えず」「女の中に思ひ出でよや。誰ありなむ」仲忠「思ほえずなむ侍る」など宣ふ氣色あれば、頻はしう思ひながら、「仲忠、内戚にも外戚にも、女と云ふもい17人なん乏しく侍る。そが中にも、女方などは更に松方をはな18りて心19は遺20〔る〕方侍らずなむ。琴は若し母方の外戚こそかの俊蔭の朝臣の琴は仕うまつらめ。それ21をさるべき筋の22更に侍らねばにやあらむ」と奏す。「よしそれはさもあらむ。やむごとなき朝臣として、移し傳へたる人なしや。絶23してなしと申24さじ

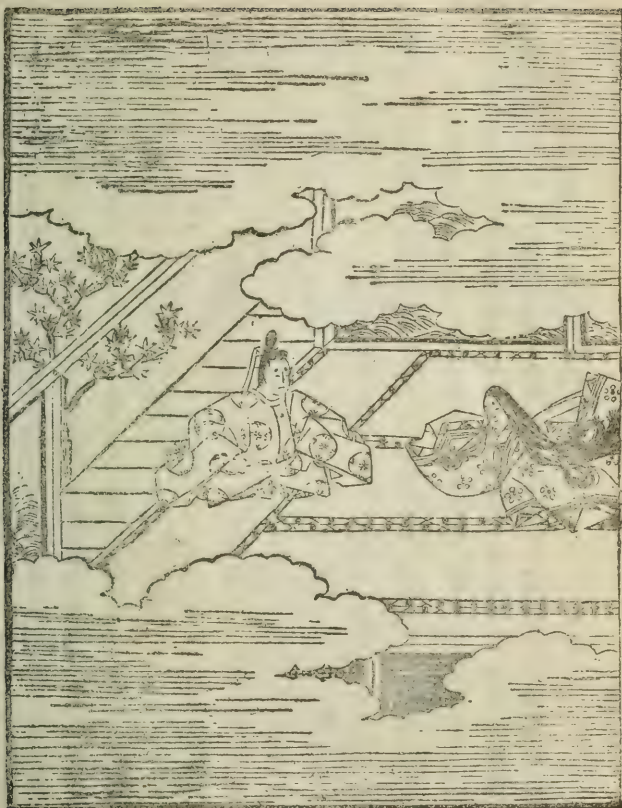
〔校異〕1〔イ〕ぬ。2〔國〕イかなと。3〔国〕が。4〔イ〕母。5〔イ〕頼。6〔イ〕ば。7〔イ〕ナシ。8〔国〕にて。9〔イ〕二三。10〔イ〕ナシ。11〔イ〕ナシ。12〔イ〕京。13〔イ〕は、ま。14〔イ〕く。15〔イ〕う。16〔イ〕さ。17〔イ〕ナシ。18〔イ〕ち。19〔内〕ナシ。20一字〔国〕ニヨリテ補フ。21〔国〕な。22〔イ〕才。23〔イ〕え。24〔要〕考異さ、〔同〕し、〔同〕さう。

ばかりにはありもしなむ。それ1をこそ2は今宵の3物には出だされめ。それは早く。これをさへ聞かずば心劣からんと4覺ゆる5なる」「たゞ移6し取りて傳へ侍りし仲忠だに、絕7らへその筋覺えず侍るを、ましてもとの師は覺ゆる事難くや侍らん」上「それをこそ8今9の師も忘れにたらむとは思はめ10かしこと、覺つ11ろ(○東)なく12 13思はされ14むよ」と宣ふ。仲忠「げに忘れにて侍らん、由ばかりをば聞し召されてし15がなと思16(ひ)給ふるを、いかでかは參らすべく侍らん」と聞ゆれば「早うそれをだに物せられずば、更に17さかじ」など18ゆかしげなく仰せらる。仲忠、如何はせむ、參らせ奉らんかしと思ひて、物も聞えで立つ。19左大將見給ひて「朝臣や。など20きばかり仰せらる21ものを、又何方ぞや。怪しく魂靜まらず異様にもなりゆく22人かな。見苦しかめり。暫し侍へ」と宣ふ。宰相「仰せらるゝ事によりてなり」と申す。「さては何かは」と宣ふ。宰相近衛の御門に出て、その日父大殿の御車のいと淸らにて立てるに、おのが車をば打ち捨てゝは23い24乘りて、大殿の25さ前皆仕うまつる。

かくて宰しや26く(○相)の中將三條殿に罷出て入る。北27方御衣など引き著て、その日28さ髮29少し30端31

校異 1 因ナシ。2 囝ナシ。3 囝賂アリ。4 囝思す、囝仰せら。5 囝仲忠。6 囝くアリ。7 囝えて。8 囝はアリ。9 因し。10 因彼處こそは、因考異彼處こそ。11 因か。12 因考異はアリ。13 因思。14 因ず參らせよ。15 囝など。16 一字囝ニヨリテ補フ。17 囝き。18 国許。19 国右。20 囝さ。21 囝るアリ。22 因考異べくアリ。23 因ひ。24 國上。25 囝御。26 囝う。27 因のアリ。28 囝御。29 因洗ま。30 囝干し。31 囝にアリ。

かねて、干し居給1ひつ2るなり。仲忠簀子に突3ゐ居4る。北の方「いかゞ、相撲は何方か5勝ち6ぬる」仲忠「左なむ勝ちぬる」北7方「いとさう〲しき事かな。若し此方も勝ち給ふとて、人々參り集まりて侍ふめるものを、いと口惜しき事かな」仲忠「いと辛くも宣はするものかな。仲忠侍る方の勝つこそ嬉しけれ。思ほしこそ落したれ」北8方打ち9笑ひて「それはた嬉しくて此所に心設けなどしたるに、さらねばさう〲しくなむ」仲忠「左近引きて、大將より初めて10待つらむかし。11は〔○分〕いても西12や東13あらむ。まことに只今14の内裏の面白15きこ16そ物17かとね。こ18かた〔○此方〕はたなほ少し心異なる御氣色ありつかし。それも彼方は例もし給ふ事、はた筋異なればにやあらむ。左の勝ち給ひて、只今興ある事こそ19限りなけれ。世に名高き舞の師、物20(の師)と云ふ者の限り集21ゐて、萬の遊びをし給ひつるを見給22ひつるに、仲忠一人見給へつるかひな23きになん御迎に參り來つる」北24方「いかでか御前の事25は見む」「それをこそは仲忠はよく御覽ぜさせ奉らめ。天下に西方淨土の遊びもかくぞあらん。御覽ぜむとあらば、御覽ぜさせ奉りてむ。早や26〲出で給へ」北27方「す28くろなりと29もこそ思へ。また彼處に思は30せ如何あらむ」

【校異】1[イ]へ。2[イ]るに、[因]考異り。3[イ]い。4[國]イたアリ。5[國]イ落。6[イ]ぬ。7[因]のアリ。8[因]のアリ。
9[國]煩。10[国]參。11[国]わ。12[国]ナシ。13[イ]にやアリ。14[因]考異ナシ。15[イ]さ。16[国]と。17[イ]に似、[国]には似。18[因]な。19[國]イ飾。20二字[イ]ニヨリテ補フ。21[イ]ひ。22[イ]へ。23[イ]さ。24[因]のアリ。25[イ]をば。
26[イ]く。27[因]のアリ。28[イ]ず。29[イ]ナシ。30[因]さむ事。

中将『まさにさあらむ事を1聞えてむや。さるべくもあらず。早や2来」と聞ゆ。北3方「すゞろにほと思へど、語り給ふを聞けば見まほし」中将「などてか仲忠は人のすゞろなりと思はむ事は聞ゆべき。口惜しく4と、などてかさばか5りの事を見給へ知らざらん なほ早6す、少し由あらむ御衣奉り、見所あらん御容貌見出でゝ、いざ7らせ給へ」北8方「衣は切に求めばさもやあらん、容貌は何所よりかは取う出べき。納めたる所も憶えぬは」「それをこそはいとよく取う出させ給ふ時あれ。よし見給9へかし」など言ひ居た10る。北11方「さば物せむかし。後12めたき事を宣はんやは」とて、御髪のなま濕りたる、急ぎ干し給ふ。中将「今日の相撲の、いと口惜しく、此方の勝ち給はずなりぬるに、仲忠13身には喜びあり、殿の御爲めには喜びなむなき。さるは只14一番になむ15負け給ひぬる。只今こそいと面白16しや。せめて面白きを見給ふ17れば、よ18かひなきになむ御迎へに参り来つる。饗の垣下の設に参りたる人々この御19供に、仲忠馬にて侍はむ」とて、たゞかの父大殿の檳20榔毛の21車に、人賜三つして参り給はむとて、宰相御厩の別當右の馬の助に「その御厩の御馬の中に、仲忠の22ひとともとかなるべき御馬23移し置かせて賜へ」馬の24ぐゑん25助國

校異 1[イ]ばアリ。2[イ]う、[国]ナシ。3[因]のアリ。4[因]ナシ。5[國]かアリ。6[イ]ナシ、[因]う。7[イ]さ。8[因]のアリ。9[イ]ふ。10[イ]り。11[因]のアリ。12[國]イにき。13[イ]がアリ。14[国]一番、[因]一番。15[國]イさ。16[因]ナシ。17[國]例は。18[イ]る、[因]考異ろ。19[因]許。20[イ]榔、[國]イ榔。21[イ]御アリ。22[因]ナシ。23[因]にアリ。24[イ]監與、[国]權。25[国]のアリ。

時1(ぎ)こ(〇聞)ゆ、「いはゆる龍の駒と云ふと2も、奉らんに3はとかや」4仲忠御馬や5ながら、中將、「自らだに、野飼に6は放たれたる身を、まして乘物は、御厩の雜役7せをしとも思は8ぬ」時國、「駒牽も近9らなりぬれば、野飼も數に入り給ふ時やあらん」中將「それに數餘る時こそ」國時、「藤壺の御方をや今はト(下)し給10ひてぬ」仲忠、「あな似げなの方の人々の夜妻や。まめやかには、その御前仕うまつらむ、馬11裝束き給12みや」「例の君の好き13さがし給14り15なりけり」16國時、

今さへや透きて見ゆらん夏衣脫ぎも代ふべき秋の暮には

風の打ち吹く程に、中將立つとて、

秋の夜の涼しき程に立つ時は代ふる衣17も猶ぞすきける

など言ひて、國時、「まめやかには、18さ19 20襲21は22何れを23か奉らむ」中將「移絵24を25置きて賜へ。26何せむにか。無禮なり」國時、「他男ども、移絵侍らぬ者あるを、さて奉らむは、俄に男ども煩ひ侍りなむ」中將「人はなほ例の27さ28御29襲添れ。仲忠なほ30物數ならず、世の心にも叶は31ねば、なほ畏まりをだに

校異 1一字[イ]ニヨリテ補フ。2國とアリ。3[イ]など。4[因]さなる。5[イ]無からん。6[イ]ナシ。7[国]をせ。8[イ]ん。9[イ]く、[国]う。10[国]へ、[因]考異は。11[国]裝。12[イ]へ。13[因]わざ。14[イ]ふ。15[因]めり、國イなり。16[因]とてアリ。17國イを。18[イ]御、[因]考異御、(同)ナシ。19[国]御アリ。20[因]裝、[因]考異すそひ。21[イ]ナシ。22國イづれ。23[因]ナシ。24[イ]ナシ。25[イ]馬にアリ。26[イ]何。27[イ]御。28[因]ナシ。29[因]裝。30國身の。31國ぬは。

こそあれ。人はなほ例の1こせ(〇擗)を」と言ふ。國時、御厩に三十餘疋立てる御馬の中に、吹上の濱にて得給へりし、つる21ぶちに勝る御馬なし、それに移鞍置きて、中將の爲めに牽き出でなどしてあるに、北3方、洗ましたる御髪の干たるを掻梳り、花4ふ線の地摺の御裳5に、6ころう重ねて、凉しき程なれば、綾の掻練一襲、紅色二藍襲の唐衣いと目出たき7奉り「な8ど珍かなる業もせ9ず、かくばかりにて」10おとな六人童四人、11(下)仕二人して出立ちて、御簾12のもとに突13る居給へるを、14俄にだに燈して侍ふ松明15の光に、中將見るに、まして更なり。御髪の程丈16 12五尺許り餘りて、少し18こ19丸がれ20する髪ぞ、掻き洗ひたるすなはち一背中寄るゝまであり。更に一筋散りたるもなし。姿の美しげなる21事更にいと目出たし。丈だちよき程に、姿の淸らなる事更に並びなし。顏貌22も更にも言はず。仲忠これを見るまゝに、藤壺を思ひ出て、この北の方を更に親と思ひ忘れ23ば、何處なりし24て女そと思ひ居たり。北25方「さら26ば車寄せさせ給へ」中將「只今大殿の見給はぬこそ27口惜しけれ」とて、「御車寄せよ」とて、手づから御几帳差して、後におとな二人、人腸につぎ／＼人28乘りて出で立ち給ふ。中將移鞍に乘りて、車の29中へ近30ら

校異 1因く。2 (不)藤壺。3 因のアリ。4 国文。3 國イとアリ。6 国居裳。7 國イたてまゝつ。8 (不)でう。9 因で。10 因とアリ。11 一字国ニヨリテ補フ、(不)下斂アリ。12 因ナシ。13 (不)い。14 因庭、國イえは。15 國イナシ。16 因にアリ。17 (不)二。18 因く。19 國まつ。20 因た。21 國イかと。22 (不)ナシ。23 (不)て。24 (不)天。25 因のアリ。26 國イに。27 (不)いとアリ。28 (不)のアリ。29 (不)轅。30 (不)く、国う。

添ひて立つ。この殿の饗の設しに參れる四位五位六位など、合せて八十人許りして參り給ふ。かくて1縫殿の陣に車引き立2たて、中將「暫し」とて內3へ參る。「4御前の人5 6內に參る人々は御車のもとに侍ひ給へ。仲忠は一人參りなむ」とて7入る。御供8に前に9だに燈して、御前に數知らず多かり。かくて立てる程に、中將殿上に參りて、仁壽殿の御前に侍ひ給ふ。上御覽じて、「如何にぞや、かの言ひし事は」と問はせ給ふ。仲忠、「まだ乘物ながらなむ」と奏す。帝打ち笑10ひ給ひて、「さらば賭物許す」と仰せらる。仲忠御答して立ちて、かの妹の君11春宮に侍ひ給へる御局に參うで〻12、君は上におはすれど、母宮13こそおはする。この大將さばかりいみじき御仲におはせしかど、この北14方につき給ひにしより、あたりにも寄り給はず。15頻ひ給ひて、御女を春宮に奉り給ひて、これをかしづきものにて、內裏にのみなんおはしましける。そこに中將參りて、「いかで人々に16もとり申さむ」と御簾の下にて言ふ。17皇女「誰ぞや」と御口づから宣ふ。「仲忠」と聞えて、「いかで人賜ならむ御几帳參らんに、いかに里へ取りに遣はす18るなん」宮、「いと汚げなりともやは」とて「月頃、若き人の一人侍ひ給へば、後めた19き此所に侍るを、他人はさもこそ20せうたまはざらめ、其處にさへいと疎くこそ思したれ」仲忠「あなかしこ。宮に侍ひなどする21折侍れど、此所に

校異 1國イぬひ。2囨ナシ、因て。3因に。4国御前。5国はアリ、因々アリ。6因な參り給ひそ、因考異七字ナシ、7囨二字ナシ。8下五字因人松明。9二字國イたゞ。10因はせ。11囨のアリ。12因見ればアリ。13因考異二字ナシ。14因のアリ。15因思しアリ。16因物〻17国宮、國イみ。18囨ナシ。19囨さに。20囨と疑、因訪はせ給〻21國イナシ。

おはしますらんと言ふ事、え承らずなむ侍1るも。中の御殿に侍ひて聞えさせし2かど、3はん〔○院〕になど承りしは、此處にこそおはしましけれ。畏けれど、姫君など宮に侍ひ給へば、4必ず思さるとも、世の人の親しく侍はむよりは、心異に5思さむなむ6と、いと嬉しく侍るべき」宮「更にも宣ふかな。この侍ひ給ふ人は、親も思はし忘れ給ふめれば、世の中にあはれに心細げなる人なめり。同胞も何につけてか思さむ。なほ哀れなる者の心苦しきに思はして、訪ひ給へかし」仲忠「あなかしこ。更に仰せ言なくとも聞えさすまじき程ならげこそあらめ」など聞えて、「ことごと7にとり申さむとするを、急ぐ事侍ればなむ」とて、急ぎて立つ。その御局より、8花紋綾の帷子懸けたる三尺の几帳二具賜はりて、母北の方の御許へ持て行く。上おはしまして、仁壽殿の南の廂10に11御座よそ12へつ13る、西の方に御屏風御几帳など立てさせ給ひて、「上達部暫し彼方に」とて、東の方に渡して、其處におはします。仲忠14仲純の君を、「いざ給へ」仲忠「切なる人15呼び參らするを、御蔭に隱して16出入り給へ」仲17忠見「誰ぞや。いざかし」とて率て、さてやむことなく賤まじき人に几帳持たせて、父大殿の御靴持たせて、「早や下り給へ」と言ふ。「物思は18すも思はゆるかな。何處に下19もよとてぞ」中將「あなさがな。20知ろし召しそ。さりとも惡しき所にはおはしまさせて

校異 1 [イ]りける、さるは一日も一條殿に參りて御方に侍ひし。2 [國]イナシ。3 [イ]る。1 [イ]數ならず。5 [イ]思は。6 [イ]ナシ、[因]いと。7 [因]考異ナシ。8 [イ]はなふ。9 [因]のアリ。10 [國]イの。11 [因]二字ナシ。12 [国]ひ。13 [イ]つ。14 [国]輔。15 [国]今宵。16 [イ]率て。17 [因]純。18 [国]えず。19 [イ]り。20 [イ]なアリ。

むや」北1方「あた苦しっ異様なる參りかな。さ2ま心も思はぬものを。かたはなる目を3見るかな」と宣へ4ど、昔より中將の言に從ひ給へば下り給ふ。童四人御几帳5の前に差したり。おとな後に立ちて、中將6て穿かせたて7〔ま〕つり戻8らせて、御く9ゝし〔○髮〕繕ひかしづき立て10るさ11め、目出たき事限りなし。いと美しげなり。目出たく繕ひて、我も他君達も几帳差12して參らせ奉る。上出でおはしまして、皆人出ださせ給ふ。御13殿油消14させ給ふ。御15松明16とりにきたに消たせ給ひて、參う上らせ給ふすなはち、上「御路の導せん」とて「なほこれより」と宣ひて、御局へ入れ奉り給ひて、中將さりげなくて居たれば、大將更に夢にも此の北の方ならんとも知らず。上御几帳のもと17褥打ち敷きて居給ひて、客人に18物語りし給ふ。「今宵仲忠の朝臣に言ふ事ありつれば、自らはえせずなんあるべき。代りをなど物しつれば、如何なる代りをかはと思ひ19つる20に、年頃の心ざしの顯るゝにこそ21ありけれ」北22方「23はと怪しく、例よりも思ふ給へられつるを、俄に侍ふべき樣にもあらず言ひ急がし侍りつれば、物も思はえず罷り出でぬるこそいと怪しけれ」上「何か怪しからむ。常にかくこそあらまほしけれ。與ある夕暮にこそ其處に參り來て、承らまほしき事あれど、えさすがに所せき心地して、心許なくありつるに」など、年頃昔の事宣ふ。

校異 1〔図〕のアリ。2〔イ〕る。3〔イ〕もアリ、國イをもアリ。4〔イ〕ば。5〔国〕ナシ。6〔イ〕靴。7一字〔国〕ニヨリテ補フ、〔イ〕ま歟アリ。8國イさゝ。9〔イ〕ナシ。10〔国〕たアリ。11〔イ〕ま。12〔図〕さアリ。13〔図〕殿油。14〔イ〕た。15〔イ〕松。16〔イ〕ともに、〔図〕どもも皆。17〔イ〕にアリ、〔図〕に御アリ。18〔図〕御アリ。19〔図〕考異侍りアリ。20〔図〕考異は。21〔イ〕はアリ。22〔図〕のアリ。23二字〔イ〕いと、國イいゝ。

「昔治部卿の朝臣の在りし時より、なほ卿か物の音を搔き鳴らして聞かせ給はなん1(と)思2(ひ)て、御迎へせむと常に思ふ事ありしかど、朝臣の在りし限りは、更に怪しく古るめきの族にて、かゝる筋の事も疎ましげにやありけん、たま〳〵參らせ給3(4へ)と物せし5かど、聽き入れられずなりにき。その後は更に世中に聞え給はずなりにしかば、心ざしのみ6多くて、少しも知らせ奉らずこそなりにしか。さるは、かく平かに物し給ひけるものを」北7方、「年頃は世の中にも住まぬやうに侍りし昔と今となむこの世の中は見給ふる」「中頃は何れの世にか物せられけん。昔ながら對8面賜はらましよりも、まして心ざし勝る事こそあれ。しか思ひし時9に目馴れ10て侮り聞ゆる11時もありなましか12しと難き事13ぞ物し給ふめれ」北14方「15など事にか侍らん。心勝りしぬべき事にも侍るかな」上「覺え給はずやは。自ら言はねど著く見え給ふらんとなむ思ふ。心ざし聞え初めては、聞ゆる人も聞き給ふ人も暇なくなん先づ今宵の人の代り16と物し給17ふぬるを、かの人の譲り聞ゆらむ事を早や」と宣ふ。「更18(に)譲19 20などある人も侍らずなむ」上「あなさがな21や。御許にさへかくこそはの22(たま)(に)宣」はざらめ。早う」と宣ふ。御答「何事にか侍らん。更に言ひ知らする人なん侍らぬ」上「仲忠23朝臣は聞ゆる事はなし

校異 1一字国ニヨリテ補フ。2一字囝ニヨリテ補フ。3一字囝ニヨリテ補フ。4國ふ。5國事。6因考異覺え。7因のアリ。8因面。9囝は。10囝や。11因事。12因うて有り難。13囝ナシ、因こそ。14因のアリ。15国何事。16國に。17囝ひ。18一字囝ニヨリテ補フ。19囝るアリ。20囝ると。21囝ナシ。22二字囝ニヨリテ補フ。23国のアリ。

やは」北1方「更に物も申さずなん。たゞ陣の邊に物見給へよと物し侍りてなむ、かく侍はすべかりけるを、氣色2も出さで侍りつれば、何ともなく、里姿もひき變へず、急ぎ3罷出つるを、御垣下に隱れこ物見候4(ふ)べき蓬の蔭なむある。なほ罷り下りよと物し侍りつれば、常も虚言し侍らぬを思5(ひ)給へ、6てなん玉の臺まで侍ひにける」上打ち笑7ひ給ひて、「8他所なれば此所もかひなしや、9さ本意ありつらん蓬の下なら10ねば」北11方「今はその蓬も門鎖してなん」「移ろひ聞ゆる人もありけり」と宣ひて、「まことか、中將の朝臣の聞ゆる事もなかりつらんは。さらば聞え12かし。古き人の前に物語りするやうにやあらん。今宵中將の朝臣の切なる言事の數ありつるを、更に自らは物も13覺えず。物14忌せぬ人を物せむとありつるは、げに15草薙の内にこそは物せられけれ。さればそれをも聞えんとてなん」と16く仲忠に賜ひつ17かせい18びの御琴を、「五箇の調ながら取り出給ひて、「これをなん、かの朝臣に今宵の言事の數に仕うまつれと物しつれば、御許に聞えよと申されつる。これ更に聲も變へじ、たゞ此の皆から、此の調の手を留め給19(ふ)手なく遊ばせ。琴と云ふもの20に聲數多なれど　なほ五箇なん怪しくあはれに思ほゆる」と宣ふ。北21方「更に人違へに聞えさせた22りにや侍らん。琴とは何の名に23侍らん。それをだにえ知り侍らぬに、怪しく24も聞えさせ

校異　1 因のアリ。2 イにアリ。3 因參うで。4 一字イニヨリテ補フ。5 一字イニヨリテ補フ。6 國イかく。7 因はせ。8 イ夜、國イ夜に。9 イ御。10 國イは。11 因のアリ。12 イん歟アリ、因んアリ。13 イ思ほ。14 イ忘れ。15 イそまう、因族。16 イて。17 イろ。18 因ひん。19 一字因ニヨリテ補フ。20 イナシ、國の。21 因のアリ。22 イろ。23 イかアリ。24 國イナシ。

けるかな」1お「この2御不興の絶えぬを、名隠し3給ふこそは4うなけれ。さても免し聞ゆべきにもあら
ずや。まさにそれよりは代へてむや。昔よりし5か(〇著)き夜眼をば」「6北方〳〵に御琴といかゞ聞えさ
せざらん。更に琴と云ふ物7餘所にても見給へず8となん。昔さもや有りけん、年頃更に目に近く見給へね
ばにやあらん、かけてこれ9たむ思10ひ)給へられぬ。そ示11の中に12侍りし仲忠更に覺え侍らずなむ13度
々申14(す)める、それこそ少し昔の人15々などにも數多の手彈き勝りて仕うまつ16るめりしか」とて、更に
手も隱れず。上「これ辛き御事なり。17またに若き時より洗き給18ふへらん事。1920さ21りす(〇忘)22かば
かりあらんや。23才と云ふもの24はか(〇若)くより附きにたる事、更に年經れど忘れぬものなり。中將の朝
臣は、なほ知らるゝことの邊に25申さるゝにこそあめれ。まことに忘れなばいと口惜しき事にこそあべけれ。
天下に云ふとも、いと氣離れてあるまじき事には人憎からぬなんよき。昔の朝臣の、さる世の中の一の者に
物せられし後、御許にのみこそ物し給へ。さる有り難き手を傳へ取りて、誰も〳〵少しづゝなりとも聞え26
つべかりける。まめやかにから宣ふこそいと辛けれ」と切に免さず宣ふ。左に上も北27方も宣ひ交して、上

校異 1因著異ナシ。2因箏 名。3國イしま。4イか。5イる。4下二字国また方々、下七字因北の方、知り給へらば。7國イこそ。8因ナシ。9イこアリ、因とアリ。10一字イニヨリテ補フ。11一字因ナシ。二字イ後。12因も五箇なむ。13因宣々しう侍れど、仲忠。14一字イニヨリテ補フ。15因ナシ。16國イりし 17イ更、イまゝ、因まさ。18イナシ。19イいとアリ。20国更に。21イわ。22イる。23イ才。24イわ。25因とアリ。26因給ふ。27因のアリ。

「掻き鳴す琴のとこそ言へ。辛しや」と宣1(ひ)て、

「餘所にこそ音をもなくては小夜更けて彈かぬも辛き琴にもあるかな

君が辛さにとはこれらなりけんかし」北2方「秋の調は彈く者こそあなれ」とて、

「秋風の調べて出す松の3音は誰を立田の山と見るらん

立田姫かと思4(ひ)給へらるゝかな」上「いでや手觸れらるゝ人もなければ、皆墜5いにたり6や。

水7せ淺みひく人もなき足曳の山の小川は塵ぞ調ぶる

さるは宿世もありとか聞8て」北9方「目に見ずはいかゞ」とて、

水を淺みみさごも見ゆる山川は秋10みえも彈かずやあるらん

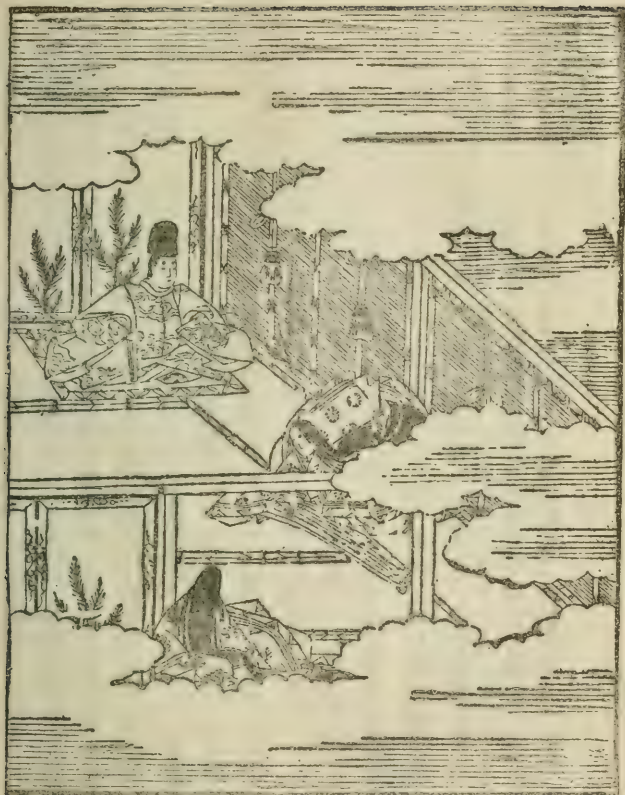
上「なほ遊ばし見よや。

み11もり(〇見守りカ、御刈りカ)田にひきはじめて12ぼ山川の底より水は絶えず出でなん

心ざしは泉より13勝りなむ。よし〳〵見給へ。まめやかにかう宣ひてやあらんとする。さてはえ罷出給はじ。早うこそ14は」いと切に宣ふ。北15方、おぼろげなう聞え給へば、辛うじていとはかなき16こてうどもいとて。

校異 1一字国ニヨリテ補フ。2因のアリ。3図音。4一字図ニヨリテ補フ。5図居。6國イナシ。7図を。8因く。9因のアリ。10図の調。11図か。12國や。13図もアリ。14図と。15因のアリ。16図字、國こ

ほのかに掻き鳴らし給ふ。上「なほ〱かく覺束なく承れ1(ば)、ましてこそ心憂けれ。少しゝきころあらん手を一つ二つ遊ばせ」など宣ふ。少し面白き手など3遊ばすに、この御琴、昔のなんやういしもの琴なれば、4こゝに5彼等に劣らず、いと切にあはれなる事添6つる御琴にて、北7方心にも入れ8ず掻き鳴らし給へど、さる上手のて9けの手どもを逸物にしつき給へる人の、さるは殊に秋の夜の更けゆく宴の松原10、11仁壽殿にありけん風に調べ合せ12て引13くに、あはれに面白き事物に似ず。北14方15よう16遊ばす事、昔大將の大殿に對面し給17ふ山に住み給ひし時、引き給ひけるまゝに、其の後更に住み給ひける世に18も觸れ給はず。この19大將20かの大殿にも更にこの琴彈きて21見せ奉り給はず。宰相中將は時々紀伊國などにても仕22うまつられけ23ると、この北24方は、更に里に出給ひて後琴に手觸れ給はずあるに、かくわりなく聞え給へば仕25うまつり給ふ。なほ年頃騷がしくなどして、稀にこそ思ひ出で給26へ、忘れ物し給ふを、この琴に27觸れ給ふにつけて、萬昔の事28に思ほえ給ひて、あはれなること限りなし。親の御手より引き取りし29、中將にかの山にて習はせし事、又この里に出でんとて彈きしなん風の聲など、萬にあはれなりし古事を、涌

校異 1一字[イ]ニヨリテ補フ。2[イ]心あ、[国]よろしか、[因]聞き所あ、國イ所あ。3[因]考異彈き給ふ。4[イ]殊。5國殊にアリ。6[イ]へ。7[因]のアリ。8國イナシ。9[因]考異す。10[イ]のアリ。11[因]八字ナシ。12國イナシ。13[因]かるる。14[因]のアリ。15[因]琴。16[因]考異彈き給ふ。17[因]ひし。18[イ]手。19[国]中。20[イ]ナシ。21[因]聞か。22[イ]ナシ。23[イ]れど。24[因]のアリ。25[因]考異ナシ。26國イは。27[イ]手アリ。28[国]も、[因]ども、[因]考異ナシ。29[因]手アリ。

く如1に2覺えて、3切に物のあはれに悲しく覺ゆれば、やう〳〵心ある手ども引きかゝりて、あはれに覺えて遊ばす時4、皆人上中下樂人ども、樂屋の遊の人も遊び止5みて、たゞこれを聞し召して、「怪し。この參りつる人は誰ならん。只今の世6に、盛りの7よしと云はるゝ中にも、かくばかりの琴彈くべき人8の9覺えぬかな。誰ならん」と10皆人驚きつゝ、「仲忠の中將こそかくばかりの聲は出ださ11め。12それはたかくてあり。怪しくもあるかな。藤壺はた參う上り給はず」皆人怪しがりつゝ、なほ此の大將殿13にやあらんと人思はし寄る氣色を14大將の君驚き給ふ氣色を見て、中將せめて知らず顏を作りて、「怪しく興ある御琴にも有るかな。15誰が遊ばすにかあらん」と、いといたうあはれがり覺束ながり居給へり。16左大將17の參り給はんや仲忠知らざら18(ん)やは、19誰が參りたる20やらんと人々思ひ、大將21大殿も22思ほしてあるに、夜は更けま23さり、琴も出で來勝るまゝに、五箇の手どもの24興あるを25遊ばし出だしつゝ、わざと面白くなりゆく時に、この北26方に、せめて御心留まる。昔より聞し召し馴けたる中にも勝りて、あはれと27思し勝る事限りなし。さて仰せらるゝ「文の28手どもの中に、29しあらむ手ども出で來む折には、涼仲忠に30(う)

【校異】1 [イ]ナシ。2 [イ]多く、[丙]考異思し。3 [國]イせけ。4 [イ]にアリ。5 [丙]考異め。6 [西]は。7 [イ]世。8 [イ]ナシ。9 [イ]思は。10 [國]イ見る。11 [イ]れけアリ。12 [イ]二字ナシ。13 [丙]のアリ。14 [イ]十一字ナシ。15 [宮]誰。16 [玉]右。17 [イ]殿アリ。18 一字[イ]ニヨリテ補フ。19 [イ]誰。20 [イ]な。21 [丙]のアリ。22 [イ]こアリ。23 [國]イす。24 [國]イぞら。25 [丙]考異彈き。26 [丙]のアリ。27 [丙]考異思はし、[國]イ思はえ。28 [國]こ。29 [イ]志、[宮]心。30 一字[イ]ニヨリテ補フ。

し〔○拍子〕ま1こ〔○申〕し、仲頼行正は今めきたらん唱歌仕まつれ」など仰せらる。かゝる程に、目出たく2遊ばしかゝり3て、その聲いとしめやかに引き給ふ。上手どもを取り出て御覽じつゝ、この手には4など云ふありけり、又5など彈くべき6〔手〕なりなど宣ふ。7この北8方、文のこと〔○如カ、琴カ〕盡くして、珍しき手をさへ盡くして9遊ばす。一並は五箇のうへふのこと10遊はして、し11をすさの聲に12遊ばす樣、同じ位13返して搔き14こへ給ふ樣の琴の音、面白き15も道理なり。同じく搔16ひ引き給ふ樣の手遣なむ愛しく目出たかりける。「このめ17く〔○召カ、妻子カ〕達も、昔唐土の帝の軍に負け給ひぬべかりける時、胡の國の人ありて、その軍を鎭めたりける時18、天皇喜びの極りなき19〔に〕よりて、七の后の20願ひ申さむをゝ仰せられて、七人の后を畫に畫かせ給ひて、胡の國の人に選ばせ給ひける中に、優れたる容貌有りける。その中に、天皇思す事盛りなりければ、その21ゐの愛を賴みて、こ22くばくの國23に母24 25婦人の中に26、我一人こそは優れたる德あれ、さりとも我を武士に賜ばむやはの賴みに、容貌畫き並ぶる繪師に、六人の國母は千兩の黃金を送る、優れたる國母は己が德のあるを賴みて送らざりければ、劣れる六人はいとよく畫きお

校異 1 団う。2 因考異彈き。3 因考異給ひアリ。4 因何と。5 因何と。6 一字団ニヨリテ補フ。7 國この宣ふアリ。8 因のアリ。9 因考異彈き給ふ。10 因考異彈き給ひ。11 団ほ。12 因考異彈き給ふ。13 団にアリ。14 団か。15 団を、因考異こと。16 国い。17 団し、因考異こ。18 因考異にアリ。19 一字団ニヨリテ補フ。20 団中にアリ。21 因身。22 因考異こ。23 団ナシ。24 国もアリ。25 団天。26 国もアリ。

として、優れたる一人をばいよく〱書きまして、かの胡の國の武士に見する1、この一人のこ2もり〔〇國母〕をと申す時に、天子は3かどかくすと云ふものなれば、え否4びず、この一人の國母5來給ふ時に、國母胡の國へ渡るとて歎く事、こか〔〇五箇カ、胡笳カ〕5（の）音を聞き悲しびて、乘れる馬の歎くなん胡のあ7いかてだちなりける。それを聞くに獸の聲にあらじかし8、それを遊ばしつる9見てたつなし、あらばとも思ほえた10つれ」と宣ふ程に、11いのは12くに遊ばし居たる。13それ彼のなむやうの家の族なりけ14り。15それを16見せ聞し召して、「この遊ばす手は、昔の故朝臣の仕うまつられし手17（に）等しくな18んありける。中將の朝臣19は萬の事20忘れて思はせて、せめて物の興なん21覺えし。御許22に23遊ばすは、萬物24（の）あはれなむ思ひ出られ、昔の人の聲など思ほえ、25深き心ざしの26勝り27しなむ思ひ出られける。心細く哀れなる事は、飽くまで御許になむ遊ばしける。28忘れてもあるべきものを草原にとこそ聞えつべかりけれ。この昔の思ほゆる手を遊ばせよ」など掻き返し給ふ時ある29をば、それ30をまし31と32き、なき手をばことく〱

校異 1 [イ]にアリ。2 [イ]くも歟、[国]く母。3 [国]言愛へず。4 國イむ。5 [イ]を遣し給、[国]を賜。6 一字[国]ニヨリテ補フ。7 [延]く、[延]考異いかく。8 [延]とてアリ。9 [延]御子に。10 [延]ナシ。11 [延]こ。12 [イ]ら、[延]考異は。13 [延]こ。14 [延]る。15 [延]三字ナシ。16 [イ]みかど歟、[延]帝。17 一字[イ]ニヨリテ補フ。18 國イり。19 [イ]のアリ。20 [国]忘。21 [イ]思は。22 [イ]の。23 [延]考異彈き給ふ。24 一字[イ]ニヨリテ補フ。25 [延]考異ぬべ、國イぬか。26 下三字國イましりしさたへ。27 一字[延]たる。28 [延]忘。29 [延]手アリ。30 [国]に。31 [国]て彈。32 [イ]ナシ。

につけて賞で1給ひて、2せめて御心に深く此の北3方を思し入りおはします。つぎ〳〵遊ばしつゝ、このは4ゝに搔き返り給ふ程に、仲頼行正5唱歌仕うまつりて、涼仲忠6侍す7べしなどする際、只今の上8手この道の人四人昔の遺物の筋一人、合せてさる古き新しき上9手達の御遊ひなれば、いとしめやかに興ある事限りなし。上「このは10ゝのあはれなるに、心凄き11を聞けば道理なり。この手なんかの胡の國へ渡りたる國母、12(胡)の國と我が國と越えける界の程歎きける手なり。げにさる13天皇の正妃とし14く、一の15后としてありけんに、さる武士の手に入りけん心地如何なりけんと思ふに、まして遊ばします樣の異なるこそいみじくあはれなれ。關許されぬ人あ16りには、こ17のは18く劣らぬ聲出だしつべき心地なむする。界越えけん國母に、關19いらぬ國王をこそ思しもおとさ20かめ」北21方22の「如何なる關守かは許し聞えさせざらん」上「近き守の地こそはたかく居ためれ」など宣ふ。この23こくは24くを一度はほのかに搔き鳴らして、今一度ばかり心留めて搔き立てゝ仕うまつり給ふに、そこばく聞し召す限りなん男女にげなく、み25る「〇皆」涙を流しつゝ聞し召し、哀れがり26も事限りなし。「いでや、何をか27は今宵の御遊にはすべからん。更に

校異 1下六字因たく彈き給ふ、上。2下三字困ナシ。3因のアリ。4困ら。5因唱。6困詩誦。7困ナシ。8因手、9因手。10因ら。11困音アリ。12一字困ニヨリテ補フ。13因帝。14国て。15因后。16困る。17困く。18因ら、因考異ゝ。19国許しぬる、因許らぬ。20困ら。21因のアリ。22困ナシ。23因二字ナシ。24因ら。25困た。26困給ふ。27國イナシ。

この遊ばす手1どもに相ふべき祿こそ思はえね。す2かし〔○涼〕仲忠が紀伊國の九日3 4〔ろ〕く〔○祿〕をまさ行はぬかた。府の大將を5ば月の頃ほひになりなば、祿遅しと責め申せ。さて今宵の祿をば如何すべき。す6かし〔○涼〕7の仲忠はきく／＼あり。御許には自らをや8は得給はぬ。中將の朝臣紀伊國の祿には女をこそ9はとてたれ」とて、御前たる日給の簡に、內侍10かみになすよし書らせ給ひて、それが上11にかくなむ、

「日の前の枝より出づる風の音は枯れにし物と思はゆるかな

これが哀れなればなん」と書き付けさせ給ひて、上達部達の御中に、「人々これに名して下されよ」とて賜ひつ。左の大臣見給ひて、いと覺束なし、誰ならんと思せど、御手づからの事な12れば、名し給ふ、「左大臣從二位源朝臣季13なと14らんより」と書き付けて、その傍に、

「風の音は誰も哀れに聞ゆれど何れの枝と知らずもあるかな

覺束なき宣旨になむ。」と書き付けて、15左の大臣に奉り給へり。見給ひて、怪しく、只今異もなき琴の聲出だして、內侍のかみになるべき人絶えてなし、琴引きける人のそ16ら〔○族〕にこそはあめれと思17はし寄り

【校異】1 國もと。2 不す。3 国のアリ。4 一字不ニヨリテ補フ。5 因八。6 不ず。7 不ナシ。8 不ナシ。9 玉は得、因得・因考異取られ。10 因のアリ。11 國イゑアリ。12 國イなアリ。13 下六字国明。14 不やアリ。15 不右。16 不う。17 不ほ。

て名し給ふ、「1右大臣2二位藤原朝臣忠雅」と書き付けて、かくなむ、

　武隈のは3な4夕松は親も子も並べて秋の風は吹かなん

と書き付けて、左大将に奉り給ふ。左大将見給ひて、これかれ參りて、「これは何でふ事ぞ」「さらば」とて聞え給ふ。右の大臣「い5まや。さらばかくなん思6(ひ)給へ寄りた7る。8如何に9(さ)は思さずや」「いでさも知らず10かし。さこそ言へ、いたく11思し寄りたるかな」とて名し給ふ、「大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察12使源朝臣正頼」と書き付けて、

　花13は14より吹きくる風の寒むけれ15ば16むべも小松17も涼しかりけり

と書き付けて、右大將に奉り給ふ。見給ひて、「怪し。こは何でふ事どもぞ。兼雅は心得ずや」と宣ふ。上、「怪しう18こそ19は心得給ふべき事にもあらずかし。覺束な20くか21く御名を早や」22右大將「か23げろう〔○階陽カ〕こそこれには奉るべかめれ。覺束なくては」と宣ふ。上「おぼめくよりはかなくてやは有りけん。いで、な知らせそや」24など宣ふ。「25三位守大納言26兼行27左近衛28大將春宮大29輔藤原30朝臣兼雅」と

校異 1國イ左。2因從アリ。3因考異ね。4团はの、国わの。5国さ。6一字团ニヨリテ補フ。7国りつアリ。8国三字ナシ。9一字团ニヨリテ補フ。10國イ二字ナシ。11团思ほ。12因使、國イ夫。13国わ。14团か。15团ど。16因う。17团は。18团そこ。19因考異ナシ。20下三字团ながら。21一字国う。22因と宣へばアリ。23因考異い。24团と。25团從アリ。26因兼行。27国右。28因のアリ。29团夫。30因のアリ。

書きて、

吹1け勝る松より出る風なれやことなる波の涙落つるは

と書き付け給ひて、民部卿に奉り給ふ。「2三位[さんみ]權大納言兼[けん]民部卿3(源)4朝臣5兼雅[かねまさ]」と書きて、

年經れど枝も移らぬ高砂6は隣の松の風や越えまし

と書きて、左衛門7督に奉り給ふ。それ名し給ふ、「中納言從三位兼[けん]左衛門8督藤原9朝臣正成[まさなり]」と書き付け給ふ。

昔への松は枯れにし住10吉[のえ]の昔の風に忘れざりけり

とて、平中納言に奉り給ふ。「中納言11源三位平[の]朝臣正明[まさあきら]」と書きて、

聞く人はあねはの松の風なれや昔の聲を思ひ出づるは

とて、宮の大夫[かみ]に奉り給ふ。「中納言中宮大夫12三位源13朝臣文正[ふんまさ]」と書き付けて14など心々に御名下[くだ]りぬ。

かくて15この歌、

松風の昔の聲に聞ゆるは八十嶋[やそしま]より16(や)吹き傳ふらん

【校異】1因き。2冈從アリ。3一字冈ニヨリテ補フ。4因のアリ。5冈實[さね]。6冈の。7因のアリ。8因のアリ。9因のアリ。10冈吉[のえ]。11冈從。12冈從アリ。13因のアリ。14以下十五字冈「松風の昔の聲に」ノ歌ノ次ニアリ。15冈三字ナシ。16一字冈ニヨリテ補フ。

北1方は、五箇の2くか3とに4調5ども皆仕6うまつり果て給ひぬ。上飽かず日出たしと思はせど、五7(箇)に調べ變8つて仕うまつり給ふべきにもあらねば、飽かず心許なしと思しながら、上「五箇はかく覺束なり9く思ほゆれど、かごと許りは遊ばしつめり。今はこれより返らむ聲に調べて、今10(二)度の節會に遊ばさむ聲を調べ罷出給へかし」と宣へば、な11ほ迎への聲に調べて侍ひ給ふ。上「年頃過しける事は嘆きてもかひなし。今よりだ12に、なほよろしからむ節會ごとに、すべて節會一つに手一手づゝ遊ばせ。また節會ならずとも、春秋の草木の盛り13の見所あらん夕暮など14に、なほおもし15(ろ)(〇面白)からむ手遊ばして聞かせ給へ。16れいて17も18千年19が中に出で來む節會ごとに遊ばすとも、この御手の盡くべき事のなき20なんあはれなりける。人の世は限りあるものを、己が限りにして、共の21千ふか盡き22む事の難き23事、承りさして世の變らんはあはれ從めたき事。いかでか共處にも此處にも萬歲の24命齡もがなとこそ思へ。

千年經る松より出づる風の音は誰か常盤に聞かむとすらむ」

内侍のかみ、

【校異】1 因のアリ。2 図手、國手か。3 図ども。4 国にアリ、因のアリ。5 図二字ナシ。6 國イナシ。7 一字図ニヨリテ補フ。8 図へ。9 國イなアリ。10 一字図ニヨリテ補フ。11 図んかく、図んかへ、因考異むかぜ。12 國イま。13 因ナシ。14 国も。15 一字図ニヨリテ補フ。16 国ま、因わ。17 国百。18 因千年、国千の年。19 国の。20 図にアリ。21 因千年經るとも、国三字ナシ。22 因ざらアリ。23 因ナシ。24 因ナシ。

「聲1足らず吹かむ風には松よりも齢久しき君ぞ涼まむ
誰にかあらん」と申し給ふ。「それが不定なるにこそ哀れなれ。よし、御許にも2かさ(〇草)木となるとも、この琴の音をそれに從へて、この遊ばすをば承りて、3鳥の聲にても承りてむ。草とならばむ4かし(〇虫)の聲にても5さゝ、山とならば風の音にて6も聞き、海川とならば波高き音にてもなむ聞かむ」と宣ふ。「楊貴妃が七月七日長生殿にて聞え契りければ、御許には今宵仁壽殿7にて8を契り聞えん。更に長生殿の永き人の契りに思ほしおとすな」と世中のあはれなる事を宣ひて、かくなむ、

「姫松の鶴の千年は變るとも同じ川邊の水9を10流れん

其所にさ11思せかし。此所にはた更なり」内侍のかみ、「ことて(〇言出カ)しはと云ふ事のあれば、えなむ」とて、

「淵瀬をも分かじと思へど飛鳥川そなたの水や中淀みせむ

とのみなむ。更に身には、深き心をとのみこそ」上、「よし、さて12試み給へかし」とて、

諸共に流れてを見む白川や何れの水か澒きは勝ると

など宣ふ程に、内膳に仰せ言ありければ、御前の物いと13淸らにて參14 15り、淺香の折敷四十、それに折敷

校異 1国絶え。2才く。3図む、木とならばアリ。4才ナシ。5才聞き。6國イナシ。7國イよ。8才ナシ。9国と。10才眺め。11國イおは。12才心得。13國イき。14才れアリ。15国る。

の臺盤物、いとになく清らにて、御器どもなど更にも言はず、同じく盛りたる菓物乾物、世の常の食物にはあれど1いと目出たし。上2右近の實頼の中將兵衛の督などに、「かくて3もし給ふに、今宵この琴仕うまつる人いと目出たき人なるを、朝臣なほ内膳につきて、この前の物少し情づいて、只今物せよ。菓物などいと興ある物を選びて仕うまつれ」と仰せられければ、この君4殿下の手を盡くして、勞ありとある人、殿上人などして、手づから組に向ひて、5宴の有識達三四十人して6しうし出したる、7殊にいと8清らなり。

かく9て目出たくて、御琴仕うまつり果てゝ、曉10方になる程になむ内侍11髫髮四十人皆12裝13束し連ねて、四十の折敷取りて參りけ14る。かくて内侍15督になり給16ふぬるすなはち、女官皆露きて　に17わかに内教坊よりも何處よ18る〳〵髮揚げ19裝束して、方に出で來20て、21御折敷取りて參る。内侍のすけ　賄し給ふ。そのすけいとやむごとなき人なり。上仕うまつり給ひて、源氏皇子達22の御子にておはします。源氏の女也。

かくて皆この内侍のかみの御23徳にある大人24童など25に、いと淸らに26物賜ふ。

かゝる程に、27大將の大殿能出物參りなどする程に、我が妻と知り果て給ひぬ。大將怪しくそゞろにて參り

校異 1 囝もアリ。2 国左。3 囝物。4 囝天下無、国大下、図だち。5 囝眞、図まこと。6 囝しこし、国調じ。7 囝事。8 図いとアリ。9 囝ナシ。10 図考異ナシ。11 囝ら、図二字ナシ。12 図裝。13 図イぞ。14 囝り。15 図のアリ。16 囝ひ。17 囝は。18 囝りも。19 図裝。20 国この。21 囝このアリ。22 囝などアリ。23 囝許。24 国童、図童べ。25 囝ナシ。26 図てアリ。27 図右アリ。

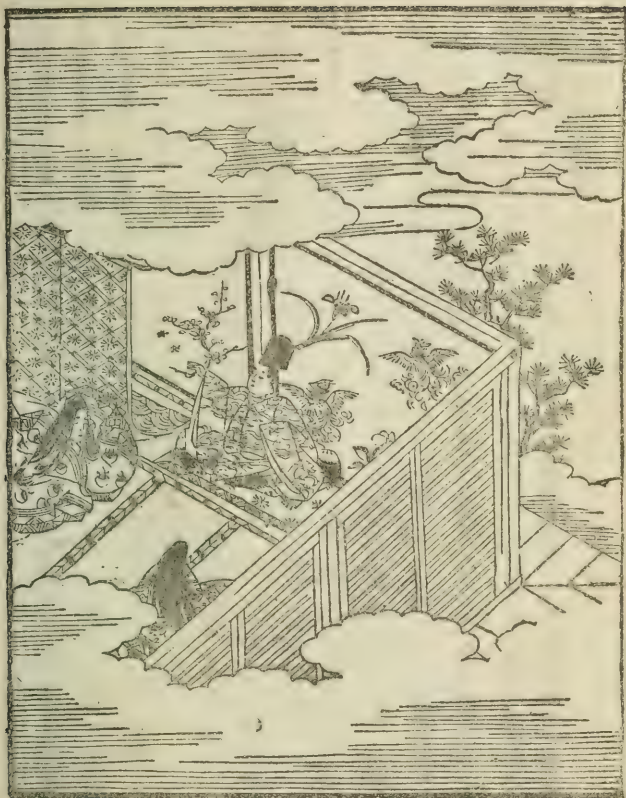
けるかなと思せど、その人の御妻子とて、さるおほぞ1うの中に出で走りてあるに、殊に恥かしからず2か
3つしくす給ふ、大殿4いや5すさ〳〵に心憎くなり、「かゝる6女持7ちたる人、いかに8人を見む」とり
き10后の宮より初め奉り、そこばくの人思ほす。げにはた眉目容貌よりも、うち出したる才、生み出したした
る子な11どを見るに、いと世の常の人ならず見え給ふ人なれば、返りて面目あ12ると、昔より聞し召し馴け
て、常に訪はせ給ひ、今にても思し離れで訪はせ給13(ふ)ものを、かくて侍ひ給ふに、宜ひか14くる事もこ
そあれと心に空に覚えて、この殿の15政所16別当左京の大夫橘元行の、北17方の御湿りに参りたるを召し
て宣ふやう、「この里のにはかに女官の饗し給18ひつるめるを、かの三條に只今参りでゝ、さる心設けせられ
よ。必ず湿りに人々物せられなむ。女官の着くべき方19へかの20男の着き給ふ所など、清らにしつらはせむ」
元行、「御座所はこの相撲に此方勝ち給はゞとしつらひ侍ふ。御饗の事などは、此度はかねて心して仕うまつ
り21つれば、何でふ煩ひも侍るまじ」大殿「されど、相撲に勝たむ設けにこそあらめ。これはかくにはかに
22ちうある宣旨にてある事なるを、女の饗などの事いと清らになんせまほしき。饗の23心殊にあるべし。い

校異 1 国イら。2 下八字図かく具し給へば、図考異交らひ給ふ、(同)かくして、(同)ナシ。3 一字仏く。
4 国イは。5 図ま。6 図妻。7 図ちたりけ、国たりた、図考異たりたりけ、国イたりけ。8 図他アリ。
9 図ナシ。10 図后。11 国イた。12 図り。13 一字図ニヨリテ補フ。14 図か。15 図政。16 図のアリ。17 図の
アリ。18 図ふべか、国へる。19 国垣下。20 図大殿。21 図た。22 図ら。23 図事アリ。

はんや只今の女官とも1ゝなり。やむごとなきすけなど、はた物し給ふ2を、用意せん。宰相中將も物せんとすれど、此所に罷出られむ3に、なくては惡しかるべければ」など、4委しく宣ひて遣はしつ。かゝる程に、5內裏はたい6でこの贈り物いと目出たくしてしがなと思はして、左の大臣に宣ふ。「この內侍のかみ罷出むに、いかで與あらん贈り物してしがなと思7ひを、さる心もなくにはかなる事なれば、え何でふ事なからむかいといとほしき事。藏人所內藏寮の邊に、少し8とめき勞あらん9との(〇物)は取う出られなんや。この事物せ10させ給11へ12」これ有心の族にて13はんたう14かさき15の人なり。心して物せさせ給へ」と宣ふ。后宮仁壽殿なども、いかでか聊かなりとも物せむなど思ほす。かゝる程に、上內侍のかみに16物語りし給ふついでに、「今宵御許に17侍ふ人の中に、內侍仕うまつるべき人はありや。この頃上の內侍仕うまつるべき人の一人なんなき。少し物など知りて、さてもありぬべからん人賜りになさせ給18(へ)。や19がて20おかしに參りなどし給はむに、後見もせさせ給へ。す21(べ)て女官の事は、何事22も御心のまゝにを。昔よりかやうならましかば、今は23國母と聞えてましかし。24はいても仲忠の朝臣ばかりの親王なからましかし。よし行末までも私の后に思はむかし。時々なほ參り給へ25と26息所は願に從ひて、淸涼殿をも讓り聞えむ」

校異 1 囗ナシ。2 國イせ。3 國イも。4 囗いとアリ。5 国上ヘ。6 囗かアリ。7 囗ふ。8 囗今。9 囗も。10 國イまを。11 國イふ。12 國やアリ。13 囗侍る。14 囗る。15 囗ナシ。16 囗御アリ。17 國イさゝら。18 一字囗ニヨリテ補フ。19 囗と、20 囗其所。21 一字囗ニヨリテ補フ。22 国にアリ。23 囗此所許。24 囗かば、国分。25 囗御。26 國イ息。

自らは1屋頃に住むとも、御饗の所は物せむ。さて侍はるとも人惡しとは物せじを。なほさて物し給へ。右大將の制せむも味氣なし。今はそれにもな從ひ給ひそかし。さても怪しう2あらじ。ねたうと思さむやは。それにはな愼み給3ひそ。かくて所をばさてのみやあらん」内侍のかみ、「何かは侍はむを制する人の侍らん。すゞろに侍ら4はばこそあらめ」上、「御許だに物し給はゞ何か避ら5む。隱れたる所こそかく物怖6わすれ」心ざし昔より更に譬ふるものなく多かれば、なほさて思7るてあれど、今はたなほさてのみはえあるまじきを、天下にかく急ぐ心ざしの方々あ8るとも、里に物し給はむに、はたえ物せじを、9此所に物し給はゞなむよかるべき。やがても侍ひ給へと聞えむとすれど、樣々に過10ゝし11（難）き事なん。この月には12十五夜に必ず御迎へをせむ。この調を、かゝる事の遺はぬ程に、必ず十五夜にと思ほしたれ」内侍のかみ「それはかぐや姫こそ侍ふべかなれ」上「此所にはた13まはた（〇七夕）送りて侍はん14かし」内侍のかみ「子安貝は近く侍はんかし」上いかでこの內侍のかみ御覽せむと思すに、御15殿油16物縁に燈せば物し17、如何にせましと思ほしおはしますに、螢おはします御18方へ邊に、三四連れて飛び歩く。上これが光に物は見えぬべかめりと思して、立ち走りて皆捕へて、御19袖に包みて御覽ずるに、數多あらんはよかりぬべければ、やがて

〔校異〕1〔国〕邸宅、〔因〕屋蔭。2〔イ〕はアリ。3〔國〕うそ、〔國〕イふは。4〔イ〕ナシ。5〔国〕なアリ。6〔イ〕ぼ。7〔イ〕ひ。8〔因〕り。9〔國〕たゞ。10〔因〕ぐ。11一字〔国〕ニヨリテ補フ。12〔国〕あるアリ。13〔イ〕な。14〔因〕考異二字ナシ。15〔因〕殿油。16〔イ〕ナシ。17〔イ〕しアリ。18〔イ〕前。19〔イ〕手。

「童べや侍ふ。螢少し求めよや。かの文思ひ出でむ」と仰せらる。殿上童べ、夜更けぬれば侍はぬ中にも、仲忠の朝臣は承り1得る心ありて、水の邊草の邊に歩きて、多くの螢を捕2ゑて、朝服の袖に包みて3持て參りて、暗き所に立ちて、この螢を包みながら4嘯く時に、上いとゝく御覽(じ)つけて、直衣の御袖に移し收りて、包み隱して持て參り給ひて、内侍のかみの侍ひ給ふ几帳のかた6らひ(○帷子)を打ち懸け給7ひて、物など宣ふに、かの内侍のかみの程近きに、この螢をさし寄せて、包みながら8嘯き給へば、さる羅の御直衣にそたゞつ9か(○包)まれたれば、殘る所なく見ゆる時に、内侍のかみ、「怪しのわざ10」と打ち笑ひて、かく聞ゆ、

衣薄み袖の中より見ゆる火はみつしほたるゝ蜑や住むらむ

と聞え給ふ樣日出たき人の物など言ひ11出したる更なり、し出12るたしたる13才などはたいと目出たく心憎き人の、その容貌はた世に類なくいみじき人の、さるらうある物の光に、ほのかに14譬ふべき人なく目出たく御覽ずる事限りなし。かくて答へ給ふ、年頃の心ざしはこれにこそ見ゆれ。

しほたれて年も經にける袖の浦はほの15みに見る16ぞ懸けて嬉しき」

校異 1 イた。2 国へ。3 宮考異とくアリ。4 國イこそぶ。5 一字イニヨリテ補フ。6 イびら歟、国びら。7 因う。8 國イこそぶ。9 イつ歟、国つ。10 イやアリ。11 國厨。12 イナシ。13 イまへ。14 イ見ゆるは、まして如何なる切なりける、上御覽ずるにアリ。15 イか。16 国も。

上おはしまして、萬にあはれにをかしき御物語どしつゝおはします程に1夜曉になり行く2。鷄打ち鳴き初めなどするに、上「稀に逢ふ夜はと3云ふ事は眞なりけり」など宣ふ。

　曉の聲をば聞かで雛鳥の同じ塒に寝るよしもがな

と宣へば、内侍のかみ、

　卵の中を夢より孵る雛鳥は高き塒を餘所に見るかな

と聞え給ふ程に、夜明けなんとするに、督の大殿急ぎ給ふに、やうく日など見ゆる程に急ぎ給ふ。「また4待つや。そもそもこは曉かは。まだ明5雲も光見ゆるものを」とて、「右大將判めて宣へ」と宣ふ。大將「なほ定め難くなん。なほ夕告〔〇木綿付〕鳥の6雛となる聲なむ聞ゆ。何れにか侍らん。不7當になん只今も8覺え侍る」とて、

「東雲はまた9見ずのえか覺束なさすがに急ぐ鷄の聲かな

これをなん承り煩ふ」と申し給ふ。上打ち笑ひ給ひ10て、内侍のかみの御許に、「聞き給へ。かく人の中11すめる。此所には聞きなむ勝る」とて、

　ほのかにも木綿付鳥と聞ゆればなほ逢坂を近しと思はむ

校異 1囡ナシ。2因考異にアリ。3國イ二字ナシ。4囡見ず。5囚暮。6国遣。7囡定。8國イ思し。9囚住吉、国見ずのみ。10國イナシ。11囚し得る。

と宣ふ。督の大殿、

「名をのみは頼まぬものを逢坂1の許さぬ關は越えずとか聞2て

なほ不當になむあなる」上「なほいで效なくも宣ふかな」とて、

「頼めども淺かりければ逢坂の淸水も絶えて結ばれぬかな

相思されざりけり」と宣ふ。なほ罷出3、左の大臣藏人所より蒔繪の御衣櫃4二十に、甕覆5ゐあふこ6と〔○枌〕はた更にも言はず。つ7かひ〔○作〕物所の8預り仕うまつりけるを、なほ仕うまつり9ける上手して仕10まつらせ給へりける御か11く〔○唐〕櫃どもに、萬のらうある物、12ちう〔○綵〕の綾付き目出たきは、これがたはかりなむ、錦などの面白きは、これが覆ひにと、年を經て擇り調の13え14て15こし給へる物も、ただこの16御料になむ。それに藏人所にも、すべて唐土の人の來るごとに唐物の交易し給ひて、上り來る毎に、綾錦なむ珍しき物はこの唐櫃に選り入れ、か17ら〔○香〕も勝れたるはこれに撰り入れつゝ、やむごとなく警策ならむ事の爲めにとてこそ、櫃18十懸籠に19積みて藏人所に置かせ給へるを、20左の大臣、年頃俄に警策ならん折にとて調ぜさせ給ひてあるを、天の下今宵の御贈り物より超えて更に21くせじ、これより22何時

校異 1［イ］は。2［イ］く。3［国］給ふアリ。4［国］二十、［図］二十に。5［国］ひ。6［イ］ナシ。7 二字［国］く。8［図］考異物と盡くして。9［図］考異添へ給ひアリ。10［図］うアリ。11［イ］ら。12［イ］ら。13［国］へ。14［国］ナシ。15［イ］調じ、［イ］にしらへ。16［イ］ナシ。17［イ］う。18［図］十かけ。19［図］包。20［図］四字ナシ。21［イ］ナシ。22［イ］何れ。

かあらむ、一つは俊蔭が女なり、夫は右大將と云ひて1え2なたなり、し3果たす業俊蔭が世の琴なり、天の下これより超えたる心憎さ何時4かあらん、これを今宵の贈り物にせむ、勘當あらじなど5思して、6それ7十かけ取り出でられ、今十かけの御衣櫃に、內藏寮の絹の限りな8き9 10選り出して、五かけの唐櫃の上に五百疋いみじき限り、今五かけには纔綿の雪の降りかけたるやうなる11が五12尺ばかり11廣14さ五百枚選り入れて、かの藏人所の十かけには、15綾錦16花ふ緤、色々の香は色を盡くして、麝香沈丁子、17香も沈ふ18唐人の19度毎に選り置かせ給20ひつる、藏人所の十かけ、朸臺覆21ふ更にも言はず、いといみじく目出たくて22かけ調へて侍ひ給ふ。后宮より23同じきし24づかは25の26なか27へは〔〇白川の仲常、人名カ〕が仕うまつれる蒔繪の御衣28箱五具に、御29裝束、夏のは夏秋のは秋冬のは30冬御裝様々に、云ふ限りなく清ら31になり。32さもとは、形木のにもあれ、また染めたる色も限りなし。唐の御衣御33らわきなど言へば更なり。珍しき紋に織りて34（これもかゝる35用もこそ36頓にあれとて）37萬に目出たくて設け給へるなりけり。

校異 1因ナシ。2国名だゝ。3囨出た。4國イる。5囨思ほ。6國イけ。7因考異の。8國は。9因をアリ。10國ふ。11國ナシ。12国尺。13国のアリ。14因き。15囨怪しき。16国花文。17國イさう。18因唐人。19因持て渡るアリ。20国へ。21国ひ。22国はアリ、因十アリ。23国同じく、因の御贈り物は。24因ら。25囨す。26因考異た。27囨つね。28國イ御アリ。29因裝。30國イナシ。31囨ナシ。32囨御衣ども、因考異さもゝ。33囨長齎。34以下十六字囨ニヨリテ補フ。35囨やう、国よう。36国二字ナシ。37国七字ナシ。

これをなん1さ箱どもに入れ給ひて、入れ帷子包などいと清らな2り。3らうを入れ帷子4にして、綺の緣の5窪の海賊6の紋をまた包にしたり。皆唐物どもをしたり。又女御達そこ7ゝの御中に、仁壽殿のみなんし給ひける。さる切なる物8は9たえ他君達は取う出給はず。今宵の内侍のかみの御贈り物10世11中に賢き人え12た〈〇取〉う出給はね13ば、仁壽殿はさる大將殿の齋き女と云ふ所なむ、さいへ14ど取う出給ひける。白銀を透箱に組まれたる組目いと面白く、一具には秋15山を組み据16へ、野には草花蝶鳥、山には木の葉のいろ〳〵、鳥ども据17へなどしたる樣いと面白し。同じき山の心ばへいとらうある組み据18へ、一具には夏の山を、山には綠の木の葉、鳥ども19の凝り遊べる山河の心水鳥の居たる樣、木の20枝に虫どもの住みたるなどいと目出たく艶めき、珍かにその山里の人の住みたる心ばへなど組み据21へたる、翳に目出たし。今一具には春の澀など生22いた23る島どもなどの心ばへ、舟どもなどその24海いとらうあり25と、いと珍しくをかしき事ども組み据26へたる透箱27二具、白銀の高杯盃の塗物して、その高杯の足にもお28りてよく、かくらうある物の綺をかしき物の樣など書いつけて、いと世の常ならず、それに御29裝束になむ言はずいといみじく目出たくて、夏冬の裝を透箱に入れて、その敷物上の覆ひ上の組30子せられける、31今いとらう〳〵じく

校異 1 不御。2 因考異る。3 因羅、因考異絡、國イろう。4 國イナシ。5 因色。6 國イナシ。7 不ら。8 因の中にアリ。9 因とて。10 不はアリ。11 国のアリ。12 因と。13 不ど。14 國イとこそ。15 国のアリ。16 国ゑ。17 国ゑ。18 国ゑ。19 因轉。20 國イ肌。21 国ゑ。22 国ひ。23 國り。24 因組。25 不て。26 国ゑ。27 不一。28 不も。29 國イそひ。30 國イに敷。31 不樣。

む深し。今1二つには御髪の調度、据2へ額より初め釵子元結御櫛どもなど、その種と3も言はず目出た4
てて5高杯なん設け給へりける。

文化十二年五月十九日以本居氏藏書校合畢　橡樟園

校異1宮一。2国ゑ。3丕にアリ。4丕く。5国六つアリ、國イむアリ。

田鶴の村鳥

一名　沖つ白浪

六月ばかりに、内裏の帝1仁壽殿に渡り給ひて、大將の女御2君と御碁遊ばしなどするに、大將の大殿參り給へり。上おはしますとて、隱れたる方に侍ひ給ふ。上召し出て、物など宣3はせて「暇文出されて久しくなりぬと聞きつるは4何事ぞ」大將「侍5り所にほと／＼しく侍りつるを見給へ扱ひてなん」上「更に聞かざりけり。先つ頃、見に罷出6ぬとありしを、例の里住せられまほしき時7は、里になん惱み給8(ふ)と此所も彼所に物せら9れば、身にも此の度は許し申さゞりつるは眞實にこそあ10れ。すべて虛言し慣はし給11ひつる12罪にこそあ13れ」大將「彼所にも、14殊なる事なくば、な罷出給ひそ。參り15よくてするも煩はしなど宣ふを、如何なればさ侍らん。若し16侍るにかひなき心地やし侍らむ」帝打ち笑ひ給ひて「煙の響17へも有れば、さも知らずかし。なほす18かし(○凉)仲忠らが祿は如何にぞや。19などす20くし(○凉21)が本意の違ひにたる心地のする」大將「今此の八月許りにとなむ思22ひ給23(ふ)る。凉の朝臣24にはしか思25ひ給

〔校異〕1〔因〕仁壽。2〔イ〕のアリ。3〔因〕考異ふ。4〔國〕イなどこそ。5〔イ〕る。6〔イ〕ん。7〔國〕イナシ。8 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。9〔イ〕るアリ。10〔イ〕めアリ。11〔イ〕へ。12〔國〕をアリ。13〔イ〕めアリ。14〔イ〕事徑。15〔イ〕罷出歟、〔國〕罷出、〔イ〕浴らで。16〔イ〕侍ふ。17〔イ〕ひ。18〔イ〕ず。19〔因〕考異二字ナシ。20〔イ〕ず。21〔イ〕顏色。22〔因〕う。23 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。24〔因〕考異ばかり。25〔因〕う。

へしを、春宮より宣旨1なんあると2て聞し召して、なほ參らせよ。そのよ3しは奏せんと仰せられしかばなん參らせ侍りしを、その代りにと思ひ給ふる4との小さく侍る程に、今まで怠り侍る5る」帝「同じ事にこそはあなれ。かの人をこそ有り難く聞えしか。此所にもかの源氏をさしも思はざりしかど、惜しき物覺えざりし夜なりしかばなん。太子のさ物せられんには、如何でかはさあら6ば」大將「7と侍る者彼に劣り侍らず」上「うるさき事かな。この度も危しや。もどきし8りれ（〇我）ぞとか言ふ事」など宣はせて、女御9君に、「今宵だに參う上り給へ。常にさ聞ゆれど、上渡りをこそ物憂がり給へ」などて、おはしましぬ10べし。女御參う上り給ふ。

〔畫詞〕11（此所は）12上らう13なむ（〇仁壽殿）14の女御おはします。御年15廿五。皇子達16八所17生み給へ18り。19御たゝち多かり。帝おはします。御碁遊ばす。大將侍ひ給ふ。

かくて大殿籠り出給ひぬ。宮「など今まで籠り出給はざりつる」大殿「しし20む（〇仁壽）21殿に參うでたりつれば、おはしまして、物宣はせなどしつれば、かの中將達の事をぞ宣はせつる。源中將の事た22（が）（〇達）へ

〔校異〕1〔不〕なかりし前より奉れと仰せられしを、かゝる宣旨アリ、〔因〕考異奉れと仰せられしを、かゝる宣旨アリ。2〔不〕ナシ。3〔國〕イら。4〔不〕者。5〔不〕りつアリ。6〔不〕ざらば、〔玉〕さらん。7〔不〕今。8〔不〕わ。9〔因〕のアリ。10〔因〕二字ナシ。11三字〔玉〕ニヨリテ補フ。12〔不〕じじ。13〔不〕で。14〔因〕ナシ。15〔因〕三十。16〔因〕考異はアリ。17〔因〕までアリ。18〔國〕イる。19〔不〕御御達、〔不〕御達。20〔不〕う。21〔國〕イはんはん。22一字〔不〕ニヨリテ補フ。

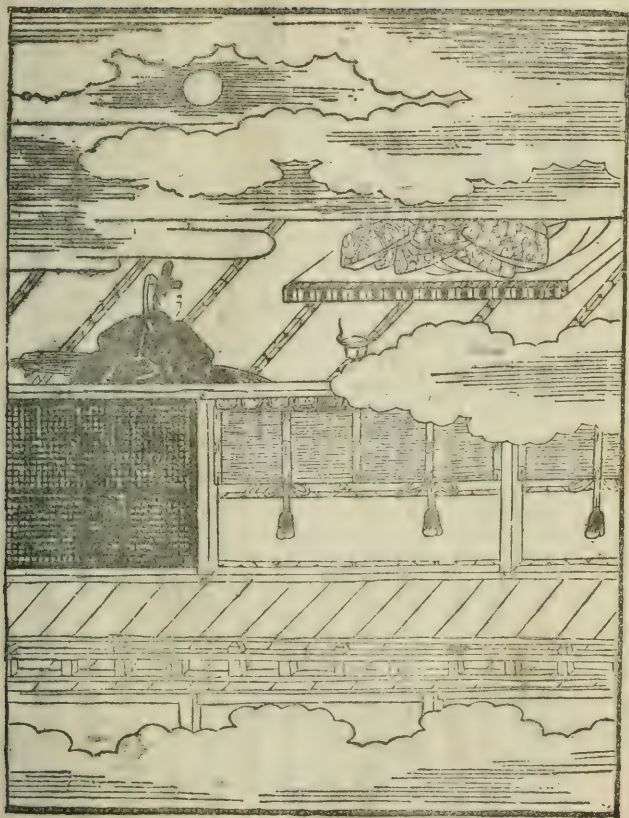
たるやうに宣はせつる、いとほしき事」宮「1様こそ劣らず生ひ出でためれば、それをこそ物すべかめれ。頭中將に2こそ女一人取らせて、子出で來ばき3ぬ〔○琴〕4ついてもさせむと思ひつれ。あ5りはらみの筋7わら8なるまじ9なり」大殿「上も10と思ほして、御心留めて物宣ふにこそあめれ。うる11さき人の幸なりや。同じき皇子達と聞ゆる中にも、心殊に12思したりつるを、源氏の中將も殊に劣らぬ人にしも、容貌もさ13へ〔○才〕も宮14將も同じごと、たゞ勢ひ15なるのみなん思ふにはあらぬ。16すへ女子の多かるは憐べき事ぞ多かるや。此方のも彼方のも17事のよき程になりにたるを、何のこれかれに奉りて18は、如何思す」宮「其所にも如何思す、宜しかるべくは早やせさせんかし」大殿「あてこそに物宣ひける人19をば外に住ませじとなん思20 21るふ。22ちごこそは右大將23主に、24げすこそは兵部卿25宮に、あなたの二人をば、姉に當ろをば平中納言、今一人は源中將にとなん思ふ」「源宰相をば此方にとこそ思へ。あてこそのまゝ何心もなかりし時26心ざしありて言ひ歩き給ひしものを、如何に思ひ給ふらむ」大殿「さらば兵部卿の宮に[illegible]へむかし」など宣27ひ、かくて、極熱の頃は誰も／＼をさ／＼内裏へも參り給はず籠りおは28しま29すと。六月

校異 1 国今。2 國イうち。3 团ん、國イに。4 因習は。5 国る。6 团えも、因皇子、因考異えも此。7 团母、国はさ、因は。8 因習はす。9 因きアリ。10 国さ、國イナシ。11 因せ。12 因考異思は。13 团え。14 团爵。15 因異アリ。16 团末に、因すべて。17 国殊に。18 因む。19 团ぞ、國イは。20 下二字因考異へる。21 一字团ナシ。22 因そこ。23 因のアリ。24 因考異袖。25 因のアリ。26 因よりアリ。27 团ふ。28 国しまさふず、因考異さふず。29 团ナシ。

になりて、大將殿の御聟取の事近くなりて、仲忠の宰相の中將に女一宮、源氏の中將に1様こそ2君、これは宣旨にて賜ふ。私にあなたの御腹の十3一の君をば兵部卿の皇子4と、十5二の君6平中納言に、こなたの十7二の君をば右大將の主、十8三の君は源宰相9よと思し10くて、御方々より初めて、御調度御裝束上下仕うまつり人11すぐ、容貌淸げに心12調へさせ給ひて、皆御消息聞え給ふ。ある限りの人さ13ゝ〔〇史〕に聞き入れ給はず。誰も〳〵あて宮の御方に深14き志あり15き、參り給ひて程もなく、異心ありとや思ほされ16されむなど思す中に、源宰相は懸けても17聞き給へば、い18はなく悲し19と思ほす。大殿宮に「この人人皆心ゆかず思したためり。何かさあらむを強ひても申さむ。あ20くこそに物宣ひし人々は此所にあらむと思すかと思へども、21彼所ならぬをば否と思すなるをば、如何でかは數多の人々に一人をば奉らむ。さてこの二人の宰相達をば天下に宣ふとも強ひ申すべし。內裏より日を取りて下し給はせて、責めさせ給ふ事をば、はかなき私事に破るべきにてはあらず」とて、一22宮の住み給ひし中の御殿23に造り磨き、御座所24にしつらはれたる事、綾25緋どもして飾り、侍ふべき人皆髮長く、容貌心26は2728定められて〔〇でカ〕、29八月十三日に聟取り給ふ。中將達心にもあらで聟取られ給ひぬ。十五夜の夜三日に當るに、その夜內裏より大將

校異 1 国今。2 国のアリ。3 不ナシ。4 不に。5 不一。6 不はアリ。7 国三。8 国四。9 不に。10 不ナシ。11 不まで。12 国殊にアリ。13 不ら。14 因考異く。15 不て歟。16 不二字ナシ、国たるら。17 不聞え。18 因と、不はんかた歟。19 國イく歟。20 不て。21 因彼所。22 因のアリ。23 不を。24 不を。25 国錦。26 因ばへ。27 不えアリ。28 不きた。29 國イ廿字ナシ。

殿に、「その1こけ達率て參れ」とあり。驚き給ひて、宰相中將達上達部皇2(子)達引き3て參り給ふ。御前にある限り侍ひ給ふ。皆御物語りして御遊びなどし給ふ程に、内侍のかむの殿より、宰相中將の小さくより習ひ、内侍のかみに俊蔭も習はし4くほそを5、「6とめに候7われたる手やある」とて率れ給へり。右大將殿取り次ぎて、「里よりかくなむ」とて取らせ給ふ。仲忠、「げに留むべくこそ侍りけ8り」とは聞ゆるものから賜はりぬ。かくて涼の宰相の許に、彌行が唐土より持て渡りたるなん風9やうの琴10十三千11と言ひて、12はし風と等しき琴あり。それを紀伊守の北13方里より種松を使にて、「忘れ給ひにた14くめど、今宵は思し出づや」とて15なん奉16れた17り。左衞門18督19君20と引きて、「里よりかくなん」とて21奉り給ふ。「涼にや、かゝる物侍りけ22り事をさへ忘れ侍りにけるかな」とて賜はる。それより初めて、上まで御唱歌して、帝「遲しや」と宣ふ。涼仲忠久しくありて、から心留めて仕うまつ23るしをのなお風は、おどろ24かし25く26父大臣して、今宵のほ27うを風は高くいかめしく、響き靜かに澄める28音出で來て哀に聞え、細き聲、清涼殿の淸く涼しき十五夜の月隈なく明きに、小夜更け方に面白く靜に仕うまつる。帝より初め奉りて、涙落

〔校異〕1 〔不〕婿君。2 一字〔不〕ニヨリテ補フ。3 〔関〕率アリ。4 〔不〕し、〔國〕イヘし。5 〔国〕風をアリ。6 〔国〕忘れし、〔関〕留め。7 〔不〕は。8 〔関〕れ。9 〔関〕の樣。10 〔関〕に。11 〔関〕年アリ。12 〔関〕考異四字ナシ。13 〔関〕のアリ。14 〔不〕ら。15 〔関〕考異二字ナシ。16 〔関〕らアリ。17 〔関〕る。18 〔関〕のアリ。19 〔関〕のアリ。20 〔関〕取り次ぎ。21 〔関〕考異參らせ。22 〔関〕そ。23 〔不〕るしせ、〔国〕りしか、〔関〕るしか。24 〔国〕〳〵。25 〔國〕て。26 三字〔国〕ちくたい、〔不〕ちゝ大、〔関〕たい〳〵、〔関〕考異父大將。27 〔不〕そ。28 〔不〕音。

さぬ1人なし。上「今宵は何と言ふ例をも求めじ」と宣ひて、仲忠の宰相に御土器賜は2わすとて3賜はす、

撫で生す松の林に今宵より千世をば見せよ田鶴の村鳥

仲忠、

松蔭に並み居る田鶴の村鳥も4よくを5ば誰と思ふものぞは

左大將取り給ひて、涼の宰相6參り給7ひて、

住の江の數にもあらぬ姫松を雲井に遊ぶ田鶴如何に見8ぬ

宰相、

永き世を讓る9松こそ數知られ岸の松をばいかゞ數10えぬ

右大將、

蘆原の田鶴の數とも見ぬ物を雲井近くも隱のするかな

とて式部卿11宮12參り給ふ。

結びつる岩根の松は年を經て涼しくのみも思13ひ入るかな

左大臣、

校異 1因考異ナシ。2不は。3不宣。4不世々。5不經たれ。6国にアリ。7因ふと。8不ん。9因田鶴。10因へ。11国のアリ。12不にアリ。13不ほゆ。

姫松をねたく見るらむ芦田鶴1の己が齢におひ〔〇老カ、生ひカ〕やますとて

右大臣、

齋ふめる田鶴の卵は今宵より孵る〳〵や千世をますらむ

兵部卿の皇子、

なよ竹の茂れる宿にまどゐしてたゞ世に2添へむ數は知3るやは

民部卿、

諸共に千世をぞ數多數へつる磯なる龜もかたく見るまで

など宣ひて、御遊びし給ふ程に夜いたう更けぬ。帝、「かく此所に御文あるとも知らで、4里より待ち遠なる心地せらるらむものを、その罷代には悦をしてよ」と宣ひて、左大臣5は6太政7大臣に、右大臣は左大臣に、8右大9臣10左大將11、大納言に12（13は左衛門14督、中納言に15は涼仲忠、權中納言には）忠純、左大辨に師純、宰相に輔純、宰相中將に行正16となされぬ。九人し給へる喜び、七人17は連ね18て右大臣殿に能出給ひぬ。19藤中納言先づ20左大將21主に喜び申し給ひに、二條22大路より三條殿に分れ給ふ。左右の大臣

校異 1〔イ〕は。2〔因〕考異うづ。3〔イ〕るやと、〔因〕りきや。4〔國〕イさも。5〔國〕殿アリ。6〔因〕太。7〔因〕大。8下六字〔國〕イナシ。9〔イ〕將。10〔イ〕にはアリ、〔国〕にアリ。11〔イ〕左大將には右大將アリ。12以下十九字〔イ〕ニヨリテ補フ。13〔國〕イナシ。14〔因〕のアリ。15〔因〕ナシ。16〔國〕イに。17〔國〕な。18〔國〕イに。19〔因〕考異かくて。20〔国〕右。21〔国〕のアリ。22〔イ〕のアリ。

より初めて、御車静かに促し留めて1侍給ふ程2に、父大殿罷出給ひて、今宵の事など聞え給ふ程に、中納言拝し奉り給ふ。父大殿「何か更に」など宣ふ。中納言「思はずにかゝる喜びの侍るをなむ」大殿「そがいと嬉しき事」など申し給ふ。中納言「侍はむとする3、これかれ車留められたればなむ」とて、急ぎて出で給ふに、内侍のかむの4殿嬉しきに5え先づ悲しく6思さるれば、大殿にかく聞え給ふ、

身を棄つと思ひし物を岩の上の松の種ともなりにけるかな

7大殿、

「思ひ出でゝ8小高き松を見る時は身を棄てたるも嬉しかりけ9る

いみじく思10ほえしも11今日なん慰みぬる」と聞え給ふ。

〔書詞〕12(此所は)13左大將殿。大殿督の君物語りし給ふ。おとな三十人許り侍ふ。か14へて藤中納言待ちつけて、大殿に七所ながら連ねて參り給ひぬ。かくて北15方の御殿の東面に宮の御前に並み立ちて16拜み奉り給ふ。宮「いと畏し」と聞え給ふ。大殿達「今日の喜びは此方にのみなん聞えさすべき」とて、皆入り給ひぬ。藤中納言源中納言けう〔〇興カ、饗カ〕の方にて物參り初む。誰も〳〵また見え給はず。御膳參りたる儀式淸らに艷きたり。17藤中納言18靱負の君を御使にて「只今なん罷出つる。喜び

校異 1 不待ち。2 不ナシ。3 国をアリ。4 不君。5 不も。6 國忠は。7 不二字ナシ。8 不木。9 図り。10 國ふは。11 國けに。12 三字国ニヨリテ補フ。13 国右。14 不く。15 国ナシ。16 不拜し。17 図かくてアリ。18 図はアリ。

なども聞えてしがな。渡り給ひぬべしや」など聞え給へり。宮「喜びは此所にも嬉しくなん。只今惱ましくて」など聞え給へり。中納言「常にかくのみ宣はせんずらむな」とて1太政大臣の御大饗の所に、左右の大臣より初めて參り給ひぬ。翌る日殿にて左2右の大臣大饗し給ふ。主の大殿もし給ふ。面白くいかめしき事言ふばかりなし。かゝる程に、藤中納言は左衞門督非違の別當兼け、源中納言3は左衞門督兼けつ。4藤中納言は中の大殿に住み給ふ。帝殿の御いたはりにて豐かにて5つた6さふ（〇經給ふ）。源中納言は異町面7かしむく〳〵なり、綾錦して造り磨きて、七つの寶を山と積み8、上中下花のごと飾りて、あるが中に勢ひて住み給ふ。

かくて9二16宮も11樣こそ君も、御容貌もし給ふわざもあて宮に殊に劣り給はず、目出たく淸らに、誰も〳〵御心ざし12けか（〇深）く目出たきものから、なほかの中納言達いかめしくもてかしづき、常の13い立ちていたはり、年に二度三度の司召に成り上り給へども、宮の君におろかに思されぬ14る事、世にあらん限りは異心なく心ざしをだに見え奉らんと思ひ15つる物をと、思ひ歎く事限りなし。そが中にも、藤中納言は參り給はざりし時にも人よりは答へ宣ひ、宮にても時々聞えさせなどせしを思ひつゝ、心魂もなく16歎く、事限り

校異 1 因太政大臣。2 因ナシ。3 因考異ナシ。4 因考異かくてアリ。5 因へ。6 因ま。7 因西向なり、国に金銀瑠璃。8 因考異上げアリ。9 因一。10 国のアリ。11 国今、國イさう。12 因ふ。13 国ゐ。14 國イナシ。15 因け。16 國イなつ。

なくて、一1宮とも時々事のついでにかの御事を聞ゆる程に、宮の君の御2許より、一3宮にかく聞え給へり、「久しくなり4ければなん。日頃5の物騒がしく思すらんに、靜かにと思ひ給へつる程になん今までになりにけ6り。

筑波根の峯7までかゝる白雲を8君9しも餘所に見るは何な10る

かの物懲せし夕暮こそ思ほゆれ。」など聞え給へり。宮見給ひて打ち笑ひ給11ひて、中納言「何事ならん。見給へばや」と聞え給ふ。「あらずや」とて見せ給はず。手を摺る〳〵聞え取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしく思ふ事昔に劣らず、思12はりて物も言はず。宮をかしと思は13えて、御返聞え給ふ、「日頃はげに覺束なきまでなりにける事をなん。いでや筑波根は蔭あれどもとなん見ゆる。」とて、

峯高み夢にもかくは白雲を今も谷なるものとこそ見れ

と聞え給ふ。中納言「かの御方に物聞えし限り、魂の靜まる時なか14りしうちに、いみじき秋の夕暮こそ有りしか。ほのかに見奉りしかば、靜心なく思ほえしかば、近くだにとて15參り來りし夕暮に、月見給16へとて御琴遊ばししに、17死に入りて身18の徒らにな19らむ事思ほえず。片時世に經べき心地もせで、せぬわざ

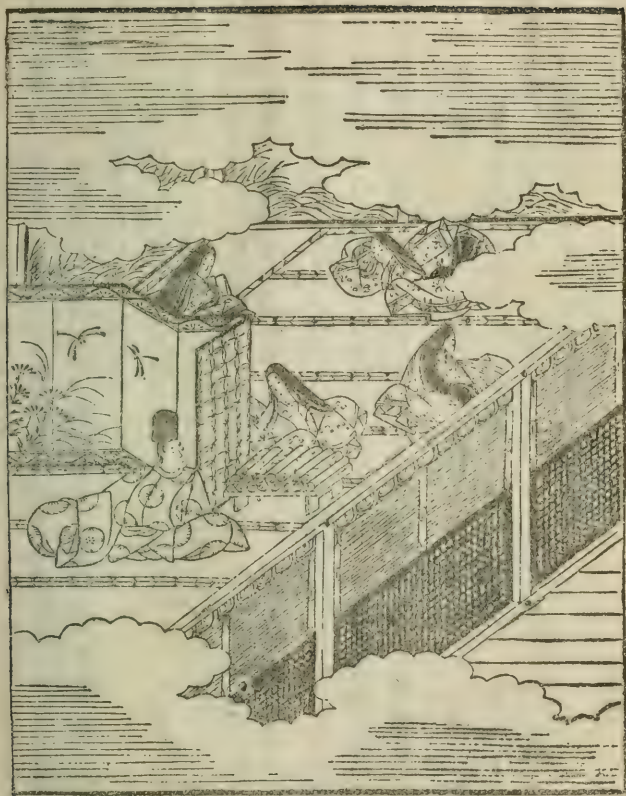
校異1 因のアリ。2 國イかど。3 因のアリ。4 団にアリ。5 団ナシ。6 國イる與。7 國イこそ。8 団消え。9 國イて。10 団り。11 団ふ。12 団ひ入。13 団し。14 國イめ。15 國イ二字ナシ。16 団ふ。16 団二字ナシ。18 因ナシ。19 団りな。

1くしつべき心地こそせしか。今まで生きてめ2つらひ、さる過失せずなりにけるは、かくても侍ふべきにこそありけれ」宮「難しと言ふやうにもはた」中納言「この胸3せにと云ふ心地なん」とて「昔だに人惑はし給ひし御琴如何4なりにたるらむ」5宮「手調への琴を手まさぐりに搔き鳴らししを、人聞きけりとて、それよりかの君も此所に6もせずなりにしかば、7其方に8忘れなん9し10にける」と宣へば、中納言打ち笑ひ11給ひて「仲忠心地惑はすばかりは遊ばすなりしを、誰に恥ぢ給ふにかあ12りけん。琴の御琴は嵯峨の院の御子日にだに、春日にて遊ば13ずなりし14かば、こよなく勝りたりしを、まして今は如何なら15む。いでや16有り難くこそおはすれ。宮もさ思ほし、また人は侍ふとも思したらず、打ち延へ參う上り給ふを、されば17二18宮一19宮など參り給ふ時は、晝より20暮まで、早朝21夜晝までおはしませば、たゞ一所侍ひ給ふやうに22なり23こそあめれ。かゝればこそ萬のよき人徒らになりぬれ」など語り給24ふ。かゝる程に、内裏より一25宮の御許に26か、藏人の式部丞を御使にて、長櫃の唐櫃一具に、内藏寮の呉服、唐の27こふく「朝服」綾錦28へいれ29うきふ練の羅、よき齎ども入れて、御文にかう聞え給へり。「この度の唐30もはよ

校異 1〔イ〕わざ、〔国〕なく。2〔イ〕ぐ。3〔イ〕げ。4〔イ〕にアリ。5〔イ〕琴の。6〔イ〕物。7〔イ〕それだ。8國イなんアリ。9〔イ〕とアリ。10〔イ〕ナシ。11〔因〕二字ナシ。12〔因〕考異ら。13〔因〕せ。14〔イ〕には、〔因〕よりは。15〔イ〕し。16〔国〕二字ナシ。17〔因〕一。18〔国〕のアリ。19〔イ〕條。20〔イ〕暮るゝ。21〔イ〕より賦、〔因〕より。22〔イ〕二字ナシ。23國イにアリ。24國イひけ。25〔国〕のアリ。26〔イ〕ナシ。27〔イ〕う。28國入。29〔国〕浮文。30〔国〕の、〔因〕物。

うもあらずなむありける。1我が事の朝服には敢へぬべしやとてなむ。」とあり。宮御使の藏人に女の裝束一具かづけ給ひて、御返し、「畏まりて2給ぬ。かゝる朝服は賜はるべき人なん侍らざりける3。」と聞え給ふ程に、右の大臣渡り給ひて、中納言4を「如何にぞや。御旅住は如何に便なく思さるらむ。居ず5さひ6がらと言ふやうに7」「かく宣はするはいとかし8」9

【原詞】10これは右の大殿の中の大殿11に組み12れて、内に13てう〔○帳〕立てたり。此所14に大臣二所居給へり。中納言三所、宰相左大辨七所連ねて15渡りて、大宮16拜み奉り給ふ。中納言白き17大袿一襲、宰相に搔練一襲、殿上人打ちかづきて居給へり。宮18あこ君御文奉り19、中納言手を摺りて請ひ取りたり。おとな三十人ばかり、蒙唐衣著20て、髫髮八人汗衫表の袴著たり。御臺四具、金の御器して物參る。御賄 宰相の君。21隅22は大饗の所。南の御殿しつらはれて、幄打ちわたしたり。これは蒲純の宰相中將、かづけ物は大いなる箱に入れて持て出で給へり。これは一23宮の御方。中納言物し給へり〔へ〕物宣へりカ」。言ふばかりなく24誰もく清らなり。宮の御同胞の御子、四所ながら直衣奉りておはしま

【校異】1国わざと、因考異我が事。2国承り。3団をアリ。4因に。5団ま。6団なアリ。7因や、谷アリ。8団こしアリ。9因など御物語りし給ふアリ。10国此所。11因ナシ。12因入アリ、因考異戸入アリ。13団丁、因帳。14国は。15國イ三字ナシ。16因をアリ。17國イおほまちき。18国ちご。19団給へりアリ。20國イナシ。21団輔純、因是。22団の。23因のアリ。24國イこれ。

したり。宰相に左大辨對面し給へり。右近1君などして御2て3ら(〇帳)に入れ奉る。一4宮を女御大宮などして出だし奉り給へり。中納言喜びておは5す。6上達部皆おはします。左右の大臣見比べて、御階上り給ふ。大納言中納言宰相まで參り給ふ。辨少納言外記者き並みたり。御前毎にいかめしう物參りたり。下對の7幄の前に8牛坂9 10東絹よき絹など積みて下に著き給へり。11(此所は)三の皇子四五六の皇子、若宮に中納言御裝束して對12面し給へり。皇子と中納言と碁打ち給へり。四の皇子13箏の琴調べて一宮に奉り給へば、宮「14箏の琴15 16忌れ17わた18るや」など宣ふ。19御琴どもあり。

かくて今は私の御事20をし給はむと、方々劣らずしつら21はれて、御調度、仕う22さへり人、劣らず設けられて、宮大殿に申し給ふ「思23(ひ)心ざしたる人24この心ゆかず見え給ふを、如何ならん」「なほかの切に物せし人25この、彼所の聞26え給はむに、何のよき事27し言はじとにこそあらめ。この中納言達も、聞さげにも思はざりしかど、今はさもあらざめり。消息をせ28うせん。29まで源宰相をなん其の頃忘れまじう聞ゆる。御文にて宣へ」とて、兵部卿の宮30御使に兵衛佐31君、32大將33に宰相中31納言、平中納言殿に35右衛

〔校註〕1国のアリ。2下二字国ちやう。3一字イう。4因のアリ。5因考異しまアリ。6因考異九字ナシ。7國脚。8イなかとに。9国にアリ。10イ集り來ぬ。11三字因ニヨリテ補フ。12因面。13イ箏。14イ箏。15因はアリ。16イ忘。17イに。18因り。19イ御前にアリ。20因どもアリ。21イひ。22イまつ。23一字イニヨリテ補フ。24因々。25イ入。26イき。27イと。28イさ、國イき。29イさ。30因へのアリ。31因のアリ。32イ右アリ、イ左アリ。33イ殿アリ。34国將君、因將の君。35イ左。

門1大輔、源宰相殿に2左衛門3佐を奉り給ふ。御消息大將殿に、「聞えさせにくき事なれど、思ふ心侍りて、これかれおはしまさする事なん侍るを、かくなんと聞えさするは如何あらん。」となむ聞え給ふ。源宰相に文書き給ふ、「覺束なき程になりにければなん、聞えにくけれど、なほ聞えよとあればなむ。先つ頃、この邊に宣ふ事ありけるを、承らざりける中に、此所に物せられし人は、身に添へて後見せさせんと思ひ給へし程に、宮より宣はせければなん參りにけるを、同じやうに宣しからぬ人侍4るめる5と、6如何せむ7を聞えよとなん。」とて奉8れ給へるを見給ひて、宰相涙をこぼして、とばかり物も宣はず。右衛門9佐事のあるやうを委しく聞え給ふ。源宰相10からくためらひて「今はか11く12によ13う(〇不用カ、餘所カ)の人になりて、宮仕へもせず、癡り歩きもせで、尋ね14呼ばせ給ふ人もなければ、誰々も對面賜はる事難く。世15中を覺束なく思16(17ふ)給ふるに、かく對面賜はり、殿の御消息を承るにも、まづ懷し18きなん。昔何の契りかおはしましけん、宮の御方に聞19(え)初めてしより、老の世20とまた21なしと思22(ひ)し人、あはれと思23(ひ)し24子のなりに25けむ方も知らず、魂の靜まる時なく思26(27ひ)給28へ入數さし程に、參り給ひにしか

校異 1 因太夫。2 因右。3 因のアリ。4 國りけ。5 囨を。6 国如何に。7 国と。8 囨り。9 因のアリ。10 囨久し、国とか。11 因考異う。12 国不、因考異ナシ。13 囨そ。14 囨訪は。15 因のアリ。16 一字囨ニヨリテ補フ。17 因ひ。18 囨く。19 一字囨ニヨリテ補フ。20 囨に。21 国悲。22 一字囨ニヨリテ補フ。23 一字囨ニヨリテ補フ。24 囨此の中、國子の何。25 囨せ。26 一字囨ニヨリテ補フ。27 国ふ。28 囨へ。

ば、世の中は限り1て思2(ひ)て、すべき方も覺えざりしかば、かゝる山里に籠り籠りて、年頃親の御顔も見奉る事難3し、世の中の事他所に承りつゝ、御喜びとかやもえ取り申さず、只今籠り隱れなん事を今日や今やと思4(5ふ)給ふるに、いともかしこく宣はせたるを、いでや實た6え(○忠)徒ら人にて侍る、かの御方聞し召して7侍らん8や、あはれと宣はせぬこそいみじくつらけれ」とて、伏し輾び泣き惑ひつゝ、宮の御返聞え給ふ。「げに覺束なき程になり侍りけるを、畏まりて聞えさする9に、いとも畏き10おほ言は、畏まりて承りぬるを、年頃如何に11侍るにか侍らむ、世の中に侍らんとも思12(ひ)給はぬを、怪しく今までめ13つらひ侍れ14ことも、15こんなほ侍るまじく思16(ひ)給へらるれば、御かづけらるべき程なかるべきをなむ返すがへす畏まり聞えさする。いでや、さても、

消え返り染め來し物を同じ野の花に置く17(と)も何か見ゆべき

あなかしこ、昔はさる心もや侍りけむ18な。」(ホノママ)となん。御使には土器度々參り、御物語りなどして、綾搔練の袿、赤色の唐衣具したる女の裝束一19重か20つゞく、

君ならで誰にか見せんくれなゐ21に我が染めわたる袖の色をば

校異 1 〔不〕と。2 一字〔不〕ニヨリテ補フ。3 〔不〕く。4 一字〔不〕ニヨリテ補フ。5 〔因〕ら。6 〔不〕だ。7 〔因〕やアリ。8 〔因〕ナシ。9 〔國〕より。10 〔不〕御、〔不〕仰せ。11 〔不〕四字ナシ。12 一字〔不〕ニヨリテ補フ。13 〔不〕ぐ。14 〔不〕ども、〔因〕ど。15 〔不〕え。16 一字〔不〕ニヨリテ補フ。17 一字〔不〕ニヨリテ補フ。18 〔国〕ナシ。19 〔因〕具。20 〔不〕づく、〔因〕づけて。21 〔不〕の。

と書き付け1てかづく。2左衛門3佐、

薄く濃く染むべき色をいかでかは人の思4(ひ)の導(しるべ)ともせむ

とて歸り給ひぬ。

[詞]これは源宰相、5なのこの6鰥(やもめ)にて、7男(をとこ)の8わら9(は)(〇童)使ひて居給へり。音羽(おとは)川前より流れて、前賷く前栽(せんざい)面白く、山近く木(こ)の葉10繁(しげ)11れ12に色付きて、草の花盛りにて面白きを眺めて13見る。14左衛門15佐花の枝に文付けて宰相に奉り給へり。擴げて見て思ひ入りて居給へり。物語りして物かづく。

か16くて、御使の君達一度(ど)に歸り給へり。皆女の裝束(さうぞく)一具(くだり)づゝかづき給へり。御消息(せうそこ)兵部卿17宮より18は、「年頃思19(ひ)20とする事有りて、山林(はやし)21にも22家と住みぬべき心地すれど、か23く宜はする畏さ24はなん思ひ給25へ靜まりて承りぬ26。」27と聞え28給ふ29。「30き31(こ)(〇聞)えさせし事のかひなくなりにしより、

[校異]1因給へり。2因右。3因のアリ。4一字[イ]ニヨリテ補フ。5[イ]小野殿に、因男(をのこ)の、国此の殿。6國イにアリ。7因考異小野殿に。8[イ]子アリ。9一字[イ]ニヨリテ補フ。10下二字[イ]時雨。11一字[イ]ナシ。12[イ]り。13[イ]居給へる、国居る、因居給へり。14因右。15因のアリ。16國イらに。17因のアリ。18國イナシ。19一字[イ]ニヨリテ補フ。20[イ]居躬(く)。21国を。22[イ]二字ナシ。23國イの。24[イ]に。25國イひ。26因るアリ。27下五字[イ]ナシ。28國イ二字ナシ。29因左衛門佐源宰相の御文奉り給ふアリ。30下三字國イナシ。31一字[イ]ニヨリテ補フ。

魂靜まる時なく思1るま2くる〔○惑ひ〕歎きて、かゝる心なん忘れ3にて侍る。いともかたじけなく、かくまでも宣はする事なむ返す〴〵畏まり聞えさする」と聞え給へり。4左衛門5佐宰相の御文奉り給ふ。宮見給ひて大殿に見せ奉り給ふ。「是も否とにこそあなれ。怪しの主達6」宰相中將「右大將の申し給へることは、まだかの小く物し給ひしより、さる心7ありて聞えさせしを、參り給ひて程もなく、さる心ありと聞き給はむは、いと8をかしかるべき。誰9〳〵10も世に經給はむ限り、御心ざしをだに失はであらんとなむ宣へる」11左衛門12佐「源宰相はかく13賜へるなん。14殿造り有樣15住み給へるに、涙惜しまず16なん侍りつる、さばかり目出たかりし人の、その人にもあらで」申し給へる事ども、片端より聞え給ふ。大殿宮より初め奉りて、そこばくの君達涙落し給はぬなし。大殿「いとほしき事かな。あたら人を。太政大臣もさやうにや思すらん。實忠顧み17かと18暫し宣19(へ)ば、かく物するを如何はせ20ぬ。この代りには季英の右大辨を物せん。かの人21見たる所あれば、22中納言宰相にもなりぬべき人なり。右大將の御代りには23頭中將を物せむ。宰相24の中將に消息せよや、25と26少し離ちてむ」など宣ふ。大宮源宰相の御返事27賜ふ。

〔校異〕1 [イ]ひ。2 [イ]どひ。3 [イ]ナシ。4 [因]右。5 [因]のアリ。6 [因]かなアリ。7 [イ]ざしアリ。8 [イ]ほ。9 [イ]もアリ。10 [イ]ナシ。11 [因]右。12 [因]のアリ。13 [イ]宣。14 [国]と作り、[因]考異三字ナシ。15 [イ]を見。16 [國]イ二字ナシ。17 [イ]よ。18 [国]しば〳〵。19 一字[イ]ニヨリテ補フ。20 [イ]ん。21 [國]イ亂り。22 [イ]ナシ。23 [国]良。24 [因]ナシ。25 [因]今、[國]ナシ。26 [イ]涼。27 [因]聞え給ふ。

「[國]露の中にも已と見えしかば同じ枝にと思ふばかりぞ
あはれに1承りしかば、忘れ聞えさせぬぞや。」など聞え給2ふ。か3へて、あなたの十4君5平中納言6に、7十8一君をば9息中將行正に、10こなたの十二11君をば兵部卿12 13宮に十14三15君16げす宮をば右大辨季英17と、八月廿八日に婚せつ。三日の夜四と18よつ〔〇所〕ながら對面し給ひて、御前ごとにかづけ物例に劣らず、豐かに勢ひたり。19右大辨兼け司20を右近少將、式部21 22省、文章博士、春宮の學士、內裏東宮院の殿上23聽されたり。親の時より敵ありと申すによりて、少將は兼けさせ給へるなり。身のさ24く〔〇才〕た25く〔〇只〕今類なし。宮より罷出させて、
26大學の27生28三十人許り、よき人の子供29に學生ども十人許り、文など30讀む。辨の君31の年四十、一いと32淸げにて目出たし。〔〇以上四十六字畫詞カ〕
人に文讀ませせなどする程に、秀才四人參33り、主物語りなどして、「如何に、宣旨下りにた34りや。何時か出

[校異]1國イかけ給は。2下二字[イ]ナシ、一字[図]考異ひて、〔〇下三字、ひカ〕。3[イ]く。4[国]一アリ、[図]一のアリ。5[イ]はアリ、[国]を兵部卿の宮に十二の君をばアリ。6[図]殿アリ。7[国]こなたのアリ。8[国]三の。9[イ]頭。10以下十四字[国]ナシ。11[イ]のアリ。12國のアリ。13一字國イナシ。14[国]四の。15國のアリ。16[図]三字ナシ。17國イに鯛。18[国]ころ。19[国]藤英季英はアリ、[図]藤英はアリ。20[図]ナシ。21[図]のアリ。22[イ]参。23[図]をアリ。24[イ]え。25[イ]だ。26以下四十六字[図]ナシ。27一字[イ]案。28一字國四。29一字[図]考異の。30一字[図]考異誤。31一字[図]考異ナシ。32國どアリ。33[イ]れアリ。34國イる。

で立ち給はむと1（する）」2秀才、宣旨は承りにき。この頃出でゝ罷りなんと思ひ給ふるに」「げにとく出給ひなんこそよからめ」「それを、此の頃暇なんなき。3詩句の事4をも添へなど仰せらるゝに」「この史記の講書も今まで仕うまつり侍5從など仰せらるなりつれば、先づかの講書の事果てゝなん三郎の上の事は物すべき」など宣ふ。忠6時大學の丞にて參うでたり。辨の主、「など久しく7見せくわんをせしめ給はぬ事をたん季ふ8へ〔〇英〕歎き9とは10つ〔〇侍〕る」大學の11丞「そがいと12と口惜しく侍る事。昨日今日の人の、そくばく出で立ちぬる13と、忠遠が今まで侍る事」辨、「そがいとほしき事をなん、この頃はく14ち〔〇藏〕人のあきため15何に、それにいかでと思ひ給へて、一日大殿に取り申ししかば、相16勞らむと思ふ心やあると仰せられしに、あるやうを委しく申ししかば、今17奏せん18などなむ仰せられし19。今又〳〵取り申さむ。眞實なる事20ならば成りもし給ひなん」「その宮仕へもふかう〔〇不行カ、不楽カ〕にては難げになんあめる」「21それはな思ほし22う。仕うまつらむ。季英23が主の御返り〔〇頗〕み24おはす〔〇忘〕れ奉るべきかな。公事25そう26〳〵にして、しば〳〵取り申さねば、疎なるやうになん」大學の丞「甚だ畏し。いとも嬉しく、かくまで取り申し給ひける事。忠遠公に捨てられ奉りたる身一27（つ）をばさるものにて、老いたる親、小

校異 1二字囯ニヨリテ補フ。2囯二字ナシ。3囯史記。4囯折り。5囯らず。6囯深。7因見參。8囯さ。9囯ナシ、囯て。10囯べ。11因丞。12國イも。13囯に。14囯ら。15囯る。16國傳は。17國イナシ。18囯と。19國にアリ。20國イは。21國イう。22囯そ。23囯ナシ、囯の。24囯ネわ。25國さ。26因しく、因考異〳〵し。27一字囯ニヨリテ補フ。

き1妻子の泣き悲しぶを見給ふる2なん紅の涙流れて悲しく侍る」辨の君「しかあるものなり。身の沈む事悲しき事は、季英より他に3知る人なし。4左殿に謀り物せん。5そもそも京に年頃物し給ひて、せいとの方6人は如何せしめ給ふ。今年の7位祿近江なん賜はり侍る。8また9ともに遣は10さず。11〔か〕み〔○守〕の12ともに消息物せん。13ともに遣はして、よう〔○用カ、要カ〕ぜしめ給へ」大學の丞「甚だ畏し。殿にもきうよう〔○急用カ〕物せしめ給ふらむ。如何でか」など言ふ。「季英殊に顧みるべき者給は14ず。身一つはかくて侍れば、私の要殊になし」とて、文書き添へて、15韻作り酒飲み16して、暁に歸る17も、綾か18は〔○掻〕練の袿一襲、給の袴添へて、かづけて返す。か19へて大殿に切に申して、く20ち〔○藏〕人になして、喜ぶ事限りなし。藏人の裝束一具取らせ21、萬の事勞は22らる。

かくて、あて宮に聞え給23ふ人々、皆殿に住ませ給ひて參り給ふ、源少將如何に思ふらんなど思して、法服綾襲二24調じて、宮あこ君に裝束目出たく25て、衣の裳にかく26て27いひ付く、

むすぶ人待つ元結は28たゝぬれど剃刀をだにあら29せざらめや30

校異　1因子妻。2因にアリ。3団はアリ。4国大、因さ。5國か、若し。6団へ。7団いろいろ、國イいろいろ。8因まだ。9因取り。10団す。11一字団ニヨリテ補フ。12団もと。13因取り。14団らアリ。15因祭。16因などアリ。17国に。18国は。19団く。20団ら。21因てアリ。22因ナシ。23団ひし、団ふに。24因つアリ。25団ナシ。26団書きアリ。27団結。28団絶え。29國ナシ。30國はアリ。

源少將涙を流してから聞ゆ。

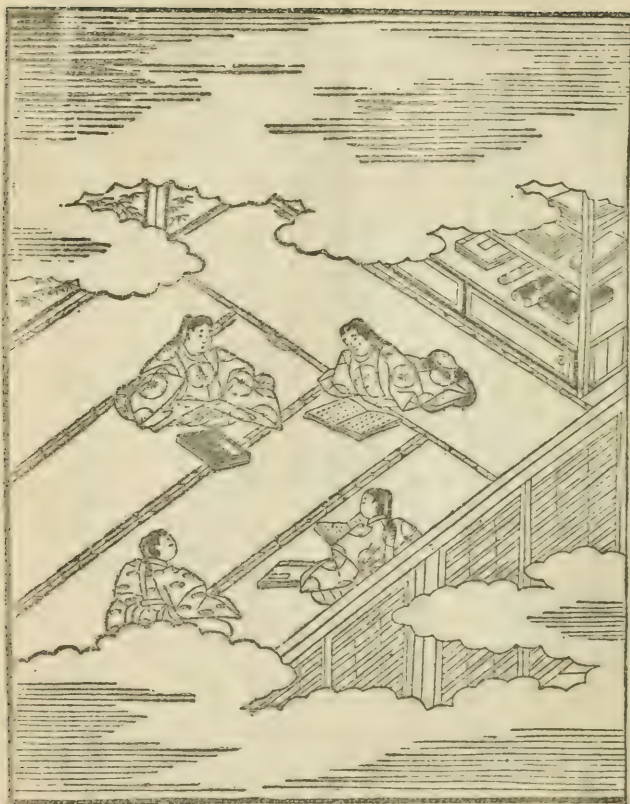
元結の朽ちし涙は變らねど今日剃1（刀）を得るが嬉し2き（本ノママ）

など聞えたり。皆御方々調ひて住み給ふ。御私の殿も賑く面白く、御調度財寶を、納め3かり4持ち給へらぬ5人なし。一條殿より南、四條より北、壬生二條より東、京極より西は他人の家なし。殿の御族の殿ばら混りもなくあり。藤中納言6左大辨7まだ8私の家なし。たゞ大殿に集ひて住み給ふ。

[畫詞] 9かくて東の町。大宮三條面中の御殿、一宮の御方。宮御年十七、中納言年廿六。遊び給へる10大殿女、玉光り輝くやうなり。御裳11立てて物參る。宮琴彈き給ふ。中納言打ち笑ひて、「情なくも遊ばすかな」宮、「文屋ほとりとか言ふなる」と宣へり。12妊じ給へり。東の御殿、13春宮の御方、御子達二所。14おと御子一所は立ちて歩き給ふ。15乳母三人。16と一所は這17い給18（ふ）。御年19 20このと同じ數なり。21這ひ給ふ。大人、童多かり。南の御殿、元のごと女御22君の御方なり。北の御殿、宮大殿住み給ふ。東南の町。東の御殿、23式部卿の宮の御方なり。西の御殿、兵部卿24宮の御方。宮廿七、

[校異] 1一字[イ]ニヨリテ補フ。2[イ]さ。3[イ]殿に、國イ二字ナシ。4國イ二字ナシ。5[イ]物。6[国]右、7[図]はアリ。8國イ渡り。9[国]此所は。10[図]男。11國イ出で。12[図]孕み。13國イ東。14[イ]男。15[図]御年三つアリ。16[イ]今。17[イ]ひ。18一字[イ]ニヨリテ補フ。19[図]二つアリ。20[イ]三字ナシ。[国]これと、[図]乳母。21[イ]四字ナシ。22[イ]のアリ。23[国]民。24[図]のアリ。

1君十2六3物4し給へり。御達廿人、童下仕數多あり。5北東の御殿、6左大臣殿の御方。西南藤大納言の御方。西北の對7源8大納言殿の御方。9さま宮十四、中納言廿10六。一所物語りし給へり。御達いと多かり。紀伊守參りて、廊の簀子に居11たり。中納言の君會ひ給へり。衣綿12唐櫃に積みて奉りたり。あなたの君達住み給ふ13も西南の町、中務の宮の御方。西の隅平中納言14の御方。15（東の對宰相の御方、16中17西の隅18 19源中將の御方）。20西21北の隅22良中將の方。東の中23の隅24達25も26おはす。御達廿27四人、童下仕いと多かり。是28左大辨の殿の御方。君達もこの町に集ひて住み給29ひし。30西北の町、右大辨の殿の御方。御帳立てゝ、31几帳屛風新らし32、萬の調度淸らなり。御衣掛33て色々の御34衣掛けたり。臺一具して、35主36に物參れり。北の方黃金の御器にて參りたり。年十37五。御達いと多かり。師子立てゝ文讀む。殿ばら宮ばらの君達集ひて讀み給ふ。辨の主宮より罷出たり。裝束淸らなり。東淸38へらな39る男とも四十人許り御供なり。大學40 41殿も42下りてひざまづき43居り。

〔校異〕1〔イ〕女アリ。2〔図〕五。3〔国〕にアリ。4〔図〕宣。5〔図〕イナシ。6〔国〕太政大臣、7〔イ〕はアリ。8〔イ〕中。9〔図〕今。10〔国〕四。11〔図〕考異給へ。12〔イ〕ナシ。13〔図〕は。14〔イ〕證アリ。15十九字〔イ〕ニヨリテ補フ。16〔国〕なり、〔図〕ナシ、17〔図〕東。18下六字〔国〕ナシ。19一字〔図〕良。20以下九字〔図〕ナシ。21一字〔国〕ナシ。22一字〔イ〕頭。23〔図〕は。24〔イ〕君アリ、〔国〕にも君アリ。25〔国〕ナシ。26〔図〕住み給はず。27〔イ〕余。28〔イ〕はアリ。29〔イ〕ふ、〔図〕へり。30〔図〕イナシ。31〔図〕二字ナシ。32〔図〕くアリ。33〔イ〕に。34〔イ〕衣。35〔イ〕辨のアリ。36〔イ〕ナシ。37〔国〕二。38三字〔イ〕ニヨリテ補フ。39〔図〕り。40〔図〕のアリ。41〔イ〕允、〔国〕案、〔図〕丞。42〔図〕な。43〔図〕イ二字ナシ。

辨の主人々に片端より文讀ませ給1はり離すみ物いと多かり。秀2う〔○才〕ども多にありて文讀む。3十九才菅原の4別足、大學に色々の文取らす。此所5に辨の主人り給ひて、北の方6と物聞え7參る。「今日宮に參りたりつれば、兵衛の君して御消息賜はせたりつる8 9かな10む、命あればかゝる折にも遇ふものになん」とて、大學に參り給ふ。これは女御の君の御腹の四の皇子の御方。北の方には、左大臣殿の11太輔、異12御腹の御13年十六。14一人男15、16又17六の宮の御方。北の方には民部卿殿の大君年十四、18姫じ給へり。三19宮御妻なし。20八の宮いまだ童。これは權中納言。北の方は一世の源氏年廿八。君達四所。一所は女三所は男。太郎君年十四、次郎男十三。21御賀の舞し給ひし。左大辨22北の方23に平中納言殿の中の君年廿六、男子の限り五人。宰相中將の御方、24北の方25その御26兔源氏年廿三、子27あり。28兵衛29佐の御方近江守の女30の女31年十五、孕なし。左衛門32大夫の御方33兵部卿34〔○宮35の女年十五、孕み給へり。36式部卿〕37大夫38の39學士の女年廿二、子40三人。宮あこ君まだ

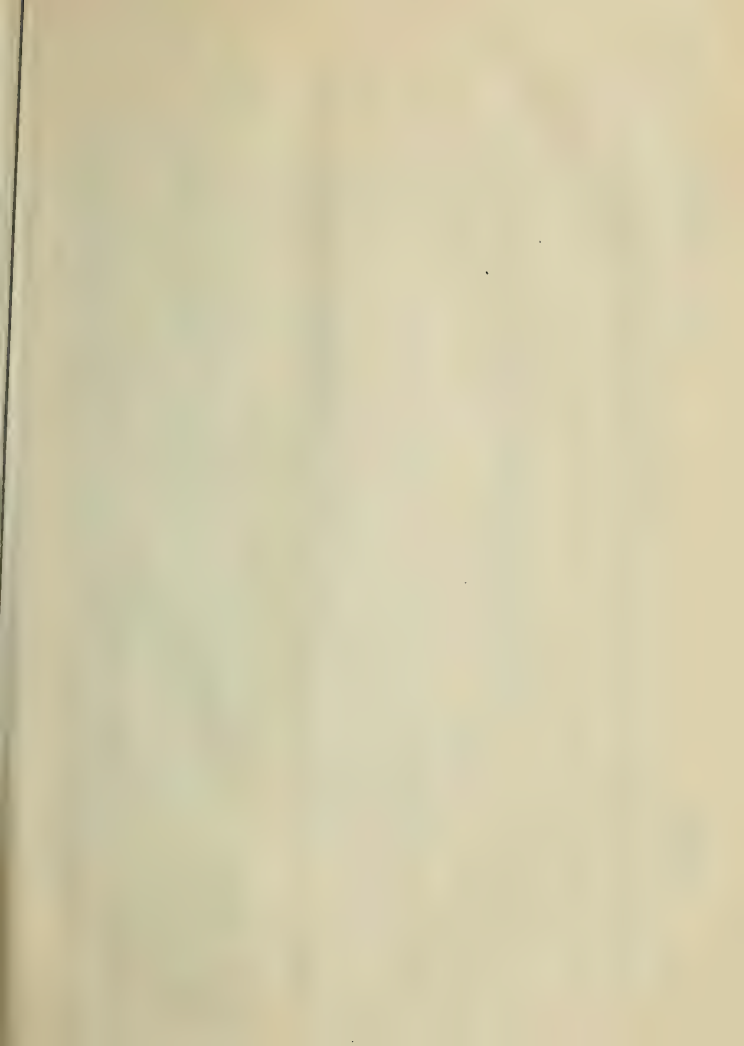
【校異】1不ふ、割。2国才、國そ。3国秀。4國すき。5因は。6因に。7因給ふ。8下三字因ナシ。9一字国ナシ。10一字不ナシ。11不大君、國大夫。12因ナシ。13因子アリ。14不子アリ。15因子なりアリ、國子アリ。16因此所は。17国五。18因孕み、國作み。19因のアリ。20不七。21因八字ナシ。22不のアリ。23不には、因は。24國イ三字ナシ。25下四字因は。26一字不妻。27不二人。28因左アリ。29因のアリ。30不氏アリ。31因考異なりアリ。32因のアリ。33国民。34十五字不ニヨリテ補フ。35因御。36国頭中將の御方アリ。37国の宮。38首の御方、宮アリ。39永憲し。40彦二。

童。1いゑあこ2君同じ3腹は、皆狭けれど、方々しつ4く住み給ふ。町毎に御門表毎に建てゝ、馬車の立つ事、5御門に百6ら〔〇千〕許り立つ。7(そ)こばく廣き殿の中隙なし。ホノママ

〔〇刊本此ノ下ニ「藤のかゝれるを松の枝ながら」以下七葉アルハ、梅の花笠ノ卷ノ卷末ノ文ノ攙入セルモノニテ、諸本皆然レバ、此所ニハ除キ、彼所ノ文章ト校合シテ梅の花笠ノ卷ノ校異ノ[イ]ノ中ニ掲ゲタリ。但シ甚ダシキ誤寫ト思ハル、所ハ之ヲ省キタリ〕

〔〇此ノ攙入セル部分ヲ「かつらの卷」ト云フ。「かつらとて」云々ノ歌アルヲ以テナリ。此ノ故ニ、田鶴の村鳥、一名沖つ白波、附かつらの卷トモ記セリ〕

文化十二年乙亥卯月十六日以本居氏藏書挍合畢　久春曾乃々於幾遊吉

【校異】1[国]家。2[国]宮。3[因]二字ナシ。4[イ]らひ。5國イ二字ナシ。6[イ]ち。7一字[イ]ニヨリテ補フ。

藤中納言は、1衛門督なれど、裝束淸らにせずとて、非違の2別當は兼けず。さて在り經給ふ程に、少かりし世の3事なれど、京極など4覺えければ、昔より親の傳はり住み給ひける所にこそありけれ、我が親の御時になくなりにたるを、我造らせて、母北方に奉らむと思して、霜月ばかりに、睦まじき人少し御供にて、おはし見給へば、この程は野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寢殿一つ、廻りはあらはにて、塗籠の5限り見ゆ。又西北の隅に6、大きにいかめしき藏あり。中納言7に任じたる人の馬に乘りて、廻りて見給へば、この藏は、この地の程にも見えず。8御供なる人に、「この地の内か。見よ」と宣ふ。廻りて見て、「此の内なり」と申す。近く寄りて見給へば、藏の廻りに、人の屍數知らずあり9。恐ろしと見つゝ、なほ打ち寄り10て見給へば、世になくいかめしき11戸かけたり。その12上の上をば、金を搖りかけて封じたり。その封13の結び目に、故治部卿の主の御名文字14よりつけたり。中納言見給ひて、驚きて、これは文15庫ならむ、昔異代の博士の家なりけるを、一枚16書17見えず、その道ならぬ等な18かどだに、世の中にも散

〔校異〕1イ右アリ、底考異左アリ。2因別。3國イ中。4國イ多。5因飾。6國イはアリ。7因御前し。8因ナシ。9因てアリ。10因考異ナシ。11因ぜう、イ錠。12イ錠。13因じアリ。14因彫、国ゑ。15因ども。16国もアリ、因のアリ。17因もアリ。18因む、国ナシ。

り、此處にも殘りたるものを、これ開けさせむと思1す程に、かは2し〔○河原〕の3程より、年九十ばかりにて、霜を戴きたるやうなる4女翁這ひに這ひ來て、「まづ此處去らせ給へ〳〵」と泣く。「5何かく6申す」とて、御隨身7問へば、「なほまづ此處去らせ給へ。多くの人取り殺しつる藏なり。まづ御覽ぜよ、こゝらの8〔人〕の屍を。去らせ給ひなむ時。あ9り樣は申さむ」と10て言へば、怪しがりて、打ち去りて立ち給ひたり。さて、これらが申すやう、「此の村は、いみじく榮えて侍りし所なり。今年二十11〔と〕せ〔○年〕餘り、三十年にはまだ足らぬ12月ど〔○程〕になむ、かく亡びて侍る。その故は、昔一人子を唐土に渡し給へりし人の御殿になんありし。その子をえ待ち13得給はで、失せ給ひて後に、その子歸りいましたりし。さて14此の殿をいと淸らに造りて住み給ひし程に、御女一人たゞ持ち給へりし。その女の小くいますがりし15時より、世に聞えぬ音聲樂16聲17なむ絕えざりし。その18御聲樂を聞く人は、皆肝心榮19いて、病ある者20は21なくなり、老いたる者22も若くなりしかば、京の中の人は廻りて承りし。その女、婿時になり給ひしかば、御門を閉して、人通はさでありしに、23天皇皇子宮殿ばらの24御よばひの25使は、明けたてば立ち廻りて26、言

校異 1 國イえアリ。2 図ら。3 因ほとり。4 国嫗。5 図何ぞ。6 因はアリ。7 因のアリ。8 一字図ニヨリテ補フ。9 国ス。10 図ナシ。11 一字図ニヨリテ補フ。12 図ほ。13 因つけ。14 國イはアリ。15 図ナシ。16 因のアリ。17 図のアリ。18 図音。19 図え。20 國イナシ。21 図病アリ。22 因考異は、國イの。23 図大王、図大君。24 図御殿。25 因御アリ。26 因あれどアリ。

も1得ずせでぞ侍りし。しかありし程に、2其後母かくれ給ひ3にしかば、か4の5御女は6聞え給はずなりにき。さりしかば、この殿に河原人里人入り亂7ちて、毀8ち果てゝ、9たゞ一二年にかくなり侍りにき。屋共10萬の物〔○者トモ解セラル〕ども取りしが、事もなかめりし11かば、この藏ばかりは、『物共侍らむ』とて、罷り寄る者は、やがて倒れて、多くの人死に侍りぬ、12夜は人にも見え侍13らで、馬に乘りて來つゝ、ゆ14ゝしう〔○弓弦〕打をしつゝ、夜廻りするやうにたん侍る。かく恐ろしき所に15なむ百16歳になり侍るまで此の17女翁の見奉り侍るに、我が國に見え給はぬ姿18顔おはする、玉の男の見え給へるは、いみじう悲し19さにと20て、告げ申さむとて、惑ひ參うで來つれど、え參うで來あへず、惑ひ侍るなり」と申す。中納言、「いとよく申したり。此の廻りに住まずなりにけむ21は、いかであるぞ」と問はせ給へば、「此の藏を開けむ〳〵とし侍りつゝ、人の惡しくするを、我はなど開けざらむと、かつ倒れ伏せるを見つゝ、年月を經て22し侍りし程に、皆死に侍りにき。さ爲し人の家には、時のまつりごと〔○時の間に事ノ誤カ、時の禍事ノ誤カトモ云フ〕起りつゝ、俄に亡び給ひにき」と申せば、「いと恐ろしき事かな。又開くる人やあると見侍23れ」とて、御衣一襲脱ぎ給ひて、一24つづゝ賜ひつ。「此の地の内に見ゆる屋のわたりに侍りて、此の藏へ、またさの如〔○

校異 1〔イ〕え告げ。2二字〔因〕ナシ。3〔因〕其後父かくれ給ひアリ。4國イみアリ。5國イナシ。6〔因〕世にありともアリ。7〔イ〕り。8國イり。9二字〔因〕ナシ。10〔国〕のアリ、〔因〕はアリ。11〔因〕に。12國イより。13〔因〕りて。14〔イ〕つ。15二字〔イ〕ナシ。16〔因〕考異年。17〔国〕嫗。18〔イ〕の。19〔因〕き。20〔国〕く。21國イな。22〔イ〕ナシ、〔国〕ぞ。23〔イ〕ナシ。24〔イ〕重。

さる事ノ誤カ」1す2にやあると見侍れ。さてこその藏の廻りに3こたてある4殿の人5掃ひ棄てさせて候へ」とて歸り給ひぬれば、6女翁、老の世に見知らぬ香ばしく麗しき綾掻練の御衣どもを得て、怖ぢ惑ふ事限りなし。すなはち物詣したる人見付けて、價も限らず7取りつ。

か8〔く〕てその9間の物を、おのが孫のあたりの者にくれて、藏の廻り10にを掃ひ清めさせて侍へば、四11五日ばかりあ12れば殿の家司13參で、幄打つ。暫しあれば、大徳達陰陽師など來て、祓14し讀經する程に、中納言御前いと多くて、藏開けさすべき人など率でおはして、事の由申させ、御誦經をせさせ給ひて、鍵なければ、開くべきたばかりをしつゝ、藏を開けさせ給ふ15。更に開かず。そこに二三日多くの人を率て、夜は16つるま〔〇車〕にて幄の内に居給ひつゝ、開けさせ給ふに、更に開くべ17くもあらず。18こたて〔〇片手カ〕をぬき〔〇貫キカ、脱きカ〕19割り20、多くの人し煩ふ。三日と云ふ晝つ方、御21裝束などし給ひて、心の中に申し給ふやう、「承れば、此の藏先22所の御領なりけり。御封を見れば御名あり。此の世に仲忠を放ちては御後なし。母侍れどこれ女なり。此の藏先祖の御靈開かせ給へ」と祈り給ふ。されど開かず。人の申すやう、「天下23いかに云ふとも、この24上は25あるべきにもあらず。26こへ〔〇壁ノ〕を毀ち27開け侍らん」

[校異] 1因考異くアリ。2[不]る。3[不]う。4[不]物野邊。5[玉]にアリ。6[国]嫗。7[東]買ひアリ。8一字[不]ニヨリテ補フ。9[不]値。10[不]ナシ。11因考異日アリ。12因りて。13[不]來て。14[不]ナシ。15[不]にアリ。16[不]く。17[因]う。18[不]う。19因折。20因などアリ。21因裝。22[国]祖、因考異代。23[板]にアリ。24[不]錠。25[不]開く、因考異劃る。26[不]か。27[不]てアリ。

と申せば、「いかなれば得開けぬぞ1 2と見む。怪しきわざかな」と打ち笑ひて、藏に上りて見給へば、いといかめしき3上な4る。引きく5ろゝかして見給へば、開きぬ。これはげに先祖の御靈の我を待ち給ふなりけりと思して、人を召して開けさせて見給へば、内に今一重校して6上あり。その戸には、7又殿と印さしたり。さればよと思して、又8上開け給へば、たゞ開きに開きぬ。見給へば、書どもうるはしき帙簀10こむに包みて、唐組の紐して結ひ、11つゞくに12だに積み13つゝあり。その中に、沈の長櫃の唐櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よき程の柱ばかりにて、赤く圓き物14積み置きたり。たゞ口元に、目録を書きたる書を取り給ひて、ありつるやうに15上さして、多くの殿の人16さして歸り給ひぬ。三條におはして、北の方にありつるやう申し給ひて、此の17書の目録を見給へば、いといみじく有難き寶物多かり。文どもは更にも言はず、唐土にだに人の見知らざりける、皆書き渡したり。醫師書、陰陽師書、人18相する書、孕み19たらむ人の事言ひたる、いとかしこくて多かり。母北の方、「あなゆゝしや。昔20人は殊更おのれをば惑はさむとこそ思しけれ」中納言、「いと賢く物し給ひける人なりければ、思すやうこそありけめ。これらをそこに持ち給ひてば、いかにかはせさせ給はまし。今まではありなましやは」など宣ひて、すなはち國々の受領などの

校異 1国こアリ。2三字イナシ。3イ錠。4イり。5イつろが。6イ錠、イ璧。7イ文。8イ錠。9國イと。10二字イナシ、国ども。11イ机、因机ども、因考異机にふさ。12二字イナシ。13因て。14因考異包。15国錠。16因殘し置き。17因御アリ。18國イさら。19イ子生。20國ナシ。

さ1爲つべき2をたい〔〇對カ、臺カ〕一つづゝ預け3しつべき人々に皆宣ひ預けつゝ造らせ給ふ。先づ築4土、二三百人の夫ど5〔も〕して、その年の内に築きつ。6藏の唐櫃7一つに8香ありと云へるを、取り出でさせ給ひて、母北の方に9一の宮にも奉り給へば、此の御族の香どもは、世の常ならず10なん。書どもゝ、11要あるは取り出て見給ふ。此の殿造れば、その廻りに、「かく世に榮え給ふ君住み給ひし」とて、皆家造りて12北に寢13る。かの出で來りし14女翁は、政所に召して、布衣などいと多く賜ふ。

畫詞 15ふしぎやたてどの藏開けたる所。

かゝる事を内聞し召して、後院にとて年頃造らせ給ふ、大宮の大路よりは東、二條大路よりは北に、廣く面白き院あり、それを中納言召して賜ふとて宣ふ、「此の16家17、かく廣き所なるを、まだ私の家などもな18るなり。これを19文所にして、かの始20せ〔〇祖〕の、殊に隱されたらむ手など習はれむに、よかんべかなる。かの皇女と諸共に、琴など彈きつゝ聞かせ給21〔へ〕。22人近く聞かざらむはあ23へなむ」とて賜ふ。「その南に、これよりは小さき所あり。それは一の皇女に24も今物せむ」と宣ひて賜へば、中納言25二人して賜はる。

校異 1[不]る。2[因]に。3[不]ナシ。4[因]地。5一字[不]ニヨリテ補フ。6國イくし。7國イにアリ、下二字[因]考異ナシ。8國イから。9[国]もアリ。10二字[因]考異ナシ。11[国]様、[因]考異用。12[不]來りぬ。13[不]ナシ。14[国]嫗。15[不]此所は京極殿。16國イ堺。17[因]考異はアリ。18[不]か。19國イ政カ。20[国]そ。21一字[不]ニヨリテ補フ。22[不]ナシ。23[因]考異いなし。24[不]ナシ。25[不]舞踏。

り給ひて、罷出給ひぬ。帝女御の君に聞え給1（ふ）「2女皇子達は、さ3りぬべき所造らせて、相續ぎつゝ物せむ」など聞え給ふ。

かくて、かへる年の睦月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの藏たる産絹など云ふ文ども取り出て、4ならべて、女御子にてもこそあれと5思ほして、生るゝ子容貌よく、心よくなると云へる物をば參り、さらぬ物6も、それ7が從ひてし給ふ。參り物は、かた8ろ（〇刀）ま9（な）いた（〇爼）をさへ御前にて、手づからと云ふばかりにて、我なほ添ひま10ひなひて參り給ふ。かくてその年は、立ち去りもし給はず、かつは文どもを見つゝ、夜晝學問をし給ふ。

かゝる程に、子生み給ふべき期近くなりぬれば、11女御の君上に聞え給ふ「一の12宮、御子13とかく爲給ふべき14程近くなりぬるを、罷出侍15りなむ」上16は「いつば17かりにか」女御の君「十月ばかりの程になん」上「さるべき事にこそあなれ。ところ人をば、かねてよりいたはりなどこそすれ。いかならむ」女御「何かは。かの朝臣、罷り歩きもせで、この頃は侍るなるを、誰も〳〵世に18疎には」上「此の皇女を久しく見ぬかな。いかゞ生ひなりにたらむ。かの人と著き並びたらむには、世に似げなうは見えざりしを」御答「人はいかゞ見奉るらん。まことなるにや、御髪も御覽ぜしよりは19、樣に多く餘り侍る。大方も見るかひなくは物し給

註　1 一字国ニヨリテ補フ。2 国今アリ。3 国る。4 国占め給ひ。5 国考異おぼ。6 国をば。7 国に。8 国な。9 一字国ニヨリテ補フ。10 国か。11 国女。12 国ナシ。13 国生み。14 國期。15 國考異ら。16 国ナシ。17 國イナシ。18 國左訓おろか。19 國長くアリ。

はず」上「さて1この皇女は」女御「2君に似給ひて、それも殊に劣り給はず。ふくらかに氣近き事添ひてなむ」上「なほ所3探せ。女子4生し立てらるゝ所なれば、此の御子達も外のには似ずかし。さらばたび5からにて6、思ふやうにて、7と二〔〇御子〕をあまた平かに8持給へる肖物は、そこにも9怪しうはあらじかし」と宣へば、罷出給ひぬ。

かくて中納言殿の出で給ひたる間に、女御10君中の大殿に渡り給ひて見奉り給11ひて「いたくぞ面痩せ給ひにける。上のさばかり後めた12がり聞え給ふものを」とて見奉り給ふに、面白く盛りなる櫻の朝露に濡れ13あえたる色合にて、御髮は14やうし〔〇瑩しカ〕かけたるごと15して、隙なく搖りかゝりて、玉光るやうに見え給ふ。御衣は、赤らかなる唐綾の袿の御衣一重奉りて、御脇息に押しかゝりておはす。かくて産屋の設け、白き綾御調度ども、白銀にしかへして、殿に設け給ふ。二月ばかりかね16く、生れ給はむ日まで、不斷のすほ17ら〔〇修法〕萬づ18神佛に祈り申させ給ふ程に、十月になりて、中の十日ばかりに、宮氣色ありて惱み給ふ。御座所、春宮の宮た19ゝちの生れ給ひし所を、あるべきやうにしつらはれて、渡し奉20りつ。內侍の督の大殿、御車五つばかりして參り給へり。中納言は下し奉りて、宮のおはします御帳の內へ入れ奉り給ふ。

校異 1国二。2国御上、因上。3因がらにや、國イはがせ。4国おふ。5〔イ〕らか。6因をアリ。7〔イ〕み。8因てアリ。9國イけうし。10因のアリ。11〔イ〕ふに。12因考異げに。13〔イ〕添へ。14国よ。15因考異く。16〔イ〕て。17〔イ〕う。18国のアリ。19〔イ〕ナシ。20因考異る。

大宮も渡り給へり。それは御局して別におはします。女御の君は、「何か。相撲の節の夜　いと睦まじくなりにしか1い」とて、同じ御帳の內におはしまして、たゞ二所にかゝり2もて仕うまつり給ふ。殊に痛くあらねど、なほ心もとなく惱み給ふ。3左大將殿も參り給ひて4、主の大臣君達は、簀子に弓引きつゝ侍ひ給ふ。御格子の內の廂には、宮の5同胞、男宮達おはします。御帳の前に弓引きつゝ中納言侍ひ給ふ。內裏より御使往き返りあり。藤壺よりも御使あり。殿の內方々の上達部は、6入らず7あらむと思して、町異なれば、中門を閉し8おはしまさふ。かゝる程に、寅の時ばかりに生れ給9ひて、聲高に泣き給ふ。中納言10も驚きて、御帳の帷子を搔き上げて、「何ぞや」と聞え給へば、11上の大殿、「あなさがなや。現なり」とて、12女御の君13に居隱れ給へば、仲忠14は、「今宵は目も見15侍らず」と云ふものから、女御16君に宮かゝり奉りて、騷ぎ給ふを見れば、白き綾の御衣を奉りて、耳挿みをして、惑ひおはす。いと宿德に、もの／＼しきものから、氣高くこめきて、御髮搖りかけたり。我が親も、いづれとなく目出たし。同じ白き17著給へり。中納言、なほ物はた籠れりける所かなと見給ふに、後の物もいと平か18なり19。中納言、「何20々ぞ」と問ひ給へば、21上の大殿、「夜目にも著くぞ」と聞え給へば、中納言萬歲樂折れ返り／＼舞ひ給ふ。三の皇子いたく

校異　1 〔イ〕ば。2 〔イ〕てアリ。3 国右。4 因おはしますアリ。5 因御アリ。6 〔イ〕云は。7 〔イ〕もアリ。8 〔イ〕てアリ。9 因う。10 因ナシ。11 国督。12 因女。13 因考異這ひ。14 因ナシ。15 国えアリ。16 因のアリ。17 因御衣アリ。18 因にアリ。19 因ぬアリ。20 〔イ〕ナシ。21 国督。

笑ひ給ひて、皇子達1樂を高麗笛に2吹き給ふ。主の大臣、　どかくは」と聞え給へば、三の皇子、「中納言の3羅舞し給ふなめり」4左大將、「只今の數寄は、味氣なくぞ侍る」主の大臣、5御時よ6き打ち笑ひ給へば、一度にほゝと笑ふ、いと心地よげなり。主の大臣參り給へば、笑ひて突7(い)居ぬ。大臣、「萬歲8 9は10いだしてこそ。半ばにては惡しからむ」と宣へば、11は立ちて、無き手を出だして舞ひ果12てつ、大臣、おひづる〔○老鶴カ〕の紋の織物の直衣をかづけ給へば、かづ13けて舞ひ立てる程に、督の大殿、生れ給ひつる君の御臍の緒切り給はむとて、「たゞ人は侍14へ。人のするわざ」15とこそ16は17 18責め給へば、「此のもの、見苦しのかたつぶりや」と宣へば、突い居て、「何を召すぞ」大殿、「下なるもの一つ」と宣へば、指貫を脫ぎて奉り給へば、「否や。今一種19疾う」と宣へば、白き袷の袴一重を脫ぎて奉りて、「あな命永や」とて、御衣掛のもとに20寄りて21見給へば、御達笑ふ。仲忠も、「22物いちじ23(る)き夜24もや」と宣へば、孫王の君、「げに、立ち走りやすくせさせ給ふめり」と聞ゆる程に、25上の大殿生れ給へる君を、いと淸く拭ひて、御臍の緒切りて、此の袴に押し26くゝみて、搔き抱き給ふ。中納言御帳のもとに寄りて突い居て、「先づ賜へや」

校異1 イそのアリ。2 国てアリ。3 イ高麗。4 国右。5 四字国さと淸く。6 一字因く。7 一字イニヨリテ補フ。8 国樂アリ。9 国ナシ。10 イは果た、国果た。11 イ立ち、イ果たし、因又立ち。12 國イたす。13 イき。14 イふ。15 イに、因ども。16 イと。17 国とアリ。18 因せめ。19 二字イナシ、因を。20 イ立アリ。21 イ入りてアリ。22 因考異くのいち、(同)物いはゞ。23 一字国ニヨリテ補フ。24 因考異にアリ。25 国督。26 イ包。

と聞え給ふ。1上の大殿「あなさがなや。いかでか外には」と宣へば、帷子を引きかづきて、2築地のもとに3「抱き取りたれば、いと大きに、首も居ぬ4〔べ〕き程にて、玉光り輝くやうにて、いみじく美しげなり。いと大きなるものかな、かゝればこそ久しく惱み5給ひつるにやあらむと思ひて、ふ6たところ〔懷〕にさし入れつ。右の大臣、「いで7し」とて8寄りおはすれば、「只今は更に〳〵」とて見せ奉9らず。大臣、「今か10ら11も、はた」とて笑ひ給ふ。中納言、「かのりうかくは賜はりて、いぬの12守にし侍らむ」13上の大殿打ち笑ひて「いつしかとも14いた15までも、かやうの折には、云ふやうかある」と宣へば、「大方の事はいかゞ侍らむ。この16程の族ある所、聲する所には、天人のかけりて聞き給ふなれば17〔添へ〕18た19ゝむとて聞ゆるなり」20上の大殿、内侍のすけして、大將の大殿21「かのおのが琴、22たしに要せらるめり。取らせむ」と聞え給へれば、いそぎて三條殿に渡り給ひて、23取らせておはしたり。三の宮取り給ひて、中納言にさし遣り給へれば、唐の縫24との〔物〕の袋に入れたり。兒を懷に入れながら、琴を取り出で給ひて、「下頭、此の手をいかにし侍らむと思ひ給へ歎きつるを、後は知ら25ねど」などて、「はうしやう」と云ふ手を華やかに彈く。聲いと誇りかに賑はゝしきものから、又あはれに凄し。萬づ26物の音多く、琴の調べ合せたる聲、

校異 1[国]督。2[イ]土居。3[イ]ナシ。4一字[イ]ニヨリテ補フ。5二字[図]ナシ。6[イ]ナシ。7[イ]來、[イ]いで。8[國]イ取。9[図]り給は。10[イ]く、[図]考異う。11[図]考異や。12[図]守。13[国]督。14[図]は。15[イ]さて。16[イ]琴。17二字[イ]ニヨリテ補フ。18下二字[図]ナシ。19[イ]ら。20[国]督。21[図]にアリ。22[イ]こゝ。23[図]持た。24[イ]も。25[國]イぬ。26[イ]のアリ。

向ひて聞くよりも、遠く1て響きたり。御方々(おほん)、上達部皇子達そ2ゝや3く、「事なりにたるべし。かゝる事はありなむと思ふ4所ぞかし。我等がしどけなきぞかし」とて、あるは御履(くつ)も穿(は)きあへ給はず、あるは御衣(ぞ)も著あへ給はで、手惑ひをしつゝ走り集りて、御前(まへ)にあたりたる東(ひんがし)の簀子に、植ゑたるごとおはしまさ5く。涼の中納言は、打ち休み給へる寝耳に聞きて、驚きながら、冠(かうぶり)も打ちそばめてさし入れ、指貫直衣などを引き下げて、ま6ひろげて出で來た7り。8誰かれ見給ひて、いみじう笑ひ給ふ。源中納言、「物語をだにせ9ざむなり。あなかまや」と10打ち11かきて、石疊のもとにて、直衣指貫著て上(のぼ)りぬ。御方の御隨身12は御13覽の14事〔〇ごとカ〕15かたまりて、16子供は近くも寄らず、17塀の18もとに方(かた)に立てり。中納言、19かゝるべき曲(ごく)を20わたく弾くに、風いと聲あ21しく吹22く、空の氣色騷がしげたれば、例のもの手觸れにくきぞかし、23にづらはしと思ひて、弾き止みて、督(かん)の大殿24申し給ふ、「今25古樂(こがく)一つ仕うまつらむとすれど、騷がしければ、えなむ。これに御手一つ遊ばして、鬼に26嘲ませ給へ」と聞え給へば、「27はしたなげにぞあめる」28君「仲忠がためには、これに勝る折なむ侍るまじき」と聞え給へば、督(かむ)の大殿御(み)ゆる〔〇床〕よ

校異 1因ナシ。2因ゞ。3因〱。4因考異ものから。5団う。6団ろび。7国る。8団これ。9國イさせで。10因手アリ。11団奏(かな)で。12因どもアリ。13団がん、国陣、因門。14因もと。15因に居り。16因異(こと)供人。17因築土(ついひぢ)。18団外(と)の、因此の。19因しか。20団音(ね)高。21団ら。22団き。23団わ。24団にアリ。25因曲(ごく)、因考異二字ナシ。26因聞か。27因いとアリ。28因いらへ、因考異ナシ。

り下り給ひて、琴を取り給ひて、1たゞ一つ彈き給ふ。その音さ2くに云ふ限りなし。中納言の御手は面白
く、3ちうしきまで雲風の氣色色異なるを、この御手4い、病ある者、思ひ5落ち6うぶれたる人も、こた
を開けば皆7忘れて、面白く頼もしく、齡延ぶる心地す。かゝれば、宮は御琴を聞し召しつれば、たゞにお
はしつるより8若やかに、わざをしいるとも思されず、苦しき事もなくて起き居給へり。中納言9君、「惡
しかめり。なほ聞こせ給ひて聞し召せ」と申し給へば、宮「只今は苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、
苦しかりつるも皆やみぬ」とて居給へり。10女御の君、督の大殿、「風ひき給ひてん」とて、騷ぎ臥せ奉り給
ひつ。琴は彈き果て給11ひつれば、袋に入れて、宮の御枕上12に、御佩刀13添へて置きつ。かゝる程に、夜
け果てぬれば、御格子ども皆上げ渡し、御几帳たてつゝあるに、主の大臣、宮の御同胞の宮達、くづれてみ
14(た)下り給へば、皆人も下りぬ。15大臣宮達殿16君達、並み立ちて拜し給ふ。中納言の君にかく17儲給18
ふとも、「あなかしこ」とも聞えで、なほ兒抱きて居給へり。かゝる程に、内裏より頭の中將19 20君して、御
消息あり。「めづらしき人の、21いた(○平)らかにあなるも、有難き事の樣22し物せらるゝなるをなん限り
なく聞し召す。例ある23ころこび(○祝事)などもせさすべきを、只今その暇などえあらで」などあり。職ら

校異 1 [イ]曲。2 [国]ら。3 [国]ゆゝ。4 [イ]は。5 以下八字[因]に沈みたる。6 一字[イ]ナシ。7 [国]忘。8 [国]さわ。9 [因]の
[因]のアリ。10 [因]女。11 [イ]へ。12 [因]ナシ。13 [因]にアリ。14 一字[国]ニヨリテ補フ、[イ]な與。15 [国]男。16 [因]の
アリ。17 [国]宣。18 [因]へど。19 [因]のアリ。20 [イ]ナシ。21 [イ]たひ。22 [イ]ざま。23 [イ]よ。

ひたれば、例の作法なし。中納言下りて拝し給1ふ、御返し奏せさせ給ひつ。又内裏より藏人式部2丞を御使にて、3左大將の4上の大殿のもとに御文賜へり。「覺束なき程に5はなさじとものせしを、心にも忘らで久しくなりにけるを、いとあはれにめづらし6がりし對7面に、はつかなりし物の音も忘れがたく覺えしかば8こそ、時々も參られよとて、公けになどは。されど、よくこそ制し9そされためれ。こゝにいかでと思ひし事を、樣々にそこにあなるを、いと羨ましく、そのわたりの事をもいかにと思ふに、さやうにて物せらるゝなれば、惱ましき事も忘れぬらんと頼もしくなん。いかで、歩きか易10すて、とくもがなと11ぞ、内裏わたりにはた參られざめれば」と宣へり。12上の大殿見給ひて、御返し、「畏まりて承りぬ。こゝに侍ふ事は、仲忠の朝臣の、13宮又たき事に思ひ給ひて侍るめりしかばなん。何の數なるべき身には侍らねど、雜役なも諸共にと思ひ給へてなむ。樣々にと仰せ言侍14るは、何事にかは。齡比べする顔にや。參り侍らぬ事は、かゝる里住にも初々しき心地侍れば、つゝまし15く思16ひ給へられてなん、いと畏き仰せ言をぞ返すぐ聞えさせ侍る」と聞え給ふ。御使に祿なし。忌17させ給へば18。かゝる程に、御乳參るべき時なりぬ。御藥19父の中納言の懐にてくゝめ奉20り21、御乳付、左衞門の佐殿の北の方、御几帳のもとに侍ひ給へば、女御

校異 1 國ひ。2 イ丞、國イ亮。3 国右。4 国督。5 國考異放た。6 國か。7 國面。8 二字國考異ナシ。9 イな。10 イく。11 國て。12 国督。13 イナシ。14 イれば。15 國考異う。16 国ふ。17 イま。18 国なるべしアリ、國考異なりアリ。19 國はアリ。20 イる。21 國給ふアリ。

の君搔き抱きて、御衣着せ奉り給1ふ、襁褓に包みて御乳參り給ふ。御乳母2も召し集めたり。一人は民部の大輔の女、いま二人は五位ばかりの人の女ども3、御湯殿すべき時もなりぬれば、その儀式、皆4すゞ5し白襲白き綾をつかはれたり。御湯殿6、東宮の若7君の御迎へ湯に參り給ひし內侍のすけ、白き綾の生絹に、單襲の袿上に著て、綾の湯卷、御槽の8外にも敷き、迎へ湯は督の大殿、白き綾の袿一重、同じき裳9一重10、結ひ籠め給へり。中納言白き綾の袿一重、11絽の袴指貫著て、湯ひき給ふ。殿の君達、弓引きつ12くおはす。かくて女御の君搔き抱きてさし出で給へれば、督の大殿抱き13、內侍のすけに渡し給ふ。今は御湯あむし奉る。14上の大殿、簀の上に15は突い居給ひて、御迎へ湯參り給ふ。御髮御16もとに少し足らぬ程にて、鎣しかけたること17 18して、白き御衣に隙なく搖り懸けられたり。よれた19りし裳に打ち疊なはれたる、いと目出たし。御髮つき姿云ふ限りにあらず。只今二十餘に見え給ふ。中納言20 21は親とも見え22で、年二ばかりの同胞に見ゆ。すけの23大殿、「こゝら昔より君達に仕うまつりつるに、程大きに、かにと云ふものゆめばかり付き給はぬこそなけれ。二月24あむし奉りたるやうにこそおはす25めれ」中納言、「見給26へ放たねば、さもあらん」「すけ侍ひてまし27(か)ば、いと畏かりけり。親にはおはしま28さずとも。立たせ給へや。

【校異】1 因ひ。2 因どアリ。3 因なりアリ。4 イナシ、国生絹の。5 因生絹の。6 因はアリ。7 イ宮。8 因底。9 イ紐。10 因考異てアリ。11 イ白きアリ。12 イつ。13 イてアリ。14 国督。15 因ナシ。16 イ袋。17 因考異くアリ。18 イく。19 因る下。20 イにアリ。21 国の。22 イず。23 国おもと。24 國のアリ。25 国ナシ。26 国ひ。27 一字国ニヨリテ補フ。28 イす。

女に1こそおはしますめれ」と聞ゆれば、「何か2そは、そのわたりをもよくつくろひ給へと聞えむとぞや」と宣ふ。さて、御湯殿果てぬれば、女御3君抱かまほしう思せど、父大臣添ひ居給4ひつれば、5上の大殿抱き給ひて、御几帳閉させて入り給ひて、宮の御方に臥せ奉り給6へ。中納言御帳の内へ入り給へば、督の大殿、「あなさがな。現なるに」と宣へば、「何か。かゝる宮仕へ仕うまつる人には、7内8外をこそ許し給は9め」とて、つゝみ開え給は10ぬば、女御の君外にゐざり出で給ひぬ。中納言、「久11(しう)12いも寝侍らねば、亂り心地いと惡しう侍る。罪免し給へ」とて、宮の御傍に打ち臥し給ひぬ。13上の大殿、「うたて物覺え14ぬ樣し給ふめり。さて忍びて侍ひ給へ」とて出で給ひぬれば、中納言御衾引き15着て聞ゆるやう、「かゝるものまたもがな。いとゝく、此度は仲忠がやうにてを」と聞ゆれば、うたて16言ふものかな。いと恐ろしきわざに17ぞありけれと思して、18出で19も20し給はず。かくて皆、御前ごとに物參り21などして、夜さり御湯殿例のごとしつ。御帳の西の方なる母屋に御座裝ひて、大宮子持の宮の御同胞22の女宮達おはし23 24さふ。西の廂に御座裝ひて、25上の大殿の御局したる、26そも右大將の君はやがて物し給ふ。27上の大殿の御許には、大人十人童四人下仕四人あり。北の方28の御參り物は、主の方よりして參らせ給ふ。

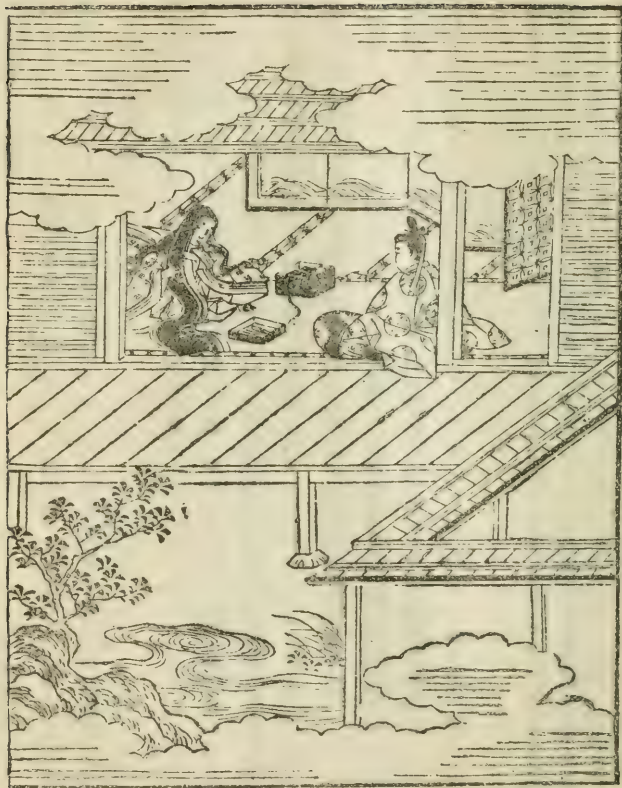
[校異]1二字[因]ナシ。2[因]考異はアリ。3[因]のアリ。4[イ]へ。5[国]督。6[イ]ひつ。7[イ]内。8[因]外。9國イぬ。10[イ]ね。11二字[イ]ニヨリテ補フ。12二字[国]ナシ。13[国]督。14[因]考異給はアリ。15[因]居。16[因]考異もアリ。17[イ]こそ。18[イ]いらへ、[イ]二字ナシ。19下三字[イ]物も宣歟。20[イ]のアリ。21三字[イ]ナシ。22國ナシ。23[イ]ま歟、[国]まアリ。24[イ]ます。25[国]督。26[因]にぞ。27[国]督。28[因]ナシ。

かくて、御産養1の三日の夜は、2左大將殿し給ふ。白3重の御重十二、同じ物打敷物、4ふの5花斑綵6の羅重ねたる、白銀の透箱六に、御衣御襁褓打敷入れたり。屯食十7具ばかり8にて、9百貫なんありける。籠り給へる人々、夜一夜遊び10攤などし給ふ。又四の宮の御方よりも、いとをかしうし給へり。五日の夜、主の11大將、同じ12くいかめしうし給へり。13大臣御子達も、樣々にいかめしうし給へり。14攤打ち物かづきなどし給ふ。

かくて六日になりぬ。女御、麝か15ら〔○香〕ども多く16具し17り集めさせ給ひて、衞府丁子。鐵臼に入れて搗かせ給ふ。練絹18を綿入れて、袋に縫はせ1920つゝ、一袋づゝ入れて、間ごとに御簾に添へて懸けさせ給ひて、大いなる白銀の狛犬21はつに22はるに、同じ火取据23へて、香の合せ24の薫物た25ゝず26燒きて、御帳の隅々に据27へたり。廂のわたりには、大いなる火取に、よき程に埋みて、よき沈合せ薫物多くくべ28て、29掩ひつゝ、數多据30へわたしたり。御帳の帷子壁代などは、よきう31へ32し〔○移カ、器カ〕どもに入れ33し34ためれば、その大殿のあたりは、他35う〔○所〕にてもいと芳し。まして内には更にも言はず。しるしば

校異 1 不ナシ。2 国右。3 国銀。4 二字不ナシ。5 国花文。6 不ナシ。7 国具。8 丙考異著代。9 国著代の銭アリ。10 不碁打ち、丙考異攤打ち。11 国大臣。12 丙考異う。13 不男。14 不丙碁。15 不う。16 國くゝ。17 丙ナシ。18 丙に。19 不給ひアリ。20 丙て。21 不四。22 三字不ナシ。23 国ゑ。24 不ナシ。25 不え。26 不み。27 国ゑ。28 国籠。29 不籠アリ。30 国ゑ。31 不つ。32 丙は。33 丙てアリ。34 不めた。35 不そ。

かり打ちほのめくひる〔○晝カ、蒜カ〕の香などはことにもあらず。大宮は北の大殿に渡り給ひぬ。1たゞの御座所は女御の君ぞ時々打ち休み給ふ。大人童は皆例の2そう〔○裝〕束した3る。中納言は例物し給ふ。東の廂に儀式して、御手水物の賄ひなどしすゑたれど、母屋の4隅より頭もさし出で給はで、宮の御おろしを5のみ參る。晝間の人なき折には、這入りつゝ宮の御傍に打ち休み、これかれおはすれば、御帳の外の土6い〔○居〕に押しかゝりて、居眠し給へり。夜は弓弦走り打ちつゝ寢ず。簀子には睦まじき君達7い並み給へり。

七日になりて、女御8君聞え給ふ、「夕さ9りは御湯殿すべし。起き給へ。御髮掻き解かむ」と聞え給へば、起き給へり。白き御衣の張りたるに、赤き10か打ちたる奉りて、御床の端の方にゐざり11入りて、東向におはす。女御の君督の大殿掻い分けつゝ梳り奉り給ふ。いと多く美しげにて、八12尺ばかりあ13る。その御賄ひは、内侍のすけと14の御乳母と仕うまつる。「かゝる時の初參15るは、するやうの侍るものを」女御の君、「何16ゐ。さ17うずとも、心もとなからぬ御髮なれば」18上の大殿、「髮は多く長き、數多あるべしや。筋有樣こそ難けれ。これは有りが19（た）く20ぞ」などて、掻い分けつゝ見奉り給ふ。つ21ゝや〔○艶〕かに目出たし。ことに害はれ給はず、少し青み給22ひつれど、いと貴に氣高く、さすがに匂ひやかにおはします。かゝる程

校異1 冈こゝ。2 国さ。3 冈り。4 冈御簾。5 冈ぞ。6 国ゐ。7 国居。8 国のアリ。9 冈れば。10 冈粉。11 冈出で。12 国尺。13 冈り。14 冈ナシ。15 冈らすアリ。16 冈か。17 冈ら。18 国督。19 一字冈ニヨリテ補フ。20 国ナシ。21 冈ナシ。22 冈へ。

に、藤壺より1して、物二斗入るばかりの瓱二、御重2の沈の折櫃十3二4入れて、蘇5わう〔○枋〕の高坏に据ゑて白銀の雉子二、は6〔○腹〕に龍脳7粉満て、雉子の8皮を剝ぎて、大9い10たるま11へ〔○松〕の造り枝に付けて、12端にかく13 14付けて押したり、

村鳥の鶴の郡に15住む雉子の松の枝にぞ今日は16住みける

とて御文あり。春宮の苑の君持て參り給ひて、宮の御前に參らせ給ふ。淺緑の色紙一重に包みて、17えこう〔○五葉〕に付けたり。宮あけさせ給ひて、見給ひて、打ち笑ひ給ふ。中納言「何事にか侍らむ。見侍らばや」「人にな見せそ18とあれば」とて見せ給はねば、「我が君は思し隔てたることそ」とて、手をさし入れて取りつ。見れば、かく書き給へり。「いともく思ふやうに珍らしかり19ける事は、先づと思ふ給へしを、暫しは物覺えぬやうに20侍りしかば、もしいかゞ見苦しき恥21隠さでを御覽ぜよと思ふ給22へ〔へ〕てなん、今まで23なり侍りにける。いでやく、いと24有難き事の取り集め侍りける折しもこそあれ、近く侍らで、25上承らずなりしこそ世になく思ひ給へらるれ26。昔ながら侍らましかば、かく思ひ給へましやと思ふ給ふるにつけても、心憂くこそ。

校異 1 [イ]と。2 [内]ナシ。3 [国]に。4 [イ]物アリ、[内]に物アリ。5 [国]は。6 [国]ら、[イ]ね。7 [国]籠め。8 [国]羽させ、[内]皮を着せ。9 [国]き。10 [イ]な。11 [イ]つ。12 [内]腹。13 [イ]書きアリ。14 [内]書き。15 [内]考異居る。16 [内]飛び。17 [イ]ごえ。18 [内]考異など。19 [イ]つ。20 [国]てアリ。21 [イ]かくま。22 一字[イ]ニヨリテ補フ。23 [内]にアリ。24 [イ]もアリ。25 [内]え。26 [イ]ばアリ。

諸共に馴れしものをおのが1代々にかゝれる鶴と他所に聞くかな

返すがへすもねたくこそ。我が君、かゝる事ありぬべからむ折、いと2かくまた3をまろが爲めに4よくならず5し」と書き給へ6り。君見給ひて、打ち笑ひて「久しく見給へざりつる程に、かしこくも書き習7す給ひにけるかな。此の御返は仲忠聞8らむ。まだ御手震ひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほゝ笑みつゝ見るに、あはれに昔思9ひ出でられて悲しければ、ゆ10かしくて置きつ。11まて赤き薄様一重に、「御文賜はるべき人は、まだ目もおどろ12きて得、なほ聞えさせよとて侍ればなん、思ほ13えずやうにと14のみ賜15かはせたる、16語さば所狹きやうに思されて17せむ。誰も恨み聞えつべしや。まこと御爲にと宣はせたるは、何事か進むる功徳こそ侍るめれ。味氣なき御いり(〇祈ノ誤脱カ)なりや。

同じ巣に移れる鶴の諸共に立ち居18る世をば君のみぞ見ん

と聞えさせよとなん」とて、裏に引き返して、「私には、いでや今は限りと云ふなれば、なほ19こそ。

千歳をば今20なりと思ふ松なれば昔も添ひて忘られぬかな」

と書きて、同じ一か21(さ)ね(〇重)に包みて、面白き紅葉に付く。宮「見ばや」と宣へば、「さぞ見給へ22ほ

校異 1 [イ]まゝ。2 [内]難き。3 [イ]ナシ。4 [イ]か。5 [イ]く。6 [イ]ば。7 [イ]はせ、[内]考異せ。8 [イ]え。9 國イは。10 [内]ゝ。11 [イ]さ。12 [内]に。13 [国]す。14 [内]宣。15 [イ]は。16 [内]は。17 [イ]け。18 [国]る。19 二字[内]考異ナシ。20 [イ]や。21 一字[イ]ニヨリテ補フ。22 [イ]まアリ。

しう侍1る2」とて出ださせつれば、召し寄せて、はたえ見給はず。女御の君いと清らなる女の裝束3お取り4給ひて、三の宮請じ奉り給ひて、「5たれ、かゝる所よりは、たゞに物せざなり」とて、「こ6との御使に物し給へ」とて奉り給へば、7もの出で給ひてかづけ給ふ。亮の君、下8もて拜して參り給ひぬ。中納言9、奉10り給へる物どもを取り寄せて見給へば、甕に、練りたる打綾、一には練絹、いとよき、口もとまで疊み入れ11、12おも〔○折〕櫃どもには、一つには白銀のこ13ゐ〔○鯉〕、同じき鯛一14おり〔○折〕櫃、沈の鰹造りて入れ、一には、沈蘇は15ら〔○枋〕をよく／＼切りて一折櫃、16合せ薫物三種、17香のふかう〔○文匣カ〕、黄金の壺の大きやかなるに入れて一折櫃、18味噌と書19す付けて、赤20むたいす21〔こ〕し、白22き衣を、縫目はなくて、續飯などして、海松のやうにして、一折櫃、白き物を入れたり。今23二には、葡萄丁子を、鰹突の削り物のやうにて入れたり。委しく見つゝ煩はし24御心入りてかく爲給25ひつらむ、殿にはさりげもなかりつるものをなど26物も〔○思〕ほす。内侍の督の大殿見給ふ。夜さりつ方になりぬれば、大宮に御湯殿參る。宮も御湯殿し給ふ。

かゝる程に、涼の中納言殿より27産養あり。子持の宮の御前に、白銀の衝重十28二、同じ29御器据30へて、

校異 1 [不]り、[図]らん。2 [国]らんアリ。3 [不]を。4 [図]出ださせアリ。5 [不]こ。6 [不]ナシ。7 [不]殿輿、[国]持て。8 [不]り。9 [図]考異はアリ。10 [国]れ。11 [不]てアリ。12 [不]をり。13 [国]ひ。14 [国]を。15 [不]う。16 國イ二字ナシ。17 [国]靡アリ。18 [図]海松。19 [不]き。20 [図]衣、[図]考異むひ。21 一字[不]ニヨリテ補フ。22 [図]ナシ。23 [図]一。24 [図]くアリ。25 [不]は。26 [不]お。27 [図]御アリ。28 [国]に。29 [不]きアリ。30 [国]ゐ。

敷物1打ち敷き、いと清らな2り。御重どもの中には、皆物あり。3二つには綾を練りて、一つには4花斑纐5纈、一には色々の織物、一つには白き6纐、一には練7貫、一には練り繰りたるいとすゞしき絲、物うるはし8き入れたり。量高く入れて、重き物を据9ゑたれば、10を〔○押〕されてかた〔○片カ、方カ〕にあり。女御の君の御前には、沈の折敷、同じき高杯に据11ゑて12たゝの〔○九〕つ。打敷物13の外にいと清らなり。沈の御衣箱、黄金の置口したる六つに、か14け物、女の装15ことて、白き袿十重、袴十16て、蒔絵の御衣櫃に入れて、物五斗ばかり入るばかりの紫檀の櫃五つに、17た代、18彈碁代、量高く入れた19る隅物20とて打ち具し給へり。又左の大殿よりも21、22た代隅物、御前の物いと清らにし給へり。式部卿の宮、23民部卿の殿よりも、樣々しつゝ奉り給へり。

かくて、中の大殿の南の廂上げわたして、御座ども敷き24りたした25る。主の大臣の君出で給ひて、26衞門の佐して、27左大將式部卿の宮の御方に申し奉り給ふ、「今宵いとさ28らぐ〳〵しく侍るべき。いとも〳〵畏くとも、渡りおはしましなむや。翁29たゞならば、舞ひて御覽せさせん」と聞え給へれば、「みいじき見物侍る

校異 1 因のアリ。2 国る。3 国一。4 国花文。5 国のアリ。6 因考異はう〔○袍カ〕アリ。7 イ絹。8 因く。9 国ゑ。10 国お。11 国ゑ。12 イこ。13 イごと。14 因づアリ。15 イ十具、イて、イ一具敷、因考異一具。16 イ具、因具。17 イ碁。18 イ碁。19 因り。20 国ども。21 因さまぐ〳〵アリ。22 イ碁。23 因民。24 イわ。25 イり。26 因左アリ。27 国右。28 イう。29 イ此所。

べかなり」とて、1おはしましぬれば、それより下はえ籠りおはせで、皆おはして2皆3泣い給へり。此の御前よりの事4ども、皆源中納言殿し給へり。いと清らに5て參6る渡り給ふ。御酒強ひ物など參りて、中務の宮一ねだれ物吐き給へり。式部卿の宮には草鞋の片足をなむ。それ7に例のやうにはあらで打ちひがみて、兵部卿の宮、「源中納言の8みよとて〔〇見よとてカ、御夜戸出カ〕姿こそしどけなかりし9か。10うひ〔〇宿〕はま11へ〔〇擇カ〕の12師13も14には見えじ」中納言、「いかなる15おもにか侍りけむ、16良中將の17遊びは、下の袴を著て、皆掻い縮みて走るめりし。それもその道の人とて、裸鶴脛にても除がれじや」「正頼が男どもは、例よりも裝束うるはしくして、笏取り括りてぞ練り出でにたりし」18民部卿の19「あれは、宰相の朝臣世に交らはましかば、いかなる猿か20ら〔〇樂〕をして一日か〔〇借カ〕21らまし」主の大臣、「宮に侍ふ者いかに思ふらむ。正頼をぞ恨むらむかし。先つ頃、ま22るで〔〇罷出〕んと物せしを罷出させねば、いみじう怨ずらんかし」左の大臣、「げに23思すらむ。母かたとひ〔〇方どひ、味方スル意〕あれば、忠雅24らが言ふ事は、所謂25にし〔〇牛〕の走るぞかし」と宣へば、一度26十度ほゝと笑ふ。

かうて御遊びし給ふ。琵27わ〔〇琶〕式部卿の宮、箏の琴左の大臣、中務の宮に和28たむ〔〇琴〕、兵部卿の宮

【校異】1 囨皆アリ。2 図ナシ。3 国並み居、囨突い。4 図イナシ。6 図しアリ。6 囨り。7 囨を。8 囨御子、図考異見に。9 図今。10 囨よ、国こ。11 国つ、図ひ。12 国と。13 図どアリ。14 囨とアリ。15 囨折。16 囨頭。17 囨朝臣。18 図民。19 図宮アリ。20 国う。21 図あアリ。22 国か。23 囨さアリ。24 囨ら。25 囨う。26 二字囨ナシ、図に。27 国は。28 囨こ。

笙の笛、中納言横笛、權中納言1大篳篥と合せて遊ばす。藤中納言「ひがみたるやうなり2。土器取りて罷出3ん」とて、紫苑色の織物の指貫4、同じ薄色の直衣、唐綾の掻練重ね5て出で給ふ。この頃例よりもかた9き盛りなり。下襲の裾いと長く7はしり引きて、土器取りて出で給ふ。兵部卿の宮、「あなめづらしや。いみじ8くも木深く9も譏られたりつるかな」とて、目を10鋭ぎて、皆見守り給ふ。更に難なき帝の11罪な12る。源中納言なずらひたりと言ひしかど、今はいとこよなし。中納言式部卿の宮に御土器參り給ふ。宮けちず(〇缺ちずカ)13み14たぶ(〇食ぶカ、給ぶカ)。15さて16ゆき17給ふ、18さて、

姫松はいつも生ふなる19宿なれ20ば蔭涼しげに見ゆるたびかな

中納言、

いさやまだ蔭はしられず姫松21は年經て永き色をとぞ思ふ

中務の宮、

木高くて涼しき蔭に宮人の圓22ゐ(〇居)するまで生ひよ姫松

兵部卿の宮、

校異 1国にアリ。2因とてアリ。3イてアリ。4因にアリ。5イ着アリ。6イち。7イ端、因拂ひ。8因考異う。9イナシ。10因とどめ、因考異とめ。11イ御アリ。12国り。13国飲アリ。14国給ふ。15イま、因と。16国かく、因かく聞え、國イ書き。17国宣。18二字国ナシ。19因考異岩。20国ど。21イの。22イる。

心ゆく心地こそすれ二葉なる松の代々のみ思ひやられて

左の大臣、

二葉より生ひ並1べつゝ姫松は2波をば3増さで千世は過ぎなん

藤大納言、

岩の上に今より根ざす磯の松立たば4憂き身5をありと6だに見む

右の大臣、

年經れば頭の雪は積れども小松の7風も待ち出でしがな

8左大將、

昔生ひの松にし傚ふものならばま9だ緑見の賴もしきかな

民部卿、

若緑二葉に見ゆる姫松の嵐吹き立つ世をも見て10しが

平中納言、

末の代の遠くもあるかな千歳經る松の二葉に見ゆる今宵は

源中納言、

校異 1 国ひ。2 内枝。3 内去ら。4 因考異浮木。5 因に、因考異ぞ。6 因賴ま。7 内蔭。8 国右。9 國イつ鍬。10 因考異まし。

姫松1は林とお2ほす此の宿に幾度千代を數へ來3つらん

權中納言、

綠兒の多かる中に二葉より萬4に〔○代〕見ゆる宿の姫松

これより下5にあれど書かず。かゝる程に式部卿の宮、「事6御じめ〔○始〕とこそ言ふなれ。い7つゝあの兒なむ」主の大臣「侍りかし」とて、輪臺を氣色ばかり立ちて舞ひ給へば、御前の司々8樂の遊人ども、男ども9を奏しつ10く11すとも彈きたてつゝ、一度に打つ物の音に合せて、その12樂をする程に、三の宮黒13うかなる搔練一重、纈の綺の指貫、同じ直衣、蘇14わう〔○枋〕襲15〔の〕下襲奉りて、土器取りて、中務の宮に參り給ふ。御樣、丈そびやかに、氣高きものから、いと匂ひやかなるもてなし、いと心憎16くて、17中務の宮に參り給ふ。御官彈正の宮と同じ、御年廿三。例ありとて、飲ちず三度ばかり參り給ふ。これを18式部卿の宮右の大臣、19いと目出たし、20これ21かゝる聟にせんと思22して、左23大臣「御肴に24せむ」と、筝の琴25にいと面白く搔い彈き給ふ。式部卿26宮、我も思はす事なれば、いとをかしと思して、打ちはゝ笑みて見給ふ。中務の宮、御土器取りて舞ひ給へり。右の大臣に參り給ふ。皇子は、叔父宮達の御座の下に着き給

校異 1 ｲを。2 国ふ。3 ｲぬ。4 ｲよ。5 因考異も。6 図於。7 国づらそ、因考異づら、國づくあ。8 因ナシ。9 国樂。10 ｲつ。11 国琴ど。12 ｲ數。13 ｲら。14 国は。15 一字ｲニヨリテ補フ。16 因し。17 十八字因ナシ。18 因見給ひて。19 國イ二字ナシ。20 因誰。21 三字ｲナシ、因の人か。22 因す。23 因のアリ。24 因何よけ。25 国を。26 因のアリ。

ひぬ。かくて御土器下る程に、右1大臣「腰屈まりたる翁をのみ奏でさせ給ひて、た2しに3くやは止み給ひたんずる」と宣へば、源中納言立ちて舞ひ給ふ。上下かく〔○樂カ、斯くカ〕面白し。かゝる程に、四の宮、赤らかなる綾搔練一重、靑鈍の指貫、同じ直衣、唐綾の柳襲奉りて、土器取りて、兵部卿の宮に參り給ふ。4見れば、いと大きやかにふ5つゝかに肥え給6ひつるが、色白くもの〳〵しくおはす。これも聞し召し7つ取り給ひて8舞し給ひつ9る、源中納言に賜ふ。取り給ひて、10作文に11は又參り給ふ。宮は續きて著き給ふ。これは内にぞおはする。年廿二。12右の大臣「此の順の舞は知りたらむかし、違ひて13こなら14はをも〔○これ習はぬもノ誤脱カ〕淺ま15し、た16く17人もせさせむ」と宣へば、御18堂の大納言立ちて、萬歲樂を舞ひ給ふ。樂19面白くす。右の大臣「萬歲樂は、人の20御して心なりけ21る22に23いても、鶴の命24をい25に見え26し」と宣ふ。六27宮、紅の搔練のいと濃き一重、櫻色の同じ直衣、指貫、葡萄染の下襲奉りて、土器取りて、左の大臣に參り給ふを見れば、28いと小く肘近に、ふくらかに、愛敬づき給へり。御年廿。左の大29すにぞおはす30な。例の缺ちずに參り給ひて、大納言に賜ふ。又それさ31く〔○更〕に參り給32ふ。

〔校異〕1 囝のアリ。2 囝ゞ。3 囝て。4 囡これは。5 囡くら。6 囝へ。7 囡ナシ。8 囝舞ひ。9 囝ゝ。10 囡三の宮。11 囡ナシ。12 囡左。13 囡此所。14 囡ぬ。15 囡じ。16 囝ゞ。17 囡一手遊ば。18 囝太郎、囝弟。19 囝いとアリ。20 囝さ。21 囝り。22 囝分。23 國わアリ。24 囡老。25 囝も、国かゞ。26 囡じ。27 囡のアリ。28 二字國イナシ。29 囝殿。30 囝る。31 国ら。32 国ひ。

1誰も2習給ひぬ。源宰相、3此の君も舞ひ給ふ4を」とて、猿樂する人にて鶴舞をす。上下一度に5同々
と笑ふ。八の御目ども覺めて、いと興ありと思ほす。八の宮は、淺黄の直衣指貫6、今様色の御衣、櫻襲
りて、左の大臣に土器參り給ふを見れば、いと貴にきびはにて、何心もなき顔し給7ひて、御年十七、左の
大臣8ぞ、「殘らず多くあた聞し召しぞ」とて、氣色ばかり9舞ひ給ふ。取り給ひて、あ10さし舞しつる宰相
に賜ふ。賜はりて又11參りあへる程に、12左大將の君、「鶴舞はこれならぬ手をば知らぬ」とて、鳥の舞を舞
色ばかり13給ふ程に、右近の幄より孔雀を出だす。左近の幄より14二つを出だして、その樂を上下ゆすりて
すれば、鳥も折れ返りて舞ふにはやされて、此の大臣その舞をし出て給ふ程に、女御の君の後に生れ給ひし
十の皇子、四ばかりにて、御髪振分にて、白く美しげに15たへて、御衣は濃き綾の袿、袷の袴衵にて、蘇
芳染の綺の直衣著て、土器取りて出で給ふ。おほ16くおほ祖父大臣兄宮達、「誰に17ほゝ」と、18二所、「あ
らず」とて、19左大將の御座におはして奉り給へば、20ついで給ひ21に掻き抱きて、膝に据ゑ奉り給ひて、
土器を見給へば、女御の君の御手にて、

一夜だに久して22うなゐ蒼田鶴のまに〳〵見ゆる千歳なになり

【校異】1〔イ〕これ。2〔ロ〕舞ひ。3〔ハ〕此所。4〔イ〕ものアリ。5〔イ〕ほゝ。6〔イ〕着アリ。7〔ロ〕ふ。8〔イ〕に。9〔ロ〕參り。
10〔ロ〕され、〔國〕さ。11〔ロ〕舞ひ。12〔ロ〕右。13〔イ〕舞ひアリ、〔イ〕しアリ。14〔ロ〕は鶴、〔國〕イふくろ鶴。15〔イ〕肥え、
〔國〕三字ナシ。16〔イ〕ナシ。17〔イ〕ぞ〳〵。18〔ロ〕問ひ給ふに。19〔國〕右。20〔イ〕突い居。21〔國〕イナシ。22〔イ〕ふ。

「人も見知1かね2ばよくお3かすとのみぞ4見ゆる」大殿「宮5かた6はすべし。中納言いとあはれ7に8思ひ聞えたり。見所なからむ人さ思9(ふ)べき人10にあらず」北の方「御息所も、さばかりおはしますめりし。帝のいみじく時めかし給ひて、此の頃もとく11參り給ひねとのみこそは度々ある御文を見れば、あめれ」大殿「そこをこそいかに見給ふらむ。よき人多く12も語りしものの13がにをに一人につきにたるよ、かゝる妻持たりける者14の我と云ひけるとこそは見給15ふらめ。16今だに頭搔い臥せ、れ17ゐ(○例)の衣打ち著て見え奉り給へ。中納言の面伏なり」北の方「げに、子ながら耻かしや」18「同じ時の殿上人のさながらある19世に、我があれば、え20うつ21 22くはあらでその座に上達部にてありつるも、あはれ早や23宮して奉りつる土器も賜ばむ」とて、枕上に打ち置きて、二所臥し給へり。24女御の君、乳母を召して「日暮れにけり。起し奉りて物參れ」と宣へば、參りて、「御臺侍ひたり」と聞ゆれば、中納言「なぞの女ばらはも25ゐ(○物)參る。花盛りを26こそ27まろ28ぞよきもの」とて起き給はず。「しか」など聞ゆれば、女御の君「醉ひぬる人こそ怪しけれ。人の怠るをだにさばかり云ふものを」など宣ふ。その日暮れぬ。

校異1イら。2因ど。3イは。4因聞。5因は。6因よくおアリ。7イと。8二字イナシ。9一字イニヨリテ補フ。10イも。11國イに入。12因持た。13イかく鬼、因中に、因かく、因考異かくよに、(同)かにかくに。14因ナシ。15イは。16因いま〳〵しうとか云ふめれど、因考異今だにしらか云ふを。17国い。18因大殿アリ。19因にも。20以下七字因ぞ越えつべうはあらじ。21イらアリ。22一字イつ。23因十のアリ。24因かくてアリ。25イの。26二字因ナシ。27イまつ(○待つカ、先づカ)。28イは。

夜も明けぬ1。つとめて、中納言、「これ昨日か今日か」と宣へば、人々いみじう笑ふ。驚きて2、「怪しくもありけるかな」とて、物急ぎて參らす。かくてその日は九日なり。「かねて仕3まつる人4延びぬべきに、その日ばかり、わざとに5はあらで、たゞ御肴ばかりの設けして、内外のこれかれの御料など設け6に、此のと7り〔○殿〕にもたゞ氣色ばかり」と宣へりければ、「物宣はぬ人のかく宣ふ」とて、よくはあらねど設けたり夜。さりつか8さ〔○方〕、督の大殿の御髮搔りて、搔練の御衣、御9小10そうぎ〔○袿〕など奉りて渡り給へり。女御の君も、さておはしましたり。宮も起きておはします。東面の廂に御座敷きて、御褥ども打ち置きたり。簀子にも御座敷きたり。母屋の11御簾に添へて、御12帳をぞ立てわたしたりける。中納言の君、北の大殿に、「渡らせ給ひなんや」と聞え給へりければ、大臣おはした13り。14宮達例のごとおはす。殿の君達、中納言よりはじめて、皆おはす。右の大臣三條殿に、「おはしまさせんや。今はかゝる御賀を」とて君達して、かの15御方に御消息聞え給へれば、大將殿おはしたり。「16彼所に」とて内に入れ奉りつ。かゝる程に、中納言の設17〔け〕させ給へりける御前の物ども皆參りぬ。宮の御前には、白18な〔○瑠〕璃の衝重19には六、下には20金の杯、上には21な〔○瑠〕璃の坏など据ゑて參りたり。内の物ども透きて見ゆめり。女御の君督の

校異 1 因ればアリ。2 不起きてアリ、因起き出給ひアリ。3 不らアリ。4 国のアリ。5 不ナシ。6 不ける、国らる、因よ。7 不の歟、国の。8 不た。9 國ナシ。10 不う。11 因隔。12 不几歟、因几アリ。13 不る。14 國皇子。15 三字因ナシ。16 因畏く。17 一字国ニヨリテ補フ。18 国る。19 国六つ。20 因白アリ。21 不る。

大殿1は、沈の折敷2六づゝ、男宮達には浅香の折敷3前に4〔5六〕づゝ参れり。管子に中納言物ー給ふ。そい6御前には蘇枋の机7に、上達部には8二、たゞ人には一つ参れり。これは異人なし。殿の君達の限りなり。主の大殿、「何方9の10中納言11の宣12 13さへや。誰々しる14人に15くか正額も侍らむ」中納言は侍ひ16てければ、主の大殿17、「仰せ言にて請じ入れ給へ」と父大臣に申し給へば、「早籠り入れ」と宣ふ。主の大殿「忠純の朝臣も今宵は猶籠り入れ」と宣へば、二所ながら入りて居給ひぬ。かゝる程に、内裏の后の宮より、例の白銀の衝重十二、同じ御坏18にして、19内に唐綾の覆20六、おもひ包みて、すみ物21多にて中納言の御22供に御消息して奉り給へり。又春宮に侍ひ給ふ中納言の妹のもとよりも、23一斗ばかり24の金の甕二つに、一つには蜜、一つには甘葛汁入れて、黄ばみたる色紙覆25いて、荷ひて、二尺ばかりの白銀26の鯉二、生きたるやうに造りなした27り。紅葉の造り枝に付けたり。28しん〔○紺〕瑠璃の大きやかなる餌袋29二つに、白銀の銭一餌30袋31に、果方を火乾のやうにしなして一餌袋、沈な小鳥のやうに造りなして一餌袋、鳥の毛を刹ぎ集めて、青き薄様一襲づゝ覆ひて結ひたり。御文は32香の紫の薄様一襲に包みて、紫33ほん〔○苑〕の造

校異 1 イにアリ。2 国六つ。3 二字国ナシ、因考異御前ごとに。4 一字イニヨリテ補フ。5 国六つ。6 國ナシ。7 国二、因二つ。8 因二つ。9 国ぞ。10 因ぞアリ。11 因ナシ。12 国ふアリ。13 因ナシ。14 因べ。15 イて。16 國にく。17 イのアリ。18 因ども。19 因上。20 イ六、折櫃組みて、国六、折櫃積みて、因したり、折櫃。21 イ覆ひて、因いと清らにて多かり。22 イもと。23 因物アリ。24 因入る。25 国ひ。26 国ナシ。27 因る。28 イこ。29 国三。30 國イ二つ。31 因ナシ。32 イ唐。33 国を。

て出1されたり。かの梨壺の御衣袋ども召し寄せてあけて見給ふ。主の大臣、「いとめづらし2き修法物」もかな」と宣ふ。3左大將4大殿、「あはれいかにして侍らん。母宮こそはしたひ(〇上三字衍カ)5し給ひつらめ。いと物清7うに心8おはせし人ぞかし」と見給ふ。かくて、黄ばみたる一襲に黄金の錢一9づゝ十包、白き色紙に白銀の錢一包包み、白き色紙をば外にうるはしく出ださせ給ひ、黄ばみたるをば10大人し11て御前12とりに參り給ひつ。碁雙六13は參りた14る。主の大殿、「い15ほ(〇魚)爲ことにはさ16る(〇更)になし」と宣へば、御簾の内17へさし入れ給ひつ。かくて内外18攤打ち給ひて、御土器度々になりて、あぶらよき程にさし給ひつ。東19攤など童大人打つ。20たこの21琴は、22いふそう(〇有職カ)多く打ち取りたりける、23合子一づゝぞ女房達は賜はりける。中納言の君宮達は皆打ち入れつ24ゝ。

かゝる程に夜いたく更けぬ。中納言の君さ25こそ(〇裝束)かれたる御琴三つ、26箏三取り出でさせ給ひつ。御箏も一つ聲に調べ給ひて、琴に手一づ27く彈き給ふ。その音更に云ふべきにもあらず。かく彈き28しろみて、わが御琴は「これ内わたりに」とてさし入れ給へば、「琵琶は忍びて宮わたりに、29箏の琴は30わざと人

校異1因だアリ。2因うし給へる。3国右。4国のアリ。5因ナシ。6因考異ふ。7イら。8因ばへアリ。9国包。10四字因大殿達の。11一字イく。12二字国ども、イナシ、因ごと。13因の具、因考異ナシ。14因り。15国を。16イら。17因に。18イ碁。19イ碁、国琴。20イたゞ、因こゝ。21因碁、22因ゆう。23因が火乾。24イナシ。25イう。26イ御アリ。27国ゝ。28因こゝ。29因箏。30イ御里人、国御前、國里人。

に」と言ひつゝ入るれば、[1]さみ[2]ども取り[3]つゝま[4]（ゐ）〔〇參〕れば、女御の君、「あなうたてや。いかなるべき事」[5]と[6]、帥の大臣、「さ聞ゆる[7]事は侍らぬものを」とて、箏の琴をいと面白く彈き給ふ。しばし彈かせ奉り給ひて、女御の君[8]は、かの御琴をいとをかしく搔き合せ給[9]へば、宮[10]おはしりへき奉り給へば、琵琶搔き合せ給ふ。いと面白し。琵琶は[11]たなほ上手なりと聞[12]き、しばし彈かせ奉りて、橫笛はみづから、笙の笛は彈正の宮、篳篥[13]中納言[14]にさし奉り給ふ。中納言笛をいと音高く吹き立てたり。異はしば[15]し合はせ[16]て吹かず。人〳〵の君達[17]に、「これにはは聞えぬ笛の音かな。左衛門の[18]上にやあらむ。聞かばや」。三條の北の方のわざをせさすらん。さても[19]人[20][21]とそも遊び給ふかな」など宣ふ中に、[22]良中將まどひ出て、源中納言に、「いざ給へ、これに。此處にいといみじき物の音どもかな」[23][24]た〔〇萎〕えたる狩衣など著て、[25]今まで、東の對の隅[26]に御格子との間に入り立ち給ひ[27]ぬ。琴笛ども吹き合せ給ひて、いみじく遊び給ふ。隱れ給ひて源中納言、「いみじき橫笛の音かな。箏の琴は北の方のにやあらむ。いまだ聞えぬ聲す。此の主、何心ありてせぬわざ〳〵[28]とや響きてし給ふらん」。中將、「いかゞはさ[29]あらざらむ。物の上手

校異 1 イ才、宋君。2 因達。3 図て。4 一字イニヨリテ補フ。5 図に。6 国かアリ。7 図ごと。8 國わが。9 図ふ。10 国をしかつき、図おこし。11 図考異ナシ。12 図し召して。13 図は權アリ。14 十字國イナシ。15 国〳〵。16 国ナシ。17 イナシ。18 国督。19 国〳〵アリ。20 國イ人アリ。21 イ人そ、図々。22 イ藤。23 図とてアリ。24 イなか、国な。25 国いまして。26 イと。27 国ナシ。28 イとや日頃し、イとやころてし、異なくし出で。29 図考異せ。

は、手の1はた足らぬばかりの嬰2へは3つ〔○侍〕らじ4は、かゝる御中にて、留まるべければにこそ侍るめれ。かくし給はずば〔○隠し給はすはカ〕、内裏5に聞し召さむにもいと物の映なからむ」とて聞き騒ぐ程に、遊びし止みぬ。6左大将いと7心地よく酔ひ給ひて、「など8今宵は宮も出で給はぬ。さうぐし」と宣へば、宰相の君と云ふして、「只9いざ寝て10」など聞えさせ給へれば、「居士よりは近か11んめれば、12通辭なくとも承りぬなむ。この朝臣共の痴者や遊び侍るとて、制して13賜ばねば、まだこそ給べ酔はね14ば、いかで御簾の内の御15こしけ〔○土器カ〕賜はらん」と聞え給へば、16宮の君17と云ふ、「参り侍らむかし」六將。「さ18る〔○釋迦カ〕の供養は否や」など宣ふ程に、大きなる土器を取りて、中納言主の大臣に参り給ふとて、

みや19濱の洲崎におりて鶴の子に寄るな20ま〔○波〕立ちぬ岸を見せばや

大臣、

諸共に洲崎の鶴し21老いたらばのどけき岸もな22にかなからむ

とて、23左大将に参り給ふ。取り給ひて、

立ち24居て25ぞ千歳も見えむ潟の洲に26掻い籠め見ゆる鶴は幾代ぞ

校異 1[イ]至。2[因]ひ。3[国]べ。4[因]琴アリ。5[因]の。6[国]右。7[因]こゝろ。8[イ]かアリ。9[イ]今。10[因]をアリ。11[国]らアリ。12[因]通辭。13[イ]賜は。14[イ]ナシ。15[イ]う、[イ]こう、[国]かはら。16[國]イ君。17[正]がいらへ。18[イ]か。19[國]イはさ。20[イ]み。21[イ]生ひ立た。22[イ]ど。23[国]右。24[国]出。25[イ]も。26[国]卵の。

彈正の宮1奉り給ふ2程に、父大殿3に中納言「召して4きれに」5といと高く言ふ。四の宮「いと6うらはやし」と宣へば、「申さるゝ事の侍らば」と宣ふ。父大殿打ち笑ひ給ひて、「これは望む所なり。猶希有7なりや」とて、今一度參り給ひぬ。さて宮に參り給へば、宮、

かへりて8ぞ千代も見るべき卵の中に籠れる鶴は幾代經べきぞ

四9宮、

東路のかひの中なる鶴なれや行き返りつゝ千代を見るべき

六10宮、

遙かにも思ほゆるかな行き返り千歳見るべき鶴の雛鳥

八11宮、

水の色は幾度澄むと川の洲に12隱れる鶴の行末は見む

權中納言、

洲に住めば底にも千歳あ13り鶴の流れて行けど盡きずもある哉

左大辨、

校異 1 因にアリ。2 不ナシ。3 因ナシ。4 不來たれ。5 不ナシ。6 不忝ま。7 國しアリ。8 國イふ。9 因のアリ。10 因のアリ。11 因のアリ。12 不返。13 國る。

まことにや千歳を經ると長き夜をおきつゝ霜の鶴の世は見む

宰相中將、

水底の騒がぬ洲にぞ鶴の子の水なる1底に千代も2見てしが

かくて源中納言の奉り給へりしかづけ物3など4いまだ使はれぬを、女御の君取り出で給ひて、御簾のもとなる人々に一5手〔○具カ〕づゝ持たせて、打ちそよめかせ給へば、中納言内にやを6ら手をさし入れて取りつゝ、先づ主7大臣より初め奉りて、つぎ〳〵かづけ奉り給ふ。左大辨宰相中將までは女のよそひ、それより下は白張一襲、袴一8具9、宮あこ君今はかうぶりし10つゝ、今は六位なれば、白張一襲11づゝかづけ給ふ。

〔畫詞〕12中13の御殿の東面。宮達四所な14をし〔○直衣〕姿にて參り給へり。これは右の大臣、容貌いとあてに物々し15て淸16うにて、愛敬づき給へり。御年五十四。されどいと若く見え給ふ。17左大將色合もてなし、中納言に似給へり。氣近く匂ひやかに淸らなり。年四十18二。權中納言いと淸げなり。「このこ19ゐ〔○鯉〕は生きたるやうなるものかな。ほと〳〵庖丁望まむとぞ思へる」と宣ふ。御產養の物あり。粥桶の蓋には、生絹の絲のあ20り〔○赤〕みたるしりふた〔○圓座〕と云ふ物のやうにしなして覆

校異　1因色。2因住ならむ。3図ども、因どもの。4國は。5因具。6図ら。7図のアリ。8因具。9図づつアリ。10因給ひて。11二字因ナシ。12因こゝはアリ。13國納言アリ。14国ほ。15図く。16図ふ。17国右。18国三。19国ひ。20図か。

1いたり。これは北面。2對面所。3さいきの宮より奉り給へりつる御車、4並べ据ゑた5る。6北の御殿。女御の君、內侍の督の7殿達の中に物ども賜ふ。

かくて又の日の晝つ方になりて、御乳付歸り給ふ。贈り物いと淸らにし給ふ。內侍の督の殿も歸り給ひなどして、女御の君、宮など聞え給ふ「かく侍り習ひて8、いかにつれ〴〵9に思さむ。しばし10 11もと12思ひ給ふれど、旅作苦しう13し侍ればなむ」大宮14「見奉らではえ侍らじ。今又とくも」とて、15左の大臣よりうるはしき網白疋、御達の中に出ださせ給ふ。かくて渡り給ふ。御前大將殿中納言殿取り合せて、16五位17四位いと多かり。大將殿門へ行き著きたれば、御車共は此の殿18御門にあり。近さは一町餘りばかりあり。中納言も御送りし給ふ。かくて渡り給ひぬる後、主の大臣、いみじう名高き19上馬二つ、驪二大將殿に奉れ給ふ。御消息、「これは御供に侍はせむとしつるを、急がせて渡り給ひにければなん」。又北の大殿より、藤綺の御衣櫃五かけ、す29わう〔〇蘇枋〕のだ21は〔〇臺〕、朸22こして衣二かけ、唐綾23 24織25二かけ、ゑ26い〔〇衣被香〕一つ、丁子一つ入れて、大宮の御文、督の大殿の御許に、「近く物し給27ひつる程にだに、聞え

校異 1 国ひ。2 イ宰燃。3 イ后。4 イなど。5 イり。6 底こゝはアリ。7 底大殿御。8 底考異はアリ。9 四字国イナシ。10 底かくてアリ、国おとづれにもとアリ。11 イを。12 底考異もアリ。13 正ナシ。14 國イうアリ。15 底右。16 底円。17 底五。18 イのアリ。19 底乗。20 国は。21 イい。22 イさ、イに、イナシ。23 イのアリ。24 イ類。25 国房。26 イび。27 青字傍書ニ「へ板」トアリ。

1てまほしかりつるを、騒がしく2のみありつればなん。いと嬉しく、残り少なく思ほえつる3行く先長くなる心地して、物の音のいとも〳〵哀れなるを4んな、蓬萊と云ふなる所は近かりけると思ふ。さてこれは5すの人々に賜へとて6」などあり。宮の御方よりは、后の宮よりありし衙重の内の物7入れながら、蒔繪89（お）きぐち（〇置口）のこ10ゝろも（〇衣）箱に、夏冬の御11そう（〇裝）束二裝づゝ、夜の二襲、同じ御髮の箱四つ、一つには沈、一つには黄金、一つには瑠璃の壺、四つに合薫物入れて、今一つには黄金12壺に薬ども入れて、麝香一13つぞ一つづゝ入る、黄金の壺十据ゑて、淸らなる包14どもに包みて、宮の御消息にて、陸奥紙に女御書き給ふ。「自ら聞えむとすれど、手震はれてなむ。日頃はいと頼もしく覺えつるを、今よりはいとつれ〴〵になん。物覺えず苦しかりし心地、すなはち止め給ひてし物の音の、いと忘れ難15さに、葉ひもせまほし16もの17をとなん。これは犬の屎に濡れ給ひぬめるを、脫ぎ替へ給へとて」な18どあり。中納言まだ物し給ふ程にあり。北の方の女御の御文見給ふ19、中納言も「まだこそ見給はね」とて見給ふ。「これもいとよき御手にこそ」父大殿「昔より20ゑ取り給ひつる上手にて、藤壺の物21の師に劣らざるらん」中納言、一日見給へりし22かば、23誰に勝りてこそ侍りしか」など宣ふ。奉り給へる物ども、御前に並め据ゑ御

校異 1イナシ。2二字イナシ。3イをアリ。4イなん。5イそ、因留守、因考異末。6因なむアリ。7五字イナシ。8国のアリ。9一字イニヨリテ補フ。10イナシ。11国さ。12イのアリ。13国臍。14二字因考異ナシ。15國き。16国く。17因考異ナシ。18因むと。19因をアリ。20イ名。21因せし。22因は。23イこれ。

馬共ひかせて見給ひて、大殿、煩はしく、疎からん人のやうにもはた、后の宮よりも忝なく1せさせ給へりける2かな。御息所の御中はよろしくもあらぬを、そこによりてせさせ給へるにこそ3はあらめ」中納言、「仲忠が許になむ4消息5侍りしとしきよにてなどあまた侍りき。6いと煩はし7う、人々の事8し給へるこそいと9おしけれ。中納言10のいといかめしき事多くし給へりつるかな。かしこにも、立たむ月ばかりにはかゝる事は侍るべかなるを、訪はではえ侍らじ。そが中にも、梨壺のいと哀れにて11侍はせ給へりしこそ、いかでなりけむと見給へりしか」大殿「そがいと哀れなりしをぞ見しや。そこを12ばよしとも13給はじを、宮何心14も思ひてし出だし給へりけむ。宮の15あこえいかでかは16せん」中納言「時々参17る。更にさる御氣色もなく、18心うつくしくなむ御前に召して宣はする」大殿「猶人は侍ふや。いかに思すらん、つゝましかりつるを、よべこそいと哀れに覺えしか」と宣ふ。北の方大宮の御返聞え給ふ。「畏まりて承りぬ。しばしも侍はむと思ひ給へるを、むつかしき引澁人19急ぎ侍りつればなん。いと哀れなる人も見奉らでは覺束なく侍るべければ、20今も21つかしきまでなむ參り22來べき。さてこれは、宿守23（の）ぞ（○望）む人多く侍るべかめる。まことや山近くと宣24（は）せたる25鹿の音にや侍りつらむ」と聞えさせ給ふ。女御の君の御返も、

校異　1〔イ〕もアリ。2〔イ〕よ。3〔図〕考異ナシ。4〔図〕御アリ。5〔図〕聞え給へること。6〔図〕大殿アリ。7〔イ〕ナシ。8〔国〕事しくアリ。9〔国〕ほ。10〔図〕ナシ。11〔国〕訪。12國ナシ。13〔国〕宣。14〔イ〕と、〔図〕に。15〔イ〕あこ君。〔図〕御心。16〔図〕ありけ。17〔図〕り侍アリ。18〔図〕御アリ。19〔イ〕のアリ。20〔図〕いと。21〔イ〕つま。22〔国〕て侍る。23一字〔イ〕ニヨリテ補フ。24一字〔国〕ニヨリテ補フ。25〔図〕はアリ。

かやうになむ。御使共なむどに、かづけ物祿など賜ひて、御返聞え給ひつ。中納言、「今[1]あしこにも侍はむ」などとて歸り給ひぬ。

大將殿[2]又女御の君[3]み、梨壺より奉り給ひし黄金の甕に、供御[4]を入れかへて、それに添へたりし[5]鰐小鳥火乾、餌袋に入れながら、藤壺より奉れ給へりし雉子添へて、内裏[6](に)奉れ給ふとて、心ざしありて仕うまつる掛貧の乳母と云ふが許に御文遣はす。「日頃物騷がしくて聞えず[7]なりにけれ[8]ば、などかそれよりも訪ひ給はぬ。さてこれは、子持の御殘り物なり。いと寒き頃なめるを、風もやらひ給[9](へ)とてなん。此の雉子などは、上に參らせ給[10]へ。交野にも御覽じ比べさせ給[11](へ)」とて、[12](乳母のもとには、沈の高杯[13]五、白銀の壺の)小さきに、黑方[14]の蜜入れたる黄金の[15]貝五つばかり、沈の[16]うせ[17]きりたりし紙に一包、青き色紙どもに包みて、五葉につけて奉り給へれば、乳母達藏縫所に侍ふ折にて、見れば、[18]典命婦達、「いづこよりあふぞ。興ある物どもかな」と言ひ騷ぐ。乳母、「仁壽殿の女御の[19]女一[20]宮の御產屋の殘り物とて賜へるぞや」とて引き開けつゝ見て、「いとをかしくしたりける物どもかな。こと[21]はりぞや」[22]と、「左衞門の督の君の御產屋の物、いかでかはかゝらざらむ」など言ひあへり。掛貧の乳母、「大殿達は、この乾

【校異】1 国か。2 国の。3 イナシ。4 国考異ナシ。5 國イこの。6 一字イニヨリテ補フ。7 イもアリ。8 國ナシ。9 一字国ニヨリテ補フ。10 国ひて。11 一字イニヨリテ補フ。12 十七字イニヨリテ補フ。13 イをアリ。14 国入れ。15 イ櫃。16 一字イか、イよ。以下九字国かつほ造りにしたる。17 一字国あ。18 イナシ。19 国君のアリ。20 国のアリ。21 国わ。22 二字イナシ、一字国ナシ、四字国内侍の。

物を1一きりづゝ打ち割り給へ」とて、「異物は2かぎ藥にせん」とて取りつ。

かくて奉れ給へる物、御文など持て參りて御覽ぜさすれば、上3怨じて、「わざとうるはしくしたりける物どもかな。鞢負が語りつらむは何事ぞ」と宣ふ。「此のかつ4 5を6くをしよせて〔○かづけ折り押し寄せ一カ〕切り7て侍り8つるは、何9とぞ10誰彼に11賜ひつ」と申す。「12様々にをかしくしたりける物13どもかな」と宣ひて、御袋は后の宮に、「女一の宮の殘り物とて物し給へるなり」とて奉れ給14へ、鯉15しき〔○か子〕などは、此の頃16子生み給へ17つる、時の更衣の御許に奉り給へり。「御文は我書かむ18く」と宣ひて、「これより聞えんとしつる程に19、鞢負がもとに宣20ひつるを、今は參り給21はぬかし。世の中のはかなくのみ22覺ゆるを、皇子達をしばしば見ぬなむ。參り給はむ時は、皇子達23女皇子て參り給へ。かの子持も久しくなりにけ24るや。おとなしくな25りたらんこそいぶかしけれ。26(ま)ことや27蒲生のとり〔○鳥カ、取りカ〕、28つらき29つに30なさるゝか。されど31誰32をこそ」とて、

「餘所ながら中淀みする淀33川にありけるこひを一つ見るかな

校異 1 [イ]ひと。2 [イ]風。3 [イ]御覽、4 [イ]けアリ。5 以下五字因はづくりをたばゝ。6 下二字國りお。7 因ナシ。8 以下六字因て。9 以下三字[イ]とも、国し。10 [イ]是。11 国賜ばはせつ、賜へ。12 [イ]いとアリ。13 國イこアリ。14 [イ]ひつ。15 [イ]雉子。16 因御アリ。17 [イ]ナシ。18 [イ]ナシ。19 [イ]なんアリ。20 [イ]へ。21 [イ]ひね。22 [イ]思ほ。23 [イ]十。24 [イ]り。25 [イ]られ。26 一字[イ]ニヨリテ補フ。27 因交野。28 以下三字国續き、以下四字因のつら。29 [イ]心、国右。30 因ぞアリ。31 [イ]これ。32 因考異ナシ。33 國イがい。

なほとくを」と宣へり。乳母1、「畏まりて承りぬ。自らも參りて聞えさせむと思う給2（へ）つるを、御あえ物のゆ3かしき程に、過ぐし侍4りつるとてなん。賜はせつる風藥なん5欲しく侍6るべき。御消息、かくなんと奏し侍7べれば、御時よく御覽じて、御文侍8る每々に自ら聞えさせん」と聞えたり。女御の君見給ひて、「内よりかくなむ宣はせたる」とて、一の宮に奉り給ふ。中納言見給ひて、「げにいかで參らせ奉らむ。9心地よく直り給ひなば參り給へかし」宮「あな恥かし。さらぬ時だにつれ〴〵と10參り給ふものを、今はいかでか見え奉らん」11沿、「過やはし給ひつる。御心とありし事かは。あな味氣なの御物恥や。仲忠12をも參る時は御前に召して、さぞ御覽ずるや。いかに思召すにかあらむ13ぞ、ほゝゑませ給ふ時多けれど、つれなくもてなしてぞ侍ふ14や」など聞え給ふ。15たまし（○御座）所も、興なる所も、照り輝きて見ゆる。御調度など更なり。御産屋どもは皆人おろす。御帳の帷子、御衣どもも、よきは內侍のすけ、さらぬ物ども一づゝおろす。16內侍のすけは院の大后の宮の人17、若くより、かくよき人の18子生み19に仕うまつり給ふ人なり。年は六十餘ばかり20なり。中納言は、內裏にもをさ〳〵參り給はず、步きもし給はず、宮21と犬22とを抱きうつくしみ23く居給へり。內侍のすけ御前に居て、「24今の程は何とも見奉り給ふまじきものを、生れ

校異 1 因のはアリ。2 一字〔不〕ニヨリテ補フ。3 国ゆ。4 二字因ナシ。5 因まうけまアリ。6 因り。7 〔不〕りつ。8 因り異事は、國る盡くに。9 因心。10 国見守。11 國イとアリ。12 國ナシ。13 〔不〕打。14 〔不〕なり。15 国お。16 〔不〕此アリ。17 〔不〕にてアリ、因考異なるにアリ。18 〔不〕御アリ。19 因考異給へるアリ。20 因考異にてあ。21 國イも。22 国宮アリ。23 〔不〕て。24 國イと。

給ひしすなはちより、御懐放ち奉り給はず、御1ゑとしに2そぼちおはします。萬の事3居立ち4具し奉り給ふを見奉り給へれば、5女もいと哀れに悲しくなん見奉る。御湯殿は6女仕うまつり果て7む8心地、かゝる所の宮仕へし侍りつれど、御迎へ湯參り、その行事をこそ6仕れ。たゞ藤壺の御局になん、大殿の、あまた出で來ぬる中に、これはいとかなしくなど宣はせしかば、御湯殿參り侍りし。此の宮の御時には、御迎へ湯をなん參り侍りし」と聞ゆ。10大殿「いと嬉しか11りなん。なほさし出で給へ。女子は見るかひなく生ひ出で給ふは口惜しかるべし。湯浴しがらとか云ふなるものを、12し出で13給へらば喜びもかしこまりも聞えん。あまた人には見せじとなん思ふ」と宣ふ程に、父君に尿多14しかけつ。宮に、「15誰は抱き給へ」とて、さし奉り給へば、「あなむつかし」とて押し16出でて、打ち17下へ向き給ひぬ。君、「頼もしげなの人の親や」18内侍のすけにさし取らせて拭はせ給ふ。宮「いかに19香臭からむ。あなむつかしや」とてむつかり給ふ。内侍のすけ20も、「藤壺の御21容貌の兒22顔に23(似)奉り給24ひつるかな。かれは少し小さくぞおはせし。こ25れはいと大きなりや26く」と、自ら27云ふやう、上28人し給ふべき人などは、又も出で來給ひぬ

校異 1因尿。2イぞ怖ぢ。3イ出で。4国て。5因嫗。6因嫗。7因考異てアリ。8イこゝら。又「こゝはは」ノ意ニ傍書シ青字ニテ「板」ト註セリ。9イつかうまつ。10因中納言。11因考異なり。12イ白く。13國イ線アリ。14イしてアリ、国にアリ。15イこれ抱。16因遣り。17因そむ。18国とてアリ。19国かくさゝ。20因この御子よ。21因方。22国のアリ。23一字イニヨリテ補フ。24因へ。25イナシ。26因嫗。27因思。28因仕へまつり。

べかめり。かゝりし人こそは、生ひ出で給ひて、萬の人1にてまどひ果てさせ給ひしか。今23いといみじ4や。御5せこし給ふまゝに、あてに6くらやけ7さのみまさりて、突きもし奉ら8ば9受けもしつべき御顔つきにて、花10織りたるごとぞなりまさり給ふ。宮のつい並11び給へば、花のかたはらの常磐木のやうに見え給12(ふ)こそ。先つ頃參りて侍りしかば、更に御宮仕へのやうにもあらで、たゞ13人の御中らひの樣にぞおはしますや。宮おはしまして、何事にかありけん、聞え給へりしかば、うちむつかりおはしまして、御髮を繰り出でゝ、御座のまゝに打ち添へさせ給へりしを見奉りしかば、縈しかけたるごとして、筋も見えず、隙もなく、同じやうに見え給ひしかば、萬の事忘れ14齡延ば15はる心地こそ侍りしか。さるは此の頃、御氣色にやあらむ、例のやうにも思したらざめり」中納言「長さは此の御髮と16」すけ「さばかりにやおはしますらむ」宮「我は人か。かの君はいといみじきものを。金の漆のやうにこそあれ。同じ所にありし時、常に比べて見しかば、かの御髮は、色と筋とは殊なりしものを」すけ「宮かくばかりこそはおはしまさめ。嫗が作り事聞えさするに17や18。なほ見奉り給へかし。それをかの御方19といと恐ろしくおはします20、ついまさり給へれば、見まさり2122にこそはおはすれ。又大殿の君の恐ろしくおはしますは、宮の御前におはす

校異 1国に、因二字ナシ。2国はアリ。3二字因考異ナシ。4因考異ナシ。5因年加はり。6国くゝやけ、因上臈し。7国にアリ。8国はせ。9国失せ。10因をアリ。11因ばせ。12一字国ニヨリテ補フ。13因のアリ。14因てアリ。15国へ。16国いかにアリ。17国は。18因はアリ。19国の。20因はアリ。21因考異しアリ。22国し。

れば宮の氣劣らせ給ふこそ。藤壺の1方はしも、殿下の大殿え打ち奉ら2ず給3えし」大殿、「忝なくはいかでか打たれ給はむ」すけ、「否や。まことはいとぞいみじきや。只今の人は、三條殿4北の方5に一、藤壺二6、宮三7よそおはすめれ。男は御前8、中納言、「まばゆくも宣ふかな。そこにあらば、心地過ぎぬべけれ」と宣へば、すけ、「さては思ほえずかし、かたはら9ほとりもなどて。罷り立ちなむ。今しばしも侍はゞ、又聞え過ぐしもし侍10り」などて、犬宮搔き抱きて入りぬ。中納言、宮に、「いみじうも物言ふ者かな。分いても、里人を賞むる11ぞ空日なる。藤壺の御方12まで罷出給はゞ必ず見せ給へ。内侍のすけの言ひつること、まことかと見比べ奉らん」宮、「まことゝぞ。いとよく物言ふ13をば。14この君は、見るまゝによくなりまさり、我は日々に怪しくぞなるや。昔だにこよなかりけり」中納言15も、「いみじき御16容貌にもあるかな。見なしにやあらむ、17とせむをもいと恐ろしげにおはすとは見奉らぬを、18さなる事は必ず見せ奉らせ給へ」宮、「いでそこたゞにはあらじ。事引き出でゝ騒がれば、聞きにくからむ19」君、「よしと見奉るとも、今は何事にか。昔だに引き出でずなりにし事を。上達部の御女の、許し給はぬ事を強ひて取20りも21いかにもしたる人22とは、公は何の罪にかあて給ふ。又殿も仲忠を殺し給は23ゞやみ給はず24ばこ25にあらましか。それも

校異 1 国かたはら。2 イせ。3 イはじ。4 イのアリ。5 イナシ。6 図考異にアリ。7 イにこそ、国にぞ。8 図ぞ一におはしますめれアリ。9 イ劣。10 図る。11 イとく。12 二字図ナシ。13 図かな。14 図か。15 国ナシ。16 図かたは。17 イ御前をも、イ越えむをも、国うたて、図考異御前そも。18 イき。19 図考異かしアリ。20 イる。21 図て去。22 イをば輿、国をば。23 イん、図では。24 図ナシ。25 イそ。

琴一聲掻い彈きて聞かせ奉らましかば、憎みも果て給はざらまし。さりし時だに過たずなりにしものを。いとよくさりぬべき折もありし1かば、帝の御女も賜はらずやありける」宮、「それはわが人2そもあ3くねば、御子の數にも思さで、たゞに棄つとこそ4思しけめ。昔は鬼5もこそは賜ひけれ。たゞ人なれど、此の君は親のさばかり思ひかしづき給ひしを、天下に思ふとも何業かせまし」「そはか6ぶき女をこそかゝる事し給ひけりな。さらばたゞ棄てられ給へるな7かまでも、心ざし淺きにはあらざなり。な8すたさしたまうこのむねずみもあなり9。まこと10をば、恐ろしきものは彈正の宮11こそおはすめれ。物も宣はず、御妻もなくて、年月を經給ふに、何心を思す12ならん。よし見給へ13よ。これぞ事は引き出で給はん」「この東の對におはします、東宮の若宮達こそ恐ろしき者は世にあめれ。いかやうに生ひ出で給はむとすらむ。14行く先の君がね15ぞやはあらぬ」「まこと16の女御の君を、騒がしかりし曉に見奉りしはや。いとよく似奉り給へりけ17りな。内侍のすけのよそへ殘し奉りつるこそをかしけれ。その御容貌は、げに氣高くすぐれたる事18は時はあらねど、見まほしう抱19（かゝ）まほしげなることは又なかめるを、さればこそ20は内裏の上は籠り臥しがちにはおはしますめれ」宮、「さばかりの21は心地は、いづくにか物し給はぬ。源中納言の22は藤壺にも殊

〔校異〕1二字〔イ〕ナシ。2〔イ〕に。3〔国〕ら。4〔図〕はアリ。5〔国〕にアリ。6〔イ〕しづ。7〔イ〕り、さて。8〔図〕ずらひ給ふべき我身に。9〔図〕やアリ。10〔イ〕には、〔図〕考異は。11〔図〕考異にアリ。12〔イ〕ナシ。13〔イ〕ナシ。14〔国〕今アリ。15〔イ〕に。16〔図〕に。17〔図〕るか。18〔イ〕いと際、〔図〕いとゞさは。19一字〔イ〕ニヨリテ補フ。20〔図〕ナシ。21〔イ〕御輿、〔図〕ナシ。22〔イ〕さまこそアリ（○原本頭注ニ「さまこそハ女子ノ名也」トアリ）、〔図〕今こそアリ。

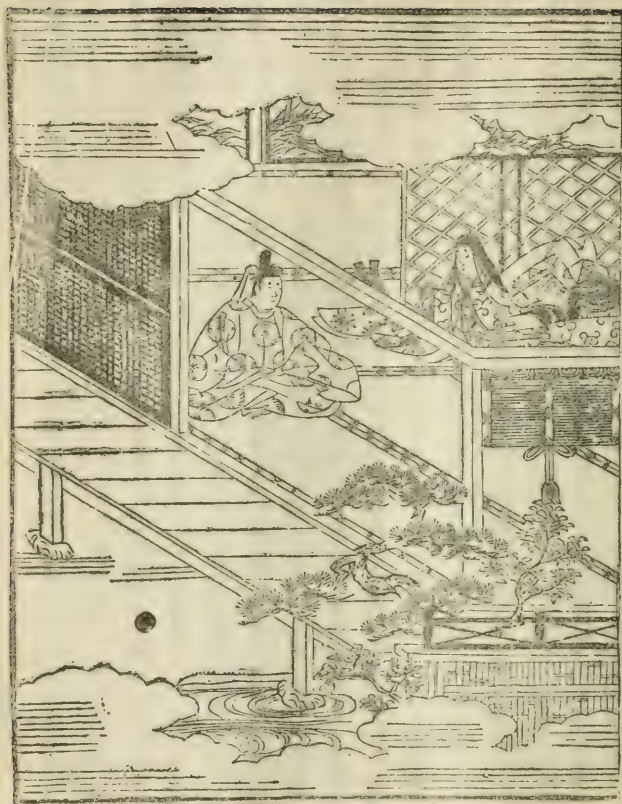
に劣らぬ1人ぞかし。内裏の2ゝみこそ中3の見に4くもの5ぬしもの6」「恐ろしの事や。な宣ひそ。7こゝち騒がし」など御物語りしつゝ、御帳の内に籠り臥し給へり。

源中納言の大殿8參り給ひて、御前に侍ひ給ふ。上、「久しくまゐつ(〇參)られざりつるかな」大殿、「侍る所に10し觸穢の侍ひつれば。なほかの後は疲り所の侍りしかば」上、「さりけむ。その程の事ども11はいかゞありけむ。此の頃、上の男どもは、そこの興ありし事を様々云ふめる。涼の朝臣12行正13を笑ふ14、いかなる事ぞ」大殿、「なでふ事15も侍らざりき。右16の大殿の内侍の督など、琴彈き侍りし程17なん興侍りしや。いと有難かりける事ぞや」上、「その琴はいづれぞ」大殿、「内侍の督の昔より彈き侍りける、りうかくとなむ承はりし。それはなむかの兒になん取らせ侍りにけ18り」上、「いといみじき物得たりける女子にもあるかな」と宣ふ。「さに侍るなり」「さてかの朝臣19はいかゞ思ひたる。らうたしとは思ひたらむや」大殿、「知らず。いかに思ひて侍るにか侍らん。20さ聞きて侍りしすなはち、舞21をなんし侍り22し23。日頃は夜晝懐放たでなん侍るなる」上笑はせ給ひて、「思ふやうなりかし。何かは知らむ、かの親族は、女子もよろしきは惡からぬものぞかし。ゆりげもなき人の子を24守るらむこそあ25なたけれ。いか26でこれに喜びもせさせてしがな。

校異 1囡ナシ。2囡上。3以下四字囡にも似る。4囝く。5囡なく。6囡し給ふれアリ。7囝こゝら。8囡内裏にアリ。9囝い。10囡觸。11國ナシ。12囡とアリ。13囡とアリ。14囡なるはアリ。15囡考異にアリ。16国大將の朝臣。17囡考異いと。18囝る。19囝な。20囝先に。21囡考異ナシ。22国にアリ。23囝にアリ。24囝持た。25囝だな。26國イに。

さて九日に當りける夜になむ遊ばれける1は、いかにせし2ぞ」大殿、「3 4も三つ、一つ聲に調べて、一つづゝなん彈き侍りし　唱歌の家の中に。5琵琶は女一の宮、賜はせし御琴和琴は侍る所に、嵯峨の院より賜はせためりしきりかぜと云ひ侍る、さて女方に入れて侍りし笛どもは、6誰彼に賜ひて、自らは7横笛8とたん吹き侍りし」上、「9はみじかりける事かな。心に入れてせぬ業々なくしけるは、此の子を嬉しと思ふにこそはあなれ。手傳へ10むとや思ふらん」大殿、「さ申し侍りき。此の手をいかにせむと思ひ侍りつるにと申し侍りき」上、「限りなかりき。11たゞ我顏に12かくぞ。いと13希有なる事。出で來べき14御家なども、思ふやうならば、その家は冠も得つべき所ぞや。和琴琵琶は誰15が彈きし。箏の笛などは誰か吹きし」など委しく問はせ給ふ。「笙は彈生の宮なむ。琴どもは誰にか侍りけん。一つに16合ひて、殊に違はず侍りつるなりき」「さやうの物、17そこもらふ(○勞カ)18しながら琵琶彈きたる」とて笑はせ給ふ。「仁壽殿和琴は名高きぞかし。すべていといみじかりける夜かな。これを聞きたらましかば」19と宣ふ。大殿罷出給ひぬ。

宰相中將藤壺に參うで給ひて、有りし御物語し給ふ。君、「中々いとよしや。世に心にくゝ思ひたる人につき給ひて、一所心安20く21。已こそ、かゝるおほたかりに出だし放たれて、22世には憂くま23る〳〵しき事を

校異 1 因考異ナシ。2 一字因考異ナシ、三字国琴ど。3 因琴どアリ。4 イ琴。5 イ彈かば。6 イこれ。7 イ双調、国わらしやう(○鳳笙カ、黄鐘カ)。8 イを敷、国を。9 イい。10 國イば。11 因したり。12 因さぞ言ふめる。13 因興あ。14 イ御。15 因か。16 国遊び。17 イぞ、子持臥、因をぞ、子持の臥。18 國イく。19 因考異など。20 イし。21 因住み給ふれアリ。22 イ世にはかく、因かにかくに。23 国が。

1聞き見給2ふ人は、殊に花やかにも見え給はず、むつかしきまゝに、目も見合せ奉3らず、むつか
心よからずと4思されためり。いと心ようなけれ。里にありし昔のみ戀しくて、あらじものを、何せん
かく出だし立てられてあらむと思へば、心憂く悲しき事も多くなむ」宰相の君、「怪しき御心にこそあな
宮は、御心才も猶異にはあひおはします。御5み遊びなども、誰にかは、し劣り給へる。宮仕へし給ふ
敵多かるこそはよけれ。羨ましき6をこそは悪しうはすれ。昔の人の中に、あはれと思ほすやありし。
門の督なりけむかし。それにぞ下﨟なれど返事などし給7ふ8」「それは手9よかりしかば、見むと
ぞ」宰相、「今やは御覧ぜぬ。いとかしこくなりにて侍るめるを」君、「さて見しかば、宮に聞えたりしか
かしこも10返事し給11へ」「文賜へ。12見給へん。論なう私事侍りけむかし。物聞えし人々の中に13は
をかは心留めては思ほしし」君、「さ思ふべき人こそなけれ。誰をか14。源宰相こそ今に恨み言ふなれ。
とに思ひけりとは聞け。さてはまこと15心ありける人しなければ、さ思ふ16もなし」「17左大將殿は、
ひてこそは物し給はずなりにしか」君、「さらずとも、それはあからめし給ふべき人ならばこそ」「いで
けすみ〔○輔純〕を19せうし〔○請しカ、側しカ〕給はじや20は。左衛門督なども、いたく濫りしを、制し

校異 1 [イ]聞え。2 [イ]へば。3 [イ]り給は。4 [イ]はアリ。5 [イ]ナシ。6 [因]ナシ。7 [國]イひし。8 [イ]なりしア
9 [イ]のアリ。10 [因]かれぞ代り奉りて返事かきし」宰相「いでそのアリ。11 [国]ふ。12 四字[因]考異ナシ。
ナシ。14 [因]はアリ。15 [イ]のアリ。16 [因]考異事。17 [国]右。18 [図]す、19 [図]制、[因]制。20 [イ]ト／。

などして、大殿のし給へるぞかし、今は思ひ慁み給1へるめり。此の頃はいと警策なりや。ねびもてゆくまに光り2なぞ放つべき」君、「久しく此のわたりに見え給はず。こゝには月の宴し給ひし時に消息言はせ給へりし」「いで、今3さへ御消息味氣なかり。なほ人の歎きはおほす〔○思すカ、生すカ〕らむかし。彈正宮も思し惱じにたるにや、これもおはせとのみあめれど、かくてのみ見え給ふは」「今4一人には聞え5、心6地に7はいみじく悲しと思ふ事もありや」宰相、「何事か。もし輔純が氣色見給へりし事か」「いで、いかで見給へむ。人の知るべきにあらずや」「いで、されどいとよく知りて侍り。さば聞えむ8に、侍從の上に侍らずや。常にさ見給へき。御德に9こそこなひ給ひてし人ぞかし」女御君、「常に夢にぞ見給ふや」と宣ふまゝに泣き給ふ。宰相の君も10起き給ひて、「常に聞えむと思う給へれど、事のついでもなく、常に人騷がしかりつれば、聞えざりつるこそ。いかなりし折にいかに聞えそめしぞ」君、「いでや。いみじく恥ぢ隱し給ひしを、人に聞ゆ11ると失きかげにてもこそ見給へ」「輔純をば、あまたあれども、そが中に親子の契りなしたりしかば、さも12おはせじ」「何かは、知り給へれば。まだ少さかりし時、箏の琴習はしゝ心なむ、怪しく思はぬやうなる氣色なん見えし。さて年頃泣き怨み給ひしかど、見知らぬやうにて止みにしを、參りて後にも、かかる文をなむ奉りし」とて、取り出でゝ見せ奉り給ひて、「これを持て來て、すなはちなんさは言ひに來たり

[校異]1 [因]ふべか。2 二字[国]ナシ。3 [イ]給。4 [国]一つ人。5 [イ]でアリ。5 [イ]ナシ。7 [イ]ナシ。8 [因]かし。9 [イ]ナシ、[因]ぞ、[因]考異こそ。10 [イ]泣。11 [因]な。12 [因]思さ。

し。これを心一つに思ふなむいみじう悲しき」とて泣き給ふ。宰相、「心のいと1みさをにかしこかりしかば、身をいたづらになして、言も出ださずなりにけるにこそ。輔純し2ることのふてうの覺えぬわざ3くはしてまし。4あ5りはまだ宮に參り給はざりしその年の秋6頃、さやうな7む人もがなとは思ひ侍り8」と宣へば、君打ち笑ひ給ひて、「9よき人の10御様に11こそ。かの君は物12を思ひ13しけ14にやあらむ、見15の苦しき事なむ見え給ふ」と宣へば、「あはれの事や」などて、「常にもとぶらはむとすれど、さすがに物騷がしくてのみなむ。大方をばさるものにて、思し16か17らむ事などは、などか宣は18ぬ。かの19宮に侍りし物どもゝ、いかでかは、などかか20やうなども宣はせざりし」「それは、かねてより、さやうの事思はむ21そ22こ23そさせむと宮24宣ひしかば、任せ25奉りてなん」宰相の君、「金などのいと多く侍りしを、いか26でせさせ給ひけん」「それをなむし煩はせ給ふ。上に奏せさせ給ひ、上に侍ふ陸奥國の守などに召しつゝなむ。さても足らざり27ければ、下には異物入れさせ28ねとなむ聞きし。人や見けん」「中納言こそ取り寄せつゝいとくはしく見29え給ひけれ30ば」君、「恥かしの事や」と宣ふ、宰相の君罷出給ひぬ。

校異 1[因]見まほしう。2[イ]か。3[イ]く。4[イ]は。5[イ]る。6[因]のアリ。7[イ]らアリ。8[イ]しアリ。9[因]な。10[イ]さ。11二字[イ]ナシ。12[国]ナシ。13[イ]知る。14[国]るアリ。15[イ]ナシ。16二字[國]け。17[イ]け。18[國]イめ。19[国]君。20[イ]ナシ。21一字[因]に、下三字[國]そこに。22下二字[因]考異ナシ。23一字[イ]に。24[イ]のアリ。25[國]イてアリ。26[イ]が、[国]に。27[因]考異しか。28[イ]ぬ。29[因]ナシ。30[イ]ナシ。

「畫詞」12藤壺。

かくて北の御殿に參うで給ひて、「事のついでに、藤壺に參うで3て侍りしかば、しかぐの事を宣ひしはや」4大臣「かの産屋の折の事を思ひたるなゝり。天下に云ふとも、たゞ人は限りあるものを。姉には頼め5と6覺えなんと覺え候ひて、容貌心7するわざに心つく者なれば、左衞門の督をぞねたくなど思ふらむ。さて宮をも心に入れ奉らぬなるべし。あれにはまた目ざま8あしき人にはたあり」宰相、「男9子10ぞ侍る輔純だに憎くも侍らざりし人なり。故侍從は、これを娚子のやうにてこそ、これに罷り通ふ所ならず侍りしか。男11達だにさ12侍13りかし人を、此の事侍らで夜晝侍はせ給ふなるべき事侍るらんと思ふこそいと不便なれ」大宮、「うたて近き所に聞えもこ14そあれ」宰相、「空言を申し侍らばこそは侍らめ。よくも知りて侍15る16かなとこそ聞し召さめ。人は一人なれど、かやうにこそ子は養ひ立て給へ。此のわたりこそ豚の侍らむやうに、物の17用にすべきも18なく、稀々よろしかりし19かば、はかなくて罷り隱れ20しかば。まめやかには、故侍從の藤壺の御夢に、21しひの罪に、途ならぬやうに見え侍る」など申し給ふ。大臣、「何事をかはさ22思ひけむ。我らが卒しと思ふ事もあらじ、官爵の事は限りあれば」御答23、「男は女につけてのみこそは」「此の中には

[校異]1國こゝはアリ。2二字イナシ。3因ナシ。4二字因ナシ。5イに。6因考異もアリ。7國イなす。8イナシ。9下二字因に。10イに。11イだち、國イ達に。12一字イる、三字因る心アリ。13一字國る。14國イれ。15國イり。16国など。17国益。18因のアリ。19因は。20因にアリ。21因思ひ。22イはアリ。23イはアリ。

誰かは」「中1宮達の中2にこそは」大宮心を得給ひて、さばさなりけりと思ほして、いみじう泣き給ふ。大臣「などさる氣色見給ひしや」宮「否や。さもあらずや。なほさるらむ。かゝる氣色ぞ見給ふ。すべて、よくもあれ惡しくもあれ、3男4女にてぞあるべかりける。中の御殿にて、夜晝ありて、憎げなき人々のあまた物し給ひしかば、さやうなるにやありけむ」大臣「一5宮なりけん。それぞ人に思はれぬべき樣し給へる」宰相の君、をかしと思へど、かたはらいたければ申し給はず。此の君、一の宮をいかでと思しけ6る。今は7かの8君をいかでかと思せど、聞え9寄るべくもあらねば、心一つに思す。さて、「此の人の爲めに、なほ誦經などせさせ給へ。その誦經の文には、なほ思ひの10罪の罪11免らかし給へ12ば、右大辨季房の朝臣に仰せ言賜ひて、願文書きてせさせ給へ」と聞えて立ち給ひぬ。大臣「此の朝臣そゝめきたりけるは。いとまめなりと見るもの13を、なむどたは言は多くしつる」宮「ある人をぞ年頃氣色ありて聞えけるや14。それを今はと思ひて、言葉15散らずなめり」大臣「うたて、うとからぬ16ながら中に、かゝる事どものありける17事」と宣ふ。かくて侍從の君の爲めに、四十九日18に、布七匹づ19ら20ず誦經にせさせ給ふ。21大宮も絹など加へてせさせ給ふ。

校異 1 因の御殿のアリ。2 囨ナシ。3 囨大臣。4 囨男。5 因のアリ。6 國り。7 因二。8 因宮。9 囨申さ。10 二字囨ナシ。11 國のかう。12 囨と與、囨ナシ、因と。13 国と。14 囨うアリ。15 囨ちう。16 囨中らひ、國中らひなる。17 国ナシ。18 国の内アリ。19 囨つ。20 囨ナシ、国賜ひ。21 以下十四字因ナシ。

【畫詞】1 2北の御殿。

かくて犬宮の御五十日は、女御の君し給ふべきと、内裏に聞し召して、これ3こそ忍びて奉らむと思して、頭中將實頼に、「か4う〳〵5思す事なんある。かの右の大臣の家にはあらぬ所にて、その事物せよ。その具の物どもは、6所納殿にあらむ物どもを、用に隨ひてものせよ」と仰せ給へば、太政大臣の曹司にて、白銀の7鑄物師など召して、急ぎせさせ給ふ。「仰せ言にて、かゝる事し給ふなり」とて、所々より、檜8はり(〇割)籠手を盡くして奉り給ふ。さもしつべき人々には、「かゝる事なんある」と言ひて、せぬ所なく此の事急がす。

かくてその日になりぬ。女御の君、大宮の御方に、「犬にもち9ゐ(〇餅)10てはすべき日になん侍りける。いかにすべきわざにか」と聞え給へり。大宮、「人に知らせでするやうに、いと多かることとなり。11それはこゝにのみなむ。分いて諸々な12くてはせぬ事になん」女御の君、「いかでかは。いと多く侍ひたり。そなたにやは參るべき」と聞え給へれば、「今そこになむ」とて、「今日だに渡りて見むとて、おはしましたり13ぬ。頭の中將、14御前どもの物など參らせ給15はぬ。16 17宮の御前には白銀の折敷、同じ18高杯に据ゑて十二、御器

【校異】1国こゝはアリ。2四字不ナシ。3不より。4国く。5不仰せ。6国ナシ。7因鍛冶鑄物師。8国わ。9国ひ。10不食。11不けれど。12因考異らで。13不ナシ。14因御前。15因ひ。16因犬アリ。17不君。18因きアリ。

どもは、1わたり三2十が無垢にの3くほの杯ども、もち4ゐ〔〇餅〕四折敷、乾物5四折敷、菓物四折敷、6〔7敷〕物心葉、いと淸らなり。また御前どもの料に、淺香の折敷十二づゝしたり。檜割籠五十荷、皆8ん沈す9わう〔〇蘇枋〕紫檀などなり。臺枋なども同じ物、袋敷物のく10らり緒などもいと淸らなり。いも物は皆參り11いの〔〇物〕、かたへは破割籠一12かけ、御13前に參るばかりしたり。たゞの割籠五十荷添へて參れり。御前の折敷どもは、大宮一の宮女御の君の御前に參る。破割籠、中取りて、宮中納言などには參る。內侍のすけ大輔の乳母よりはじめて、御達まで14には、檜割籠、15御子たゞの16家にて17は、內侍の督の殿に、女御の君18の御消息して、「日頃聞えざりつる程に、かゝる日までも。19などそれより」など書きて、「これは、

20いか21に〳〵と聞き渡れども今日をこそ餅食ふ日と分きて知りぬれ」

とて奉り給ふ。藤壺に同じ數に奉り給ふ。かくて餅參るべき時22あれば、その時になりぬれば、「とく〳〵」とあれば、兒君いと出だし立て難くし給ふ。から23くして御湯殿などして、綾の御衣一襲着せ奉りて、大輔の乳母と云ふ24率て參りたり。女御の君搔き抱き25奉りて見せ奉り給ふ。大宮見給へば、いと大きにて、首もす26ゝよか27なり、白き絹に柑子を包めるやうに見えて、いと白く美くしげなり。「これを今まで見せ給

校異　1国檜割籠。2以下十二字因寸の沈を轆轤に挽けるなり。3下二字国つぼ。4国ひ。5イよ。6一字図ニヨリテ補フ。7下二字国ナシ。8国ナシ。9国は。10イく。11イも。12イ荷笥籠。13因前。14因なり。15因三十荷。16因五十荷添へ。17因ナシ。18因ナシ。19因なむ。20イ傍書「歌」アリ。21国ナシ。22因な。23因考異うじ。24因抱き。25二字因ナシ。26イく。27因にアリ。

はざりける。かゝる人1いと多く見つる中に、これはまだ見ぬ樣なり。かゝらぬだに、さてもありぬべくなるを、いとをかしかめり」女御の君、「いざ、見にくし」とて隱さるれば、宮、「されど、親達にも勝り奉りぬべかめり」とて、餅參り給ふ御折敷見給へば、洲2にま〔○濱〕に、高き松の下に、鶴二つ立てり。一つは簪、一つは匕くひたり。松の下に、黄金の3首して、帝の御手して書かせ給へり、

綠子は松の餅をくひそめて千代々々とのみ今は云はなん

とあるを大宮見給ひて、白き薄樣に書きて押し付け給ふ。

4我居りて松の餅をくはすれば千歲も次ぎて老いよとぞ思ふ

女御の君に、「かゝる事ありけりや」とて奉り給へば、書きて押し付け給ふ。

老の世に5千6をのみ7しなる綠子の松の餅をいとゞくふらん

とて、一の宮に奉り給へば、物も宣はず。これかれ、「いかで」など宣へば、

くひそむる今日や千代をもな8く〔○習〕ふらむ松の餅に心移りて

と書き給へれば、女御の君、折敷ながら中納言の9御許にさし10入れ給へば、取りて見るやうにて、

千歲經る松の餅はくひつめり今はみかさの11音してもがな

校異 1二字因考異ナシ。2囝は。3因匕。4國我が。5囝ち。6国代アリ。7囝知れる、国知れ。8国ら。9國イナシ。10因出で。11囝劣らで。

と書き給ふを、彈正の宮、「見む」と聞え給へば「いとかしこき御手1は2く(〇侍)れば、え見給は3ず」とてさし入れつ。宮、「許されざらむ人のやうに」とて、御簾の内にはひ入りて見給ひて、「暇(いとま)なしや。

姫松も鶴も並びて見ゆるにはいつかはみ4かのあらむ5(ご飯)すらむ

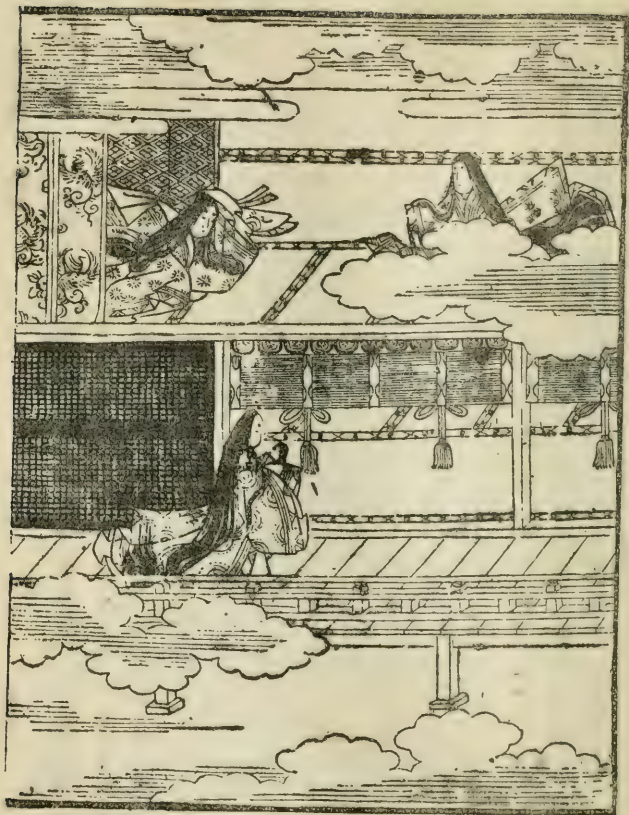
と書き給ふ。大輔の乳母、6ほとりに押し7つゝ、

絲子の千代てふ事は人ごとに並びて誰にと思ふものかは

とあるを人々見給ひて、「乳母ことわりや」とて笑ひ給ふ。かゝる程に、内侍の督(かみ)の殿より御返りあり。御使は、白き袿袴かづ8きたり。御文見給へば、「9誰よりも聞えむと思う給へるを、日頃は10聞えさせぬ事の侍りてなん。さても聞し召しつけたるをなむ。

辟かへずいかと云ふ子をいかでかは今日の名殘りと人の聞きけむ

いと耳となりや」と聞え給へり。かくてもち11ゐ(〇餅)12參り物など參りて、これかれ物聞し召して、大宮は乳母抱き奉りて13、大宮彈正の宮14「などかあなたにも時々渡り給15(は)ぬ。あまた16たはすれど、かたじけなけれ17ば、一所をば殊にこそは思ひ聞えしか。いと疎(うと)々しくこそ思したれ」18宮、「年頃は、身の數な

校異1 二字[イ]侍。2 [国]べ。3 [国]じ。4 [イ]る。5 [イ]とアリ。6 國イお。7 [イ]付く。8 [国]け。9 [イ]これ。10 [イ]えアリ。11 [国]ひ。12 [イ]五十日(か)。13 [国]入りぬアリ。14 [国]にアリ。15 一字[イ]ニヨリテ補フ。16 [イ]お。17 [イ]ど。18 [国]三アリ、[国]三のアリ。

らぬを思う給へつゝみて1」2宮、「など3わ旅住(たゞずみ)のやうにて4は、これもかれも、さてあらせ奉らまほしげに思はれたるを、見給5へば、心づきもいとよう聞ゆるや」三6宮7、「昔より數8もにも侍らぬ身なれば、誰かはさ思ひ侍らむ」大宮、「などかはさ9(お)ぼ〔○思〕さるゝ」女御の君、「いさや、此の御心10 11こそ見給へわびぬる。藤壺の里におはせし時、はかなき事を聞え給ひけるに、いらへ給はざりきとて、12それを13そむじて、法師のあらむやうにてのみ歎きわたり給ひて、ある時は、きんぢがつたなく、我を人氣(ケ)なく14か15生み出だしたるとさへぞ宣ふや」大宮、「更に承はらざりし。かの人を16、兵部卿の宮17にさ宣ひき。さてはあ18らま19しき事なりと20四條の大將さ宣ふと聞21く。源宰相22とこそ心ざし23あるやうに聞き侍りしか。更にこそ知らざりけれ」御答(いらへ)、「多くも聞し召し殘したりけるかな。いといみじき事ども多く侍りしものを。まづはかしこ24ぞ」とて、中納言を見やり給ひて、「こゝにこそ、同じ所にて、よくは知り給25ひつらめ。しか26のたと27へなる事もや思しあはする事も侍らむかし」と宣へば、宮をかしと思す。中納言苦しと思す。28大殿宮(おとゞみや)、「さればこそは、なほ昔よりか29(ず)〔○數〕ならずと30は」大宮、「などはかくしくかくなどは宣

校異 1〔因〕なむアリ。2〔国〕大アリ。3〔イ〕は。4〔イ〕ナシ。5〔イ〕へつ、〔国〕ひつ。6〔因〕のアリ。7〔イ〕のアリ。8〔イ〕ナシ。9一字〔イ〕ニヨリテ補フ。10〔イ〕にアリ。11〔因〕にぞ。12〔イ〕わ。13〔イ〕惱(うれ)。14〔イ〕は。15〔国〕うアリ。16〔イ〕ばアリ。17〔因〕も。18〔イ〕る。19〔イ〕じ。20〔国〕三。21〔因〕きゝ。22〔因〕ナシ。23〔因〕考異しぬ。24〔イ〕う。25〔イ〕へ。26以下五字〔国〕宣ひけ。27一字〔イ〕ひ。28〔イ〕男、〔国〕彌正の、〔因〕三の。29一字〔イ〕ニヨリテ補フ。30〔因〕考異こそアリ。

はずなりにし。さらましかば、ともかくも聞えてましものを、宮仕へにとて出だし立てたれど、思ふやうにもあらず、後安く(うしろ)と頼み聞えし人さへ許さず、心憂き事どもの多か1んなれば、常に思ひ歎くと聞き侍れば、いとうたてくなん。なほ心安くてあらすべかりけるものをと思う給2ひつるに」と3宮、「いとあるまじき事かな。何か4とかく5思う給へざりき。たゞ答(いらへ)し給はざりしをのみなん今に心憂く6をかしきやうに。7また通はしなどし給へりし人も、まめやかなる心ある者8な9るめれど、こゝには志をだに昔ながらにとてなん。年頃は何10か思11はじ、志して参らせ奉り給へ12るかひありて、宮はた異(こと)御心のなかめれば、いとよかめり。先つ(さき)頃召しありしかば、内裏に13侍りしついでに、かの御局に参うでたりしにも、14いと思ふやうにておはすめりき。多くの人の惑ふめりし御身を一所見奉り給へば、さらではかひなからむかし。かの君も今はよづき給ひにければ、参うでたりしにも、いと氣(け)近く物など宣15ひき。早うから16てこそはおはすべかりけれとなむ思う給へりし。御容貌(かたち)もこよなくなりまさり給ひにけり。さは言へど、やむごとなき人につき奉り給ひて、こよなくもてなされ給ひにけりとぞ見奉りし」大宮、「何かそれは、常に物を思17ふなれば、昔のやうにだにえあらじや。いと久しく見侍らずや。去年(こぞ)の秋あからさまに罷出させて侍りしかば、あなづりて籠め

[校異] 1 [不]ナシ。2 一字[因]へ、二字[不]へ。3 [因]のアリ。4 [不]と、[因]考異とく、(同)も。5 [國]宣。6 [因]なほ同じ、[因]考異なむをかしき。7 [不]文與、[因]文、[因]考異文あるは返し。8 [因]はアリ。9 [不]か。10 [因]にアリ。11 [因]ほし。12 [因]りし。13 [因]参りアリ。14 二字[國]ナシ。15 [不]ふ、さばや。16 [因]にアリ。17 廿一字[國]イナシ。

据ゑたりなど、いと憎げに宣1(ひ)しかば、煩はしさに參らせてき。常に罷出むと宣はす2なれど、罷出させねば、いみじく恨むるや。此の晦日ばかり3ぞ、4罷出させむと思5う給ふる」女御の君、「源中納言6いまだいつばかり7ぞ」「いさ、此の頃とぞありしかど、まださりげもな8かりき。それこそいとようなりにたれ。髮などもいとよ9う生ひためれ、さるは苦しげなる程なめれど。それをこそ昔はさも聞えむと思ひしか。思はぬ樣たる事の出で來にしかば」三10宮、「それも、えさも侍らざらまし。家のさうぶ〔〇處分カ、菖蒲カ〕のやうにこそ」など、暮るゝまで御物語り11し給ひて、大宮も渡り給ひぬ。女御の君も御方々へおはしぬ。宮、物の初めなりとて、例のごと取り散12くさせ給はず。

かくて中納言、内にはひ入りて、犬宮搔き抱きて、「犬をば、宮はいかゞ宣13ひつる。多くの御日に恥かしくこそ」宮、「見せざりけりなどこそ」「見にくしとやありつらむ」「親どもには勝りぬべしと14 15や」君、「仲忠、宮とあ16るは、さるや見し。さては怪しうはあるまじきものなゝり」宮、「よしとこそは思ひけれ」君、「内侍のすけの言ひしかばこそ。さればこそ17聞かせつべしとは聞えしか。彈正の宮の御物語承はりつるこそ、さる事ぞと思18う給へつれば哀れなれ。こゝに侍はざらましかば、かく思う給へてぞ侍らまし。その御心を失

校異 1一字[イ]ニヨリテ補フ。2因ナシ。3[イ]にアリ。4二字因ナシ。5因ひ。6因のはまた、國は又。7国にかは、國イは。8因しや。9国く。10因のアリ。11因考異などアリ。12国ら。13[イ]へ。14因考異かアリ。15因か。16[イ]らば。17[イ]す。18因ひ。

は1せ給2ひつるこそ、吾3ゑ君はいと嬉しく覺え給へ。異人4かく思ひ消たせざらまし。5初めはいとこそわびしかりしか、こゝに參うで來し夜までは。見奉りしかば忘れ侍りにき。今はた犬など侍れば、さ思ひ侍りけむとこそ。たゞ御心のつらからむにこそ、かれにまさりても。たゞかの御方に御心ざしたく思されたるなむ、恥かしくいとゞ6をかしくは、さて侍りても何のかひか7あらむ。源宰相などのあはれにて物し給ふめるも、只今は取り分きたる事もなかめり。疎からぬ御中にこそ、かくおはしたるもよけれ。物思し知らざりけん昔こそさりけめ、今は世8中物思し知りたれば、折あらむ時は、とかく聞え給ひつゝも慰め給ひけん。他所人にとても何のかひかは。さて9御て罷出給ふべかなる、10男の聞えし事必ず」宮、「いひしやうに、見たる人の物狂11をしきやうなれば、そこにもさやと思ふにぞ」君、「何か、今は天女いま12そがりとも、何13か14は見給へん。たゞかゝる15中らひに侍るを、さる志もありしに、覺束な16るらじとてこそ。もし17は18はし19はめ20て〔○初めてカ、しばしはめでカ〕21 22いた23くとも、24かれをこそは。そのかみは25御前26の27事28 29ひたき奉らば同じ事ぞや」宮、「怪しの人がはりやかの君は、我だに同じ所にありたらひて、30所々31な

校異 1因考異さアリ。2イへ。3イが。4イはアリ。5国物は、因考異ものを。6イは。7因考異侍。8因のアリ。9二字イナシ。10イを、こ。11国は。12因考異す。13イとアリ。14イナシ。15イ習。16イか。17因ナシ。18国しばし。19イナシ。20因は。21因考異ことアリ。22因こち。23イし。24因なは。25因御前。26因を。27イ人、因異。28イたアリ。29イ抱き、因人取り。30イ人と歟、因考異人と。31因にアリ。

りし1はいと〴〵戀しくて、常に2泣か3れし。えさ4はあらぬ物から、な5りより〔〇仲賴〕などがやうにあるは、見苦しくこそ6は」7と主、「いとゆゝしき事。よし見給へ、必ず」など聞8へて9殿籠りぬ。宮に大臣の「聞え給10はぬはいかゞありつる」「いみじく生ひ出でぬべき者にこそあめれ。宮11のぞかやうに12なりしかど、これはいと13けし14とにこそ見えつるや」15と、大臣、「16母主の今からいと心にくゝもてなすめるは、いかに生し立てんとすらむ世の中にありにしかな」と宣ふ。

かくて大臣、年も老いぬ、愼しむべきやうに言ふをと思して、大將17ちし給ふ御表一度は奉らせ給ひてしかど、返されたれ18ど、又奉らせ給ふ。此の度も留められず。右大辨季房を召して、「かうかう公に申19す20も納められ21ぬ。實に思して留めらるべく、御心と22められよ。こ23のしき〔〇式カ、辭儀カ〕は留められば、論なうこのわたりにぞあらむ。その24所25權中納言の朝臣にもがなと思ふを、その心を思ひて、かの朝臣に讓り26げなる氣色とらせて27を」と宣へば、すなはち御前にて28作り書きて奉る。見給ひて、「思ふやうなり」と宣へば、「此度は留まりなむ」とて奉らせ給ひぬ。かゝる程に、內裏より中納言の君の29許に、大將兼け給

校異1国かば。2図歎。3図るれ。4図考異も。5丌か。6下三字丌ナシ。7一字図ナシ。8丌え。9丌大アリ。10図ふ「犬。11丌は。12図あ。13図氣色。14丌う、図殊に。15丌ナシ。16図父。17丌じ、丌辭。18丌ば。19図せど。20図考異を。21図考異ず。22丌どアリ。23図考異ナシ。34丌頃、図事。25国藤。26国ナシ。27図考異よ。28図級。29丌御アリ。

ふべき御消息あり。大殿、宮に、「かう／＼の事なん仰せられたりつる。設1物などせさへ給へ」と申し給ふ。かゝる程に、内裏より2か3ゝ〔〇唐〕櫃一よろひに、唐綾4まこと綾織物、一5には絹入れて、「これ、かの日の設けの物にし給へ」とて、宮の御許に奉り給へり。又源中納言の北6方の7もとより、赤色の織物の唐衣唐裳摺裳、綾の細長、三重襲の袴添へたる女のよそひ五8具、置口の9みはたに疊み入れて奉れ給へり。こゝかしこより皆かやう10〔に〕し奉り給へり。こゝにも設け給ふ。花11にむ〔〇紋〕綾など皆具せられたり。

かくてその日になりて12大將兼け給ひつ。御喜びとて、御裝束蘇枋襲綾の上の袴など13ハ有難きうつしに入れ染めて、裝束きて出で給ふまゝに、宮拜み奉り給ひ、14女御の15北の大殿などに喜び申し給ひて、右の大臣の御方に罷出給16ひて、御供には四位八人、五位十17四人、六位三十人ばかり18の御隨身ども、御前すべき人さらぬも多かり。19方々の御前を渡りておはすれば、「あな目出たや」など言ひ騷ぐ。源中納言殿の方を見やり給へば、青色の簾に綺の端さして懸け渡したり。勾欄に押しかゝりて、簀子に童八人ばかり、青色に20〔蘇枋〕襲、綾の上の袴濃き袙著て並み居たり。御簾の内に、四21五間に赤色の唐衣、22それも濃き23褄ど

校異 1〔国〕のアリ。2〔不〕御アリ。3〔不〕ら。4〔不〕大和與、〔因〕大和。5〔因〕つアリ。6〔因〕のアリ。7〔不〕御アリ。8〔不〕つ、〔因〕具。9〔不〕御箱、〔因〕衣箱。10一字〔不〕ニヨリテ補フ。11〔不〕も。12〔国〕右は左にうつりて仲忠右アリ、〔因〕右は左にうつり給ひ中納言の君右アリ。13〔不〕あめれどアリ、〔不〕ありなどアリ、〔國〕あめれアリ。14三字〔因〕ナシ。15〔正〕君。16〔不〕ふ。17〔不〕余。18〔不〕ナシ。19〔不〕御方。20二字〔不〕ニヨリテ補フ。21〔因〕間アリ。22三字〔因〕ナシ。23〔不〕薄き。

も1打ち出でつゝ著たる人居竝みたり。大將立ち留まりて、「君はおはすや」童べ2「今朝內裏へ參らせ給ひ

ぬ」大殿、「御方に聞えさせ給へ。喜び3になん。此度はかたきなき心地するを、かつは聞えさする」とて、遣水の4程よりおはし過ぐれば、髫髮ども扇を叩きて「名取川に鮎釣る大殿の」と謠ひあへり。大將見やりて、「さ宣ふとも、え知らずや」とておはしぬ。右の大殿5より喜び申させ給ひて、それより車はさせ給て、內侍の督の殿に參うで給ひぬ。それより內裏へ參り給ひぬ。かくて陣入り給ふより、人々めづらしがる女御更衣の御局の前渡り給へば、人々、「いとめづらしく參り給へるかな。久しく見ざりつる程に。目出たくもなり勝り給ふかな。猶女一の宮こそいと心にくけれ。そこと心人に知らせざりつれども、物言ひふれぬかりしものを、あからめもせさせで持6給へる7に、仁壽殿の女御の、思ふやうに目出たき人なり。宮仕は、同じき帝と聞ゆれど、上に限りなく時めかされ奉りたり、女はかく世に類なき人に、二つなく思はせ8り。目出たし。男皇子達は、いと美しげに容貌よく、人に賞められつゝあまた持たり。たゞ后に据ゑ、坊に据ゑずといふばかりにこそはあめれ」又異人の云ふ、「されど、これは時々人參うのぼりなどす。10春のこそいみじかなれ。また二つ人あるものとも知り給は11で、年頃になりぬ。などか12は黃金は持たり、みじき物なめりかし。院の御方は夜晝音をぞ泣き給ふなる。昨日今日兒絲子と聞きつる人13と依りて、我

校異　1六字因ナシ。2因申すアリ。3因申しアリ。4囝ほとり、国方。5因に。6囝て參うづ。7囝よ。
囝る。9四字囝ナシ。10囝東。11國む。12因坊がね。13囝に。

かゝる恥を見つる事。さりとて院にあらむと1てすれば、過失もして寄せられぬやうに、上達も思すべし。2まして人は心肝安からぬ事とこそは3泣き給ふなれ」「誰々も皆4にこそは。大き大殿の君はた大5うへ〔（聲）〕をはなちて、夜晝拜みのろひ泣きのゝしり給ふ6なり。7ま8きなかめれども聞き入れ給はずとや」など、局々言ひ騷ぎ給ふ。大將の君藏人ども上に喜び奏せさせ給ふ。上「かく9は喜びはまさしくなりにけるを、なほこなたに10」と仰せらるれば、11（舞踏し給12ふ。上りて侍ひ給ふ。上とばかり物も宣はで）御覽ずるやう、わが女をいと怪しうはあらじとてこそ取らせしか、いとこよなくもなり勝りにけるかな、いかに見給ふらむなど思ほし、13いかでとばかり思14ひ）しみ給ひて、「などかいと久しく15。先つ頃節會などありしに、參られやすると思ひしに、さもあらざりしかば、いとさうざうしくなんありし。人よりは睦まじかるべき心地するを、疎き上達部などよりは。されば物せられんこそよからめ」大將かしこまりて、「日々に參り16てべく侍るを、月頃仲忠が先祖に侍る人17人のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍り難き所に棄てたるやうにて侍りけるを、さすが人のえ取り失はで侍りけるを、いと見18付け難19くて、取り出でゝ侍20る、委細の書の抄物と云ふ物見給ふとてなむ。文書と云ふもの見給へつきぬれば、世間の事侍らぬものなりければ

校異 1〔イ〕ナシ。2〔イ〕交らへば、〔イ〕まして上は、〔因〕交らひ人は。3〔因〕歎。4〔因〕ごアリ。5〔イ〕こゑ與、〔イ〕こゑ。6〔因〕れ。7以下五字〔因〕慰め聞ゆ。8一字〔イ〕さ。9〔因〕ナシ。10〔因〕をアリ。11廿二字〔イ〕ニヨリテ補フ。12〔国〕ひ、〔因〕ひて。13〔イ〕入りて。14一字〔イ〕ニヨリテ補フ。15〔因〕はアリ。16〔イ〕來、〔イ〕つ。17〔因〕ナシ。18〔因〕捨て。19〔因〕う。20〔イ〕り、累代、〔因〕る累代。

に參り給1ひて、それより春宮2に參り給ひて、先づ上に喜び申させ給へば、藤壺になんおはしましけるを、出で給ふとて、藤壺に參うで給ひて、孫王の君して御消息など申させ給ふ、「久しく侍はざりつるを、今日は喜びになん。分いても聞し召し古りたらんに、めづらしげなくや」と聞え給ふ。孫王の君、御前に聞ゆれば、宮、「そや、右大將の御消息あめりや」とて、3御氣驚かし奉り給へば、君、「年頃近き守り4に聞き侍りつるを、5そもかけ離れ給はざるを喜び聞えさせむ。めづらしくなむと6う7ち給ふるを、今日の御心地のやうに」と言はせ給ふ。大將、「今日のやうに思されば、いと多かるべき日になど聞え給ふよとて、忘れ果て給ひ8にたらむな」と、孫王の君、「誰がならはしの」と云ふ。答へ9て、「君よりぞ10とみゝ（〇外耳カ、身々カ）に11も、12大方こそともかくもあらめ。私心をあらむものを、などか思し棄てたる」孫王13「それも今はな14に」大將、「昔思しなすか、萬忘れずながらこそ。いかにぞ宮の御心15え」「昔ながら、今はまして立ちまさりもし給はでぞ、むつか16くれおはしますめる。よからぬ事の樣々に聞ゆるまゝに、御心もゆかで、罷出て心をだにやらむと聞え給17へば、許し奉り給はねば、夜晝ぞむつかりおはします」「このよからぬ事の筋には、梨壺18をも安からざらんかし。これを思ふ19こそかたはらいたけれ」「いで、それ20のみぞ。聊かなる御事は聞え給はず、思し隔てたる御氣色なくて、時々參うのぼらせ給21ひ日も渡らせ給22へふ時ある、23さて

校異　1囡ふ。2[イ]へ。3[イ]告げ。4國イも。5[イ]今。6以下四字囡永は。7一字[イ]け。8囡ナシ。9囡ナシ。10囡考異も。11囡は。12囡考異覺えん。13囡の君アリ。14囡ぞ。15[イ]も、囡ばへ、國イえも。16[イ]ら。17[イ]へど、囡ふは。18囡の。19[イ]にアリ。20囡をアリ。21[イ]ふ晝、囡ひ晝、囡ふ日。22一字[イ]ニヨリテ補フ。23[イ]まで。

は憂き事のみ」君、「まことにや、言葉は聞えぬばかり賜はる」孫王の君、「1死に侍らん。先づ御後見はこ〔○えノ誤カ〕ならぬ事2もとこそ」「いで自らの喜びよりも先づこれを申さむ」「あひならうすかせ給ひて、そが喜びを3させ給ふらむ4に」など立ちながら宣ふを、5と宮6〔御〕簾の内に立ち給ひて見給ひつゝ、7事警さ8ゝ〔○策〕にもなりまさりにける人かな。いかにあらむとてかくあ9らむ。いとかゝるをも親などはゆゝしと見るらんか10ゝ。この11人12昔の心思し出でたる時か、取りもあへずたゞむつかりにむつかりて憎み給13ひてや。容貌するわざこそこよなからめ、志は並ぶ人あらじとぞ思ふや。かやうにてある人は、14人一人につきてはあらざなれど、そこに人を並べては見せ奉らじとこそ今も行く15先も思へ。參り給ひて後は殊にさる事も16〔なし。17かゝる〕梨壺ばかりこそ心もおいらかに、見る目もきたなげなきうちに、親なども心ある人なり。此の朝臣の聞18くやなど思ひて、時々19參うのぼら20せ、渡りて見などもすれ。それも、21さなせそと思さば、さもせじかし」君、「いと怪しき事。誰も早うおはしけむやうにておはせばこそ侍ひよからめ。さらではいと聞きにくゝなん」宮、「さ覺えざらむ事をばいかゞせむ。そこばかり物思はせ給22へこそなけれ。里に物し給ひし時23も、夜晝こそ24は思ひしか。やむごとなき事ありて罷出給ひても、長居をのみし給

校異 1因何し。2不ナシ。3因せアリ。4因よ。5因ナシ。6一字因ニヨリテ補フ。7因いと。8不く。9因るアリ。10不し、不く。11因ナシ。12不はアリ。13因ふ。14因ナシ。15因考異本。16五字不ニヨリテ補フ。17因ナシ、国かる。18國イき。19不申して。20不ば。21不き。22不ふ人。23不は。24不ナシ。

へは、いかで1思ふ。すべて罷出なし給ひそ」君、「いとわりなき事。いかでか小き人々を見奉2らでは」宮「それに呼びにやりて見給へ。こゝにも見む。おほいまうち君などは、こゝにて逢ひ給ふめり。今一所は文して萬の事聞え給へ。里住し給ふ時3は、つれ〴〵4いと便なくて、物も食はれずなん」5となむ、更に許さじと6すゝ7て思し給8ひつる。

［書詞］9 10藤壺11は。

かくて大將殿は梨壺に參うで給ひて、物など聞え給ひて、罷出給ふまゝに、御官の人待ちうけ奉りて押し立てゝ遊びて、殿におはす。殿にはあるべきやうに御座所しつらはれたり。例の中の御殿の南の廂に、幄ども打ちわたしたり。中將少將12參らぬ人なし。いといかめしくし給ひて、夜一13日遊ぶ。さる物の上手のあるじとなれば、いかで14 15難なく聞かれ奉らむとて、遊ぶ事限りなし。曉方に皆、少將より初めて上達部16かづき給17(ふ)。上達部は例はかゝるわざなきを、18(は)じめ19給ふ度なれば、20上21下別の祿など賜ひわたして、明くるまで遊びてなむ、22樂など立ち給ひける。

〔イ〕文化十二年六月十三日以本居氏藏書校合畢　橡檍園

校異 1〔イ〕はアリ。2〔イ〕りて。3〔国〕にアリ。4〔因〕にアリ。5〔因〕など。6下二字〔イ〕ぞ。7〔國〕そ。8〔イ〕へ。9〔国〕ことはアリ。10〔国〕梨。11〔国〕ナシ。12〔イ〕も知。13〔イ〕夜。14〔イ〕かアリ。15〔イ〕なけ。16〔因〕物アリ。17一字〔イ〕ニヨリテ補フ。18一字〔イ〕ニヨリテ補フ。19〔因〕の。20〔イ〕中。21〔因〕中アリ。22〔国〕上達部などは立ち、〔因〕罷出。

かくて一二日ありて、大將殿内裏の仰せられし文ども持たせて參り給ひて、その由奏せさせ給ふ。帝、此の朝臣に見ゆるこそ恥かしけれ。警策に心にくくて、見1なに神さびたる翁にて見ゆ2れば、女一の皇子の面伏なりや」と宣3うて、打ち假粧じ給ひて、日の4(御)座におはしまして、召し入れて、「いづ5く」と宣へば、沈6文箱一よろひ、淺香の小唐櫃一よろひ、蘇枋の7大いなる一よろひ持て參れり。開けさせて文箱を御覽ずれば、文箱には唐錦を二に8切りて9えふ10認めて、11(厚さ二三寸ばかりに造れ12る、一箱づゝあり。俊蔭の主の集、13うの手にて14小書に書けり。今一には俊蔭の主の父式部15大輔の集、草に書けり。「16てづか17う18天子讀みて聞かせ19よ」と宣へば、20小書21け(文)机の上に22ぞ讀む。例の23老24の宴などの講師の聲よりは、少しみそかに讀ま25せ給ふ。七八枚26の文27や28果て29に一度30 31訓、一度は32うそ(◯聲)に讀ませ給ひて、面白しと聞し召すをば33誦34をさせ給ふ。何事し給ふにも聲いと面白き人の35誦し

校異 1イろ。2因考異るは。3因ひ。4一字イニヨリテ補フ。5イら。6国のアリ。7因覆した。8因考異押しアリ。9因鑿。10因じたる。11以下十八字イニヨリテ補フ。12國り。13イそ。14因眞名。15イ御アリ、國イ卿のアリ。16イ手、因考異み。17イら。18二字国ナシ、因點し、國大三。19イナシ。20二字因ナシ。21イふ。22国て。23イ花。24国ナシ。25国さアリ。26因讀みて、因考異の文讀みて。27国たり。28因が。29因ナシ。30イはアリ。31イ訓に。32イこ。33因誦。34イぜ。35国誦。

たれ1ぞ、いと面白く悲しければ、聞し召す帝も御しほたれ給ふ。大將も涙を流しつゝ仕うまつり給ふ。悲しき所をば打ち2泣かせ給ひ、興ある所をは興じ給ひ、をかしきをば打ち笑はせ給ひつゝ異御心なく聞し召し暮らす。上達部殿上人3あり、大將の仰せにて御文講ぜさせ4給ふ5、參り6訪ひ給へり。されど人に聞かせじとて高くも讀まず、7御前には人も參らせ給はず。誦ぜさせ給ふばかりをぞ僅かに聞きける。かくて仕う8參り暮らす。上9に「此の頃10は夜長に11しめやか12にて、13夜聞かん。な罷出そ」と宣へば、夕暮に殿上に出で給ひて、宮に御文奉14(れ)給ふ。「罷出侍りなんとすれ15ど、御文聞し召しさして、夜仕うまつれと仰せらるればなん。夜寒をいかにとなん。南の御方おはしまさせ給ひて、諸共にを。犬召して16御前に侍はせ給へ。罷出侍るまでは御帳の内出17でさせ給ふな。18をい19 20かに21 22と23云ふ24事25 26侍るなり。まことや宿直物賜は27せよ。わ28びても衣だにと語らひ29にて。なめし。中務の君30な〔○讀〕み聞31う給へ」とて奉り給へば、赤色の織物32の33、た34られ綾35の36も37に綿入38(れ)て、白き綾の袿重ねて、六尺ばか

校異 1イば。2〔イ〕歎。3因等は。4二字〔イ〕ナシ。5因とてアリ。6〔イ〕集。7因御前。8イまつ。9国ナシ。10国の。11以下六字因考異なりぬ。12因なれば。13国また。14一字イニヨリテ補フ。15イば。16因御前。17國だ。18因お。19国らアリ。20イナシ。21因もアリ。22イも。23國イもアリ。24因考異て、。25〔イ〕ぞアリ。26因考異はべ。27国さアリ。28因考異い。29因ナシ。30イよ。31イえ。32因も、國イナシ。33国もアリ。34イだの。35因ナシ。36下二字国にも。37イナシ。38一字イニヨリテ補フ。

りの貂（ふるき）の裘（かはごろも）、綾の裏付1（け）て、綿入れたる、御包に包ませ給ひ、3をき（〇置）4ロばかり5（御）衣箱6一具に、いと赤ら7かな8る綾掻練の袿一襲、同綾じの袿重ねて、三重襲の夜の御袴、織物の直衣指貫、かい9ゆり（〇掻練）襲の下10襲入れて11包みたり。色香打目世になく目出たし。故の箱帯珍の具など奉れ給ふ。御返12事は中務の君、「かくなど聞えさせつれば、御宿直物奉らせ給ふ。夜寒げな13よし何14 15ともまだ思し知らずとなん。犬16色はさおはします17時までさせよとなむ」とて奉れ給へば、大将見給ひて、「味氣なの宣旨書や」と獨言ちて、宿直裝束しかへて、召あれば參り給ひぬ。夜さりの御膳參る。「執負やある」と召し出でゝ、「此の朝臣いたはれや、18里19後めたく思ふらん。こゝにておろしを物せよ」とて、下させ給ふ。「これをかれを」など御覽じ續け20させ給ふ。后腹の21五22 23に侍ひ給ひける24、酒殿に大御酒召して、「文は酒こそはやせ。25近衛は酒はなれては何業かせん」と宣ひて賜ふ。五宮に、「くし26ぞ」なと宣へば、「檜割籠27侍28り」上、「さらば强ひよや。いぬる年の十五夜に29ぞ御達30してため31し、こゝにて32」と宣ひて、御覽じて、「かばかりに」とて賜へば、ともかくも聞えで、賜33（ふ）限り飲みたる、いと34清き程なり。酒など

校異 1 一字イニヨリテ補フ。2 イり。3 国お。4 因の、因考異かりの。5 一字団ニヨリテ補フ。6 因三。7 國ナシ。8 國イり。9 イね。10 国袴を、因袴。11 団包にアリ。12 イナシ。13 イに與、国に。14 イけアリ。15 國イけ。16 イ宮。17 イと聞え。18 イと、因考異さぞ。19 因にてアリ。20 國イせアリ。21 因宮。22 団宮アリ、イ君アリ。23 国宮。24 国にアリ。25 因近。26 因は。27 団あ。28 イる。29 因そこ。30 因强ひ。31 因り。32 因ゟアリ。33 一字イニヨリテ補フ。34 因よ。

打ち飲み1て、文に向ひたる火影、顔有樣いと目出たし。上、見る日より近まさりする人に2ぞありける、一の4皇子5さことに志ありてや思ふらむ、又我心を思ひたるにやあらんと思す。かくて文讀ませて聞し召す。女御6から參り給へり。そ7れ夜は8ふ更(○承香)殿9能御との10い(○宿直)なり。夜更け行くままに、文讀む聲、誦ずる聲も、いとあはれに面白し。上は琴の琴搔き合せつゝ誦せさせ給ひつゝ聞し召す。「あはれ11に、こ12れ朝臣の、昔琴を習はしたらましかば、いかによからまし。此の事によりて身も沈み13にしぞかし。大臣にもなりなましものを」大將、「いと味氣なう侍る人にこそ」14こゑ(○上)「あ15るに16て、もどきしにこそ」大將、「その朝臣のやうならましかば。かれはいといみじう侍りけるものを」上、「空言かな。かの朝臣には昔もこよなく17すさ(○勝)りたりと聞18えたる人も言へ、19又聞きしに、さこそあれ」と宣ふ程に、「丑20ろ前」と申21すは、夜更けにけり。「暫し打ち休みて、つとめてこそ」と宣ひて、入らせ22給ひぬ。大將の君は殿上に臥し給へり。此の君侍ひ23給ひとて、殿上人いと多か24け。寢入らで身じろぎ臥し給へれば、頭中將、「昔は寢ぎたなくおはせし殿の、などかうし(○牛カ、斯うしカ)のやうにては侍ひ25うゐにたるぞや」と宣へ26ど、27袖になりて、上起きさせ給ひて、殿上の方にみそかにおはしまして、かい28ば見をし

校異 1 因果てアリ。2 因こそ。3 因れ。4 因宮。5 イま。6 イ更衣、イ更衣與、因ナシ。7 イの。8 イそきやう、因承香。9 イの。10 因み。11 因ナシ。12 イの。13 因考異つゝ大臣にもえたらずなりアリ。14 イうへ。15 イな。16 イく。17 イま。18 イき。19 因ナシ。20 イの。21 因せば「。22 因ぬ、因給ふ。23 因給ふ、國イぬ。24 因り。25 イ添ひ、因給ひ。26 因ば。27 因「そへに」といらへて臥し給へり、つとめて。28 イま。

給へば、大將殿1の人の見ぬ方とて、奥に向きて文書き給ふ。「2上はなどか御返は宣はせざりけん。昼東なくなるらん」宿直物4賜はせたりしにつけても、

唐衣たちならして百敷の袖凍りつる今宵5何た6り

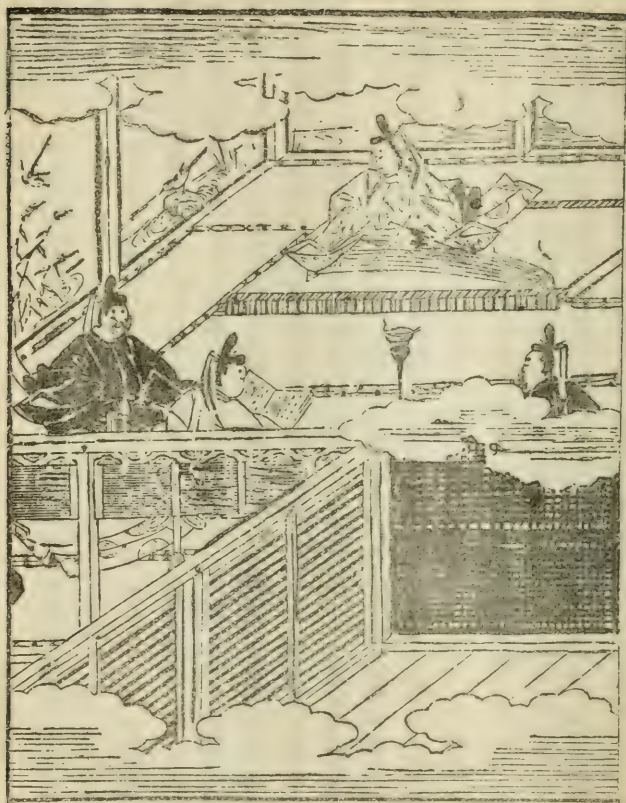
いかで打ち延7つてとこそ思う給へつれ。今日もや宣旨書8はいみじうこそ思はしおとしたれ」と9 10白き色紙に書きて、咲きたる梅の花につけて、主殿司に、「宿直所に男どもあらん。取らせよ」と賜へば、宰相の中將の君の御子、宮はたと言ひて、八11年ばかりにて殿上にあり、それ、「まろを使ひ給へ」とて、奪ひ取れば、「などかくは宣ふ」と宣へば、宮はた、「宮の御12供なれば」と言ふ。大將、「それをばなど」と宣13ひて、「君、思ひ棄て給へば、まろも」と14て取りて、殿上口に立てる15侍16るの人に取らせつ。上は、おろそかには思はぬなめり、つとめて文やるはと見給ひて、やをら入らせ給ひて、17御座所におはしまして、暫しありて召18せば、裝束して參り給ひぬ。五19宮も御前に侍ひ給ふ。さて御文仕うまつる程に、宮はた、20青き色紙に書きて、呉竹につけたる文を21下げ22て來て、「宮の御返23事」と24持て騷ぎて、大將殿、「暫し今」と言へば、上、「持て來や」とて取らせ給へば、大將殿いとかたはらいた25し、苦しと思26ふめり。上御覽ずれば、

校異 1イナシ。2イよべ。3國イらアリ。4國返し。5イなりけ。6國考異る。7イへ。8國イナシ。9國考異てアリ。10以下五百卅一字國イナシ。11國つ。12イもと。13イふ父。14國考異言ひアリ。15二字国さぶらし。16一字イナシ。17イ例のアリ。18国せ。19国のアリ。20国考異亦。21イ捧歟、国捧。22国考異ナシ。23国ナシ。24国てアリ。25国ぐを。26イく。27イな給アリ。

「よべは散らされもやするとてなん。思ひおとしたりと1かありし。そ2れわたりにては、

消えずのみ見ゆる思ひもあるものを何か袂の凍りしもせん

まことや、裝束どもゝ物せさす。昨日のが見苦しかりしかば、「これも3華きしにぞあなる」と、いとをかしげに書き給へり。女御の4宮の御手5のあてに若くは見ゆれど、おとなしくも後見6をこするかなと思して、押し巻きて投げ遣はしつ。大將賜7わりて、見て、「何事にか侍らん」とて、懷に入8(れ)つ。上侍宮に、五の宮を御使にて、「昨日よりいと有難き文をなん、右大將に9讀ませて10さゝ侍る。渡りて聞きた11ま(〇給)へ」と聞え給ふ。五12宮打ち笑ひ給ひて、「え上り給はじ。更に13たゞにおはせざ14んなり。吾が所に籠りおはして、15現にも物し給はざ16んなれば、男ども侍る所に參うで來つゝ、此の月17次御18前に侍はぬ事。すべて19大顔なん見奉ら20ぬとなむ歎き佗び申21す」上22は「何處に物せらるゝにか23あらん」「藤壺ならでは何處にかは。異人を知り給はゞこそあらめ」「皇子をいかにし奉24らん」宮、「それは今年いまだ對25面し給はざ26れり。すべて27讒も見奉る事難く、いかならむ28障にか29侍りつらん、此の30御妹こそ時々見奉りて、

校異 1イナシ。2イの。3因殊更。4イ君。5因に似て。6因お。7イは。8一字イニヨリテ補フ。9以上国イナシ。10二字イ聞、因聞き。11イま。12因のアリ。13因だ。14因ナシ。15イ上。16因ナシ。17イ頃。18因前。19囨「御」トアリテ下ニ「板」ト記ス、国おほん。20イん。21国し給へば。22イナシ。23イはアリ。24イるアリ。25国面。26イるな、国な。27イ誰。28イ隙。29国はアリ。30囨御。

1娠して侍る2「あたら人の、3いちの心物し給ふこそあなれ。世の中はいとよく保ち給ふべしとこそ見れ。文にも、酒を好み内を4(こ)の〔○好〕むとこそ5しれるものを。6此の宮いかに思すらん」「いかに聞し召すらん。そが中にも7宮の御あ8ひ〔○愛〕子な9り。10など11子達かくのみあらん」「女三12 13皇子もいと哀れにて物せらるなり。輔純の朝臣もいかゞしなさんと物すらん。すべて女皇子達はたゞに物せられむこそよからめ。身によからぬ宮達多く持たるや」と宣ふ程に、春宮14御使15「只今參う上るとなん仰せられつる」と奏す。巳16つ四つばかりになりぬ。〔○圐以下ヲ「畫詞」トス〕大將は殿上に物調じ据ゑた17る、宿直所に18も宮19よりも藁盛所よりも參れり。御前より立ち給ひて、宿直所に下りて居給へり。參20る物ども調じ据ゑたり。御裝束は蘇枋襲、綾の上の袴などにて、いと淸らに香ばしく21奉れ22給へり。四位五位あまた參れり。裝束解き廣げて臥し給へり。〔○以上圐畫詞〕午23時ばかりに、春宮24はみじく淸らに裝束き給ひて參う上り給へり。御褥など參りて、御前におはします。大將25を召26さ27ど、暫し休むとて參う上り給はず。御裝束しかへて參り給へり。物の色美しさ類な28く匂深くて、例の御文仕うまつる。聞し召しくらして、く29て

校異1圐孕み給ひ。2イなりアリ。3圐色。4一字国ニヨリテ補フ。5イ記せ。6国四。7国人、圐院。8イい。9イる。10圐考異いと。11圐言痛。12国のアリ。13イ宮、14圐のアリ。15圐歸り來てアリ。16圐ナシ。17圐り。18イナシ。19國イか。20圐り。21イてアリ。22二字国ナシ。23イのアリ。24イい。25以下四字圐考異目を。36一字イせ。27一字イとて。27國イき。29すらく。

〔○暗く〕なりて、まだ御殿油参らぬ程に、大將下り給ひて、藏人して奏せさせ給ふ、「罷出侍りて、つとめて參らんはいかゞ侍らん」と奏せさせ給1〔ふ〕。2らへ〔○下〕「暮れ難く明け易きうちに、夜なんいと興ある。罷出られずやよからん。又3客人の物し給ふを」と宣ふ。大將いたく歎きて、宮に御文奉れ給ふ。「今朝は喜びてなん。すなはち4に思ふ給へれど、罷出なんと5て侍りつれど、許させ給はねば。そのわたりにとか侍りつるは、あな古めかし6や。

昔7の8は9聞きにしものを程もなき戀に10添へては色燃えぬべき

昨日は今日こそ侘びしきものとは。まことや、汚き物は賜はり侍りぬ。犬はいかゞ、聞えたりしやうにや」とて、昨日の御11そう〔○裝〕束どもに奉12り給ひつ。暗き程になりて御返しなし。上より頻りに召せば、物な13んど參りて14給ひぬ。15ころ〔○上〕「文は夜なんいと興ある。今宵16はこゝに17て聞き給へ」と春宮に聞え給ふ程に、雪少し高くなり、御18殿油參りて、短き燈臺19さら〔○更カ、皿カ〕に20立てたり。上の御前に琴の御琴、春宮の御前に箏の御琴、五21宮琵琶、御前ごとに打ち置きて、大將は文讀み給ふ。上あからさまに入らせ給へる程に、大將文の點直すところにある筆を、春宮取らせ給ひて、御懷紙にかく書きて、藤壺に

校異 1一字イニヨリテ補フ。2イう。3イ眞人。4イと。5因ナシ。6イナシ。7因老異へ。8因み、因老異と。9イ消え。10因ぞ袖。11因さ。12因れ。13因ナシ。14イ參りアリ。15イ上。16イナシ。17因ナシ。18因殿油。19因左右。20イ奉り、因奉りたり、因老異奉る。21因のアリ。

奉り給ふ。「今宵は文聞けと宣へば、心にもあらでなん。ながら、ふ1 2も云ふなるも3（の）を、

　白4雲の降ればはかなき世5中を獨り明かさん6事7の8佗びしさ

9あらん世の限りだにこそ」とて、宮はたに取らせ給ふ。これは藤壺を狠にし奉りて、春宮の殿上もす10とて、持て參りて奉11るは、君白き紙に、

　「憂き事のまだ白雪の下消えて降れど止まらぬ世の中はな12ら

憂からぬはとこそ。何かな13らん、思ひ給へられず」とて、宮はたに、「上大將などの御前にて14はな奉そ」と宣15（ふ）。16はりて、宮の御後に侍ふ程に、御文讀むさかりに、上あからめし給へる間に、宮取りて見給ひて、世の中を心憂しとも思ひたるかな、心に身を任せ17八、人の心事によりてなど、打ち涙ぐみ給ひて見給18ひつるを、大將見合せ給ひて、思19（ひ）やみにしかど20心地打ち騷21げば、洗むとすれど僻讀22を多く22す。上點一も讀み過たぬを、怪しと思して、打ちほゝ笑み給ふを、大將見奉りて笑ひぬ。上も念じ給はで笑はせ給ひぬ。大將いとはしと思ひて、かい直して、いと面白く讀みなす。その際いと面白24くあり。

校異 1 イとてアリ、国とアリ。2 因考異そ。3 一字国ニヨリテ補フ。4 イ雪。5 因のアリ。6 囚物。7 國ナシ。8 因考異はかな。9 囚にアリ。10 因考異るなるアリ。11 イれば。12 イぞ。13 イかアリ。14 因はアリ。15 一字イニヨリテ補フ。16 イ參。17 イば。18 イへ。19 一字イニヨリテ補フ。20 以下十八字イニヨリテ補フ。21 国がれて。22 國ナシ。23 イ据ゑてん、国すべきを點、因考異すべきに點。21 因し。

1上打ち靜めて、いと高く面白く2過ぐる聲、鈴を振りたるやうにて、雲井3をうがちて、面白き事限りなし。4御前なる御琴5ども掻き合せ給ひて、「文の祿6何よかりなん」と宣へば、五7宮、「又はいかでか。此の度のには賭りたらばや」上、「いと難からん。文才には何かは」とて、御時よく笑はせ給ふ。「さて、こ8のはしばしかくこゝ、此の草子を讀まむ」と宣ひて、今一箱のを初めて讀ませ給ふ。これはいと讀みてあり、あはれに面白さも優れり、上、「9文才はたほ此の朝臣のは優れりけり。怪しく此の族の手10して優11りなるかな」と宣ひて、夜一夜面白き句ある所を誦ぜさせ給ひて、御琴どもに合せ12給ふ。曉方に、いと面白き所あり。大將に誦ぜさせ給ひ我も誦じ給ふ。五13宮に「誦ぜよ」と宣へば、ともかくも宣14(は)で、打ち出でゝ誦し給ふ聲いと面白し。春宮誦し給はず。

かくて曉方になりぬ。春宮に、「なほ明日ばかりは此方にを。いと御心付きぬべきもの侍り。それ見せ奉らん」とて、御几帳たて15おはしまさ16さ給ふ。上は入らせ給ひぬ。五17宮は臺盤所に入り給ひて、藏人達の中に御殿籠りぬ。大將は侍に出で給へば、宮18かたともに往ぬ。大將臥し給ひて、宮19かたを懷に臥させ給ひて語ら20に、「姉君は大きになり給へりや」宮21かた、「大きにもなり給はず、ち22い(〇小)さくもおはせず」

校異 1国聲、因考異ナシ。2イ誦する、國誦す。3因考異に通り。4因御前。5イど。6イにアリ。7因のアリ。8イれ。9イ風情、因文才。10因こそ。11イる。12イさせアリ。13因のアリ。14一字イニヨリテ補フ。15イてアリ。16イせ。17因のアリ。18イは。19イは。20イふ。21イは。22国ひ。

と言へば、「御髮は長しや」「いと長げなり」大將、「父よはうつくしうし給ふや」「いさ知らず。弟宮をこそ夜晝抱き給へ」「いで弟宮は幾らはど2思すにおはする」宮3かた、「今ぞ立つめる。いとをかしげなり」と言ふ。大將、「など父4よは宮をば思ひ奉り給5ふぞ」「いさ、南の方に出で居て、6他所人に見なし奉りつゝと泣きなど7らそし給へ」大將、「いづれの宮をと8か宣ふ」宮9わた10は、「そこ11のを12 13とへていづれかは14我がと言へば、內裏の上の御許に參うづれば、いと淸らにて常に見え給ふぞかし」大將、「などてそれをば思ひ奉るぞ。見奉らんとや」と言へば、「よし」と言ふ。「さて御文は取り入るゝか」宮15かた、「さ16うかし」大將いみじう笑ひて、「我17得させん18 19よ、物な思ひそ。さて藤壺に參らば、仲忠なむと聞ゆるとて、日頃侍へど、いと20よ〔の〕暇〔〕の侍らねば、え參り侍らぬと申し給へ」など言ふ21わ、つとめてになりぬ。宮は22かた起くれば、頭か23はつくろひ裝束せさせて遣りつ。藤壺に參りたれば、御達、「あなかうばしや。此の君は女の懷にぞ寢給ひける」「さか24く。右大將の大殿の御懷に25寢26たりつる」御達、「女27めにこそは」と言ふ。上に申し給28ひつる事聞ゆれば、君、「侍ひ給29(ふ)と承はれば、顏もしき心地なん。御暇の頃は、さ云ふやうあなり30」と言はせ給へば、大將、「いとけやけくも、よから31ぬ事なき事」など聞え給ふ。藤壺、「此

校異1イき。2イ大き。3イは。4イき。5因はぬ。6イこそ。7イこ。8因考異ナシ。9イは。10イナシ。11因ナシ。12国もアリ。13イ超え、国置き。14二字国ナシ。15イは。16イぞ。17国もアリ。18イにアリ。19因に。20イま。21イに。22イナシ。23イい。24イし。25イぞアリ。26国イざ。27国ナシ、因考異房。28イへ。29一字イニヨリテ補フ。30イかアリ。31イぬ。

の君は何處なる1に」と問ひ給へば、「殿上に」と言ふ。藤壺孫王の君に、「かの言ひし事は、今の間にぞよか2んなる」と宣ふ程に宮の御文あり。見給へば、「よべ3思はぬやう4に有りしかば夜もすがらなん。何事をかさまでは。

降るかひの5中になからんあわ雪6の積れば山とならぬものかはに

とて、うつらから7むをのみこそ。さらぬ事をばな8をは〔○思〕しそ。暫しとあればなん。對9面に10お」とあ11る御返12事、

「山となる雪ぞ13ゆゝしく14おほゝゆる絶えて越路のものとこそ聞け

それをこそ思ふ給へあるまじけれ」と聞え給ふ。かゝる程に雪高く降りぬ。大將の君、宮の御許にかく聞え奉り給ふ。「夜の間はいかゞ。御返も賜はせざりしかば覺束なく15もなん。更に散らし侍らぬものを。

かくばかり見ねば戀しき君を16いかで知らで昔をわが過ぐしけん

と聞えさするも思しや17出づ18る19んと思ふ給ふるこそ。かつは犬こ20ゝそいと21戀しう侍れ。我が君、御懷に抱かせ給22ひつれ。今朝の雪こそいと寒げなれ」と聞えて、御返23事見て御24前25へは參らん、昨日の

〔異本〕1国ぞ。2因ナシ。3国はアリ。4国ぞ。5イ何か。6イも。7因ぬ。8一字イお、六字因考異は大空〔○ぞうノ誤カ〕には。9因面。10イを、11因り。12因は。13イゆかし、因考異いみじ。14イ思ほ。15イと。16因考異おき。17因知。18イら。16因考異らアリ。20国ナシ、因考異そこ。21イ戀。22イへれ、因へ。23因ナシ。21不前、因前。25因に。

やうにもぞ持て騒ぐと1覺えて、暫し參り給はず。殿上には、源中納言、右2中辨、中納言、異人もいと多かり。右3大臣殿の君達あまた物し給ふ。源中納言大將の君に申し給ふやう、「などか君は、昔よりいかばかりかは契4(り)聞ゆる、5此の御文を承はらんとて、妻6(子)の懷を捨てゝ、かく寒78夜に震ふ〲打ち延へ侍ふかひなく、一文字をだに聞かせ給はぬ、少し高くだにやは仕うまつり給はぬ」大將、「仰せ言あれば高くは侍9 10うが中に、苦しう侍れば聲も出でず」中納言、「さて、いかでよべは11人とは雲をうがちて空には12あにし。此の主こそは我が世の末の博士とは思ひつれ。それ13直14さ15る氣を參りて、まどふまで讀みのゝしらせ給16(ひ)しかども、腸の斷17たじかは。御聲の限りをこそ聞き侍りしか18ば、詩一つも覺えぬは、すべて君は19涼をぞまどはし給ふ」琴彈き給ひては、裸褌にて走らせ給ひて、殿上まで笑はせ奉り給ふ」大將、「20他易き御21腹にこそあれ。今も聞い給22はではえ仕うまつらじや」中納言、「なほ物の底にな讀み入れ給ふぞよろし23くは」大將、「石の唐櫃に入るゝぞかし」右大辨、「壁の中に納めさせ給24へと25しやあらん」大將、「さては主ぞ埋もれ給はん」中將、「明王の御世に出26づまじき事27なり。此の御文祕せらるゝよ

校異 1 因思し、因考異思はし。2 国大。3 因のアリ。4 一字イニヨリテ補フ。5 二字因考異ナシ。6 一字イニヨリテ補フ。7 因きアリ。8 イき。9 因ぞアリ。10 イそ。11 イ一人、国一度。12 イ上り、因考異上りに。13 国すら。14 下三字因酒。15 一字イり。16 一字イニヨリテ補フ。17 イえしかば。18 イ文字。19 閑イすぐし。20 イ立ち。21 因考異耳。22 因ふま。23 因からめ。24 因ふ。25 イに。26 イで來、國で。27 イどもアリ。

し、行正こそ承1〔はり〕つけたれ。理なり2けんかし。俗の身こそ味氣な3 4やとははつ聞き知りた5ゝむ」など言ふ程に、藤壺より大きやかなるしふたい〔○重臺カ〕の程たる瑠璃のをた6い〔○瓮〕に7いをの一8瓯、同じ9 10さ11うつ12ち〔○平杯カ、皿杯カ、高杯カ〕に生物13か14し〔○干〕物15門杯16物盛りて、同じ17坏の大きなるに大御酒入れて、白銀18 19結袋に信濃梨、20下瀬など入れて、白銀の銚子に21 22こう〔○香〕煎一調子入れて奉り給へり。炭取に小23小炭24取り入25〔れ〕て奉り給へり。集まりて興じて、皆取り据ゑて參る程に、大いたる白銀の搬子に、若菜の羹一鍋、蓋には黒26ほう〔○方〕を大いたる土器のやうに造り27しほめて覆ひたり。取所には女の一人若菜摘みたる形を造り28たり。それに孫王の君の手してかく書きた29る、

「君がため春日の野邊の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる

あつ30いもの〔○羹〕をばかくなん仕31うまつりなりにたる。聞し召しつ32いしや」と書きつけて、小さき黄金のなり瓢を奉り、33よじ〔○雉〕の足34織物に高く35盛りて添へ奉り給へり。集まりて笑ひのゝしれば、上

【校異】1二字イニヨリテ補フ。2因げに放。3イきアリ。4因けれ誰か。5イら。6国ひ。7国魚、因御膳。8[イ]折。9[友]きアリ。10二字国たか、因ひら。11一字イら。12イき。13因凹杯にアリ。14国ら。15三字因ナシ。16国に菓アリ。17因きアリ。18イのアリ。19因考異透。20[イ]ナシ。21一字因考異瞬、三字因地黄。22イか、因わ。23イの炭。24二字因ナシ。25一字イニヨリテ補フ。26国に。27イく。28二字因ナシ。29因り、30イナシ。31[イ]ふ。32イべ。33イき。34国折。35國イも持。

」など此の朝臣の今日は遲く出で來て、かく言ふは」とて、例の所よりのぞかせ給へば、臺盤に物据ゑて取りなしつゝ參る。御酒など參る程に、例の宮はた、陸奧紙のいと淸らなるに雪降りかゝりたる枝に文を付けたる持て來て、「宮の御文」と捧げてひろめかす。源中納言、「1心地しあらむ2御文をかうして、惡しかめりや」大將3は、「今日はいとよしや。昨日御前にてかくしたりしこそ4見えしはなかりし5かど、6かくがはしう」と取りて見給ふ。後7に上も御覽ずれば、「覺束なしとかあるは、御8前にとのみ9よ(〇聞)けば、上もこそ見給へとてなん。思ひ出でんと10かや。

か11よ(〇畏)りなくありし昔の見えしかば今も我にはあらじとぞ思12(ふ)

とてぞ聞えにくきや。からうじて物思13(ひ)知られたりけるかな。聞え給へる人は、あなたの御懷にのみぞあなる」とあるを、いとよう見給ひて、度々文遣りなどするは、いとないがしろにはあらぬなめり、いかで今し14い(〇召)し据ゑて、せむやう見むと思して、御心地落ち15 16給ひぬ。返りおはして、つれなくて居給へり。17天上に18酒飲みのゝしりて、19鍋の蓋の返り事は、物取り食ふお20よた(〇翁)の形を、21物を丸がして造り据ゑて、それにかく書き給ふ。

校異 1 因考異こゝらも。2 因考異ぬ。3 因ナシ。4 イ道しは、因淵瀨も。5 因いと。6 イから、因らう。7 因より。8 因前。9 イき。10 因ナシ。11 イぎ。12 一字イニヨリテ補フ。13 一字イニヨリテ補フ。14 イば。15 因居アリ。16 イ居。17 イ殿上、因上。18 因はアリ。19 因かのアリ。20 イき。21 因食アリ。

二上如の雪間掻き分け袖ひぢて摘める若菜1はひとりこか〔〇飼カ、賀カ〕へとや
あつ3いもの〔〇羹〕時はまだ過ぎ侍ら4たりけ5り」とて奉れ給ふ。物など食ひ（ひ）果てゝ、大将7此の8物ども奉れ給へる物9どもを、さながら取り集めて返し奉り給ふとて、孫王の君の御許に、「これをいと全く返し奉りたく、明日にもいととく賜はらんとて。器物侍らずば、求めさせ給はん程遅くやとてなん」と宣へり。孫王の君などいみじく笑ひ給ふ。「10客11とくにて、今さへも客12人見給へるかな」とて、「いとよき13心厨子所の執仕なりけり。分きても土器を14添へ、失ひ15てける。衣の袖解かれぬべう」16と聞えたれば、集まりて笑ふ。大将「今ふるを17さ〔〇古長カ〕18役19を奉らん」などて、酔ひて臥し給へり。上より「遅し」とて20責めば、「上達の御盃酒を強ひて賜び侍りつるに、前後も知らでなん」21空酔をし、空言をして参り給はず。帝休むならんと思して、暫し召さず。

かくて巳の時打ち下りての程に、青鈍の綾の袴柳襲など、いと清らにて、今日22にうつしは麝香薫物23薫衣香、24もれうとにし25かくしたり。さて参う上り給へば、26上の侍臣の主の27集を讀ませ給ふ。讀み暮らして暗うなりぬ。上「いと日高う初めつ。更にな立ちそ」と宣ひて、28御殿油いと29ど参りて讀ませ給ふ。亥

【校異】1国を。2イ食。3イナシ。4国ざ。5イる。6一字イニヨリテ補フ。7二字ナ彩異ナシ。8三字イナシ。9二字㑂ナシ。10イそう。11国言、図言人。12図言し。13イ御、図御。14図ぞ一つ。15㑂り。16匠も。17国靴。18図考異福。19図に。20イ召せ。21図とアリ。22イの。23イ薫、国薫。24イ物毎、国も猶殊。25図読。26イよべの、国上は、図今日は。27イ詩アリ。28図大。29イとく。

の時ばかり1よりは、2られ3は暫し止めさせ給ひて、小唐櫃開けさせて御覽ずれば、唐の色紙を中より押し折りて、大の草子に4綴りて、厚さ三寸ばかりにて、一には例の女の手、二行に5ひゝかた書き、一には草、行同じこと、一には片假名、一つは葦手。先づ例の手を讀ませ6 7給ふ。8うたて限りなし。四所さし向ひて、9人に10聞かせで聞し召す。今宵は11よさい「○后」の宮參う上り給へり。12たかの13これうのゐかひ達いと多かり。かゝる事ありとて、御簾のもとに后の宮おはせば、上は大將に御目くはせて、みそかに讀ませ14給ふ。「后の宮15達16こそ聞かせ給はざらめ、か17ら「○講」師は心18をよ」と宣へば、ゝ讀まで、19取りくひもて侍ふ。上「いと20惡き朝臣なりけり。かくな21臆せられそ。たゞ言ふにしたがひて讀め。これは22詮もく讀みつべけれど、23室に異人の讀むまじきよしのあれば、先づ諸24ますするぞ」と宣へば、少し高く讀む。所々は25聲にも讀む。后の宮いみじう憎み給ふ。されどいとよく聞し召す。異人はゝ聞き知らず。聞し召し知りたる限りは、上も春宮も泣き給ふ。したるやうは、た26えありつる事を、物語のやうに書き記しつゝ、その折の歌どもをつけたり。面白き所27々28、悲しき所29々30有り31て、かくて曉方になりて、上

校異 1因考異に。2イこ。3イらアリ。4イ作。5イ一方、因一歌。6国させアリ。7二字イナシ。8国日出たき事。9国日毎。10イ讀ま。11イき。12イ對、因こなた。13因御。14因させアリ。15因御アリ。16因にアリ。17イう。18国せよ、因してを。19国爪。20因惡。21國イほなほ。22国誰。23イ更。24國イさ。25因考異ずんアリ。26イだ。27因考異も。28因もアリ。29因も。30イるアリ。31イナシ。

「かゝる理なり。此の母皇子は昔1右高2かりける姫、手書き歌詠みな3り4。院の御妹5の女御腹たりけり。さりける人の、さる折々にし置きたりける事なれば、かくいみじきなり。是は女一の宮には見せたりや」大將、「見給6へ付けし所にて、7ち(○外)題ばかりをなん。さては今宵8となん9開きては見給ふ」上「かしこに講ぜらるべきものなりと10も、是は暫し」とて、「今一を」とて御覽ずれば、11是は後蔭が京より筑紫12出で立ち、13唐士へ渡りたりける間より初めて、京14に15女の上を言ひそめて、言ひつゝ折々に歌ありけり。これが面白く悲しき事はかれに16一17優れり。その卷にしも取りあたりて、開18え召して、「是は內侍の督の見るべき事どもにこそあめれ19ば、見たりや」と宣ふ。大將、「さも侍らず。是は見せ侍らん」とて取り代ふれば、「なほ見果て20い」とて御覽ずるに、面白21き悲しき事限りなし。又殊に取り代ふる卷は、蓮22花園にて天人かけり給ひし時、讀み集めた23る24ども、そのよし記せるなり。上めで給ふ事限りなし。「夜明けぬべし。長き夜をしも盡25つすべ26てもなき事27(ど)もなめり。今はこれらはたゞに見ん。集ども日記ども28などをなん29混ぜて聞くべき。それは佛名過ぐしてせん。此の朝臣30いと31ゝる(○苦)しと思ひためり」

校異 1一字イ名、二字國イなどか。2図く、國くあ。3國イかアリ。4イけりアリ。5国ナシ。6イひ。7イげ。8国も。9國イ日々。10イて。11二字國イナシ。12イヘアリ。13図唐土。14因考異の。15因歸り參うで來てアリ。16国は、因考異ナシ。17國卷あ、國イ卷あされ。18イし。19因ナシ。20イよ。21因く。22不華アリ、国華のアリ。23國イり。24イ事アリ。25イく。26イく。27一字イニヨリテ補フ。28二字因考異ナシ。29因讀ませ。30二字因考異ナシ。31イく。

と仰せられて、東宮に聞え給ふ。「その1如くなければ對面する事いと難し。かゝるついでに聞えんと思ふ事2どもあり。此の朝臣こそあめれ、それ3は4行く先の御後見すべき人なめれば。月頃5よけ6い上にも物し給はずと言ふなるを、なほ上に7ちらし8給ひて、例の作法に政事あらせてこそ侍はせ9むに、思す人あらば、夜は參う上らせ、晝は上局賜ひなどしてこそ。例に違ひて聞ゆれば。そが中に10虚空と申11す人のいたく歎かる12やうに聞ゆるは、などかはいとさしも。院の聞し召す所もあり、13さ年高くなりぬれば、御14世今いくばくもあらじを。そか15らち〔○中〕にも、16宮のいと17ろうたくし給ふ宮なり。18て下に心に叶はずとも、少し心留めてこそ」と聞え給へば、「それはさ思う給ふる事なり。先つ頃も、渡り給へと聞え、かしこにも參うでゝ侍りしかども、聞ゆるにもしたがひ給はず、いと荒19ゝし20く御氣色のあれば、21てゝひかしこまりて物も聞えず侍り」上、「それも宣ふやうありと22ぞ、23かくやし宮、「24さ知り25て26る27あるものを、宜しからず思すなり。それ28かじめ、かしこになん今宵出で給29へば、聞えしを、30たてなん絶えたるを、いかなるにか侍らん、よからず思して、此の人かしこに侍るとて御氣色惡しければ、勘事免さる31ゝま

校異　1イ事と。2〔イ〕ナシ。3イの。4因考異御アリ。5イ聞。6イば。7因領じ〔○マタ勞じカ〕、因おはし。8二字因ナシ。9因給はめ。10以下二字イ二宮、因考異四の宮、六字国四の宮、因承香殿の宮、因考異も人の中すは四の宮。11一字イせし。12イるアリ。13イ御し。14イ世はま、國世はまいて、國イ齢まいて。15イう。16国院。17イら。18一字イ天、三字国そこの。19因考異ま。20因き。21イ月頃。22因ナシ。23イ聞。24イ交じ、因罷、因考異そし。25国侍、因考異侍るめ。26イ侍アリ。27イめ。28イは。29イふべきと、國イへきと。30因さ。31イナシ。

でなん。心ざしなば失ひ侍らね1ど、ついでには自ら聞し召してん」上2は、「後は3秋物にも4なし給ふとも、院のおはします5きに、かゝると聞6え7召すなん、いといと8おしきや9なる事どもを思したるに10やあらん、上も宮も御髪おろしてんとし給ふなり。世11 12保ち給ふべき事近くなりぬるを、平かに、誹られな13して14保ち給へ。人の國にも、最愛の妻15(持)たる16わと誹り取りたるめる。さ言はるゝ人持給、れば戒め聞ゆるなり。分17きてもこゝには18(よ)き女の限り集へたれど、え褒められずなりぬるやに宮、かしこに19とぞ侍るめれ。言葉も惜しますのゝしることは、外に20はえ侍らじ」と聞え給ふ程に明けはなれぬ。

上世の中に名高くて傳はりくる御21帯數多ある中に、よしと思すを取り出でさせ給ひて、大將に、「22これ23朔日に御は24ひ(○拜)などあらん折、物せられよ」とて賜ふ。大將25に(○舞)踏し給ふ。明けぬれば罷出給ひなんとす。上、「佛名過ぐして、必ず今二三日物せられよ。年の始にはえ讀むまじき文なめ26にを。仁壽殿は今年に參るまじきにやあらん。自らの上に、かやうの時よりも、いと27悲さ(○久)しかめるは、もしそこにの28ど29 30せさせて物せらるゝか。まめやかには、こ31(こて)のかして參らせ32くれよ。昔はかくもあら

校異 1因ば。2イナシ。3因やらへ。4因考異ナシ。5イ世。6イし、旧しらトアリテ下ニ「板」トアリ。7國しら、國イ示。8国は。9イうアリ。10因ナシ。11イをアリ。12因を知り。13イく。14因知り。15一字イニヨリテ補フ。16イにこそ、因にぞ、國にとぞ。17因考異い。18一字イニヨリテ補フ。19イこそ。20イと。21国ナシ。22二字國イナシ。23三字因ナシ。24国い。25イふ。26イる。27イけ。28イみ。29国めアリ。30国め。31一字イニヨリテ補フ。32国ら。

ざりしかど、末の代には女の侍るにこそ」1宣へば、大將かしこまりて承はり給ふ。此の御文2は皆封つけさせ3つ、御廚子に納められぬ。春宮歸り給4ひつる。殿上人學士など率て、大將も藤壺まで御送りし給ふ。孫王の君に5消息申し置き給ひて、梨壺に參うで給ふ。宮は藤壺に入り臥し給ひぬ。大將の君梨壺に對6面し給へり。「日頃侍ひ侍りつれど、聞えざりつるかな」「いつも上にとのみ承はりつれば、これよりも7え聞えざりつる」大將、「いと8つ9て思し隔てたりける事。先に參りたりしかど、などか宣はざりけん」梨壺10に、「何事ぞや。聞えぬ事なきものを」大將、「あるやうおはしけるものを。是ばかり11は、殿の御ためにも仲忠12がためにも、13對面なる事なん侍らぬ。例14のやうなる世に15そよりめでたき16になり17も、18何かは、かく皆人の不用になりぬと言ひ騷ぐ世に、いかに。さ19はれ、かゝる聞えのあるのみなん嬉しき事侍るべき20」「21いで、怪しの問はず語りや。よき事侍ひつきて何かはとてこそ」大將、「いつばかりよりかは」君「相撲の節の22暑氣にやなど思23(ひ)し程よりにやあらん」大將、「いと久しくなりにけるを、殿には聞し召したらんや」「24いで、いかで25か。聞えばこそ26はあらめ27。時の28時のなく恥かしければ、こゝなる人に

校異 1イとアリ。2イどもアリ。3イて。4国へり。5イ御アリ。6図面。7イナシ。8下二字國イナシ。9一字イらく。10イナシ。11イぞ。12イらアリ。13国面目。14以下十字図ならぬ御樣の事承はりて。15下一字イナシ、三字図考異ナシ。16以下二字イ事、八字図事になむ思う給へる。17イとアリ。18図へしアり、國イしアリ。19図れさ。20國イきアリ。21図答。22イ頃アリ。23一字イニヨリテ補フ。24図答。25國ナシ。26イナシ。27国どアリ。28二字イナシ。

……ん」大將「一夜五の宮の奏し給ひしをなん」
五の宮の御心ぞいと怪し3よや。かくいたづらにてありとにやあらん。我はしも憎まじなど宣ひしを、
の頃音もし給はぬは、かう聞き給ひてなりけり」大將「世の中のあだ人となり4分れ給ひて、世をばない
しろに思5〔ひ。〕て、御前にもつゝむ事なく、萬の事を奏し給ふや。なほよく心つゝしみて侍ひ給へ。あ6
め〔○當目カ、惡目カ〕のみ有り」と宣へば、「一所により奉りて胸のみなん潰れ侍る。大臣殿の君一所のみ
そ、數多の人の名は立て給ふめれ」大將「院の御方7へ參う上り給はずとか」「8いで、此の森いみじき御
9せかひありて、御衣引き破10うれ、萬の所掻き損はれ給ひて後は、11また上らせ奉り給はざなり。されば
かくてのみは世にも。昔時におはせし人なれば、宮に對12面賜はる時も、哀れと思13〔14ひ〕聞ゆれ15ど、心
16憂ければなどぞ宣ふ17」大將「やむごとなき所もや引き破られ給18へらん。さてはましていかならん」と
て、「今一二日過ぐして參らむ」とて罷出給ひぬ。

〔校訂〕19 20梨壺。

かくて大將、君罷出給ひて、21〔一22宮の御方へ〕23參りて見給へば、日の御座所にも、御帳の内にも宮おは

〔校異〕1イナシ。2イふ。3イさ。4イ騒が歟、因騒が。5一字イニヨリテ補フ。6イく。7国は。8因答。9イさ。10イら。11イ參う。12因面。13一字イニヨリテ補フ。14因へ。15イば。16囝失せ、17イなりアリ、因なゐアリ。18因ひつ。19囝こゝはアリ。20二字イナシ。21六字イニヨリテ補フ。22国のアリ。23國イはひ。

しまさず。怪しと思ひて、中務の君に、「いづくにぞ」と宣へば、「西の御方に、御湯参る」と聞ゆれば、淺ましと思ひて、「などか。罷出侍るとは聞し召しつらむを、今日しもおぼろげに、久しくすまし」て御髪のやうに、すまし干させ程、命短からむ人は、え對2面賜は3みじかし。さて犬は」と宣ふ。「それもあなたに」と聞ゆ。「大輔呼び給へ」とて召したれば、犬4宮抱きて出で來たり。大殿抱き取りて見給へば、こ5を丸かしたるやうに肥えて、見知り顔に物語りす。いとうつくし6く思ひ、宮の御許に御文奉り給ふ。「からうじて罷出侍りつるを、7渡らせ給はぬこそ。大宮のたきあるものを、今日の御ゆ8つる〔○沺〕こそ。

9何にかも裂くとは聞かぬ逢ふ事を今日あら〔○顯、洗〕はるゝかみ〔○神、髮〕は何ぞも

そなたにや參り10來べき」と聞え給へり。されど御返も聞え給はねば、むづかりて、犬宮抱きて日の御座に臥し給ひぬ。太輔11「此の子は人にや見せつる」と宣へば、「さも侍らず。誰も／＼西の御方に渡りおはしまして、見奉らせ給はんと有りしかど、御帳の内にかく抱き奉りてなん。たゞ春宮の若君達なん、大臣12の君に13抱かれ奉り給ひておはしまして、隱し奉りしかど、內裏の上をも、こなたの上をも、打ち14かなぐり奉り給15はゞ、宮の兒16見せよ／＼と宣ひしかば、上なん打たれ侘び17て見せ奉り給ひし18が、うつくしみて抱

校異 1 図さぬ。2 図面。3 イら、4 冂君。5 国など。6 イと。7 國イいた。8 冂す。9 イ中だに、匞あなたに。10 国ぬ、図考異侍ふ。11 図にアリ。12 二字イナシ。13 イ抱。14 國イナシ。15 イひつゝ。16 イのアリ。17 国させ給ひアリ。18 図かば。

き持ちておはせし」大殿1の、「いと物狂2をしき事どもかな。3りば4(か)りの程の事は、昨日今日のや
にいとよく5覺ゆるもの6。男7君達にかゝるわざをこそ。若君はいとよく8し給へ。かくしておはせん
ば、何わざをかし給ふべき」太輔、「御髮にかゝり9、二所ながら泣きのゝしり給ひしかば、いかでかは」
聞ゆれば、「すべておろかなるわざこそ10は」11と物しと思したり。宮つとめてより暮るゝまで御髮すます。
御ゆ12る(〇床)13正して、御許人た14へゐて參る。すまし果てゝ、高き御厨子の上に御褥敷きて干し給ふ。
女御の君の御前にあたりて、廂に横樣に立てたる御厨子なり15や。母屋の御簾を上げて御帳立てたり。宮
御前には御火桶据ゑて、火起して、薫物どもくべて燒き匂はし16、御髮炙り拭ひ集まりて仕うまつる。「こ
たに渡り給ひて干させ給へ」と大殿17聞え給へば、女御の君、「か18ら宣ふなるを、19あなたにて干し給へ
し」宮、「何か、今干し果てゝ」と宣ふ。右近の乳母20と云ふ、「干し果てさせ給ひてこそ。渡らせ給21へら
ば、たゞ大殿籠りなば御髮にた23ばつき24なん25ず。御26(う)ぶや(〇產屋)のその日の中にだに、入り臥
給ひし御心は、御髮ばかりには27障り給ひなんや」宮、「何事を。物な言ひそ」と宣ふ程に、大將の君直衣

校異1国ナシ。2国ほ。3イか。4一字イニヨリテ補フ。5図思ほ。6イをアリ。7国宮。8国隱アリ。
図てアリ。10イい。11國イナシ。12國か。13因高く。14イだゐ、因だし、因考異がひ、(同)えかい。15
ナシ。16国てアリ。17因考異のアリ。18イう、因考異く。19國イそ。20イが。21國イひつ。22イん。
イわ。イ頭註「タワ、源順集、金葉戀二」アリ。24因給ひアリ。25因ナシ。26一字イニヨリテ補フ。27因僻

て、中の戸1押し開けて、女御の御前に突い居給ふ程に、右の大臣もおはしたり。宮あらはなれば、御屏風取り出でゝ立つれば、「何か、いとよかめるものを。さてと2ゝ干させ給へ。あなたにも御厨子は多く侍るもの3」など45て女御の君に聞え給ふ。「6さ仰せ言侍りつる7、8大殿聞えさせんと思う給へ9つれど、亂り心地のいと悩しく侍りつれば、ためらひ侍るとてなん。上しかじかなん宣はせつるは、さば仲忠が乳母せさせ奉るとなん仰せ給へる」女御の君「さこそ言へ、見る10と聞ゆる11所、いかにか12して宣へ13り。此の犬を見て、えあるまじけれ14。宮達15をば16知り奉17らで、やがて參りぬれば、ともかくも知らぬを、これは初より18見、口入れなどし侍りつれ19ば、え振り捨てゝは。そが中に、物の藥あり「見よげにもしなさめ宮仕へなれば、忙がしくも思はず」父大臣「などかさは思はす。正頼が子供の中には、そこのみこそ幸はおはすれ。此の宮達を、そこばく20數かたは〔〇片輪カ、形はカ〕なく21生し22奉り、樣々に言ふかひなからず出で走る23所24に打ち群れ〔おはしますを見奉れば、女子持ち奉りたる心地こそすれ」「又此の25かむかを、かく見奉り給は〔〇給ふはカ、給はゞカ、給へばカ〕、天下のきさ26(27き)の位28に何かはせむ。」來し方行く

校異 1因考異をアリ。2イを、イくを、因く、因考異う。イ頭註「とゝほさせ給へ、ハ連範サセタマヘナルベシ、髪ノ事也」アリ。3イをアリ。4因とアリ。5イぞ。6イ今朝。7因をアリ。8イさとく。9イナシ。10因時。11因考異との事ぞ。12因くは。13因る。14イばアリ。15イは。16因考異見。17國イりて。18イ御。19イど。20因さす方。21因生。22因立てアリ。23二字因ナシ。24因考異々アリ。25因犬こそ、國かむり。26一字イニヨリテ補フ。27因い。28因も。

末も、また類物し給ふべき人かは。物思し知らずもありけるかな」大将打ち笑ひて、「かたはらいたくも仰せらるゝかな。それ1こを物の栄なく思さる23にこそ。あなたには犬にくはれたるだに見捨てられたるとこそは常に勘當せらるなれ4。天下5知り給ふべき事近くなりたるやうに仰せられつるものかな」大臣、「朱雀院修理し果てつ6めれば、さもあらん」大将、「日頃は宮も上になんおはしつる。月7次見奉らざりつる程に、いと清らにならせ給へる」大臣、「我國の王には餘り給8ひつる人なり」大将、「いとゞからき役をなん。春宮9はいと氣高く心にくくて、つと見守り給ふ、五の宮はいと物華やかにて、何事を見付けむと思したる御氣色にて見給ふ。御文をとざまかうざまに讀ませ給ふを、仕うまつりつるは、いとこそか10と〔〇難〕う侍りつれ。11さはは12ん〔〇侍〕れど、重物をこそ賜はりて侍る」大臣、「何にかあらん」「御13物ひ〔〇帶〕な14へり」大臣「いで見給はん」と宣ふ。取15もに遣はしたれば、螺鈿の帶の箱に、袋に入れて御包に包みて持て參れり。大臣引き出て見給へば、貞信公の石の16帶、いとかしこきなり。驚き給ひて、「これはまた17なき物なり。これを賜18ひ給ふばかりにつか19まつり感せしめ給20ひつるこそいと恐ろしけれ。これは小野宮の大臣の御帶なり。これによりてなん多くの事ありし。それによりてなん貞言院の律師山籠り21し22に23かば、小野に籠り

校異 1イら。2因るアリ。3イる。4國ばアリ。5因考異讓。6囝ナシ。7イ頃。8イへ。9イも。10イた。11下六字因考異ナシ。12一字イべ。13イお、国おも。14一字イニヨリテ補フ。15イり。16國ナシ。17イ世にアリ。18一字イはり。二字囝ナシ。19イうアリ。20因へ。21因考異給ひアリ。22國よ。23国は。

居給ひて、今は1兩様すべき人も侍2べらずとて院に奉り給ひしを、内裏の3位に居給ひし時渡し奉り給ひてしなり。かしこき御寳になんせさせ給へる、數多侍ひつ4ゝめども、これがやうにはえあらじ」と宣ふ。大將、「これは藤壺の御5ごとくに賜6ひて侍り。宮の御文奉り給へりける御返7を御覽じて、何事か聞え侍りけむ、いみじく思ほし入りたる御氣色を、怪しと見奉りし程に、御文仕りまつり違へて、上の笑はせ給ひしかば、か8たきに、誦せさせ給ひし句をなん、わなゝく9〔く〕物も覺えず誦じ上げて侍りける。これに、祿何よからんなど仰せられて賜10へるなりし11 12く13 14い15〔○詩句カ、秀逸カ〕仕うまつりては、重き祿賜はるものなりけり」16大上宮「それを例にしたらん人は、17いかゞあるべからん」と宣ふ。女御方、我が18さ前、君達の19さ前どもの御臺どもを參らせ給ふ。大將はまだ物20參らざりけり。大臣取り[illegible]し給ひて、御酒など少し參る程に、源中納言の北の方、子生み給ふとて、いたくわ21〔づ〕〔○思〕ひ給22ふと23一騒ぐ。大臣、「内侍のすけかしこに物せよ。心知らひたる人な24らで惡しからん」と宣へば、「早く君台しおりつれ25 26よいり給ひぬ」と聞ゆ。大臣、「立ちながらとぶ27らいん」とておはしぬ。大將の君訪はまほしう思へど、

校異 1 イたやう、国はた領。2 因ナシ。3 因御アリ。4 イら。5 イ徳。6 因はり。7 因考異東アリ。8 イしこさ。9 一字イニヨリテ補フ。10 国ひつ。11 國らアリ。12 イう。13 因考異ぶアリ。14 因は。15 国つアリ。16 下二字因彈正トアリテ下ニ「板」ト記セリ。三字国大臣。17 二字國イナシ。18 イ御。19 イ洞。20 イらアリ。21 一字国ニヨリテ補フ、イづ鍛アリ。22 イひ。23 因考異ナシ。24 イくて。25 イばアリ。26 イ鍋、国參。27 イらは。

苦しうて物し給はず。かゝる程に生み給ひてけり。1男と云ふ。2御3君、「御髪は干給4はぬや。はや渡り給へ」とて奥へ入り給へば、大將御屛風5押し開けて見給へば、宮6 7う〔〇濃〕きうち8よ〔〇袿〕の御衣に、あからかなる9又き10いけ11つ12きたる織物の細長引き重ね13て奉りて、白き御衣引きかけて、御髪は少し濕りて、四尺の御厨子より多く打ち延へて、瑩しかけたると見ゆ。小さき御臺して、御湯漬菓物14など參りたり。大將、「あた15御髪の御すまひや。あなたにて干し給へ。一人はいと侍りにくし」とて、掻き抱き下して、16い〔〇率〕て參り給ひて、やがて御帳の17中に入り臥し給ひぬ。「などか御文奉れ給へど、こゝにてもかしこにても御返は賜はらぬ」とて、日頃の有りつる御物語聞え給ふ。宮はた18言ひし事19どもなど聞え給へば、「内裏にならひて、こゝなる時もあなたに常にあれば、見もすらんかし。顔も心もをかしき者と見つるを、憎く20物を見ける」大將、「さてち21く〔〇父〕主22ぞ」宮、「それはさも見えぬものを」大將、「あた23はま。御伯父達は皆さる心なきものなり。一人はいたづらにもなされぬめりき。24証にかあらむ、さばかり物を思ふめりし25かはや」26打ち笑ひ27て、「怪しき濡衣なりや。28〔こ〕と〔〇異〕筋にこそ見ゆめりしか」「29いで、

校異 1因男子なり。2イ女アリ。3因のアリ。4因ひ。5因考異引き。6イはアリ。7イこ。8イき。9イに、因考異ナシ。10因の。11因浮。12因け。13因ナシ。14二字因ナシ。15イ見苦しく。16イゐ。17因中。18因のアリ。19國イナシ。20因もアリ。21イち。22因は。23イか。24イ誰。25因ナシ。26因宮アリ。27因給ひアリ。28一字イニヨリテ補フ。29因答。

上に1いもうと2〔と〕〔○妹〕の君ならんや3い。異宮達はいと小さくこそおはしけめ」4れど5て大殿籠りぬれば、右近の乳母打ちむつかる。「さればこそ聞えさせつれ。明日も御湯は參りぬべかめり。さかなく御殿籠りぬれば、おぼろげに參りに6てき、御髮7のやう8に」と聞ゆれば、女御の君、「あなかまや。夜晝御前に侍はれけれど、打ち休まんとこそは。何かは、御髮のわたりも何も、人の見奉り給はんに、9かもこそ10ともかくもし給はむ。更に」11と宣ふ。又の日12になるまで出で給はず。13御膳參14りて、御菓など鳴15かせど聞き入れ給はず。し煩ひて、中務の君、「御菓參る」と聞ゆれば、「いと眠たく苦し。小さき盤に少し分けていませ」と宣へば、中の盤に御分け、16つち〔○別〕に少し分けて、下の御合など持て參れり。先づ宮に少し召させて、御おろし少し參りて、大殿籠りぬ。又の晝つ方まで出で給はず。內侍の督の殿より御文あり。「などか17かへ〔○久〕しく。かねて宣ひし事を、さらん時と思ひ設けたる事な18るらん。今日こそいとなむ思19ふ。物し給ひて見給へ」とあり。大殿、「20さことやさる事ありかし。あな21へる〔○苦〕しや。いかで參うでん」とて、「只今參りて。さらなれば聞えさせぬ」とて奉り給ひぬ。「さてもあらじ。又外樣へ」など聞えて出で給ひぬ。

校異 1 医御アリ。2 一字イニヨリテ補フ。3 イは。4 イな。5 図とアリ。6 イく。7 下四字国を。8 一字イナシ。9 イよ。10 医考異はアリ。11 イも。12 国晝アリ。13 国を。14 国らで。15 イら。16 イべ。17 イ久。18 医考異か。19 イひ。20 イま。21 イく。

二條殿に參らせ給へれば、蓬萊の事どもいと淸らにて、子持の1方へ〔○前〕のものども2など皆3し具して、あしこに4引き出だしたらんに5もどかしからずせられたり。洲濱6湧水の側に鶴立てり。その鶴のもとに、葦手にて黄金の毛にて打ちた7る、

今宵より流るゝ水8のおのが世に幾度澄むと見ま9く鶴の子

とあり。萬の物具して、取り出でゝ見せ奉り給ひ、物など參る。父大殿いたう興じて見10え給ふ。大將、「日11次內裏に侍ひ侍りて。夜毎文仕うまつり侍りて、12へかなんまた13〔かくて〔○罷出〕侍りし。やがて侍はんとせしかど、明くる日までさ14ら〔○侍〕ひ15く、亂り心地のいと惡しく侍りしかば、そのな16らり〔○名殘〕17や侍らむ、昨日今日起きあがられ侍らざりつるを、御消息の侍りつればなん。さるは御覽18ずべき物も侍り、聞えさすべき事も多19し侍る」父大殿、「何文か仕うまつられつ20か」「21いで、故治部卿の主の22見し文などの侍りけるを、何かは文書などをさへ祕し侍らんとて、御覽ぜんとありしかば、持て參りて侍りし23お、やがて仕うまつれと仰せられしかばなん。さてかゝる物をなん24賜ひて侍る」とて、帶を見せ奉り給ふ。「これはさ聞く御帶25、いと忝く賜はせためるは、一日頭の中將の、世の人の言ふやうなれ、帝のやむごとなく

校異 1イま。2二字イナシ。3図ナシ。4二字図ナシ。5図もアリ。6図のわき。7図り。8イは、図を。9図し。10国ナシ。11イ頃。12イ一日。13一字イニヨリテ補フ。14イぶら。15イて。16イご。17国にアリ。18イせさす。19イく。20イる。21図答。22図御集。23イを。24イ賜らび。25イなりアリ。

し給ふ物は、皆そこに賜はりぬ。御女の中にかなしくし給ふ1も、玩び物2も、い3つまで4これをと思したろは皆5らんと言ふとありし6は、さも言ひつべき事にこそ7はありけれ」大將8、「9 10右の大臣の11御帶となん。これは御前に侍ひ侍りなむ、よき御12御帶侍らざめるを13。仲忠は故治部卿の主の14唐より持て渡り給へりける、未だ革もつけで石にて侍る、これ15も劣るまじ16う17は侍るを、調ぜさせてさし侍らん」父大殿「何か、忝く御心ざしあらんものを。なほ節會などにさして御覽ぜさせ給へ。こゝにはさらずとも」大將「さらば、かの侍18(る)を調ぜさせて奉らん、いとかしこき19角どもなど20云へりけりや。さる物どもを籠め置かれて、ほと〳〵怪しき事21も」大殿「更に22いかぬ事23や」大將「いとめづらしき事の侍るは、き24(こし)〔聞〕召したらんや」御答「何事にかあらん」大將「さだ過ぎたる事になん。梨壺の御事なり」大殿「御顏をだに見奉ら25で年頃になりぬるを、何でふさる事か」大將「それが怪し26さに、一日罷出侍りしまゝに、やがて參うでゝ侍りしに、問ひ聞えしかば、何かは、よき事27 28聞きつきて〔〇つけでカ〕となん宣ひし」父大殿大きに驚き給ひて、「いつか29らある事にかあらむ。宮は知ろしめしてや。もし異樣なるわざしたるか」大將「いとまが〳〵しき事。いかゞは知ろしめさゞらん。人よりは時々參うのぼり給ふなるものを。七

校異 1イナシ。2因の。3因ろ。4下二字国ナシ。三字因考異ナシ。5イな。6国かば。7イナシ。8國のアリ。9因故アリ。10二字國ナシ。11石御。12因ナシ。13イばアリ。14因唐土。15イにアリ。16国く。17因ナシ。18一字イニヨリテ補フ。19イ心の。20因侍。21イナシ。22イ言は。23イなり。24二字イニヨリテ補フ。25国んとて。26イき。27イをアリ。28國イけ。29イら、石く。

月ばかりよりと聞き侍りし」父大殿、「いと興ある事かな。昔猶みある程にさかり有りて、今さあらましかば、なほ忘れ奉るにてこそ。か1くのゝしる世の中に、ともあれかくもあれ、さあむなるに、怪しく思ひの外なる事」大將、「内裏に侍ひし頃、宮も上にかゝる御氣色御覽ぜんとにや有りけん、留め奉り給ひて、二日ばかりおはしますめり2きかし。ありしよりもいと3警策になりまさり給ひにためり。4〳〵に〔〇國〕知り給ふべき事も近げになん」大殿、「藤壺いみじき人なめりかし。只今の后にこそは。坊がねを一人にもあらず、二人まで玉を磨きて持給5つるぞ。かう幸6い人を、さともなき我らまで言ひ煩はしかな」大將、「又も梨壺のやうになん。それは後よりとなん承はる」父大殿、「あたら明王がねの、多くの人歎かせ給ふにぞあめ7な。人一人によりて、父母8つらから〔〇同胞〕と具して思ひ歎くは、いくそばく9その人の歎きぞは。そがた10く〔〇中〕にも、院の御方いかに思すらん」大將、「内裏にもいとかしこく歎かせ給ふめ11る。その事によりては、味氣なく、殿にも仲忠ら12もいと苦しき仰せ言なん。なほかの宮訪ひ聞えさせ給へ。それによりても、いとほしく思されたりき。げに院の御世いくばくもおはしまさ13ず時、さなど聞かせ奉り給へ。それはかしこに參うでさせ給はん、何の著き事も侍らじ。こゝはかく廣く侍るめり。たゞ仲忠侍るべしとて、14御くらせ給へる所におはしまさせ給へかし」「いかで、こゝは此の15御料に奉りたる所に、人の物し給はん16と、本

校異1国う。2イ聞し召。3イきやう。4イく。5イへ。6国ひ。7イる。6イは。9イナシ。10イか。11イり。12國イナシ。13イぬ、国じものをおはしまさぬ。14イ造。15イ御。16国事。

に〔意〕違ひたるやうに。年頃いみじう悲しかりし心ざし、又人なくて心安くてあらん2だにこそ」「それは御心寄せさせ給はゞこそは。かく聞ゆるにつけて3、などかやがて奉り給はゞこそあらめ、廣き4所に時々通はせ給はんに、なでふ事かあらん。5廿日若くおはしましけむ世に、憚りなかりけん事につけて、仲忠らが物の心も知らぬを6かぎもては、いかばかりかは悲しび給ひし」と聞ゆるまゝに、涙は雨の如くにこぼ7つ。父大殿母北8方もいみじう泣き給9はんや。「年頃10まで物11し給ひける人の、宮仕へし給はん御女など持ち給ひて、今かくておはするは、何心12か思すらん。なほ誰々も此の事許し給へ」と申し給ふ。北の方、「何かこゝには年頃かくて物し給ふに御心ざしは見つるを、今は忘れ給ふとも思ふべくもあらず。ましてそこにかく聞え給はん事はよき事になん」13聞え給へば、大殿、「こゝには知らず。二所の御中に宜しかるべく定め14て」大將、「その日ばかり御迎へせんと御文15を書きて賜へ。持16ちて參りて委しく聞えん」大殿、「なほ參うでゝ申されよ17りし。こゝに18は何事をかは」大將、「いと便なき事。いかで19御文なくては」とて、20硯紙など取りまかなひ21奉り給へば、「何事をか書くべき」とて、22いと久しく思ひつゝ書き給ふ。「いさや、かやうにぞ。物覺えずや」とて見せ給23ふ、見れば、「年頃は24と聞えさする25も26、いかでなりにけるにか

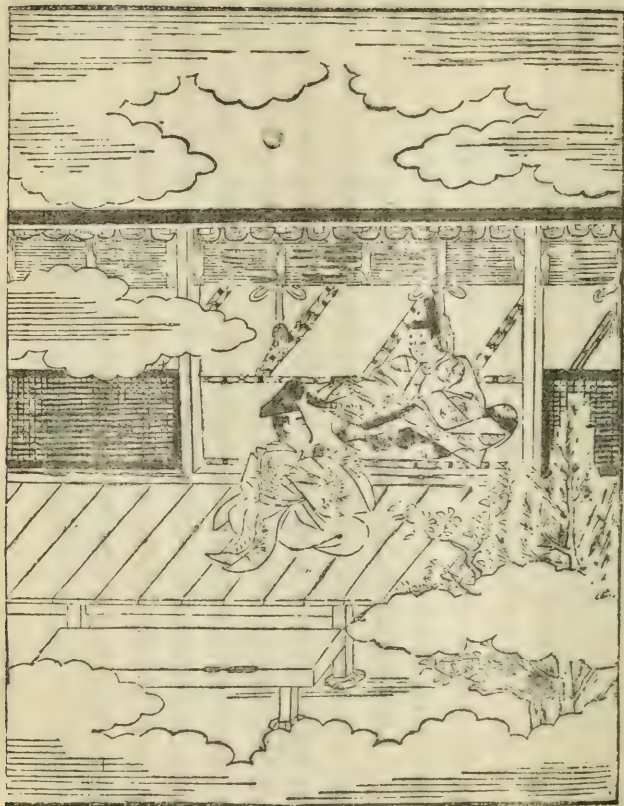
〔校異〕1イい。2イをアリ。3國イはアリ。4國心。5イ昔。6イ限り、國恨みみ。7イす、國る。8國のアリ。9イふいアリ。10國イさて。11國イ宜。12國にアリ。13國とアリ。14國給へ。15國ナシ。16イナシ。17イか。18イて。19イかアリ。20イ御アリ。21イてアリ、國考異つゝアリ。22二字國ナシ。13國へば取りて見給ふ。24國ナシ。25國事アリ。26國侍らずアリ。

と思う給ふる、怪しくなん。いかなるにか侍りつらむ、昔のやうにもあらず、罷り歩きもせず、物憂くなりになるは、1す〔○無〕徳にな2くもて侍るにや侍りつらん。老いぼれたるとだに思ひ定めぬ。さればそ3れわたりにもえ参らず。そが中にも、これかれ物せらるゝ所なれば、憎しと見給はん所もあらんが恥かし4さに、さし分5すてもえ聞え6ず。御覽ぜざりし人にも侍らぬを、此のいとむつかしげなる所に渡りおはしましなんや。さ侍りぬべくば、その日ばかり御迎へに參り來む。さても怪しくこそ。

　餘所ながら多くの年も隔てけりころも恨7みし時はいつぞも

それをさへなん。ことごとには此の朝臣聞えさせ承はれよ」となん8あり。大將、「いとよく侍るめり」とて、押し卷きて取りて、「今日はえ參り侍らぬ。明日參らむ。此の事とかく思9ふ給ふるも、いと10ほしく思11ひ給12へる事の侍りしかな」とて、日暮れぬれば、かの源中納言殿に、家司の中に心あるを召して奉れ給ふ。御消息あれば、「かの暮にと宣ひし人にとてなど申せよ」とぞ有りける。大將歸り給ひぬ。その夜は梳髮せさせ13〔湯殿など14させ〕給ふ程に、中納言殿の御消息聞ゆ。「く15るこそまう16〳〵と言ふなれ。かねてこそはとなん。名取川とも聞えさすめり」とあり。御使共には樣々の祿あり。

かくて大殿籠りて、「今日17恥かしき所に罷らんずる」とて、よき直衣裝束取り出でゝ、御薫物どもせさせ18、

校異 1 イむ。2 イり。3 イの。4 因考異き。5 イき。6 イナシ。7 因め。8 因などアリ。9 因ひ。10 因考異をか。11 因考異う。12 因ふ。13 七字イニヨリテ補フ。14 因考異參り。15 因ひ。16 因く。17 因はアリ。18 因給ふアリ。

宮達の走り給へるを見1て、「丹後の乳母のむづかる2なりし御髪は損はれざめるは、怪しくもかこちしかた」3とて、一條殿は二丁なり。5門5りに立て6る。大殿宮、それにしたがひて西東の對渡殿皆あり。寢殿は東の對かけて宮住み給ふ。異對どもに住7こくは、8一つ9腹10生め11しごとめ12きたりし人13、對一つ14を二15人に16て住17む。池面白く木立興あり。18やうく毀れもて行く。これを梨壺の君に、父大殿の奉り給ひけるなれば、宮ぞ主にて住み給ふ。異人19は、上達部皇子達の御女なれど、親も物し給はず、たゞ大殿に20語り給21ひ侍りしかば、今かゝり22給ふとて、23頃21の家たんなければ、え分れ給はぬなり25。召人26めきたりし人々あるは、次々にしたがひて罷出にけり。かゝるに、大將東の二の對南の御殿の前より、丹後の掾に御文持たせて、宮の御方に參り給ふ程に、方々立ち並みて見つゝ、人々の言ふやう、「我が君を侘びさせ奉る盜人の翟は、あたの戯れに戯ぶれて、とはうの27誦經文捧げ持ちて惑ひ來るぞ」と集まりて、或28は手を摺りて立ち居拜む。或は萬のまがくしき事言はぬなし。主どもは、「あなかまや。かく目出たき子持たらむ人をば、いかゞは疎かには29ら給はん。すべて宿世の盡きたればこそあらめ」とて、打ち泣き

〔校異〕1因給ひアリ。2イめ。3因など宣ふ。4因御アリ。5国は二つ。6因り。7イみし、因める。8下三字因御子一人。9國イ母。10イにアリ。11イりし子時、因るといたく時。12因かし給へる。13因々アリ。14下三字因づゝ。15イつ。16因ぞ。17因みける。18因さは言へアリ。19因々アリ。20イかゝ。21因へ。22二字イナシ。23イ日アリ、因年アリ。24因ナシ。25因けりアリ。26イ妻持。27國イ壽命。28因ひアリ。29イし。30イに。

給ふもあり、見めで給ふもあり。かく言ひ騒ぐも知らで、いと靜かに歩みて、御供に人いと多くて、寢殿の御階のもとに立ち給へれば、よき童四人ばかり、大人十人ばかりありて、「右大將の君こそおはしたれ」と宮に聞ゆれば、「あな覺えず。なでふ道惑ひぞ」と言はせ給へれば、「大殿の御使にて、取り申すべき事侍りて」と申させ給へば、南の廂に御座1し2(と)ね(〇褥)など3敷きて、よき童出で4よ(〇來)て、「こなたに入らせ給へ」とあれば、入り給ひぬ。大將、「しば〳〵と思う給ふれど、騒がしく侍りつゝたん。今日は、此の御文人して奉ればおぼめかせもぞし給ふ。著5て御覽ずばかり6も持たせて參れと侍りつれば7」とて8なん參らせ給ふ。宮、「げにかゝる御使なくば、え思ひ出づまじくこそは」とて、見給ひて、「あな怪しや。ささとにて書き給9へるにやあらん」と宣へば、大將、「いとゆゝしき事になん。なでふ空心にてかは。人々數多物し給ふを、昔の事はたえ(〇絶えカ、將得カ)10果つらし。さし11待てば心よ12からぬ事こそ侍れ。なほ渡りおはしませとなむ。かしこには人も侍らず、たゞなかた13し(〇仲忠)ら14る母一人、め15るいたる(〇妻かいたるカ)女にて、宿守には」と聞え給ふ。「そのめかいたらん一所こそは、さわやかならむ數多よりも、いと恥かしう16は。さても時々見奉りし時も、僻事せられしを、いか17なる事にかなん」大將、「さも侍らず。年頃18 19御前をば常に歎き聞えさせ給ふ。それを思ほし起して聞えさせ給ふなり」宮、「世の中はかくてあり

校異 1 二字承考異ナシ。2 一字イニヨリテ補フ。3 因考異參り。4 イき。5 イく。6 イと、因に。7 因なむアリ。8 二字因ナシ。9 因考異ひつ。10 イ待らじ。11 イ分きては。12 國イナシ。13 イだ。14 イが。15 イか。16 因こそアリ。17 因がアリ。18 因此のアリ。19 因御前。

ぬべし。たゞ院の、面伏なるものは、死なぬこそ心憂けれと宣はすなるを1よ(〇聞)くこそいみじう悲しうは」とて泣き給ひて、「何かは、心強う聞えても何のたけき事かは。2たゞ思ひ3入れたりとだに、院に聞し召さるばかりにこそ。悪しくもあれ善くもあれ、さもと人に見え聞えにし人、忘られたるばかりは、いみじき事なんなかりける。賢き人の4とて足らひた5り、6今あらむをば何にかはと思へ7ば、たゞ言ひなされんをこそは」と宣へば、大將、「いとも嬉しく8、參り來たるかひありて、かく仰せらるゝ事。今二十五日ばかりに御迎へに參り來ん」と聞え給ひて、御返9申し給へば、「な10(に)(〇何)か、かうなん物し給11ひつる」と宣へ12ば、「いかでか、空參りしたりともこそ。たゞしるしばかりにても」など聞え給ふ程に、御供の人々は、宮の家司ども13政所に呼び14付けて、皆樣々に酒飲ま15す。大將には、よき菓物乾物など16折敷17よくして、御湯漬御酒など參る。まかなひには大殿の召し使ひ給ひし人の、よき若人なりし、た18は褒へ19がたき右近と言ふなん出で來て仕うまつりける。大將、「これや、かしこに忘れず、有難き人と物し給20(ふ)な21ん」宮、「いでやこゝには、善きも悪しきも、さ思ひ出でらるゝ者あらじや」大將、「今はこゝにも忘れ聞えじ」とてかは22しけ(〇土器)さし給ふ。宮、「いとめづらしく見え給23(24ふ)る」とて、御几帳のもとに寄り給ひ

校異 1イき。2二字國ナシ。3國出で。4イ持。5國る。6國考異と。7イと。8イもアリ。9イ事アリ。10一字イニヨリテ補フ。11イへ。13國とあれアリ。13國政。14國入れ。15國せなどアリ。16下四字國いと淸らに。17二字國考異淸らに。18イナシ。19國やらぬ、國考異果てぬ。20一字イニヨリテ補フ、21イらアリ。22イら。23一字イニヨリテ補フ。24國へ。

て、土器度々1とす2ら（〇勸）め給ふ。大將、「御返3しなくば、え罷り歸らじ。こゝにこそ侍ふべかめれ」と聞え給へば、「あな煩はし」とて、「めづらしきは、うつ4くし心にもあらじと思5（6ふ）と、うたてある御使にてなん。いでや、

恨みけん程は知られで唐衣7初濡れわたる年ぞ經にける」

と書きて、折りて挿されたりし紅葉の、枯れ困じたるに付けて出だされたり。大將、なくて散りにし8故郷の9事言ひて立ち給へば、南の御殿よりか10らじ（〇柑子）を一投げて、大將を打つ人あり。「待ち取11る12こそ」とて取りつ13きて出で給へば、14東の一二の對より、橘と大いなる栗と投げ出だしたり。大將取り給へば、一の對より年三十ばかりなる人の、いとあてやかに愛敬づきたる聲にて、「15たがへ（〇誰が方カ、違へカ）にかは16」と言ふ。大將、「浮かれ17そとこそしる18しなれ」とて出で給ひぬ。

〔語詞〕これは一條殿。

かくて三條殿に歸り給ひて、宮の御文奉りて、宣19ひつるやうかう〳〵など申し給へば、大殿、「哀れにも宣ふなるかな。昔のやうにて侍らむだに、御前伏にこそあれ。今はまして何のかひもあらじ20を、21あて22そこ

校異 1イナシ。2イす。3イナシ、因り。4イナシ。5一字イニヨリテ補フ。6下二字因へど。7イ袖。8因故郷。9イと。10イら。11國り。12イなるアリ。13イさ、国ゝさ。14因東。15因誰に。16國イしアリ。17イ人。18イく。19因考異へ。20因はや。21因さ、因考異と。22因宮。

は毀れなどやしたる。いかやうにか住み給へる」「奥は見給はず。あらはなる限りは異なる事も侍らず。政所の家司の男どもなど1はまだ侍ふ(り)。下人など數多侍りて、御3(倉)開けて物を納めおろしなどし4侍5(り)つ。おはします所も目やすくしつらはれて、童大人數多侍りつ」父大殿、「かれはたか6う(○財)の王、7宮をいか8樣子にて、その9御財をさながら領じたり。よき莊いと多く持給へる人ぞ。よき調度こまかなる寶物はかしこにこそあらめ」と宣10う。大將、「不便なる11所に參うでゝ、畏く打たれ侍りつるかな。かゝる譏どもして、方々にぞ打たせ給12ひつるに、困じてなん侍る」とて取り出でゝ奉り給へば、「怪し13くもありけるかな」とて栗を見給へば、中を割りて實を取りて、檜14わだ(○皮)色の色紙に、かく書きて入れたり、

　行くと15ても跡を留めし道なれどふみすぐる世を見るが悲し16さ

とあり。物も宣はで、橘を見給へば、それも實を取りて、黄ばみたる色紙に書きて入れたり。

　古への忘れがた17さに住みなれし宿をばえこそ離れざりけれ

柑子を見給へば、赤ばみたる色紙に書きて入れたり、

　結び置きて我がたらちねは別れにきいかにせよとて忘れ果てしぞ

校異　1イ數多。2一字イニヨリテ補フ。3一字イニヨリテ補フ。4因考異てアリ。5一字イニヨリテ補フ。6イら。7下五字因ぞやそのみ一つ。8因考異獨。9因祖父の。10イふ。11國イ頃。12因へ。13因考異う。14因は。15國イ來。16國イき。17因き。

とあるを見給ひて、涙雨の如くに降らし給ふ。北の方、あはれ樣々にかく憎からず思ひける人々を1おきて、かくありけると見給ふも悲しければ、打ち泣き給ふ。大將の君、2用なき物ども取り出てけ4なか4れ、はしたなしと思ひ給へり。56かへしく思ひ7み8う9き10て、「此の柑子投げ出だしつらむ所は、故式部卿の宮の中の君なり。父宮の召して宣ひしやう、我なん世に久しくあるまじき。こゝにらうたしと思ふ者なんある。あ11たくし12くは言はる1314れ15、さりともと思ひてなんとて賜ひたりし人16や。十三にて見そめていと17ぱくもなくて、宮隱れ給ひにき。その後程もなくてぞこゝには來にしかば、げにいかに思18ふらん。栗19出だしけんは、な20り〔○仲〕頼の少將の妹なり。いとよく人の妻にてもありぬべかりし人ぞ。遊は少將にも優りたり。すべてせぬ業なく、勞ありし人なり。容貌21も氣近く、愛敬つきてぞありし。橘の所は、千蔭の大臣の御妹22の23なり。24それ25は年は我にこよなく兄にぞおはせし。26親にする西わ27うりには、28更衣29などいます30がり。その更衣は宰相31の中將の32みめみこの33腹なり、34梅壺の御息所と言ひし、

【校異】1國イも。2国益、図益。3イる。4イな。5図大殿アリ。6イ久。7一字イナシ、国ひ。二字國イナシ。8イそ。9イさ、国み。10図給ひアリ。11図考異さ。12図考異ら。13図考異なアリ。14イな、15図どアリ。16イたり。17イく。18図ひ給アリ。19国投げアリ。20イか。21國イか。22國ナシ。23図御子腹なり。梅壺の御息所とぞ言ひしいみじき色好みなりしを語らひ取りしアリ。24三字イければ。25一字図が。26図その。27図た。28図もとのアリ。29図の。30図考異め。31図ナシ。32下一字国ひ。下二字図御女。下六字図御娘。33イ母。34図しが琵琶なむ上手におはせしそれに兒の一人出で參うでたりしがいかに生ひ出でしにやあらむ。〔○以上次ノ頁ニ亘ル〕

「さし押さ」參うで來ね」とて賜ふ。かくて、「除目1果つなるを、參らせ給はんとやする」大殿、「何しにかは參らん。出でゝ歩けば、そこにも面伏にて。人の人とも見たらねば、生きたるかひもなさに」大2臣、「闕の侍らざらんには、いかでかは」父大殿、「などかはその闕のなからん。此の頃こそかく3金4てさ(○釘)このやうに閉まりためれ、そこを御子にして、中納言になさるとて擧げられし闕には、親とてある己をこそなされましか。仁壽殿を思して、5うの親を引き超してなされたるは、さるべき事かは、自ら右の大臣參り給ひて、心に任せ6てした7ら(○給)ひてん。殊なる事なくば交ろひせじと8す、新宰相にも9方10い(○參)らじとせしかど、久しう參らで、帝の御顏もゆかしうもぞあるとて、參りて見れば、右の大臣我11かと思ひ顏にて、12孫の皇子達は13こま(○玉)をすぐれて並び居、子共は雲井のごとつきて、土を14て15いて睬　つきあへり。いでや、皇子達16思へば、宿世心憂く、いかなる人17てはつきたる女子持18(へた)らんとぞ見ゆるや。又今一つのくぼありて、蜂巢の如く生みひろぐめり。天の下の皇子達は此のくぼ共に生み果てられ給ふめり。此の度も男子をこそ生まめ。此の十二月19の月夜のやうなるわざしたんなる者は、女の童のかじけたるをこを生まめ。幸ひのなき者はいかゞはある」北の方「などか20物も宜は21で、荒々しうか22く惡23毒は吐き給

校異1イ侍、因侍か。2国將、3因金。4イく。5イそ。6國イナシ。7イま、國イが。8因て。9イま。10国る。11イは。12イ御孫、因孫。13イた。14イく。15国ひ、國は。16イをアリ。17イく。18一字イニヨリテ補フ。19因に同じ事。20因外の事は。21因ぬ人のまが〳〵。22イう。23因考異ごくをば宜。

ふ。昔思ひ出でゝ心地のむづかしきか。1あしこを子にて持給2つるはなどかはある。まだ腰屈まり給はざめれば、人と3悲としくなり給ふ世もありなん。女4子5らしは6へし給ふとも、男子の筋にも7い8るやう9もありなんは10、いとうたて、世の人の11付きたるもの12も、怪しからぬ者こそたはやすく言ふなれ。13御やうなる人は殊にしも言はざなるものを、立ち返り14厭へば15ひらかにも宣ふ16なかな」大殿、「さて、そこ17いつき給へ18」とて19（ひきまさぐり給へば、「うたて20職れ給へる」とて）打ちむつかりて、後向き給へる御髪の、21やう（〇塗）しかけたる如くして、九尺ばかり有るを繰り出で給へれば、一御座ひろごりていと目出たし。「此の御後手のひろごりかゝるに見つきてこそは、我22は聖になりにたれ。よき人を家に多く据ゑ、使ふ人23のよきを集めて、宮をば羨みもて来て、さるものにて据ゑ奉りて、人の妻などのもとにも到らぬ隈なく歩24よて、皆憎まれ25てこそありしか。今26様の人は怪しうよめる（〇まめにカ）こそあれ、27先づはかしこき天が下の帝の御女を持たりとも、そのおとうとの御達、そのあたりの人の妻は、女御まで残してまし28や。罪の浅きにやあらん」と宣へば、大將、「いとうたてある事。獨り侍りし時、いかでと思ひ給へし

校異 1因か。2イへ。3イひ。4以下二字イ達、イ慣ら。5一字因達。二字国達。6因づ。7因考異出づ。8因か。9因なるアリ。10因やアリ。11因思ひアリ。12因をアリ。13イさ。14下四字因いとつまび、国言へばおい。15一字因考異おい。16イる。17イは。18イりやアリ。19十九字イニヨリテ補フ。20国たは。21国え。22イも。23國イナシ。24イき。25國イナシ。26國やそ。27因まろ。28國て。

人をだに、よき折侍りしかど、さもあらずなりにしものを」大殿、「それこそ、いと我が如くなけれ。今もなどかさせざらむ。罷出物せられん時、空酔をしてたゞ入りに入るべきぞかし。人1も騒がば、いたく酔ひにけりや。こゝ2にいづくぞ。中の御殿にはあらずやと、たゞ酔ひに3強4ひばかり5ぞかし」北6方、「いと悪7としき事多くし給ひ8げなるな。若き人は親かく宣ふとも9こそは早う立ち給10はね。な聞き給ひそ」おと11し(〇大殿)、「男は身を顧み人の思はん事12お知りなば、よき妻は得てむや。文通はして、ゆるされん時と言はんには、何わざをかせん。隙を見てふと入りぬればこそ。まして13あしこの亂れて歩かんは、14をう15女しあらじかし。此の宮と源中納言の妻とは、早うこそ」など宣ふ。大將、「いと怪しき事。16更にかの日御車どもなど設けさせて侍はん。絲毛なんかの宮に内裏より造らせて奉り給へり。まだ乘り給はざめ17るを、18民部卿の19御方20になん新しき絲毛の車造りてあ21めるを、先つ頃より太政大臣惱み給ふとて、かの殿の打ち延へて物せらるれば、22見物忌などにあらばなん消息を物せん」父大殿、「いかやうにか思ひ給ふらん。とぶらひ奉るべくこそ有りけれ」大將、「右大辨の昨日申されしは、御表二度は奉れ給23ひつる。一日召ありしかば參りたりしに、作らせ給ひしは、病重くなりにたる24氣色などのやうになん作らせ給25(ふ)と申

校異　1因若し。2イは。3イ醉。4因ふ。5イしアリ。6因のアリ。7イナシ。8イけるか。9イそこ。10イひ。11イど。12イを。13因か。14因考異あふ。15イふ。16さらば。17因れば。18国式。19イ御。20国を。21イな。22イ御物。23イへ。24因考異よし。25一字イニヨリテ補フ。

すは、頭く思ひ給ふにやあらん。えかしこに侍らずば、源中納言のみ1るた〔〇御方〕に數多侍り。すべて幾つばかりかは」大殿、「いさや十ばかりこそよからめ」大將、「御前の事など、かねて仰せられよ2。かしこにも宣はん。御座所しつらはせ給3ふ事4をこな〔〇行〕はせ給5ふ」大殿、「て6らど〔〇調度〕など淸7うなりし所を、よきもなかめりや」と宣ふ。大將歸り給ひぬ。大殿、「をかしき8眞事9の10をの11し〔〇己〕12舅の帝に言はれ13て、すゞろなるそこの御14敵15引き出でんと言ふかな。さ言ふや16〔う〕こそあらめと思へば、否とも言はぬぞかし」と宣へど、下17心地には惡しとも思さざりけり。

〔宮詞〕18三條殿19の。

かくて源中納言殿の產屋の七日の夜になりぬれば、紀伊守に20御饗宴の事どもを、男方女方御座所しつらふ事仕うまつる。御簾には21淺黃にして、綠の綺を端にはさしたり。南の廂に廻りて懸けた22り壁代には白き綾を打ち23やう〔〇瑩〕じたり。疊には24紺綿を薦に、紫の裏付けて唐の錦の端さし、白き綾を席にしたり。褥、上蓆は例のごと。簀子にもかくしたり。淺香の机、白銀の容器、黃金の土器、火桶には沈を檜皮色に彩りて、內には黃金の塗物をしたり。25鉢白銀を26內27黑28に色どれり。起し炭は鳥の卵。かくて殿の君達皆

〔校異〕1因か。2因かしアリ。3国ひ。4国お。5因へ、國イへカ。6イう。7国ら。8因ナシ。9因かな。10因お。11イれ。12因宿德。13因むとアリ。14イ方を。15二字國イナシ。16一字イニヨリテ補フ。17因心。18国こゝはアリ。19国ナシ。20國大御燈明。21イ賦。22イる。23国え。24因唐の。25因考は、因考異灰は。26以下三字因丸くし。27因考異はアリ。28因考異う。

おはし1て2ん。上達部は上に、君達は簀子におはす。異人はまだおはせず。中納言の君大將にかく聞え給ふ。

「3松風をはらめる君も得てしがな生まれたる子のあえ物にせん

いかで〳〵」と聞え給へり。大將、「かく宣はぬ先に參うでんと思4ひつるものを」とて、かく返り事に、

「秋風をあゆとや知れる君が子は千歳をまつの5野分とぞ聞く

只今參りつるものを、あえ物と宣へば物憂くこそ」とて奉り給ひて、「かしこはさすがに人目多く、恥かしき所ぞ」とて、6紅裝束淸らにして物し給ふ。中納言喜び7と8下りて迎へて入り給ひぬ。9末には物10〔の〕師幄打ちて、方に有り。11近衞府の將ども皆有り。12ざう〔○尉〕四人、さ13うかう〔○僧綱カ、雜樂カ、散樂カ〕四人14の松明ともしたり。

文化十二乙亥年六月十五日以本居氏藏書校合畢　豫章園

［校異］1下二字囡つ。2一字イナシ。3囡考異秋。4イへ。5囡考異分きて。6イ直衣、国おほし、囡考異ナシ。7国ナシ、囡て。8国居。9イ前。10一字国ニヨリテ補フ。11囡近。12イぞ。13囡る。14国ぞ、囡ナシ、國イを。

かゝる程に、1平中納言藤大納言藤宰相などおはしたり。物参り、御土器度々になりて、皆人遊び給ひ、2下にもかうじ〔○困じカ、講じカ、講師カ〕のゝしる。かゝれど3左大將源中納言は、遊びもし給はず、4いと向ひ5居て物語を6し7、中納言、「人の心ばかり口惜しき物こそなけれ。涼はこゝにかくて侍らんと思はざりき。藤壺8ほの宮に奉り給ひし時、思ひしやうは、いかさまにせむ、法師に9遣りなまし、死にや10しなまし、滋野の帥のやうに11、これへをや12せましとなむ思ひさ13は〔○騒〕ぎし14、又15取り返し思ひしやうは、いづれも物狂16をし、17本意をこそ18遂げめと思ひて、年頃つれなく罷り歩きしに、かゝる事聞19きしかば、いと妬く、なでふ事も20報はせむ、憎21らば22ひとき罷らむ、らうたくば23ふた〴〵に罷24くむ、25わ26すれ〔○我〕を27かた28くな29くる田舎人と思ひて、30返し給ふとなむ思ひし。さる程にかゝる事有りしかば、思ふごと二夜は罷りにき。内裏に召しゝ31夜は更に参らじ、やがて止みなんと思ひて、更くる夜までは侍り

校異 1イ源。2イしに、因詩ど。3国右。4イつ。5因ナシ。6國イく。7イ給ふアリ。8一字イナシ。二字因を。9イやな。10國イナシ。11イう。12国申さ。13国わ。14因がアリ。15二字イナシ、國イう。16国ほ。17イう。18イ侍るめれ。19イえ。20イ侍は、国侍は、國とぶらはせ。21イく。22イ人憎、イ一夜〳〵、国一夜。23イ二夜〳〵、因二夜。24国ら。25下二字国ずわ。26イナシ。27因ば。28因だ。29イな、因ナシ。30イかく。31國イとアリ。

しかど、させし事のいと哀にうたてかりしかばなむ、え侍らで參りに1き。さて2だに侍りつきにしかば、かく今まで、今宵もこゝにて君達に對面する。3京人の勞あるな4りせば、か5くては侍らましや6は」大將、「それは仰せられたる7ぞ、これによりて8大殿は9心いたく思し煩10くひけ11り。宮も度々仰せらるゝめりしかば、かゝる宣旨ありと申し給ふめりしかど、強ひて召し12取りてこそ。されば御心地にこそ飽かず思されけめ、人はこと13はり〔〇道理〕14こそ思ふや。さてもかの君は、容貌によりてこそ誰15々も思ひしか。此の君も16劣り給はざなるは、小さくより17大將の宮18にこそ思ほしかしづきだりけるを19も、かゝ20る事のありければ、いと21をかしがりてこそは有りけれ。同じ人の御子の、かれは先づ生ひ出で、これは後に生ひ出で給22ひつるにこそあれ。容貌は劣り給はざ23めるを、24おか思す」中納言、「さだにあればこそ25はかくても侍れ26ば、今はいづちか27罷らむ。天下に云ふともかの君の28さ29やうなる人は有りなむや。容貌のみやび。萬の事をこそはさだき30くはさ31りや」大將、「さても有32樣を宣へ」「かの君の御樣は、まろぞよく33聞き34取りたる35など、髮うるはしく、色白く、目は36お〔〇鼻〕こそはつきたあれ」大將、「さのみやは。

校異 1 国し。2 国さ。3 国都。4 國イるには。5 国考與ら。6 イナシ。7 イそこ、国事なれどそこ。8 国こそアリ。9 国ナシ。10 国ら。11 国れ。12 國寄。13 国わ。14 イとぞ。15 イも誰。16 下廿字國ナシ。17 下三字国大殿も。18 下三字国も。19 国ナシ。20 国考與りけアリ。21 イは、國イに。22 国へ。23 国な。24 イ何を、国何。25 国ナシ。26 イナシ。27 國侍る。28 イ御、イナシ。29 国さま。30 イき。31 イも。32 国るアリ。33 イ見。34 國寄。35 国かな。36 イな。

さて心はなしや」「1いさや、それは知らず」大將、「いかでか今宵はあ2り」とて笑ひ給ふ。「まことに、こと
に見しやうなる童の有りしは誰3ぞ」中納言、「いさ數多あれば知らず。いづれ4ぞ、中に承香殿の女御ら6
もと7やしこそあれ」大將、「もし此の我等が中將なりし時、8(く)9は10うぶつ〔○灌佛カ、供養佛カ〕の童
に出だされたりしは」答へ、「それぞ11るし。これこそと12ぞ言ひし」大將、「13それ14らが一日こ15れ16し麗り
し17かば、國を18叩きて、夕さり19來、問ひし20かば、いと馴れたりしと見しは、さなりけり」答へ、「わら21
つ〔○童〕は、藤壺のあこぎこそあれ。他には22只今なし。あこぎは兵衛の君の弟23とや」「24(あこぎは)25
ム〔○木工〕の君の26おと〕と〔○弟〕や、先つ頃内裏に侍りしに27も、あこぎをぞ語らひて侍りし」などて、
遊びも28せず。大將、「など君29の琴は彈き給はで、人をば呼びもて來て、30すゞろ物語の役は」「31いで、
年頃思ひつる事を言はむ人もなかりつる。今日今宵思ひ出づるま32しに聞ゆるぞかし。琴は聞く人もあらじ」
「口惜しくとも、彈きにこそ彈33かざらめ、聞34しには聞く35は」中納言、「さ36や37う38こ人39は知ら40すば
かりはいかでか。さて書などをこそ41男の童は、萬の遊びは42」大將、「43(子)ばかりかなしき物やは有44りけ

校異 1 因答へ。2 イる。3 イにか。4 因そが。5 イの御アリ。6 國イ子と。7 イなり。8 一字イニヨリテ補フ。9 イわ、イよ。10 国ナシ。11 イか。12 國イて。13 因我。14 イナシ。15 下二字国こに。16 イへ、國イら。17 因時。18 国鳴らし。19 イ琴彈き、国來と言ひ。20 イは。21 国は。22 國たる。23 国ナシ、因に。24 一字国ニヨリテ補フ。25 イく。26 二字国ニヨリテ補フ。27 國イと。28 因し給は。29 因は。30 國心。31 因答へ。32 イき。33 国き給は。34 イさ。35 因を。36 因やそこのアリ。37 イそ。38 イに。39 因に。40 因る。41 因自ら習はずや。42 因え學ばじアリ。43 一字イニヨリテ補フ。44 二字因考異ナシ。

る。君は思ひ1のや」「2いさ、いまだきたなければ見ず」大將、「云ふかひなき事する君かな。まろ3が子はすなはちより懐にこそ入れ居たれ」中納言、「それ女ならば。我等が子4は親にまさるなし。男は我に劣らぬには何にかはせん。女ならば琴をも習はし、をかしき物をも取らせて、5あ6やかなる交らひもやすると7思はめ。まろがもとに女のく8ら〔○座カ、鞍カ〕こそ侍9〔れ〕」大將、「賜へ。それ10より11用なか12なり。まろが子に取らせむ」13 14答15て、「まろが子の妻になし給へ。さながら取らせむ」大將、「いとまが〳〵しき事するうち出でなむ。さても我等16かて童の心地しつるに、皆子を設けつる17に。まこと18親19やう〔○用〕意はしてきや」「20いさ、晦日の夜こそは。まこと21は方々22もし給へば、内へも入らず」大將、「源氏と云ふ23所、痴れたる事する。我は人の御親とも知らず、おはするに、たゞ入りに入り臥しにき」中納言、「帝の御女得たれば、誰かは御24前に25は入り臥すらん。何かはさ26いは27ゝ〔○祓〕へられて、鬼も神も急ぎて28は29逍30らむ31荒るゝべき」大將、「我男子は實法にはあらぬものぞ」「32すべて、妻を33思はぬか。思はざらむ時、今まであらむや、捨てゝまし」大將、「あはれ吹上にて我等が怪しき事を、せぬわざ〳〵をせしやは。我

〔校異〕1国給ふ。2因答。3イらアリ。4國イぞ。5国花。6國イて脫歟。7因こそアリ。8國イく。9一字イニヨリテ補フ。10二字イナシ。11因爲。12イソアリ。13国と言ひてアリ。14下二字國イいかで。15イへ。16国ぞ。17因よ。18イや。19一字因よ。下三字因考異とや言。20因答。21イナシ。22国物。23國イとうろ。24因前。25イナシ。26イは。27イら、國イう。28下四字國早や食ひ。29下三字イ逐ひ。30一字イく、國イおり。31下三字イ歩く、国やる、イある。32因答。

等はかく上達部の初にて有り、かの1中將もかくてあらば、今頭などにも2なむ。そのかみ上﨟にも有3(り)て、45多くも有りし人の、哀にて山に籠6りたる。久しくえこそ訪はね。訪ひ給ふや」中納言、「涼7は時々訪ひ侍8り。先つ頃綿の衣ども縫はせて、かいさら9 10餅など11調じて送り給へりき」大將、「年返りて花12の盛にいざ給へ。13りききうの中將などして文など作ら14る。昔15古き16所17そした(〇失)はぬこそ生きた18るかひはあれ。殿上の今はいとさうぐしきに、世20中のはかな21(き)に、今は思ふやうは、人の聞かま22し23くし給ふ物の音を、手を惜みて今日も死なば、何のかひかは。萬のするわざ24として老25ひぬればみな劣り26忌れなむ。下り立ちて遊びて、帝にも親にも聞かせ奉らんとす」中納言、「いと27いみじき事有るべき世28中にも有るかな。まろにも聞かせ給へ」大將、「君にもせよかし」と云ふ程に、御消息大殿よりあり。「參うで來むずるを、亂り足の氣あがりて、東西知らずなむ29にこそ、男ども侍らん。御身のかはりには雜役もせさせ給へ」と有30(り)。御返31事、「畏まり32て承はりぬ。33はた(〇渡)りおはしまさねば、人いとさうぐしげに」など聞え給ふ。色紙を引き違へ34つ35ふ、甚代多く

校異 1因少。2イなりアリ。3一字イニヨリテ補フ。4因御アリ。5因覺え。6因られ。7イいとよく。8イへアリ。9國もアリ。10イ餅。11因考異し。12イナシ。13イ頭、因考異良、(同)連純。14イめ、因む。15イのアリ。16イ心カ。17イう。18國イり。19イナシ。20因のアリ。21一字イニヨリテ補フ。22国はアリ。23因考異う。24イ年。25国い。26イ忘。27イどアリ。28イのアリ。29イそこに。30一字イニヨリテ補フ。31因り。32國イとアリ。33イわ。34下四字國包みて。35一字國イナシ。

包みて、御前ごとに參れり。大將、「1中納言2君の寶は皆今宵打ち取りてむ」とて碁3を4より給へば、中納言、「負け給ひぬ」とて、打ち5きず6い給へは、結び袋に入れて出だしたり。一度にいと多く押し立てゝ7打ち入れつ8。大將餌袋に一9重袋置きつ10く(ヽい包)みて、二包持給へり。負けたる人集まりて、11上は「またこそ負けたらん時使は12む」とて取らせず。これらは黄金の錢なり。かくて13御酒度々になりぬ。殊に高き人々おはせねば、ある限りの君14うち(〇迷)15は、足を亂16れて17かぶ(〇戯)れ遊びをし給18ふ程に、夜半ばかりになりぬ。大將立ちて、東の簀子19に立ちて、柱に依り立ちて見給へば、御簾を二尺ばかり捲き上げて、大人四十人ばかり、赤色青色の唐衣、綾の摺裳引20し重ね着て並み居て、今宵の歌詠み書き、あるけ21あゝかゝりと言ひ合へり。童十餘人ばかり、青色の五重襲22綾の表の袴、綾搔練の綿二重襲の衵23着て、前ごとに白き錢を置きて賜う24べつ。簀子には間ごとに燈籠かけたり。蘇枋の大いなる櫃に白銀の25鉢据ゑて、火26を起しつゝ所々に据ゑたり。東の渡殿には、すみ物など棚にか27を据28へたり。暫しあれば、紀伊守國の官達のらう29に引き率て物奉る。荒卷一30 31つ、32さけ(〇酒カ)とを一33つにつけた34ち。

校異　1三字因ナシ。2国のアリ。3因ナシ。4イ打ち。5国給は。6国居。7國イ寄り。8國イれアリ。9イ餌。10イつ。11イ乞へば。12因め、國イめカ。13國イおほみ。14イた。15國の。16イり。17イは。18一字イニヨリテ補フ。19國イナシ。20イべ。21イと與アリ、因とアリ。22イのアリ。23二字因ナシ。24因ひ。25因箸添。26イナシ。27イき。28国ゑ。29因ども。30因考異をアリ。31因考異枝につけたり。32因考異捧。33因枝。34イり。

鏡十さ1くげ〔○捧〕2に田鶴3一4つにつけたり。雉子5こ十捧6たり實を一枝につけた7こ、鳩など くさ9くげ〔○捧〕二つを一10捧にしたり。白銀の11巣二つ12二つ、蜜とあま13くら〔○甘汁葛〕と入れたり。東の渡殿に持てつ14く〔○連〕ねて竝み立てり。ま15(た)紀伊守16北の方の御許より御重三17(つ)。腰高杯18淺19し結ひたる壺四つ奉り給へり。それは御前の簀子に竝め据ゑたり。開けて見れば20鰹21 22を燒の鮑、海松甘海苔など見ゆ。大將の君俄にさし出で給23つり。人々驚けば、「我と君とは24いみじ25く契りたる中ぞ。互にうち〔○内カ、打ちカ〕許さむとぞ言ひた26る」とて入り給へば、母屋の27御簾の28前に方々の御産養の物ども參り据ゑたり。大殿左大臣種松など奉りたる物どもなり。中に種松が二なし。母屋の御簾の内にぞ産屋装束したる29しう〔○衆カ〕30ど31もいと多く居たり。大將、「今はかくおとなしくなり給ひて、子掻き抱き給ふらんこそ、あな恥かしや」大殿の北32方、奥の方にて、「こそ33 34は見習ひ給ふらんを」大將、「物恥35ときす36聞かれためる37を、何か此の頃のなのらば、兵衞府よりは參り38にけむや」北39方40に、「しほちよりこそお

【校異】1イさ。2国に鯛、図二つ。3イをアリ。4図枝。5イナシ、図考異と鯉。6国たる三、図二つ、図考異二つ。7イり。8イ十、国と、図一。9イさ。10図考異枝。11イ餌袋。12國に。13イづ。14イら。15一字イニヨリテ補フ。16イのアリ。17一字国ニヨリテ補フ。18下二字図四つロ。19イく。20下二字イかつおほ。21國イつ脫歟。22国壺。23図へ。24国いとアリ。25図考異う。26國イり。27イ隅。28イ間。29國宿德。30図へアリ、國イとへアリ。31イへアリ。32図のアリ。33国こアリ。34イこは。35二字イナシ。36イとアリ。37イは。38国きな。39図のアリ。40図かの、図考異ナシ。

ひけれ」大將、「近きま1ゝもり[○衛]ならではなどてかは。よき所に參り2來けるかな」とて、衙重なる菓物々見給へば、白銀の皿の四寸ばかりなるに、それより高く盛りつゝあり。かゝる程に、内より土器出ださせ3て4賜ふとて、

年を經て5一度あらむかゝる日の土器幾代君にさゝまし

とあれば、大將、

生まれ出づる代々の土器6よつ程に先づ一度の兒を見せなむ

とて、又「御醉7しつる8佐野のわ9(た)り[(渡カ]10司にや」11とあれば、「酒飲まざらむ人咎めむ」とぞ12口々に宣ふ程に、南の方に宮は13たか言ふやう、「大將殿こそ、此の14寺に來盜みし侍る。此の御物皆取る」とのゝしれば、大將、「盜みする親15とはよ16ら17ぞ打18つや」と答へ給へば、内より土器度々強ひ給ふ。

盃の19め20つ[○廻]り逢ひつゝ萬世を數へて君に21見かせ知らせん22

た23どて内にさし24かれ給25ひ、26外[○上二字ふ人トモヨマル]には27きに並み居て、と言ひかく言ひ、強

校異 1イナシ。2イ來。3イナシ。4國イてアリ。5国二。6国待、國イら。7以下六字イ靜かさの、国考異しづかさの。8国がアリ、国はアリ。9一字イニヨリテ補フ。10イナシ。11イナシ。12国此所マデヲ詞トス。13國なる。14一字国父。三字国父君の物。15国は早。16国考異く。17国こそ。18国て。19國イあ。20イぐ。21イ幾代。22國イ知らせむアリ。23國イらで。24一字國イナシ。二字イこれ、国入れ。25国ふ。26国内。27国君達。

ひにもなれば、「いと煩はしき所にも」とて、立ち給ひなむとすれば、式部2四の宮の御方、3世に名4だゝる琵琶、源中納言の持給へ5る6、いさゝか搔き7習はしてさし出で給ふ。大將、ともかくも言はで、搔き鳴らし給ひて「これは此の名たゝる物なりけりな」とて、一日うな8い9ども唄ひし歌を、いと面白き音に搔い彈きて、「いづらや。此の折に10こそ、かの扇拍子は」とて、少し搔い彈きて立ち給へば、兵衞の君と云ふ人、道に塞がり11給ひて、「かゝる所に入りおはしまして12は、まさにか13つ「〇歸」らせ給ひなむや」とて引きと14く「〇留」むれば、「あな煩はしや。猨猴の心地こそすれ」「15大將16御舍人共17にかし」大將、「うたてある隨身にこそは」と宣ふ程に、内より綾搔練の18糸黑らかなる一重、薄色の織物の細長一重、三重襲の袴一19重、20(え)も言はず淸らにてさし出で給へれば、中將の君と云ふ人、取りてかづけ奉りつ。大將御達の歌書21き22つけつる硯のもとに立ち寄りて、筆を取りて、懷紙にかく書きて腰に結び23つゝ、

24(千歲經む齡をこゝに幾返りき「〇着、來」てもこそ見む鶴の毛衣

かくて)高欄のもとに、これ25かれ押し掛りて居たる所に、「26實になりける27一日は知らぬ人28はらかはこ

校異 1イる。2イ卿。3国ナシ。4国高き。5イを。6国をアリ。7イ鳴ら。8因ゐ。9イナシ。10國イにも。11イ居。12因ナシ。13イへ。14イど。15因答。16宝のアリ。17イぞ。18国いと。19因具。20一字イニヨリテ補フ。21國イさ。22三字因考異け、二字國ナシ。23因付く。24以下廿六字因ニヨリテ補フ。25因こその。26因出で給ひて。27イ鶴。28イいとかは、国獻はゞ、因なれば。

1に、今より先に知る人に」2と3を4にてす5くし取らせて、そなたの御階より6なりて、密かに出で給へば、中納言見付けて、南の階より跣足にて下りおはして、追7ひ付きて、「8なら君の、内に入りて、舎人の間の法師のやうにては逃げ給ふ9に」とて引きもて来て、「うとき所に10知らぬ人のやうに。上臈も殊におはせず、大納言殿こそ。それ11はうとからぬ御中なれば、起き臥し昔語りも、行く先の契もせんとする12所に、13てうぶく(〇調伏カ)まろかやうにては」大将、「をいたす(〇追ひ出すカ)心や有ると」て。まことは、これこそに物14言はむとて儲り入りたりつれば、召し入れ15懲せられつるに困じて、16参り逃げ17つるぞや」とて、これかれ盡くし取りやか18ゑ(〇返)しまと(〇窓カ)に[illegible]み給へり。19殿上達部二所、大将中納言殿と物語し給ふ程に、故侍従の20みとぞ21大夫なりしは、内藏頭22(に)て、藏人にぞ物し給ふ。故侍従には容貌も心も勝りたる、23類なき色好みに24ぞ有りける。土器取りて出で給へり。大将、「此25君見26立てお27かれ28ば、29いても萬の事30勝りにぞ」などて、「内裏に、御佛名31過して参れと仰せられしを、え参り侍らぬかた。折32悪しくぞその由、いたはる所侍りてなむえ参らざめると奏し給へ」とて、「水の尾の33御子なる

校異 1イそ。2下三字国をと。3下三字國御衣。4下二字イ袖。5イべ。6イ下。7國イナシ。8イ何ぞ。9イぞ。10三字イナシ。11国も。12国ナシ。13イぞ。14国はアリ。15イてアリ。16イ能。17国ナシ。18イへ。19国大臣の。20イ御弟ぞ、国御弟の、国御弟の。21イ言ふ。22一字イニヨリテ補フ。23國イ位。24國イて。25国のアリ。26下四字国奉。27イる。28イ分。29国分アリ。30国忘るゝ。31国過ぐ。32国あら。33下二字イ御婿。四字国行。

人の、かやうの折をかしかりしはや」中納言1殿、「藤壺少しの罪は得るらんやは。昔より人侘ひさせむと或り給へる御身かな。すさぐし[〇涼]ら3 4面はやはある。身を捨つる捨てぬと5こそあ6めれ」大將は、「辭ひにたるか。などかくは言ふ」答へ、「7え[〇醉]はぬ時も言科なれば、皆人8耳馴れにたらむ。吾が君こ言賢し9くや」大將、「10にや、さかし11言ふ12をろ13(か)にと言へば、14そよ」平中納言、「遠くて15居寄16つて思ふぞ17」と言へば、「さてはえこそ」と18口々91云ふを、御同胞達内にも外にも、いと聞20らにくしと思へお。宰相中將、「今宵は轆轤はしした21かきけをここそ見給へれ。22攤に負けせまりて、23はたまろさり24さく25かをとて、26えて[〇碁代]を借りつれば、のゝしりつるに、侘びにてなむ侍りつる。此の27と28へと云ふ物少し盗ませて侍ればこそ、いと多くかうて侍れ」とて、多く包みて持たせ給へり。「かれは心高き人ぞや。怪しうこそは。29いみじき契馴れした30るものを」「いかなる御契をか」大將、「見31をざ32くんとこそは」33答へ、「藥、ましくふ侍る事かな」34など言ふ程に曉になりぬ。土器たびかへり參る。内よりかづけ物、君達35取り續き36て出で給へり。中納言取37か38つぎかづけ給ふ。織物、赤色の唐衣、綾搔練の綾、摺39と裳、三重襲の

〔校異〕1以下十七字イナシ。一字国ナシ、因此の。2イず。3イはアリ、イもアリ。4イ面。5因にアリ。6國イは。7イゑ。8因見。9因う。10イそ。11国らアリ。12国お。13一字イニヨリテ補フ。14因でかし。15下三字国よづい。16因り。17因よアリ。18因考異てアリ。19因考異にアリ。20イき。21イな。22因碁。23二字国ナシ、國イわた。24因考異き。25因る。26イご。27下二字国碁代。28イつ。29イ短か。30國イり。31国せ。32国ら。33イ獻へ。34イと。35國よ。36イナシ。37イり。38国續き。39イナシ、国の。

袴、兒の衣裲襠添へたり。上人に1は織物のほ2うなが〔〇細長〕、袷の袴など樣々なり。かゝる程に、西の方中納言の伯母君の御許より、織物の袿一3重、唐綾の搔練、袷の袴など、上達部殿上人などにも出だし給へり。立ち給はむ4ずる程に、大將、「まことや、聞えむとしつる事は、明日5御車賜へけん」中納言、「何6々の御料にぞ」「女三の宮、三條に迎へ奉る料なり」人々いみじく喜び驚き給ふ。「我が世に、痛はしくかたはらいたかりつる事の、日やすき事かな。是はいかでぞ。殿の御心と思し立ちたる7か。御催しか」大將、「異人の知るべき事ならばこそ。8させりんとあれば」「いとよく侍るなり」と人々集まりて喜び給ひて、「車奉り侍らん。分きても藤壺の明日罷出させむとあ10めれば、それが入るべきやうにななむ」大將、「それは罷り出で給は11じ。さるものなりとも、曉方に12ぞからうじて13は。14それも不15用16 17もやこゝにはなき。晝つ方に寄れて、その御用にもあたりなむ」「いとよかなり」と、此れ彼れも宣ふ程に、紀伊守ま18しらうど〔〇客人〕の上達部19よ20と心21には22中にもあるを、かくて皆歸り給ひぬ。これこそ23賭物をもちて思ふやう、こればかり賜はむとにやあらんとて、24ひく／＼見る25、腰の方に文ゆひ付けられたり。見れば、

校異 1イナシ。2イそ。3因かさね。4イとす。4國イ出づる間。6因ナシ。7因考異御事アリ。8下三字イ御前。9國イめカ。10國イは。11國イば。12國イけり。13因ナシ。14國イす。15因徑。16因考異にアリ。17国に。18イら。19イに。20イ所。21以下十一字因させし物のあれどえも出だしやらで、因考異ざしの物のあれどえ出だしやらで。22下三字イナシ。23因かのかづけ給へる、因考異かのかづけ。24因つく／＼、因考異つらく／＼。25因にアリ。

人知れ1ぬ渡りそめにし名取川なほ見まほしや告げよいづこと

内裏わたりこそ忘れがたけれ。是は寒げなる居ずまひなり」とあるを2も見て、此の文をいと嬉しと思ふ。かくのゝし3るつ4て持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかで見むとこそすれ、これひ5ら〔〇一〕行に6も持ちたる人は心に7くゝせしものをと思ひてか8つ〔〇隠〕しつ。織物のほ9うなが〔〇細長〕を引きへぎて、兵衛の君に10合はせ、中將の君11一12つ取らせて、殘りは取りて入りぬ。

かくて昨夜の御前の物13引く。14すみ物15も添へて、荒卷16十17みだ〔〇枝〕と、魚18鳥19と2021た22ゝ23かつき〔〇高杯〕五た24りつき〔〇高杯〕づゝ、大殿大將殿[illegible]壺の女御の君の御許へ奉れ給ふ。

内侍のすけ歸りなむとて、「犬宮の御湯殿に參らむと大殿に聞えてしを、かくて侍れば物しと25思すらん。おぼふげたらでかなしくし26るへば、いかに日頃27御湯殿を後めたく思すらん」中納言殿の北の方、「こゝにも心しらひたる人もなければ、御口28入れ給へとこそ29思へ」すけ、「時々通ひて參り來む。さばかりある御心に、御方いとよくいたはらせ給へばならんと思さむ、いと恥かしく侍り」北の方、「げにさぞあらん」など宣

校異 1イず。2イナシ。3イり。4イつ。5イと。6イてアリ。7國イつゝ。8イく。9イそ。10図取ら。11国にアリ。12図重。13図どもアリ。14國に。15図考異に。16イを。17イえ。18国とアリ。19一字国ナシ。下三字國十枝。20イこアリ、国二アリ。21以下十字図一つ高杯一つ。22一字イナシ。23下三字國[illegible]。24一字イか。25國イたほ。26国給。27イはアリ。28國イつ。29図考異はアリ。

ふ。大1殿の北の方、「この2乳3にはいかゞある、いぶかしさに、先つ頃大殿の内裏に物し給ひし頃見に物したりし4よと、更に見せ給はず。何し5にかは、かたは〔○片輪〕やつきたる」「あなまが〳〵し。たゞ父大殿、今少し小さくて貴近きに6こそおはす7れ。日に二度三度はありし御文に、人に見せ奉り給ふなとのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも生ひ勝り給ひなむかし」大殿「いでや、容貌ある8ゝも、言ひ騒げば餘りに聞きにくしや」など宣9ふ。内侍のすけ10、御衣櫃に女の裝束一11具、夜の裝束一12具、絹三十匹など入れて取らせ給ふ。

書詞13 14源中納言殿。

かくて大將殿は日の御座所に犬宮抱きて臥し給へり。宮もかたはらに御殿籠り15給へり。源中納言殿より16も奉り給へる物ども17、絲を藻にて、白き組18を荒19くかにて、絹一匹を20甍にて、21すを五葉の造り枝に付けつゝ十22しだ〔○枝〕、鯛23たひ〔○鯉〕は生きてはた24てやうにて、同じ造り枝に付けたり。雉子の25嘴には黒26方27 28皆白銀29どもなり。30糸は黄金、その31端には黄金入れたり。小鳥には黒方を丸がしたり。

校異 1国将アリ。2国兒。3国の。4イかど。5国ナシ。6イもアリ。7国めアリ。8イナシ。9国考異ひし。10イにアリ。11国くだり。12国くだり。13国こゝはアリ。14以下五字イナシ。四字國イナシ。15三字イナシ。16国ナシ。17国はアリ。18国緒アリ。19国卷。20国魚。21国そこ。22イへ、国え、國り。23国こ。24イらく。25国腹。26イう貼り。27国を丸がし入れ膜をばアリ。28国ナシ。29国にて造れ。30国鳩。31国腹。

折櫃1には白銀、2 3沈4のか5すを〔〇鰹〕6 7黒方8壺燒のあ9そび〔〇鮑〕、海松青海苔は絲、甘海苔10に11腹を染めて、12下には綾、衝重13廿六蘇枋の物入14(れ)たり。洲濱を見給へ15(16ば)中納言殿の御手にて、

行く水の澄む影君にかふるまで汀の鶴は生17いも18たしなむ

とあり。〔〇以下國書詞トス〕19すみ物は臺盤所におもと人20藏人達居て21食ふ22とても皆あり。皆分けつゝ〔〇以上國書詞〕23ぞ、昨夜のかち物24の錢今一25重袋白き添へて、「いと行く先長く思し設くめる物26は、などか忘れさせ給ひにける。心きたなき上達部27 28も侍るものを」と中納言の御消29息にて有30(り)。御返31「32くに掻きあづけてかは色こそ變れ33にめる」となむ34。

内侍のすけ、いと清らに裝束きて御前に參り給ひて、「大宮のいと戀しく35おはしつれば、今日明日はと侍りつれど、急ぎて參りつるなり」大殿、「いと嬉しかなり。日頃後めたかりつる。御方々はなどておはしつる36ぞ。數多御簾せしは幾所にか」「大將北の方の御子にし奉37り給へば、いたく惱み給ひしかば38、式部卿の宮

校異1囚ナシ。2因鰹はアリ。3國イこん。4下四字因ナシ。5一字イつ。6イをアリ。7因壺燒の鮑はアリ。8下六字因ナシ。9一字イは。10因は。11イ絲。12因したり壺。13因には。14一字イニヨリテ補フ。15一字イニヨリテ補フ。16因に。17国ひ。18イ立た。19因こゝは源中納言殿。20二字因ナシ。21因物アリ。22イ碁代。23一字因かくて源中納言殿より大將殿に。三字國よそへ。24因ナシ。25因餌。26イぞ、因を。27國イにアリ。28イに。29イ息。30一字イニヨリテ補フ。31因りアリ。32因人。33イいかが。34因萱へりかくてアリ。35因はアリ。36イナシ。37因れ。38因おはしめアリ。

の御方は御子をいと安く1か〔〇生〕み給へば、あ2へ物にとて。大納言殿の北の方は、何れとも本よりいみじき思ひ同胞にて、心細き心たど聞え給へ3る、かれて渡らせ給ひにける。いかなるか侍らむ、大納言殿御仲違にて、日頃は夜毎に4おはして、5男子になむ居明かし給ふめる。御格子はとくおろして6めぐり、人物聞ゆればいみじうさい7(な)8めば9た10く一所なむ。一夜は11惜しがりて、中納言の君對12面し給へりしかば、それも追ひ出でられてたむ。今日は北の御殿に渡り給ひぬらん。さ13かは、それもかやうの事ありげにおはすめり。14むべなりけり、例は15いたう16く〔〇容〕めいたる人17いとまめに見え給ひしは」「此1819君の御容貌はいか20くおはする」21「內裏の御方のやう22の人23いとをかしげ24なるになむ」大將、「見奉らざらむ人は知りがたくぞ」すけ、「何か、氣色はいとよくぞ」「さて源中納言殿は」すけ、「それは、宮の御やうの人の若く淸らにおはする事。御方々いと淸らにおはしま25す」宮は驚き給ひて、「何事ぞ。あれ聞26(き)にく27く28」大將29の、「夢見給へるか。人の物や言ひつる」とて、「中納言と君30との御中はいかなるぞ。見まろ31がやうに抱くや」すけ、「御中はいと目出たく思ひ聞え給へり。いたう煩ひ給ひし時は、泣く／＼手

〔校異〕1イう。2因え。3因ば、4國イ思。5イ實。6イさしアリ。7一字イニヨリテ補フ。8因み給へ。9下二字因ナシ。10イだ。11因いとほ。12因面。43イる、14因う。15因いとアリ。16イら、國イそ。17イのアリ。18因のアリ。19二字國イナシ。20イが。21因すけアリ。22因にて。23イのアリ。24二字因ナシ。25イし。26一字イニヨリテ補フ。27イし。28因やアリ。29因ナシ、因殿。30國イナシ。31國イに。

惑ひぞし給ひし。兒は、1見には見給ふ。恐ろしとて抱きみ給はず」大殿、「まだ見ずなど宣ひしかば、いぶかしきにや」などて、内侍のすけ犬宮抱きて入りぬ。3弟宮は、「起き居給ひて、昨夜の所よりある物ども見給へ。これら取り置かせ給へれ。かゝる物の用4ある時、俄にすれば煩はしき」と聞え給ふ。起き給ひて、昨夜のかづけ物ども見給ふ。大殿、「皆人かゝる事すれ5ばと怪しく、物の具など有難く清らにする所にこそあれ。此の袿添ひたるは御前に奉6れ。唐衣添ひたるは内裏の御方の參らせ給はむ7料に奉れ給8へ」宮、「かたへは三條に奉9れん」大殿、「あな見苦しや。片隅に籠り居たる生女の著るべき物かは」など宣ひて、その日はおはしまし暮らして、又の日、「三條に籠り10てすべき事侍り」とて、表の衣裝束清らにして、薫物どもして出で給ひぬ。

三條殿11參12ふで給ひて南の御殿を見給へば、いと清らにしつらはれたり。暫しあれば、殿ばらより御車ども奉れ給へり。源中納言殿より新しき黃金作13の男ども廿14四人、裝束一15すくにて、選り立てゝ奉れ給へり。絲毛には侍の下﨟の男どもに表の袍など著せて16卅人ばかりつけたり。御前四位十人五位廿人六位17卅人。大將は、「馬に鞍置きて、男ども歸るべきやうに奉て參うで、三條殿に」と言ひおき給ひて、父大殿一

校異 1イ身弱み。2イき。3国大殿〔○以下詞カ〕。4イ意アリ。5国い。6図らむ。7図御アリ。8イひつトアリテ下ニ「板」アリ。9イら。10國イナシ。11国にアリ。12国う。13国には、図に。14図餘。15イすぢ、国すじ、図つら。16イ廿。17図考異廿。

一御車にて、御前二人ばかりして、明く物し給ひぬ。西の御門より下り給ひて、右大将は宮の御1前へ、左大2将は忍びて中の3御方に參りて見給へば、打ち破れたる屛風一雙ばかり、夏の帷子の煤けたる几帳一つ二つ立てゝ、君は綾搔練の所々破れたる一重(○單)4、煤けたる5白衣著て、火桶の煤けたるに火6わづかにおこしたるに、臺一立てゝ、白きたうわん(○陶埦カ、唐埦カ)に御膳ひめ7く8きて少し盛りて、す9じ10折り置、漬けたる韲、堅11い鹽ばかりして、夜さりの御物にもあらず、朝の12物にもあらぬ程に參りたり。13御前にに古びたる14かは(○側カ、皮カ)蒔繪の15梨子地の箱、16さやうなる硯の箱据ゑて、櫛の箱蓋を取り除けて、一日の柑子の壺の殘りを取り出でゝ、乳母17のかけて見など18のす、その女19孫など童にて有りし20にも(○下)仕一人ばかりなむ有りける。大殿見廻らして、とばかり物も宣はず、たゞ泣きに21二三の御衣の袖一と22らになりぬまで泣き給ふ。御前なる硯を引き寄せて懷紙にかく書きて、打ち置きて立ち給ひぬれば、中の君「我かくていみじき樣を見えぬるは、さもあらばあれ、異代にや23は經たる。かくなしたるにこそはあめれ。これをかくすと見えぬるは、いみじく悲しき事。我が幸ひなく恥24見るべき宿世の有りければ、25心地の年月こそあれ、かゝる年月を見る事」と伏しまろび泣き給ふ。乳母の26孫の童「御硯にかゝ

【校異】1因前。2イ臣藏。3イ君アリ、国君のアリ。4国がさねアリ。5因白。6イはつ。7イめ。8国と。9イぐ、イす、因み。10因お。11因考異ナシ。12イ御アリ。13因御前。14二字イナシ。15イ笥。16因同じ。17イナシ。18イナシ。19因孫。20イナシ。21因こみ。22イど。23因考異ナシ。24イをアリ。25イここら。26因孫。

ろ物こそ侍れ」とて取りて奉る。見給へば、

ともかくも云ふべき方も思はえず見るに涙の降るに惑ひて

君、これが返事をだにいかで言は1ひと思して、かく書き給ふ。

眺めつ2る雲井をのみぞ恨み3來る別れの人は目にも見えね4ど

5書きて、いかで遣らむと思せど、出で走るべき姿したる人もなければ、押し揉みて手に握りて、寢殿に向ひたる柱6もとに立ちて見給へば、7左大將8落ち9かゝりて、10東の一の對の方へおはしぬ。11(なほそこに立ち居給へり。かくて12大殿は宮の13御方14に參り給ひぬれば、)御達廿餘人ばかり裝束淸らにし15、童四人靑色に16襖し重ねて著たり。おはする所17有樣昔に劣らず。御褥敷きて御簾の前に居給へり。宮は昔の御容貌に18殊に劣り給はず、綾搔練の濃き薄き織物のほ19うなが(〇細長)など奉りて、御火桶淸らにておはす。炭櫃に火などおこしたり。御臺一よろひ20 21盞などして、例のやうにて物參22れり。大殿、「年頃は淺ましく公にも捨てられ奉りたるやうにて。昔は行く先23若し人なみ〳〵にやと思ひ給24へて、かゝる宮仕へもさる方なりしを、25今日は限りのやうなる身に侍れば、侍はむも御前伏たるやうなれば、かゝる身にあ26り27ぬ

校異 1イむ。2イゝ。3國つ。4國ば。5イとアリ。6イのアリ。7國大殿は。8イ下り。9國給ひ。10國東。11以下廿九字國ニヨリテ補フ。12國考異左大將下りかゝりて南の御殿。13國考異ナシ。14國考異へおはし。15國てアリ。16國イ直衣カ。17國の。18二字國ナシ。19イそ。20國金のアリ。21イ五器。22イる。23イも。24國イう。25國今。26國え。27國經アリ。

べき者のもとに籠り侍1(る)を、さてのみやは行く先も短くなりぬる心2地3侍ればなむ、4濱の苫屋のやうたる所に時々通ひおはしましなむや」と聞え5たり6し。宮、更に年頃見ざりつるとも思し7立たで、いと8おいらかに、「世9中はいと10とかくかくても有り11ぬ12や。たゞ苦し13く覺ゆるは14、身15の上も宮も心と世の中に住みはふれて、帝后の御面を伏する事と宣ふなれば、16え參らで年を經るたゞ悲し17さは、18昔は皆19しこそ20宣ひしか、21時々は參り22通ひしものをと思ふなん、23孫王の御上24に思25ひ給へ26らるゝ27されば、今はともかくもしなし捨てられなんまゝに28なとなむ一日中納言に物せし」と宣ふ程に、大殿御前に昔のやうにて御堂參れり。多くの御物語り29給ふ程30は、右大將31の妹の方におはして、簀子のもとに32參り、「あなた覺33えず、所違へか」と聞え給へば、「人34只35し36求め給ひしかば、それ聞えむとてなむ」啓、「かゝる人の知るべきと宣ひしかば、いとよくぞ思ひ知りにき」などて、屏障のもとに几帳立て、褥さし出でて、37赤色の火桶38立てかして置きたるに、火おこして出だしたり。大將、「今少し近く寄らせ給へ。山籠り

校異 1一字イニヨリテ補フ。2国ち。3イしアリ。4イ濱。5因給へ。6因ナシ。7因たら。8国を。9国のアリ。10下二字イよ。三字国ど、因ナシ。11国へアリ。12国べしアリ。13因う。14因東宮の御方なりアリ。15因は。16因と。17因き。18以下十三字イナシ。19一字因々。20二字因物せし。21二字因ど今。22因給へぬを。23因かしこには後めたう宣ふ」大殿「春宮の御方は中納言かくて侍ればいとよく仕うまつりなむ。24因をぞ畏まり。25因う。26二字因ナシ。27因」御答「。28イなど。29イしアリ。30国に。31イ少將アリ、国は少將アリ。32因立ち給ひて、国たゝまへり。33イら。34イ々。35国と、因ナシ。36イもアリ。37イ吾が君。33イ縮。

の君を、昔はいみじう語らひ聞えしかば、さりとも聞し召すやうも有りけん」答、「山籠り1の知るべき人やは」と。大將、「何か、いとよく承はりたりや。一日も聞えさすべかりけれども、かくておはすらむとも2え知り給は3ず有りしを、5うちておはせ給ひしよし聞えしかばなむ。かく承はらましかば。山の君の宮に覺え給へは、かばかりに聞えまほしくなむ」答、「常に聞ゆめりしかば、よ6うにえ承はりな7らしたれど、う8と〳〵しく思されし筋にやと思9う給ふるたん」大將、「それは親二所おはすとなむ、殿の御かはり、かの君の御かはりに、人數に侍らずとも相思ほせ。さてもいかでかは、かの君達世に經給はぬに、かくては此のくた10び〔〇宮内〕卿11の殿のはいづくにぞ。いかでか」答、「親の御許にこそ12は。先に13もし14給へりしには、み〔〇見カ、身カ〕になむ、吹上の歸さを思15(ひ)出でゝ、いみじくなむ泣16かる17さりし。かの人、同じや18くなる樣になりなむなどあめれど、親の許さ19れねば、心は同じやうにてたむ」大將20、「幼たき人たど物しげなりしかば、何に21て、幾つばかりにて、いづくにか」答、「女一人十餘ばかりにて、男二人、一つ二つが弟にてなむ。女は母君の御許に、男は物習は22なむとて、山へ迎へ侍りき。23兄なるは何事も親には勝りぬべかめり。弟はえせで騷がれ侍るなり」大將、「遊びの24人もいとかしこくて持給へりし。持て上り

校異 1 因しける。2 國イも。3 イで。4 因考異かば。5 国から、因かく。6 イそ。7 国ど。8 國イもう。9 去ひ。10 国い。11 因ナシ。12 イナシ。13 因考異ナシ。14 一字イ宣、國イの。三字因考異忍びニ。15 一字イニヨリテ補フ。16 イく。17 イな。18 イら歟、国う。19 因ナシ。20 イはアリ。21 因そ。22 国さ。23 國イこのうみ。24 イ具、国ぐ。

給ひにしか」答へ、「1子共に物習はさむとて、後になむ。女にゑ習はさぬは、少し外の方にさし出でゝ、物の音など調べ置きて、かしこよりも深く入りなむとて、常に言ひおこせ侍りつる」大將、「あはれ、さる所に、何心を思ひて幼なき2事共3と居給ふらむ。

むつまじきうときと4妹を振り捨てゝ山邊に獨り5いかで住むらむ」

と宣へば、いもう6〔と〕〔〇妹〕の君いみじく泣きて、

7馴みしも見えしも更に忘られで獨りは里に住み憂かりけり

と聞ゆれば、大將、「今日は宮の御方8に三條へ渡り給ふとてなむ物せられつる。仲忠侍る所も今9ひと廣くなりぬべし。今そこに御迎へせむ。暫しなほかくておはせよ。な思しうとみ10す」とて立ちて、宮の御方へおはしぬ。大殿、「こゝにや」と宣ひて、「11左近や。昔思ほえてまかなひせ12むや。湯漬せよ」など宣へは、同じやうなる金の坏にして、湯漬して、給いと清げにて外に參る。御酒など參る程に日暮れて、御車御前など參りたり。政所より炭多く出だして、所々に13おこさせて、車添など据ゑて、餅干物など取り出で、酒14樽に入れて据15へて16御爛して、沸かしつゝ飲ます。御前どもに菓物干物などして酒飲ます。かくて先づうな17ひ〔〇髫髪〕下仕18かく人賜19人の御車寄せて奉りて引き出づれば、中の君、「さばかくするなりけり。20我が

校異 1因殊。2イ子。3イ問ひ。4因考異今は。5因考異人の。6一字国ニヨリテ補フ。7イ樂しみ。8国ナシ、因の。9イい。10イそ。11一字因右。二字イなほ。12国よ。13イ火アリ。14国樽。15国ゑ。16イさぶり。17因むこ。18イから、国ら。19二字国へ乗る。三字イへ乗る。20因我れ。

い1か様にあらむとすらん。此の文をだに見せずなりぬる事」と泣く〳〵2持ち3かく思ひ立ち給へり。大殿御車出だして暫し有りて、立ち寄り給ひて、「今日は便のやうなり。今殊更にを」とて歸り給ふに、此の文投げ出だし給4(へ)れば、5取りて6おはして奉りつる御車に奉りぬ。大將は御馬に乘りて、7先に仕8(う)まつり給ふ。世の中の人、右大將は繼母の宮迎へ奉りて、御前して9すべかなりとて、車引き立てゝ見る。御10續松ともしわたして、逸る馬に乘り、11おり(〇下りカ、居りカ)12まはしておはする御樣を、車ども13簾をさし出でつゝ見る。よしある檳榔毛の車の簾垂をいと高く上げて、落ちぬばかりこぼれ出でゝ見るあり。大將14打ち寄りて、「何見給ふ。まろより外にあらじかし」と宣へば、「かゝるあたりには有りければ」大將、「後15のをと云ふなればぞ」とておはしぬ。かくて三條殿におはして、南の御殿に御車寄せつ。皆16なり給ひぬ。今宵の17御設け人々にあづけられたれば、皆參りたり。父大殿はやがてこゝに御殿籠る。大將、「今なむ罷出る。明日も侍はん」と北の方に聞え18て歸り給ひぬ。

右19大殿は藤壺の御迎へし給はむとて、やがてその車にこと(〇琴カ、事カ)な20ど21とは(〇加)へて、絲毛三つ、黄金作22 23たうきり、髫髮車下24いかへ(〇仕)車合せて廿25人ばかり、御前の人26の國な27りのみこ

校異1国イナシ。2下三字イと近。3二字因て。4一字国ニヨリテ補フ。5国御供の人アリ。6八字因ナシ。7因御アリ。8一字イニヨリテ補フ。9イいまアリ。10イ松明。11因を。12イお。13因よりアリ。14イ立。15因おひ。16イ下。17因ナシ。18因給ひアリ。19国のアリ。20イく。21イく。22因考異のアリ。23因考異と。24イづ。25国ナシ。26因ナシ。27イる。

そ殘れ、京なるは1五位2四位なきなし。大殿、「暇許されざなるを、參りて罷出させん」と宣ひて出立ち給へば、御子ども、中納言を放ちて3御皆御供に參うで給4ひ、ぬ5い〔○縫〕殿の陣に御車引き立て參うで給ふ。宮は甞よりさる氣色御覽じて、「怪しく心地の惡しきかな」とて、とらへて臥し給ひぬるま6しに起き7居給はず。大臣參り給へれ8ば、宮入り臥し給へれば、え上り給はで9下に立ち給へれば、君達はさながら土に立ち給へり。10女これかれして君に消11息申し給へど、え聞え次がぬ程に、大殿の君の御方に言ふやう、「12心地の年月13日も14へきりつる15し人の、今宵かくからうじて16出で17居られぬ18べきかな。いかに19腐り20みた21ゝきたらむ22かるいはくぞ昔の言の葉來23ぞすめる」と言ふ。又院の御方24に下仕童など、「今宵はよき日なるべし。縫殿の陣の方に、俄に物卷きたる車ども25開きに立てりつ。今宵ぞ持て出でらる26るべ27るめる。28若しずは29へして、よく打たばや」など言ひあへり。大臣爪彈をして、「女子30取りたらん人は、よき犬乞食なりけり。中にらうたしと思ひし者をしも出だし立てゝ、かゝる耳を聞く事。猶犬31烏にもくれて、籠め据32へた33くましものを」と言ひ立ち給へるを、宮はいとよく聞し召す。これかれ「夜更けぬ」

校異1因四。2因五。3イは。4イふ。5イひ。6イま。7因出で。8国ど。9國イ後。10因大臣。11因息。12イこゝら。13因考異ナシ。14五字イ隔たり。下二字国経ざ、因隔た。15国ナシ。16下四字因率て去な。17一字因考異寢。18二字因る。19國飾。20下四字因亂れ。21一字イらトアリテドニ「板」アリ。22十二字因るは這ひ出でむぞかしその樣の聞え。23イえ。24因の。25イ北。26イナシ。27イか。28イ崩え、国百、國イことゝ。29国え。30イ持ち、イ持たり。31イかくす〔○隱すカ、か國栖カ〕。32国索。33イら、國イち。

と消1息申せ2ば、「え聞えず」とのみ申す。3孫王の君を呼び寄せて、御後の方より忍ひて參うでゝ申せ。度々罷出させずとのみあれば、思はえず敵など持ち給へれば、後めたさに御迎へになど4申し給へ」と宣へば、「聞えん」とて、御後の方よりやをらすべり入るを、宮御殿籠り起くるやうにて、いと荒く走り5踏ませ給へば、御脇息に倒れかゝりて、腰を突き6ぞ7突き、御屛風御几帳もこぼ8らと9倒れぬ。10孫王の君いと久しくためらひて、かう〳〵と聞ゆれば、「11翁12々夜のほど13ろに參りてたゞにやは。顯純啓せよ、宮の亮なれば。14藏人ならずとも」と宣へど、「何か。御氣色よろしからぬにこそ」と15て申し給はねば、むづかり給ふを、宮聞し召して、女君をつと掻き寄せて宣ふやう、「そこは我をいかに言ひ13さがしてか、親は17しか18く〔〇同胞〕引き連れさせて我をば責めさする。萬の事我に知らせてこそ參りも罷出もせられめ。我に知らせで、親はらか19〔20ら〕〔〇同胞〕一つ心にて我をや責めさせむずる。そこを放ち遣りては、我はあるべくもあらず。かく21叱りて罷り出でさする22、又參らせじと23なめり。かくながら24はれ〔〇我〕もそこも死なむ」と宣ひて、つと抱きて臥し給へば、五月ばかりの腹いみじうはたらきて、たゞ惑ひに惑ひ給ひ、いみじ

校異 1国息。2国ど。3国孫。4五字國イナシ。5国伏さ、因考異出でさ。6下三字イつ。一字國ナシ。7國イ來つ。8イ〳〵。9因倒。10国孫。11下二字国をほな〳〵、因考異おふなく〔〇おふな〳〵カ〕。12因かく。13イナシ。14國イナシ。15イかく、因考異もかく。16因くた。17イら。18イら。19一字イニヨリテ補フ。20イら歟アリ、國う。21因強ひ。22因はアリ。23因考異の事アリ。24イわ。

う泣き給ふ。宮いと憎しと思せ1ど、は2く〔○腹〕のさ3は〔○騒〕ぐにいみじと思して、打ち許して〔○因以下ヲ詞トス〕宣4ふ、「5上々はいましむる6とぞ」と宣7〔ふ〕8ばかり、「そこによりては、せぬ業々をこそしつべけれ。かく心を隔てゝ心強く惡しきは、仲忠の朝臣のするぞ。これに逢はずなりにたるをぞいと悔しと思ひ9入れためる。人のいとかなしくす10か一子、み11こど〔○帝〕の二12つなくいたはり給ふ聟、我が國に面もたげたる人いたづらになして、天の下の人悲しませ給ふらんに13こそこは容貌よかめ14り、心こそえよからざりけれ」と宣へば、水のわなゝきして、汗にしとゞに濡れて、か15く〔○屈〕まり伏し給へれば、さすがにをかしと思して、「今より我に知らせぬ心16な遣はれそよ。罷出らるべき事あめれば、今暫しこそあれ、強ひてかくすればいと憎きぞかし」と宣へば、夜半17過18まで立ち給ひて、曉にぞ大臣19歸り20ける。

つとめて21馬の頭の君を御使にて、大臣の御文あり。「昨夜は道の程後めたさに、22御迎へに參り來たりしかど、23暇を賜はり給はざりければ、曉になむ罷出24歸るを、25暇賜はり26て27給ひて消28息は宣29へ30るまどもなどと31らの〔○謂〕へさするも煩はしきを、いでや、子ども廿人にかゝ32りて持て侍れど、そこをば懷

校異1イら。2国ら。3国わ。4下四字因ひ聞えねば。三字イうつらへ。5因考異うつらむ。6イナシ。7一字イニヨリテ補フ。8因我は。9イいます。10イる。11イか。12國イ重。13イナシ。14因れど。15イが。16國ナシ。17因過ぐる。18イるアリ。19因はアリ。20国給ひアリ。21国内藏。22イ御。23国御アリ。24一字イ侍、國侍りつ、國イつ。三字因候ひつる。25因御アリ。26イナシ。27三字国ナシ。28国息。29イく。30国くアリ。31イと。32國れ。

と云ふばかり1に2 3ほし立て奉りしかば、い4づくかも人々しくなり、面だゝしき目をも見給へ5とこそ思ひ奉りしか。消6息7つかぬ程8、打ち休らひつゝ9聞き侍りしかば、ある所々にゆゝしくいみじき事ども10の有りしかば、いと心憂くなむ。自らはさるものにて、若き者ども、人々にも聞きしこそいと恥かし11かりしか12。げに暫し罷出給ひて、人の目ども13し休め奉り給へ」と有14(15る)を、16人17(取)りて御前に奉れば、宮、「持て來や」とて御覽じて、いといと18おしとは思せど、罷出給へとあ19る20いと憎しと思して、押し揉みて投げやり給ひて、「人々の物すらん事はこゝにはえ知らず。面伏なりと思さば、見給ふまじくこそは」となむ21言はせ給へば、22馬の頭いとはしたなくいとほしと思して、罷出給ひて、かう〳〵と申し給へば、これかれいとほしがり騒ぎ給ふ。大宮「事しも有23(り)顔に、お24ほな〳〵子どもも引き連れて、25あろよからぬ文書をして、かゝる事も26出だし給27ふ。そこはとまれ28かくまれ、若き29〳〵の行く末のため30にとこそ味氣なけれ」と宣ふ。31左大將殿32の聞き給ひて、「さればこそ聞え」33は、え罷出給はじと。おぼろげに御心34重35く36おはしますに37あらぬ38に、いとほしき事かな」と宣ふ。

校異 1イお。2イをアリ。3国生、國生。4イつし。5図むアリ。6国息。7国申しアリ。8国にアリ。9イナシ。10図宣ひ。11図く侍。12イばアリ。13イも。14一字イニヨリテ補フ。15二字図考異り。16国老アリ。17一字イニヨリテ補フ。18国ほ。19國り。20国をアリ。21イとアリ。22国内藏。23一字イニヨリテ補フ。24図ふ。25国何か。26國イな脱與。27國ひ。28四字イナシ。29イ人アリ。30二字イナシ。31図右。32図ナシ。33イかば、図か。34図輕。35國イしアリ。36國イ思。37イもアリ。38國イと。

かくて今日は司召なれば、左右の大臣1左大將など一日定められて、夜召す。東宮はその夕さり藤壺諸共に上り給ひて、例の如2くしつらはせておはします。つとめて、司召果てゝのゝしる、いと多く召したり。3衞門督に忠純の中納言、右近4 5中將には近純6の内藏頭兼けて、左衞門尉にあこ君7となり給へれど、宮には喜びも申させ給はず。宮の上におはしませば、人々殿上人など喜びて、8左大將も參り9、うたてある事は宣ひつれど、10にめなる御心にしあらねば、召して物宣11(ひ)などす。「先つ頃、いと間近かりしかど、異事なかりし程に12て、ことごと(〇事々カ、事毎カ)にさやうなる事あるべきやうにはあべか13りしを、今年は不用なめりな」「大將の此の頃仕うまつるべく14侍りつるを、さる事侍りてなむ。年返りてぞ仕うまつるべく15も侍る」とて罷出給ひぬ。藤壺を下へ下し給はで、いと近く御局し給ひて、兵衞の君、孫王の君、あこぎばかりして、又人召し寄せ16、「人の用あらば、此の人を使ひ給へ」とて据ゑ奉り給17へれば、御氣色のいと恐ろしかりつるに怖ぢ惑ひて、18物も聞えで侍19ひ給20(ふ)。(〇因以下ヲ畫詞トス)21喜びの人いと多かり。殿上にも侍ふ22なり。

畫詞23(こゝは春)24宮。

校異 1因右。2イナシ。3因左アリ。4因のアリ。5国少。6国ナシ。7イナシ。8国右。9イ給へりアリ。10イま。11一字イニヨリテ補フ。12イ侍り。13イらじ。14以下廿六字國イナシ。15一字イナシ。16国ずアリ、因考異でアリ。17因考異ひつ。18二字イナシ。19下三字国はず。20一字イニヨリテ補フ。21因こゝは司召アリ。22二字イナシ。23四字国ニヨリテ補フ。24イナシ。

かくて晦日にもなりぬれば、こゝかしこにせ1られ2か「〇節料」いと多く奉る。3にが中に種松4す、5大殿、6右大將殿7の粥の料、すべて調じ8て奉る。9大殿には炭10廿荷米三11石、12殿には炭十荷米十石奉れたり。大將、三條殿に米一石13こと炭二荷奉り給ふ。又14ゆじ數15みに、米も炭も、御厩の草刈、馬人召しておほせて、小さき童二人、大きなる法師雜仕求めさせ給ひて、一條殿に少將の妹16ご遣はす。「一日はことくにと思ひ給ひしかど、日の暮れにしかばなむ。なほ聞えしやうに、何方にも17くむつまじき筋に18置きて、此の炭は水の尾19見比べ給へとてなむ」と書き20散らしのすぐよかなるに包みて、山より21少將の手にいとよく22書き似せて、近く使ひ給ふ上わ23くは「〇童」添へて、24栗田だし25ところ「〇所カ」に26をし27へ「〇教ヘ、カ、押しカ」入れて、歸り參うで來ね」とて遣はしければ、到りて、「水の尾より」とて入れたれば、見るに、炭28ははみをいと細かに29組みて、とのこすを貫き立てゝ、錢廿貫一籠に入れて、物30多して結31いたり。米32を絓糸俵に編みて、絹五十匹33俵に入れて三俵、今一つにはいみじくうるはしき綿廿34入れたり。見給ひて、「いと物35覺えず、つしやかなる36をち「〇節」料も賜37ひつるかな。これをいかにせん」

校異 1イち。2イら。3イそ。4イは。5国大殿。6イ左衛。7イに。8イナシ。9国大殿。10因三十。11国十アリ。12因右大將アリ。13イナシ。14イ同。15イナシ。16イに。17イ〱。18因をさ。19国にアリ。20イてうち紙、國て料紙。21因とてアリ。22二字イナシ。23国ら。24団送り。25イし、団ほ。26因お。27団ナシ。28イ二十籠、因考異はみ。29因積。30イ覆ひ、国おふし、因覆し。31国ひ。32因は。33二字因ナシ。34因屯アリ。35國イ思す。36イせ。37イへ。

と宣へば、乳1（母など、「これも大殿の御德にてこそあめれ。知らぬ人2、御よはひ人ならばこそ3は取り入れ給はずもあらめ。早や御4返聞え給5、へ」と言へば、御使を呼び入れて、物食はせ酒飲ませなどして、大いなる童には白き袿一、小さきには單衣一6つら賜ひて、懷に入れさせて、御返7、「承はりぬ。一日はげに理にも聞えさせずなりにけるかな。山の代りと宣8ふはすれば、9むさ10のたとひの侍らん心地して、いともく嬉しくなむ。さては、これは炭燒をさへせさせ給ひければ、いかに11さて黑か12らんとなん思ひ遣られける」と聞えつ。取りひろげて13、御達喜ぶ。「あなかまや。かの君の14 15供のと聞きて、行き集まりて誂ひ呪ひぞせむ」とて、母君の御許、水の尾の料など16しりを、宮内卿の殿にも奉れなどし給ふ。水の尾には、大將殿御文添へて、17異物衣など調じて奉り給ふ。

［童詞］18少將の妹の19御方。御達四人童下仕一人づゝ、女房二人ばかりあり。君卅餘ばかりにて、愛敬づき匂ひやかなり。20さへ「〇前」にこと「〇事カ、寥カ」ども21に置きて、住ひよげなり。

かくて種松は、22右大將23にも絹綿など大きなる櫃に積みて24來にしなど、世になき25しき26ゝに奉27り、宮の御方にも御莊28々より29にし節料多く奉れり。

［校異］1一字イニヨリテ補フ。2イのアリ。3イナシ。4因返。5一字イニヨリテ補フ。6イづゝ。7因しアリ。8イナシ。9国馬。10因考異ナシ。11イ御手。12イるアリ。13イ見てアリ。14イ御アリ。15因御物。16イに置く、イ取り置く。17国子ども。18国こゝはアリ。19因御。20イま。21イナシ。22因左。23因殿アリ。24因錦。25下四字因錦を。26一字因考異り。27因れアリ。28國御アリ。29二字イナシ。

大殿なほ北の方の御許にのみ夜晝おはする、物などはたゞこゝに、あなたには時々晝間などに參うで給ふ。北の方に一日中の君の有りしやう語り給ひて、投げ1居たりし文見せ2て奉れば、北の方いみじく泣き給ひて、「あはれ、親に遲れ奉りて心細き住居するはいみじきものを。若くて親には遲れ奉りてけり、そこには年頃思ひ聞え給ふと見えず。げに何心地し給3ふより、などか4は5さ哀に親の聞え置き給ひけむ物をか6しくは」大殿、「いさや、そこを見付け奉りしに、胸心も潰れて、萬の事覺えざりしかば、7さしさりつるにや。此の中納言の言ひ出でゝ、かうして忘れたり8つる見苦しき者ども9し思ひ出でさするにこそは。いかに10訪ひに遣らむ。く11い〔○食〕物などこそいと哀れなりしか」など宣ふ程に、「右大將殿より」とて、此の炭きを奉り給へれば、大殿、「氣色ある物かな。持て來」と12御前に召して、開けさせ13て見給へば、少將の妹の14なりし同じやうなり。絹などはまつべしやと委しく御覽ずるに、いと美しげなる白絹どもなり。北の方、「これを遣りて宣ひつる所には物し給へ」と聞え給へば、大殿、「よき事なり」とて、車のは15づしたる、破れたる下簾などかけて入れさせ給ふ。納殿、贄殿、魚鳥菓物など、よきを選ら16せて、炭油など17〔な〕が〔○長〕櫃に積ませ給ひて、御文18、「一日は見給へ19しに、目も昏れて、物覺えざりしかばなむ、え20消えざ21り22し

校異 1イ出だし、因出だし給ひ、因考異出だしたり。2イナシ。3国はん。4因ナシ。5國ナシ。6因ナシ、因考異ら。7イ去らざ、国さらな。8因考異し。9イも、国が。10国もアリ。11国ひ。12イてアリ。13國イナシ。14イ賜へ。15イぐ。16イれ。17一字イニヨリテ補フ。18因はアリ。19イりアリ。20イ聞。21國るさか。22以下三字國イと。

1くも思せ。それも今は、

天雲2は見ゆとも今は何かせん見えぬ此の世の人は問ふとも

さて此の米は夏衣にや。「一重な3るしもと4りゆふなれば、今よりだに」とて奉り給へれば、君物どもよりも、一日の文を見てなど思して、御返5、「一日は覺えぬ便なりしをなむめづらしき心地せられしか6ど、此の世の7、されど8も、

待つ人は多くの月日見えねども何れの暮か雲を見ざらむ」

と有9(り)。かの包みし金は、10一日料に11立てゝぞ有りける。12唐人の13來たる頃にて、14用する物せむとしければ、かゝる物どもあれば有りしやうに入れて持給へり。衣など人々に著せ給ふと聞きて、里に出で居し人々、15そくせそかつ しつゝ出で來たり。物いと多く取りひろげてにぎはしければ、異方々の人はいみじく羨みのゝしる。

かくて晦日の日、三條殿に、「大將殿に聞ゆべき事有り」とありければ參うで給へり。大殿、「申すべき事有りてなん。16此の17二度はなりぬる近江守の家18の19み20ななむ21切なる用あるを、そこ22と使ひ給ふ人にこ

校異 1イと。2イの。3イり。4一字イナシ。二字イかい輿、国か言。5因しアリ。6因考異は。7因外の心になむアリ。8因ナシ。9一字イニヨリテ補フ。10イ百兩。11イ足らで、イ絶えて。12イから。13國イ齎。14因要ず。15イ取らせかく、因取らせてぞ返、因字言。16以下五字因此度御いたはりにて。17以下二字イ二見、イこま、国身。18以下三字イナシ。19以下二字イ南。20一字国ナシ。21因こゝにアリ。22イに。

ゑあ1むなれ。用ぜらるゝ二條の院の2なんがし〔○某カ、東カ〕なる、こゝに3領ずるに4よと物せられよ」大將、「いと易き事5なり。さら6ずも奉り侍りなむ。いとよく叶ひ侍る人なれば、7二度は右大臣8も9との〔○物〕しと思したりつれど、强ひて申しなし侍りぬるなり。さても身には10すみ侍11らざなり。12三條の院のもとなる所になむ。13三はに14さはけれど、いとをかしげに造りて侍15り。宮あこにと思ひて侍る妻の料に侍るなるを、宮あこはおよずけたる心ばへなれば、みも不益になむ」大殿、「さりとも代りなくてはいかが。宮あこはなどかさも得させ給はずなりぬらむ」大將、「先づかうぶり16をと17や侍らむ」大殿、「藏人の少將の弟まさりになり18分れぬべかめるかな。只今の上19の人はこれ一人なめりかし。心もよげなり。誰をか持たる」大將、「侍りしかど、今は侍らで、宮あこと二人、親のもとになん。少將は有るまじき心ばへなれば、親など制し給ふなれば、さて仲忠は20つ21う〔○侍ら〕ずやと物す22なれば、それは23不意に賜へばこそあれ、きむぢはいかなる道、何によりてとなむ切に責め給ふなれど、思ひ止までなむ。心地も知らぬべき者なめりとなむ歎かる24」大殿、「侍從は誰よりかは。もし宮か」25大將、「知らず。氣色見給へむとて物せしかど、異

校異 1因ナシ。2イひ。3国領。4因を。5二字國イナシ。6イに。7イ此度。8国嵐。9イま。10因過ぎ。11一字國ナシ。以下二字イるさ。四字国りきや。12因かの家アリ。13一字イみ。三字因殊に、因考異御庭。14イ狹。15因る。16イなど。17イにアリ、國イさアリ。18国まさら。19イナシ。20イべ　国やへ。21因ら。22因ナシ。23國イ賄。24國イる脫歟。25二字因ナシ。

筋こそとなむ。夜晝あ1はび〔〇遊〕物思2ひ3 4りしかば、5かく世の短かゝるべ6ければにやとこそ見給へりしか」大殿、「例なる事なれば、げに嘆7(か)れぬべくこそは。何れ8をかは」大將、「9二の宮こそは10こゝ11も著給ひて12所はいまだ小さくなむ」大殿、「御容貌などはいかゞ13し物し給ふらん」大將、「畏きは、我か人かとのみ有るは、優り給へるにこそ」北の方、「いでや、宮は14いと目出たくおはするものを。さるかたふつ族にて、皇子達にさへ15すれば、色あひ御髮筋などはいかでかは。又さるに見16ね。17かの18限りはこそ飽き給へらずなりにしかば、いかで參りて見奉らむ」大殿、「髮よく容貌よく有る人は見しや」「此の中に、こゝにおはする宮と中の君と、御髮は有難かりし。こゝの19御樣なる20され21どなし。かやうに物し給ふ」北の方、「あなむくつけや。容貌は年こそ。そが中に穢るものともせで打ち捨てたるに、かれは女御の夜晝撫で22つくろひ奉り給へば、いといみじや」大將23に、「やら24になむ常に似たりと聞ゆれば、かれと25はいとよきものを。藤壺の26こそ」27宣ふ。「此の宮はかの御やうにこそをかしげなるとなむ承はる」「年老いぬる28ば29かりの寶はなかりけり。昔なりせば此の人達いかに30い31まほしからまし」と32「こまが33つらせ給へ

校異 1イそ。2図へ。3國イなアリ。4イナシ。5廿三字國イナシ。6イかりアリ。7一字イニヨリテ補フ。8イナシ。9国四、國此。10下三字国御裳。11下二字國に來。12国こそ。13イナシ。14二字國イナシ。15国おはアリ。16イぬ。17イ髮。18イかゝり場。19図御。20図はアリ。21イば。22國イい。23図御。24イナシ。25国ナシ。26図考異とアリ。27国とアリ。28國イナシ。29國イな。30国見。31國イさ。32イ大將アリ。33イへ。

かし」大殿、「今その駒や」などて、「宮のあと1か誰をか」大將、「宰相2の中將の3大4宮5ぞと思ひて侍る

女(すけ)をとなん。かの君6はたさる御心もなかなれば」大殿、「それも用なかなりや」大將、「かの宰相こそ、此の

宮をあらはれて女御にも自らにも物せら7れなれ」大殿、「若8君をばいかにせむとにかあらん。9大殿(おとゞ)御子

ふさい〔○不才カ〕なりや。あなかしこ、いとお10ほけなき人ぞや。若11宮をば我が12一條に有りし前よりこ

そ13取りもて14きかしか。15又16取17らずや」大將、「さらばかのい18ゑ〔○家〕の事は、又宣ひて、申さむに

したがひて」などて歸り給ひぬ。

〔藏開〕19こゝは20かよひて〔○絶有りてカ〕三條殿。

かくて右大21將殿には22大殿の御方に、大納言殿の北の方23あた〔○渡〕りておはす。大宮、「かゝる折に、か

く離れ24い〔○居〕給へれば、かしこ25は便(びん)なく思すらむ。父大臣も怪しからぬやうに聞き給ふらむ。何事に

よりたる26御中ぞ」と宣へば、「何にかは。今は人27に28下(お)りて、あなづれば、見え侍らじとて」大宮29も、「さ

な〔○るカ〕事もあれ、またたゞに物せられざめり。便なき30事31し32しの初(はじめ)に一人はいかでか。今宵早や渡

〔校異〕1イは。2底ナシ 3底三の、國彈正の。4イ將のアリ。5イに。6二字國ナシ。7イる。8イ宮。9イ男子(をとこ)。10因ふ。11イ君。12國イナシ。13國イ寶 14イ來に、イ來。15以下二字國イまこう。16一字イと。17イう。18国へ。19十字イナシ。20以下四字国ナシ。21国臣。22国左の大臣。23国わ。24イゐ。25イナシ。26因御。27以下四字国と思はで。28以下三字イ面(おもて)。29イ幼なき子ど、因考異幼な子ど。30以下二字イ年。31一字イ今年、イ年。32イナシ。

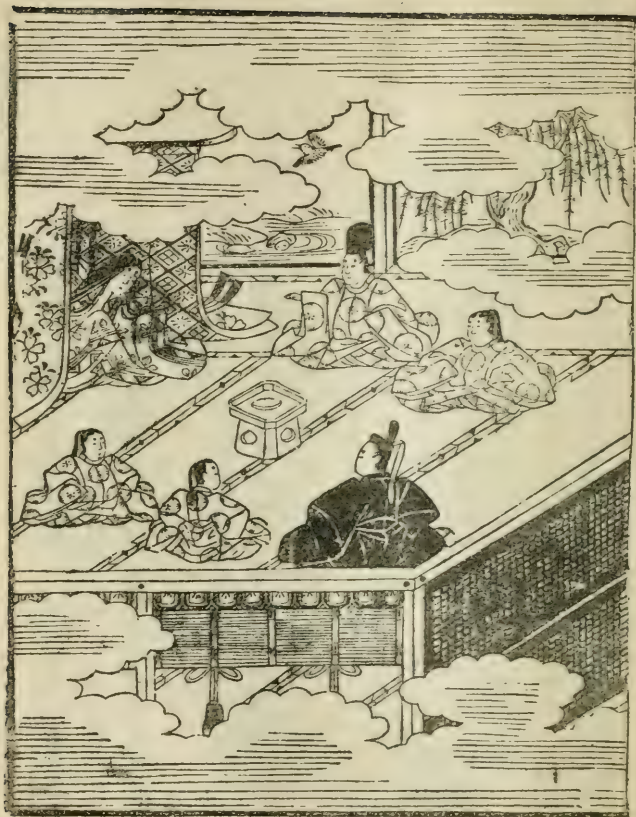
り給ひね」と聞え給へど、答も1聞き給はず。御子は五2なる3弟も三つなる女孕み給へり。女君はいとをかし4ければ、父君いと5かなしうし給ふ。殿には人々の奉りたる物いと多かり。種松ぞたてま6へ〔○奉〕りたる米五石炭五7荷、女御の君の御方にと8の〔○外のカ、殿カ〕宮の御方に9て奉り10參うで、かくて11朔日の日になりて、12殿君達より初めて13十所餘り一所、北の御殿の東14面に15皆立ち16て、宮大臣拜み奉り給ふ。暫しあれば宮達四所、いと淸らに裝束き給ひて女御の御前に參り給ふ。17左大將打ち次ぎて參りて拜み奉り給ふ。宮達大將殿18に參り給ひぬ。青色に蘇枋襲著たる童、御褥參り物參りなどす。御消19に參らんとする程に、20大宮に御土器21も22持たせ奉り23、書きて出だし給へり。

今日の24みと25我思26へど圓居して幾代の春を共に待ち出む

と丶大將にたてま27へ〔○奉〕り給ふ。大將28の、宮を搔き抱きて、土器を29見てかく聞ゆ、

圓居して今日待つ事30は變らじを春の來ざらん年は有りとも

と聞えて、土器度々になりぬ。

校異 1イ聞え。2因つアリ。3一字イ男。二字国男。4イげな。5國イお。6イつ。7イ石。8イナシ。9イナシ。10イ設く、因給ふ。11国年返りてアリ。12イ此の。13國イ年頃。14イのアリ。15イ並み。16因給ひアリ。17因右。18国も。19イナシ。20イ十、国十の。21因ナシ。22三字國ナシ。23イてアリ。24イご。25因我が。26イふ人、國イひ人と。27イつ。28イナシ。29國イこそ。30國の。

かくてみな内裏にま1つ〔○參〕り給ひぬ。何方にも〳〵上達部參り給2はぬ3中に藤大納言殿は、北の方4に籠り居て御裝束えし給はねば、參り給はで、子どもうつくしみて居給へり。かくて上達部は右近の陣に着きぬ。女御の御腹の皇子達5四所。6殿大將は御7所に參り給ふ。例の御局どもの前を渡り給へば、后の宮の人々云ふ、「かの仁壽殿の腹の皇子達を8見よや。有心にこそ。あれ9も女皇子の打ち連れたるにこ10そ11はあめれ。有12（る）所に、など此の名だたる容貌の皇子、大將に氣取られたる」また異人の云ふ、「近衞府大將を、上にこそはあめれ」など口々に言ひ騷けど、見ぬやうにて渡らせ給ふ。一宮三品、帥の宮四品、今一所は13五品、14二所は15科免され給へり。16六の皇子はまだし。皆蘇枋襲の練の表の袴著給へり。宮達は御所に侍ひ給ふ。

大將は藤壺に參うで給ひて、17孫王の君に、「參り來たるよし聞え給へ」と申し給へば、「日頃は上の御局18かとなむ。一夜おと19し〔○大臣〕の物し給へりしに、御氣色いと惡しくて、その夜さり20出で21たり、參りて、御局の人も寄せ給はず、さればえ聞えじ」と聞ゆれば、「人はなしや」「たゞ二人なむ。兵衞あこぎ22になむ」大將、「よしさらば」とて歸り給ひぬ。23上渡り給ふと覺えた24る25人なれば、梨壺に參うで給ひて對26面し

校異 1 国る。2 国ひ。3 図なき。4 イナシ。5 国五。6 国右。7 イ前。8 イナシ。9 図ナシ。10 イれ。11 図考異ナシ。12 一字イニヨリテ補フ。13 図無。14 国一。15 国殿、図色。16 国十。17 国孫。18 国に。19 イど。20 図居てアリ。21 イ奉。22 イと。23 図ナシ。24 國イり。25 イ程。26 図面。

給へり。君、「1一日、人の宮は殿に2言ひしはいかなる事ぞ。宮は聞し召して、上の、己を宣ひしに驚きてこそ、3得むやうにそこに給4ひつるならむとなむ」5「內裏に6もさぞ宣ふなるや。內裏にもとまれさておはす」7と言へば、「いとみさ8をなりや。內9の事知らねども」大將、「さも聞えねど、さてのみはいかでかはとて、えこそ」君、「一夜召したり。參う上りたりしに、院の御方をぞ、いかでかはと思ひ聞ゆれど、恐ろしく宣ひしのみ覺えて、えこそ聞えねなど10ぞ宣ひし」「藤壺は11何にかあらむ」「たゞ御簾の前に局して苦しげにてぞ。乳母達など12のは、い13らな14らにかあらむ。こと15しあからめをこそし給はね。いかなるべき御中にかあらむとぞ嘆くなりし」大將、「味氣なの嘆きや。時めく人はさこそは。たゞの人16を思ふ時に17は、片時他にとやは覺ゆる。御上をばいかゞ宣ふ。大殿に申し18(し)かば、宮は19しかなど宣はすらんや。いかなる事20な21るなむいぶかしがり聞え給ふなり22かし。君をと23かくも、いかゞ24知ろし召さぬ事25はっ一日も、藤壺もかやうにぞあめる。年頃さもあらざりし事をなどぞ26宣ひし」27宣ひて罷出給ひぬ。

〔畫詞〕28こゝは梨壺。

校異 1イつる。2イなどアリ。3国よき。3国へ。5国大將アリ。6國イナシ。7国か答。8国ほ。9国々アリ。10国ナシ。11イなど、国何とに、國イなどに。12イナシ。13イか。14イる。15国と。16国も。17國イナシ。18一字イニヨリテ補フ。19知イる。20イぞアリ。21イど。22二字イナシ。一字國イナシ。23国もアリ。24国思。25以下三字イ侍る。四字国侍る。26三字イナシ。27国などアリ。28五字イナシ。

かくて七日になりて人々加1くゐ〔○階〕し給ふ。右大臣正二位、左大將殿從二位、左衞門2佐四位、3宮あこかうぶり得給ふ。女かうぶり一階超えてな4ひじ〔○内侍〕のかみ三位の加階し給ふ。かくて賭弓に左大將參り給はず。右5すけ給ひぬ。内宴は聞し召さず。

廿五日に出で6つゐ乙子は、犬宮7御百日にあたりけり。此8度9こ内侍のかむの殿10し給ふ。やがて子の日がてら參り給ふやうは、右大將は東宮11若宮12にをかしき玩び物參り物調ぜさせ給13ひ14品の絲毛15な、黄金造の車、16色々にてうじて人17の黄金の黄牛かけて、わ18か〔○割〕籠ども、白銀黄金調じて、容れ物いとをかしくて、駒に人乘せなどして設け給へり。

かくてその日になりて、内侍の督の殿、車六つして參り給へり。御前の物ども、犬宮の御前には沈の折敷十二、金の坏ども、御前どもに樣々にしたり。檜割籠百。かくて右大臣は、昨夜司召の夜なれば、左19大臣も參り給ひぬ。宮の女御の御前の物ども參れり。男宮達の御前にも例の御衝重割籠、大20宮にも御前の物して參れり。檜割籠に据ゑて奉21れ給へり。女御の君の御方の人々同じ數、春宮の若宮達22人々のも、檜割籠五つに、さての御方々にも皆奉れ給23(ふ)。藤壺に檜割籠24十にたゞの25と26ま奉り給ふとて、女御の君の御

校異 1イかい。2國のアリ。3国家宮。4イい。5イ負。6国來。7國のアリ。8國度。9イは。10イにアリ。11イのアリ。12國は。13以下二字國ふ雛。14イ雛、国らな。15イナシ。16国迄色。17國乘せ。18イり。19國のアリ。20イ夫。21イり。22國のアリ。23一字イニヨリテ補フ。24国十、イと。25以下二字国十、國イとふカ。26イナシ。

文、「新しき年は、すなはちと思1へ給2（へ）しを、怪しく此のわたりの御文は見給はぬやうに承はりしかば、つゝましかりつる程に、犬3のかゝるわざする程になりにける4を、かくなむとも聞えでやはとてなむ。

萬代の行く方も知らで思ひ出づる小松に今日ぞ子の日知らする」

と青き色紙に書きて、小松に付けて奉り給ふ。藤壺は踏歌の夜5（よ）りは下におはしませば、御消息も聞え、君達も參り給ふ。檜割籠どもは殿上に出だし給ひて、御返、「げに覺束なきまで日頃は6里の御文も見給へざりきや。對7面にぞ8（聞え）さすべき。此の頃はいかでかと思ひ給へつるになむ。さてこれは、

萬代の子の日知るらむ姫松につくべきことの我もあるかな

罷出侍らむと思ひ給ふれど、心にもあらずのみなむ」と聞え給へり。かくて犬宮に餅參り給ふとて、女御の君折敷の洲濱を見給へば、例の鶴二羽し9る10よろひて有11（り）。松12をい「〇生ひ」たり。左大將13の14 15手に16書き給へり、

17もし借らば今日と知らせ18ず乙子をぞ數へて千代となす19宵の松

と有り。女御、「いとよき物の師にこそは」とて、

校異 1 因う、國イほえカ。2 一字イニヨリテ補フ。3 イ宮アリ、因考異こそアリ。4 イナシ。5 一字イニヨリテ補フ。6 因御アリ。7 国面。8 二字イニヨリテ補フ。9 イか、国り。10 イ喜び。11 一字イニヨリテ補フ。12 国おひ。13 因殿アリ。14 因御アリ。15 國イは。16 イてアリ。17 イ百日かは。18 イつ。19 国すか姫、因せよ姫。

生ひてさは1もし栢にやなりにける子の日を千代と數ふべき松

内侍のかみ、

　數へ2つる今日を今日知る姫松は千代てふ事は習はざらめや

一の宮、

　姫松は子の日を多く數へつゝ數多の代をも過ぐすべきかな

とて上[○督カ]の大殿、折敷ながら3外にさし4入れ給へれば、右大將、

　姫松は乙子の限り數へつゝ千年の5松は6見ずと知7らなむ

8とてさし9出づれば、異人は見給はず。10宮達、宰相の中將、11良中將、藏人の少將宮12々あこの太夫、皆詠み給へれど13かくす。

右大將は東の御殿の14南の方に參り給ひて、宮達の御前に沈の折敷、瑠璃の御15壺のち16い[○小]さきして物參り給ふ、17小車二つづゝ、白銀黃金の馬、樣々色々取り立てゝ、「宮達出でさせ給へ」と聞え給ふ、初の宮は若宮と聞ゆ。御年五18 19大きに、御色あひ御髮の筋、母君に似給20(へ)れど、これは宮の御やうにて、

校異　1イ百日かは。2イた。3イ戶。4国出だし。5イ春。6イ滿つ。7イるら、下ニ「板」アリ。8國イさ。9国入る。10イ大臣アリ。11イ頭、イ藤。12国の、國ナシ。13イ書かず。14國イ皆外。15イ杯。16国ひ。17國を。18國つアリ。19イ程アリ。20一字イニヨリテ補フ。

氣高くおは1し、御髪背中ばかりなど、海松を作りつけたるやうなり。綾掻練一襲、袷の袴織物の直衣著給へり。弟の宮は2四つ。御髪肩わたりにて、兄宮のやうなり。それも同じごとさう3か［〇裝束］き給へり。大將二所ながら御膝に4 5立て給ひて聞え給ふ、「かしこに侍りつる子にもち6い［〇餠］食はせ7て侍るを、先づ聞し召させて、おろ8かしをとてなむ」若宮9は、「上に10出たりしかば、宮の隱して見せ給はざりし」11兒の宮、「見せ給はざりしかば、いみじう泣きしかば12とこそ見せ給ひしか。抱きしかば、打ち落して騷がれき」大將、「さていかゞ御覽ぜし。憎けにや侍りし」宮、「いな、いと美しかりき。こなたに率て來などせさせしかば、のゝしり13て留め14き。只今抱きておはせよ」と宣へば、「只今はきたなげにむつかしう、なめけなるわざ15 16もし侍れば、今大きになりなむ時に、召してらうたうして遣はせ給へ」宮、「いと17うど嬉しかり18けりなむ。遊ぶ人なくていと惡し」と宣ふ。大將手づから賄して、宮達に物く19しめつゝ參り給20ひて、車どもを、「21雛に子の日せさせ給22ふとて率て參りつる」とて奉り給へば、宮達も喜びて玩び給ふ。かくて常にをかしき23玩び物は奉り給ひけ24る。

［晝詞］25こゝ26東の御殿。

校異 1因す。2イ萬。3イぞ。4イ据ゑアリ。5国据ゑ奉り。6国ひ。7イナシ。8イナシ。9国我が見。10因出で。11イ二、因二の。12イナシ。13イナシ。14イナシ。15因考異をアリ。16国を。17国いと、因ナシ。18二字イナシ。19イく。20イふ。21イ雛、因雛。22二字イひ。一字因へ。23国御アリ。24イり。25六字イナシ。26国はアリ。

かくて大將は中の御殿に渡り給ひぬ。上〔○督カ〕の大殿は、賭弓の料に設けられたりしかづけ物ども、取りに遣はして、宮達三所には1袿2かづき添へたる女の裝、宰3將の中將、4良中將には例の裝束、藏人の少將太夫の君には織物5細長給の袴などかづけ給ふ。かくて皆歸り給ひぬ。〔○因以下ヲ畫詞トス〕上〔○督カ〕の大殿南面に御座よそひて、御供の人々などそこに侍ふ。御みづからは宮の女御6君に御物語聞え給7へ。

畫詞 8 9む10しか〔○百日〕の所。上〔○督カ〕の大殿曉に11渡り給ひぬ。12宮は首いとよく居て、起き返り13し給ふ。人14見てはたゞ笑ひに15てうつくし。

大將內裏に參り給ふ。〔○因以上畫詞〕司召には、宮あこ侍從16、兵部の大17將18に左衞門19佐20なり給ひぬ。さては人々私の御いたはり有り。21右大將は、昔山より下り給ひし馬添、22（一）人は伊豫介、いと23難かりけるを、いたはりなし給ふ。その時は大學の允、所の24衆にて有りし。かゝる25程に月たちて、二月になりぬ。右大將三條殿に26あの宣ひしい27ゑ〔○家〕の劵奉り給へり。大殿に申し給ふ、「仰せられし28い29ゑ〔○家〕30建て侍31り申すやう賜はれ32り。33くにはい34ゑ〔○家〕35ばかりは

校異 1イうち。2因袴。3イ相。4イ頭。5イのアリ。6国のアリ。7イひつ、国ふ。8国こゝはアリ。9以下五字イナシ。10国ゝ。11國イ到。12因犬アリ。13国などアリ。14イこそ。15因笑ひ。16イにアリ。17イ輔。18国は。19因のアリ。20国にアリ。21イナシ。22一字イニヨリテ補フ。23國イかたそ、24イ侍從。25國イかど。26国か、國イもカ。27国へ。28以下二字イ城。29国へ。30イ奉り。31以下十二字因る仰せ賜はりなばかくばかりの。32一字イる。33一字國イナシ。34国へ。35三字因ナシ。

造り侍りぬべし。これはかく小さく口惜しき所なれど、これを1と仰せら2ればなむ。やがて内の3くらして奉り侍るめり。目録」とて、その文奉り給ふ。見給へば、厨子唐櫃几帳屛風より初めて、人のい4ゑ〔○家〕の5ゝあり。藏に物置きたり。此の家6ゆ7へ8ぬしばかり〔○家の邊の柴刈りカ、家ゆゑ主ばかりカ〕9 10所の垣ゝと全く新しく造りて、檜皮の御殿いとをかしげに造りて、たゞ這ひ11入12るばかりにしつらひたり。大殿13の「代り14にと家はいかゞ物する。さるべくば存物せむ」大將、「更に賜はらじと申し侍り。いかばかりのつたなき者と御覽ぜられたれば、かう仰せらるらんとなむばかり畏まり侍る」と申し給ひて歸り給ひぬ。

二月五日ばかりに、中15君の御許に、車二ばかり、著給ふべき御衣御衣箱に入れて、御車に入れて、むつましき人五六人ばかりして、忍び16て一條殿に夜更けておはして、中の君の御方に17は入り給へば、人々裝束して、御達四人、童下仕など二人、君も白き衣など數多著給ひて、御18殿油などともしたり。大殿聞え給ふ、「さきに來たりしかど、19物を聞えずなりにき。心ざしは更に怠らねど、怪しく20はらは〔○童〕なりし時哀なりし人の、己だに知らで隱れにしを見付けて、それを哀と見つゝ年頃侍りつる程に、かくて物宣ふをもえ聞えざりつる。よし、それはしめやかに聞えむ。かの21件22三條の東23角に向ひたる家小さき有24(り)。そ

校異 1イも。2囡るアリ。3イ造ら、囡具具。4国へ。5イ具。6囡考異の。7囡考異ゑ。8囡考異の。9イのアリ。10囡考異そ。11イら。12囡考異らアリ。13囡此アリ。14囡の。15イのアリ。16イ給ひアリ。17一字イナシ、囡這ひ。二字イ參。18囡殿油。19イもえ、囡えも、囡考異え。20イわ。21囡ナシ、國イ祭カ。22イのアリ。23囡の外。24一字イニヨリテ補フ。

こに渡り給ひて、いと心安くて物し給へ。身はかくおほぞ1くなる所の、心を心に任せ給はぬなれば、御迎へにとてなむ」と宣へば、「俄にてはいかゞ」と宣へば、大殿、「何でふ物あらばこそあらめ。いさゝかならず調度などは、こゝに乳母を留め給ひて。今日よき日なり」と宣へば、「2更に」とて御車寄せさせ給ひて、乗せ奉り給ひて、人賜には有3(る)御達など乗せ給ひて、御包など入れて、いと忍びて西の御門より出でゝ、かの殿に入りて見給へば、御座所新しく、淸げなる屛風几帳など立てたり。取り使ひ給ふべき調度なきなし。大殿さてその夜はそこに留まり給ひて、御設けいと淸らにしたり。大殿、つとめて殿の內を見給へば、しらて覆したる唐櫃二具、錠さして鏈結ひ付けたり。さし開けて見給へば、から〔○香カ〕の唐櫃どもなり。あるには御衣ども樣々にし入れ4い、あるに5はよき6衣綿、おの〳〵かみなどあり。御衣掛に覆して、御衾など掛けたり。7さらぬ物ども、杯唐櫃など多かり。外には四尺の御厨子三具、三尺の一具、覆8したり9さへ、それにも10上鏈あり。開け11て見給へば、男女の御調12に〔○度〕二13階14具15おほして、硯の具などあり。16覆なる17べし18一具、一つには唐19物いとようし置きたり。20 21調度燈臺の具などあり。か22つ〔○壁〕代は白くて新し。し23う〔○寢〕殿の北に新しき長屋あり。隔24ごとの內數多して、贄殿、酢酒つくり、

校異　1イナシ、国う。2イさらば。3一字イニヨリテ補フ。4イナシ。5國イナシ。6イ衣。7イ侍ふ。8イしアリ。9二字イナシ。10イ錠。11イつゝ。12イど。13囡ナシ。14イ十アリ。15イ覆。16囡大い。17イ廚子。18囡二。19国のアリ。20囡考異一つにはアリ。21囡一つには。22イべ。23イん。24イて戸。

漬物、炭木油など置きたり。藏一、それには錢米よからぬ布どもなど置きて、1上さして、鍵は厨子に有2(り)。御厨子所大殿3の具いとよくしおきてたり。大殿見廻りておはし給へれば、君昨夜大殿の包ませておはしたる綾掻練、織物4細長など著給ひて、年四十に5三つ足ら6ねど、いとあてはかに見めきて、らうたげなる顔して、髪丈に二尺ばかり餘り給へり。いと若く見え給ふ。大殿、「留まりにし人のもとに7こそなるむつかしき物どもは、乳母の宿りに殘さず取らせて、そこ〳〵8とよく9 10ば聞11きにめで、夜さり渡り12ぬと言ひ遣はせ13て」と宣14へ。昨夜より三日の家主の近江守、今日は御15臺16米の御杯して、大殿、家の祭奉りたる目錄添へて奉り給ふ。「これは確かならむ物に入れて置き給へ17れ。これをさへはかなくしなし給ふな。こゝには常にもえ參うで來じ。近ければ時々あからさまにこそ參うで來む。今は我人にもおはせず、親も物し給はず、有りつるやうにてあらむとな思ほしそ。18あしこにある子の母、いと心よく有難き人なり。それ19は思ほしうとまず語らひて物し給へ」とて渡り給ひぬ。

【書詞】20こゝは中の君の御殿。

かくて北の方の御許におはして見給へば、裝束淸らにして頭梳りて居給21ひつれば、只今聟取もしつべき女

【校異】1国錠。2一字イニヨリテ補フ。3図ナシ。4国のアリ。5イ一つ二。6図ぬ程なれ。7イそこ。8図を。9以下六字国は開かずさて、図掃き淸めて。10一字イナシ。11以下二字イらた。12イね。13図よ、國イナシ。14イひつ、図ふ。15イもい、國イもたひ。16イ金。17国ナシ。18図か。19國も。20九字イナシ。21イへ。

のやうにて、いと日出1こし。住居しつらひ云ふ方な2し、暗き所にも、北の3方4御方5ちやうだい「〇御容貌谷躰カ、御方の帳臺カ」照り輝きて見ゆ。香のかうばしき事は更にも言はず。御達もかく容貌あるは卅人ばかり出で入りすれど、なほ廿人ばかり絶6たずあり。童下仕も數多有り。此の殿は一町なれど、年頃搔い7廣げつゝ心に入れて多くの御殿造り重ねたり。北の方に大殿の聞え給8(ふ)、「年頃いとほしと思9るいる人々10すふとて侍るなり。取り据11へたる此の12事いとはかなき人なり。父宮の多くの財寶よき莊どもなど13賜14へめりしかど、15くし「〇年」頃ロ入れざりし程に、16有りし17人ともなく18皆19し失ひてけり。有りし人もたつきなくなりければ、皆出でゝ去にけり。かう哀なる人になむ。そこにも殊に思す人もなかめるを、私の人にしても20身え聞えずと21、思し遣りて心しらひ給へ」北の方、「わ21(か)「〇若」き人の、親物し給はず、御く22ら「〇ロ」入るゝ人もな23きは、いかでかは。さても24夜「〇世カ」人こそさしもあらで有りぬべかりける人も、世25を26すらむやうも知らで、親とて有りし人も、呪ふやうに、悪しかるべくばよかれと思ふとも惑ひなむ、よかるべくば恐ろしき物の中に捨てたりともあへなむ、たゞ神佛に任せ奉ると、ゆゝし

校異1イた。2国く。3イナシ。以下二字国考異ナシ。4国考異にアリ。5国考異のアリ。6イえ。7國イひアリ。8一字イニヨリテ補フ。9イひつ。10イ住ませ、國イ住むと。11国ふ。12国人。13国持給。14國イふカ。15イと。16国考異な。17国物ど。18イてアリ、国とくアリ。19イナシ。20イ見。21国もアリ。22一字イニヨリテ補フ。23イち。24国くて。25イよく、国世の人。26国に。27国住む、国過ぐ。

く言はれて有りし程に、打ち續きて亡くなりにしかばこそ淺ましかりしか。まして皇子達の御子と言はむ人は何事をかは」と聞え給へば、「げに1 2こそあらむ。女子を數多持たらぬこそ安けれ」など宣ひて、「今日はかゝる日になしてむ。宮訪ひ奉りて參うで3來4ていなむ」とて、宮の御方に參り給ふ。

〔畫詞〕こ5なたは左大將殿御方に6て、一の宮7も通はし奉らんと思して、し8(ん)〔○寢〕殿の所遠く去りて、池山近き所、月見給ふべくとて、高くいかめし9く今造られた10る西の對廊あり。御達十人ばかり、童11べなどあり。

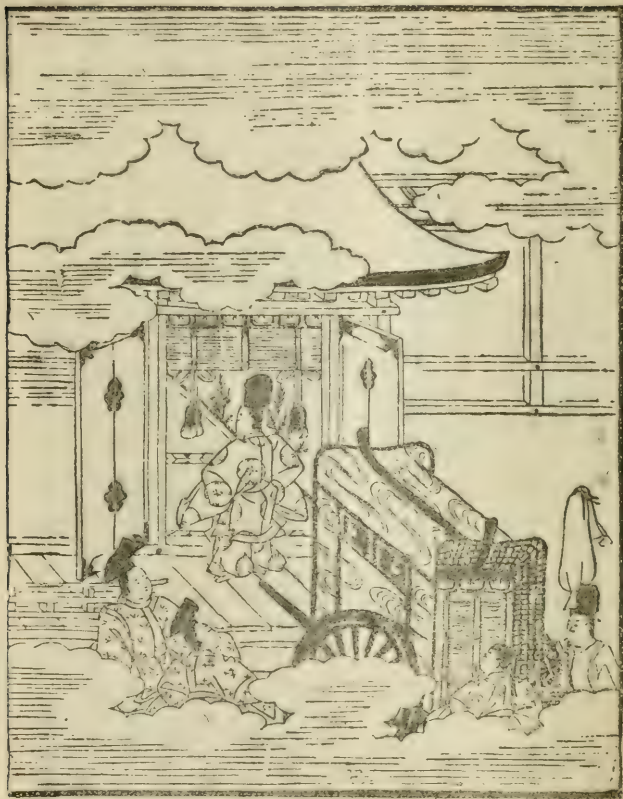
宮はいとらう〳〵じう、氣高く、もの12くしき顏して居給へり。大殿宮に、「年頃覺束なくて侍りつるを、近くておはしまさする時だにしば〳〵參り來まほしけれど、此の侍る人は、かれもまだ小さく、己も13又世の中も知らざりし時より侍りて有りし程に、子14のなむ有りけるを知らせで、いさゝかなる事に倦じて隱れにしを、年頃はえ求め出でざりしに、からうじて有難く見15出て侍りしかばなむ、あからさまにとて16罷出にしまゝに、やがて罷り留りにしかば、いかに怪しく思されけむ。さて、此の年頃17守り18さる所もなく、宮仕へも有りしやうにも仕うまつらで籠り侍るに習ひたるに、例ならず習は19(ぬ)やうに思は20れ侍れば、又

校異 1 国さアリ。2 二字イナシ。3 以下二字国ナシ。4 二字因ナシ。5 因こ。6 因ナシ。7 因ナシ。8 一字イニヨリテ補フ。9 因き家。10 イり。11 國イナシ。12 イもの。13 因まだ。14 因ナシ。15 イ出で、因考異付け。16 因參うで。17 国罷。18 イた。19 一字イニヨリテ補フ。20 イるも。

いかなる隱れなどかせむとて、いと心深く有難き心ゆるびも侍ら1んず。2此の仲忠のあそ3ひ〔○朝臣〕ここに侍4れ5ど、親に6し給ふ。それが見思はむ事も愼ましく、おのづから御覽ずらむ、怪しく兼正7子にはあ8らぬ者なれば、若く侍9れどいとまめに、一所につき奉りて侍るめるも、幼くこゝかしこに罷り歩かんと見んが恥かしさになむ。今も昔のやうに侍りぬべけれど、え」など聞え給へば、宮「10何か、中納言も昔はそこの御有樣にも劣らず聞えしかど、此の宮の名だたり給へる人なれば、いとまめになられたるにこそ。11うらに此の内侍の督の、世の中に12まさた13よ者に物し給ふなれば、一人になりにたる14こそ。異15、人〕のえ靜めざりしぞや」など御物語多くして歸り給ひぬ。

〔畫詞〕16こ17うは18い〔三條殿〕、宮の御方。

かくて一條殿には、夜更けて大殿は車ながらさし寄せて下り給ひしかば、方々の人え知り給19(は)ざりしをかく物運び家淸めなどするに驚きて、か20こゞ〔○方々〕21の思はしける、かく集まりて有りつる方に、宮22々もかくてこそはと思ひつればこそ、さてだにす23くろなりつる住居を、宮をば家に迎へ奉24る思ひしを、はじ25ろの家に迎へつるは、我らをばえ打ち26て27をはて、かくてなありそと28よこそと思ひ29て嘆く程に、

〔校異〕1イナシ。2国息子。3イむ。4下二字國イりてと。5国ば。6イなんアリ。7国がアリ。8国は。9イるなアリ。10イなどに、国など。11イごゝ。12イ紛れ、國イまさ。13イき。14イにアリ。15一字イニヨリテ補フ。16以下十一字イナシ。17イこ。18国ナシ。19一字国ニヨリテ補フ。20イた。21国は。22国に。23イず。24イり、国らんと。25イめ。26国捨アリ。27国置き。28イに。29イナシ。

眞言院の1律師は家など買ひて、「渡り給ひね」と伯母大殿2を聞え3給ひし4給ふかと、し出でむ樣を見むとて暫し物し給へる5、かく聞き6見て、御車して夜自らいまして、自ら迎へて率て渡り給ひぬ。北の對におはするは妹なり。右大臣大い殿のあなたの一7(つ)御腹の弟、同胞なれど異腹にてうとかりけるを、妹睦びして忍びて迎へ取りて通ひ給ひしなり。8后の宮の御匣殿、異御腹の妹なれど、いとらうたくして顧み給ふを、かくして聞召して、「さればこそ密に渡り給ひねとは物せしか」とて別納に渡し奉りつ。更衣は宰相の中將の私の殿に御女迎へ奉り給ひて、西の一の對におはするは宰10將ばかりの人の11女、若くて奉りたるなりけり。それは兄な12うてありければ迎へつ。13中將の妹は、大將殿二條の院のか14ごや15(か)なる家に、暫しとて据16へ給17ひつれば人もなし。たゞ18の宮の家司ども集りて、妻子引き率て、あるひは下屋19うに20曹司21(し)つゝ有り。

かゝる程に、花盛興あるに、大殿大將に、「一條の人氣もなかなるを、いかゞ住みなしたると行きて見む。いざ22たうべ」とて諸共におはして、23先づき24(た)[〇北]の御殿に入りて見給25へば、居給ひし所に、かの君の御手にて、

校異 1因律。2因に。3二字國ナシ。4イかど。5イにアリ。6イナシ。7一字イニヨリテ補フ。8因太上。9イナシ。10イ相。11イ御アリ。12一字イど、國イよ。二字因どの。13因少。14イた。15一字イニヨリテ補フ。16因ゑ。17イへ。18因ナシ。19イナシ。20國さらし。21一字イニヨリテ補フ。22因給へ。23四字因考異中。24イ一字ニヨリテ補フ。25四字國イナシ。

妹背川住ま[1]ひなりぬる宿ゆ[2]へに涙をも猶流しつるかな

とあるを哀と見給ひて、西の對のか[3]ら〔〇更〕衣の御方を見給へば、居給ひし所の柱に、

近かりし雲の下り居て見るべきに風吹く塵と惑ふ身[4]はな[5]ぞ

[6]とあり[7]けるに、院[8]〔に〕侍ひしを[9]い〔〇幸〕て罷出にしぞかし、あないとほしと見給ひて、同じ一の對を見給へば、

故郷に多くの年を待ち佗びて渡り川にも訪はじとやする

とあれば、まして哀いづくへならん、いかでこれが返事せむと思す。東の二の對に入りて見給へば、その對の前に、様々の對にあたれる柱に、

來ぬ人を待ちわたりつる我なくて[10]わかきの竹[11]に[12]誰を拂はむ

と有るを[13]、「經るもの」と言ひし所と[14](思して、一の對に入りて見給へば、居給ひし柱)寄せに、

來つゝ見し宿にぞ影も額まれし我だに知らぬ方へ行くかな

と[15]草に書きたり。大殿、「此の人いづちならむ。母宮の御許にはたあらざめり」と宣へば、大將、「仲忠なむ二條の院に渡し奉りて侍り。今かしこ廣うなりぬべかなれば、そこにかの物し[16]たぶ[17]が、遊びする人なく

校異 1イず。2国ゑ。3イう。4イなる。5國ど。6國イぞ。7国げ。8一字イニヨリテ補フ。9国ゐ。10イ末。11国よ。12國これ。13国いと哀と見給ふアリ。14十九字イニヨリテ補フ。15国ざればみ。16イ給ふ。17イる。

てさう〴〵しくし給へば、迎へ侍り」と申し給ふ。大殿、「恥かしく若くよか1(り)し人2」とて、よからぬ事もあらむものを」大將、「いと目易くて、らうある人にこそ物し給ひけれ。とかくあ3べき事は皆物して侍り」大殿、「あないとほしや」と宣ふ。かくて、大殿廻り見給ひて、昔は方々に我も〳〵4と5興を盡くして住みしものを、今日は掻い拂ひて人もなし、花は色々に咲き亂れたり、6かすかに見給ふに哀に思さるれば、打ち泣きて、

花だにも昔の色は變らぬをまつ「〇待つ、松」7時住みし人ぞ散り8ぬる

と宣へば、大將、「これにも」とて、

年を經てまつをも散らす宿なれば春なる梅の嘆かるゝかな

と申し給へば、「あな思ひぐまなや」と宣ひて、御修理すべき事など宣ひて歸り給ひぬ。

[畫詞]9 10一條殿。

かくて北の方に大殿、「年頃一條のいぶかしかりしかど、人々の苦しげにてあらんといとほしかりつれば物せざりし。人もなしと聞きて罷りたりければ、いとこそ哀なりつれ。廣き家に屋ども多かるに、人は皆住みあ11さ「〇餘り」てこそ侍りしか、人音もせず、お12そろ「〇下」し籠めて、草木ばかりぞ有りつる、方々に書き

[校異]1一字イニヨリテ補フ。2国考異ぞ。3国るアリ。4国ナシ。5イ淸ら。6国さ。7イと聞きに、國時過ぎ。8イけ。9国こゝはアリ。10三字イナシ。11イま。12イナシ。

付けたる事」な1き聞え給へば、北の方、昔の京極を思して、かく書き付けて見せ奉り給ふ、

さりとては尾上の瀧2こそ流れにし君住吉にいかゞ有りけん

と一見せ奉り給へば、「身をつみてのみ3かたに」と宣ふ。大殿はたゞこゝにのみ物し給ふ。物などは奉れ給はねど、かくておはしませば、我が御方の者の御莊々々より持て4混みて奉5れ6、7御同胞8宮達よりも、かく旅におはするなりとて訪ひ聞え給へば、これも9すの御德に10とぞあるべき。中の君は賜り物何もなく少しづゝ11も口分け奉り給ふ。夜はおはすべくもあらず。時々宵の間などになす。

かゝる程に、梨壺罷出給ひなんと聞え給へり。右大將物し給へるに、大殿、「宮の罷出む12のあめる13を、いかなるべき事にか。かゝる人14は帳臺の宿直などしてこそ15は、許され16人とすらむやは」大將、「いかゞさ侍らん。先つ頃度々參う上り給ひけるものを。宮、藤壺もかやうにてぞなどこそ宣ひけれ」大殿、「いさや、うたて聞ゆる世なれば、人もやうたて言ひなさむとてぞや。車どもなどして迎へに遣らむかし」とて、御車調へさせ給ふ。「一條は只今恐ろし17げなめり。こゝにてこそはともかくも」とて、宮の御方の西面、西の對かけて、一條殿の御調度18ども運ばせ給ひ、しつらはせ給ひて、御車十二、御前こゝかしこ取り合せて數知らず多くて、御迎へに宮の御方の御達廿人ばかり參る。19左大將、「かの御迎へに20侍21り。おはしまさむと

校異 1イど。2國イを。3イは。4国積。5国り。6イ給ふアリ。7國イ給ふ。8イのアリ。9国そ。10国ナシ、國イこ。11国物。12イと。13イナシ、国は。14国の。15イナシ。16国む。17イき。18國イナシ。19国右。20イ參りアリ。21国る。

1やすゐ」と聞え給へば、大殿「何しにかは、そこにも。内裏の聞し召すに2てうなるやうにもこそ」大將、「いかゞ參らざらむ」女はさるべき人の追從するにつけてこそやむごとな3しも。なほおはしませ、人の見4所も、宮の聞し召す所も侍り」と聞え給へば、5「右6大臣7引き連れて參り給ひ8、騒がれ給ふこそ、9惜しまれ10給へば11面目あれ。罷出ますとて無期の勘事に12もあづかれ、それに13喜びて親兄弟14を15勘ぜられむこそいと恥しかるべけれ」と16りふり給ふを、強17ゐて18 19のかし立て給ひて、參り給ひて、御局におはすと聞し召して、宮、「20罷出ぬべかなり」とて渡り給へり。二大將物し給へば、宮は、「こゝに21ぞ罷出らるべかりけれ。かの左大將いとめづらし22うこそ。今年對23面せざりつるかな」24と、大殿「25畏まりて26仰せつゝ侍27るを、今は身を捨てゝ籠り侍りつれ、久しう内にも參らず侍るを、今宵此の女の童能出むと申して侍りつれば、かく無德に侍れば、從ふ下人28一人も侍らねば、車につきて罷出させ29むとて」宮打ち30笑はせ給ひて、「いと有難き車添使ふべき人にこそ31は。無德なるに22はあらで有難きにこそ。さてもかく33事からぬ「〇缺かぬカ」近き衞は、昔も今もえあらじを34、いと有難き35なりや。こゝに36此の頃ならずとも罷

校異　1因ナシ。2イてぞ、因も異。3イく。4イるアリ。5因大殿アリ。6国のアリ。7因のアリ。8因てアリ。9因大將アリ。10イ給うべ。11國目ぼし。12イナシ。13因より。14因の。15因勘。16イ避、国眠。17国ひ。18因そゝアリ。19國ナシ。20国參うで。21國イこそ賊。22イく。23イ面。24因ナシ。25以下八字因甚だ畏き事に。26以下二字イ信じ。27因り。28二字因ナシ。29イなアリ。30國捕。31イナシ。32イナシ。33イうと。34イとアリ。35イ事アリ。36イはアリ。

出られ1むなむ。又こゝに物ずる人も暇乞ふをと思へど、此の頃は神事の頃なれば、げにいかでかはとてなむ」など宣ふ程に、夜更けぬとて急ぎて罷出給ひぬ。かくて南の御殿に罷出給ひぬ。御設け、殿2政所よりいと清らにて參れり。大殿梨壺と物語聞え給ふ。「此の3夢4やうなる事は、宮はまめやかに思したりや。前前も世の人もよからぬ事言はるれば、これをなむ夜晝思ひとするを、今宵ほのめかし給へるは、いかに思したるぞ」君、「しろしめし5にはいかゞは。とかく思ほすらむ事は知らず。罷出むとさ申せたりしかば、參う上りて侍りし」大殿、「世の人のする6と7のいか」君、「さやうになむ」大殿、「さらばいと嬉しかなり。後はとまれかくまれ、8知るとだに宣はゞ恥隱れぬべし」など御物語し給ひて、やがてそこに留り給ひぬ。9いとめて、御10內參るとておはする程に、宮より御文あり、「昨夜は怪しく急がれしかば、11殊に〳〵物せずなどなむ。さりぬべき昔も有りしを、人々に恨みらるゝ今しも、哀にて罷出12くれにしをなむ。今宵は、

　近くても見ぬ間も多くありしかどなど春の夜を明かしかねつる

空言人になりぬべしや。さらば思ふやうにた13いら「○平」かにてを14や、早う」とて、薄き紫の色紙に書きて、梅の花につけ15奉16り給へるを、大殿17寄りて見給ひて、「今ぞ18心地19起き居ぬる。此の御文は樹の箱

〔校異〕1イナシ。2国のアリ。3因夢。4因のアリ。5イナシ、因し。6イ事。7国の若、因をいかゞは。8因しか。9イつ。10イ湯、国物。11因事々に。12イら。13国ひ。14因ナシ。15イてアリ。16イれ。17イ取。18因心、國イこゝら。19イ落ち。

の底に1よく納め置き給へれ」とて、御使に酒2賜ひて、物かづけ給ひ3て、いみじくいたはらせ給ひて、御返、「夜べは、夜更けぬと人々急がれしかば、心あわたゞしくてなむ。空言人4にとりはかりなむ。まことには、

出で入5など餘所には見つゝ雲井にて多くの日をも過ぐ6し7としかな

何か、侍ひ侍りても」と聞え給ふ。8右大將檜割籠など調じて奉れ給へり。9御達など取りさがして10、大殿は寢殿11へ渡り給ひぬ。

［畫詞］12繪有るは、つき［○次カ］のひはた［○日將カ、檜皮カ］藤壺ま13（か）で［○罷出］給へり。

延寶五丁巳年

初春吉辰開板

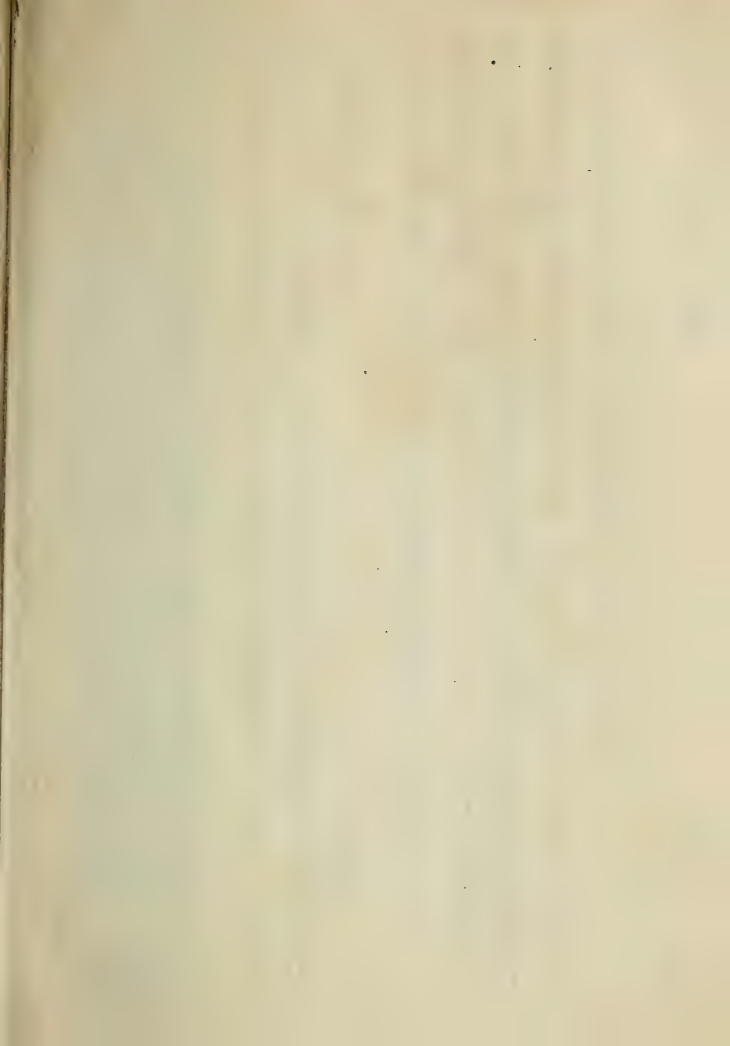
［校異］1因イて。2イ賜うび、因賜びて。3因考異ナシ。4国に答むば、因とかこれば。5イる。6国す。7イ來、因考異て。8因左。9十字因ナシ。10イ食ふアリ。11因に。12以下四字イナシ。以下十八字因こは梨壺罷出給ふ。こゝは梨壺。大殿も御物語し給ふ。大將殿の奉り給へる檜割籠御前にあり。御達取りわたし食ふ。檜皮の屋ども多かり。13一字イニヨリテ補フ。

〔○校訂者云、刊本は卷名を誤りて、藏開下を、國讓下となし、此の卷を全部の最後に置きて、第二十卷となせり。柱にも、「國下廿」とあり。ゆゑに、刊年をも、此の卷の末に記したり。また次の如き、校者の書入があるも此のゆゑなり。もとこれは、刊本の誤を訂して、正しき國讓下（刊本は卷名を誤りて嵯峨院となす）の末に載すべきを、今は刊本のまゝに、此所に記し置けり。また刊本が國讓下を宇津保物語の末卷となせるは誤りにて、正しくは樓上下を宇津保物語の末卷となすべし〕

【朱書】うゑ字のすりまきをもて、たがへるところ〳〵を、かたはらに朱してしるしつけたり。よさあしさかたみにあるを、たゞにありのまゝに、一もじもたがふはもらさずなんものしたる、時は文化三とせといふとし五月十日あまり八日の日。

村田（花押）

【墨書】ことうつし卷もて、文化四年三月十八日、春雄寛光よみ合せつ。

〔○以下別筆、橡障園の奥書、墨書〕
この人々、としかげの卷より、あて宮の卷までよみ合せて、そのたがへるところ〳〵、かたはら書にしるしつれど、末の卷々は、さらによみあはせもなくなむ有ける。ことし文化十とせあまり二とせといふとしの春、此本をもとめて、本居大人の本をかり得て、卷々のたがへるふし〳〵、ありのまゝに、かたはらに、朱青いろの墨もて書しるしよみ合せつ。同じ年の七月三日の日くすぞのゝ與之。

昭和六年六月五日印刷
昭和六年六月十日發行

日本古典全集
第三期【非賣品】

うつぼ物語
第三

編纂者　正宗敦夫

東京府北豐島郡長崎町一六二
發行者　合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長島東一

裝幀者　廣川松五郎

東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷者　不二製版印刷所
高瀬清吉

發行所
東京府北豐島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇一二